

「キニリル」諸嶋ニアル魯西亞人ハ日本ノ支配ヲ受ベキ事

各嶋ニ留ルヲ願フ者ニハ左ノ權利ヲ與フル事

(甲)他國人ヲ除ク外是迄各嶋ニ住ミテ業ヲ營ミシ各民ヲ保全シ並ニ百般ノ生計ヲ隨意無碍ニ營ムヲ得而シテ何様ノ名目ニテモ形狀ニテモ一切稅ヲ納ル事ナク又其營業ニ用ユル器什ニモ稅ヲ納ル事ナシ

(乙)各嶋ニ住ム各民ノ林樹ヲ有セザル者ハ其家藏及船隻ヲ造築シ修繕シ又ハ柴薪ノ用等凡ソ一切自分用ニ供スル爲ニ近傍ノ木ヲ伐テ以テ用ユルヲ得ル事

(丙)日本人民ノ現ニ開採セル礦山又ハ其開採ノ免許ヲ得シ確證アル者ハ一切無稅ニテ業ヲ營ムヲ得ル事

第四「クシニコタン」港ハ日本ノ通商航海ノ爲メ無稅港ト爲シ且ツ其商船ノ噸稅、出入手數料、燈臺稅、繫船稅等一切皆課セザル事、並ニ日本政府同港ニ領事官ヲ置クヲ許ス可キ事

第五魯領沿海諸港ヲ日本通商航海ノ爲メ開クベキ事  
第六「キニリル」諸嶋及樺太嶋ニ住ム蝦夷人ハ去留共ニ其意

回答ノ件

五月十六日到

別記第二十三號

以公信致拜啓候然ハ先便廿二號ニ添差進候對話書第六回に記載致候義に付過る廿四日「スツレモウホフ」氏事當公使館え罷越別紙對話書第七回の通談判致候間右にて御熱覽可有之候其大意ハ一昨々廿五日以秘號電信左の通申進置候間別紙と御引合せ可被下候

魯政府ハツマリサノ事マデニ承諾セリ、  
「左」  
「千嶋」  
「不殘」  
「渡」  
「政府」  
「動産」  
「不動産」  
「ワタス事」  
「セイフ」  
「ドウサン」  
「ドウサン」  
「トモ」  
「カイトル事」  
「タガヒ」  
「ハヤク」  
「ヒト」  
「ヤリテ」  
「シラベル事」  
「カクミン」  
「ハシン」  
「領」  
「主」  
「支配」  
「リヨウ」  
「シユ」  
「ノシ」  
「ハイ」  
「ニテ」  
「ソノ」  
「ママ」  
「エイ」  
「ギヨウ」  
「シ」  
「ド」  
「ヂン」  
「ハ」  
「ミト」  
「セウ」  
「チ」  
「ニ」  
「キヨ」  
「リウ」  
「ヲ」  
「キメ」  
「サセ」  
「ル事」  
「Kushungkotan」  
「十年」  
「無稅港」  
「後」  
「ハト」  
「ト」  
「セム」  
「ゼイ」  
「コウ」  
「ソノ」  
「ゴ」  
「ハ」  
「サラ」  
「ニ」  
「キメ」  
「ル事」  
「ゴクン」  
「ヂヨ」  
「ウ」  
「ノ」  
「ロク」  
「ヒ」  
「チ」  
「ハ」  
「チ」  
「ノ」  
「事」  
「Petersburg」  
「ニ」  
「テ」  
「ヂヨウ」  
「ウ」  
「ヤク」  
「ラム」

ニ任ス事

第七沿海道海岸ニ於テ日本人鯨ヲ捕フルヲ許スベキ事

七五 三月二十八日 露國駐劄樺太公使ヨリ 寺島外務卿宛

樺太問題ニ關シテハ露國ノ意見我訓條ニ大略一致ヲ見ルニ至リタルニ付條約締結ノ全權御委任アレハ細目ニ就キ適宜處置スヘキ旨並ニ露國政府條約促進ヲ希望セル事情等報告ノ件

附屬書

三月二十四日露國駐劄樺太公使ト露國亞細亞蒙頭兼外務大輔トノ對話書

露國政府審議ノ結果立案セラレタル樺太千島交換ニ關スル條約案ニ關スル件

附記一、五月十八日寺島外務卿ヨリ露國駐劄樺太公使宛(電信)

宛(電信)

右對話書所載ノ條約案中批准交換ノ場所ノ項ニ關シ問合ノ件

二、五月十九日露國駐劄樺太公使ヨリ寺島外務卿宛(電信)

右條約ハ東京ニテ批准交換アルヘキ旨

スブ事、  
「右」  
「ミギ」  
「ニ」  
「テ」  
「ヨク」  
「バケ」  
「ツヤク」  
「ノ」  
「ゴ」  
「イ」  
「ニ」  
「ン」  
「ジヨウ」  
「ウ」  
「ハ」  
「ヤ」  
「ク」  
「御」  
「差」  
「越」  
「可」  
「被」  
「下」  
「候」  
「日」  
「本」  
「政」  
「府」  
「ノ」  
「シ」  
「ナ」  
「ハ」  
「八」  
「萬」  
「三」  
「千」  
「八」  
「百」  
「七」  
「十」  
「六」  
「四」  
「ナ」  
「リ」  
「ト」  
「シ」  
「ラ」  
「セ」  
「ラ」  
「ケ」  
「リ」

日本東京外務省 寺嶋 榎 本

一對話書にて御承知可有之通此度は魯政府大抵拙者所帶御訓狀の條款に一致いたし候に付當面に異論を交へ不申先づ其儘開過ごし申候彌當表にて結約の全權を御委任有之候は、細末の條款は熟慮の上尙相添可申候、「スツレモウホフ」來館の數日前拙者内々他人より聞込候には魯政府はもはや樺太嶋の一案を早く方付日本との交際と世上の評判を取直さん爲め此度は多分一致するなるべしと云々右故にや當日「スツレモウホフ」氏は此度魯政府の一致を頗る恩にかけたる口氣有之候尤我方には餘り面白き事には無之候得共樺太嶋現今と尙來の利害得失を御果斷あられ此度の機會を以て大略別紙の通條約御取結の方可然存候然るときは皇國の聲價を落さざると無益の財を靡せざると彼我の交際を一新するとの三事を達し得べく否らずして後來別に著敷き好機會可有之とは不被存候

一魯政府の結約を極て差急き候義は「スツレモウホフ」氏の口供に據ば一は來る五六月の交よりして魯帝始大政大臣も例年の通養生の旅行にて都府に在らざるを以て其期を失ふ時は空く多少の時日を延べざるを得ざると其二は樺太嶋も「クリル」嶋も共に僻遠の地なるを以て時候に後れば請取渡の手筈不都合に及へばなりと、然れども拙者の推察に據ば前二事の外に猶次の一事あるに坐するなるべし即ち此度の結約永引ときは日本在留の英公使其間に立入て隠に魯國の爲め妨を爲すならんと付度するによりてなるべし

一別紙魯西亞領「クリル」十八嶋略記は「スツレモウホフ」氏より差越たる者にて甚だ約に過ぎたりと雖ども亦以て彼地の一斑を見るべきにより拙譯の分差進申候原文佛文に付「ボンベ」氏に和蘭文に爲譯たるものにて候、「クリル」諸嶋氣候及海路其外の様子は魯國新舊書類中より當時爲譯置未た成就不致候間今便差進候

一先便別記第廿二號に一寸申進候米國「ボストン」府の商人「ヘーエス」氏「バラムシル」嶋借用願一條に付其後當表在留米國代理公使「スカイレル」氏に問合候處同氏申聞候には先之千八百七拾一年米國一商社にて「カムサツカ」地方に

附近せる「メーヅノキ」英「カバル」及「ベリンゴフ」所謂「ベリ」の二嶋を是の二嶋は舊魯西亞米利加に連なる「アレウイト」魯國より借受漁獵致居候處頃者別に一社ありて千嶋の「バラムシル」嶋を魯政府より借受んと企願出候折柄千嶋は品に寄悉皆日本領と可相成様子に付「ヘーエス」氏貴館え罷出相願たる義にて貴國より我商民え御貸渡被成候は、毎年何程か金納可致と云々又「ヘーエス」氏は巨商にて儲なる人物の由申聞候、「スカイレル」氏は當表に既に八年も在留致居魯語を善くし又能魯情に通居候著名の人物とは乍申餘りに早く秘事を漏れ聞候に付其所以を尋候處同氏少數憚て敢て顯然とは説明し不申候得共其話頭の首尾を以て判斷致候にかの米商「ヘーエス」氏なる者は魯國見物旁「バラムシル」嶋を魯政府より借受願に來り「スカイレル」氏を以て其筋え申出たる處折節拙者代地談判の評議中に付「スツレモウホフ」氏より其願意を斷りたるによりて此方談判の様子を側聞せしに相違無之候、「ヘーエス」氏過日當表出立の節も「バラムシル」嶋若し日本の版圖に入候は、「ボストン」の一商社え御貸渡相成候様吳々も拙者え頼入候、勿論右「バラムシル」嶋の義は未定の義に付拙者敢て可否を答置不申候得共此度

寺嶋外務卿殿

(附屬書)

對話書第七回

明治八年三月廿四日比特堡府大日本國公使館におゐて

特命全權公使 榎本 武揚

通辯 二等書記官 市川 文吉

〔(朱書) 亞細亞家頭兼外務大輔 スツレモウホフ〕

紀 事

本月四日應接の節申入置たる條款に付魯政府總評議の上奏聞相濟たる趣を以て本日午前第十一時「スツレモウホフ」氏我公使館に來り二通の書附を披き容を改て申出ける事左の如し

〔(朱書) 一樺太嶋境界一件過日御示談の趣は總評議の上奏聞相濟即ち我皇陛下の御意を遵奉して茲に兩國條約の題案を持參致候然るに貴下には條約取結の御委任狀御所持に候哉若し御所持無之に於ては此案文入御覽兼候に付御聞取の上以電信貴下結約の御委任有之様御申立有之度候〕

一拙者義樺太嶋境界取極の全權も帶居候處昨年始て拜晤の節貴下の御申聞には當表に於て條約取結の義は貴政府御

三月廿八日

の代地條約彌御取結に相成候上は右「バラムシル」嶋は其「コンチジョン」次第年限を定て御貸渡に相成候は、其歲入の少利益は暫らく措き一は以て代地たる「クリル」嶋の全く無用の地にあらざるを世間に示し一は以て邦人他の「クリル」諸嶋に營業の氣を鼓舞するの一助とも可相成歟と存候

一「スカイレル」氏は淡泊にして欣仰すべき風ある人物なり余屢與之相往來す一日同氏其所見を余に語て曰く日本國海陸軍逐次盛大なるに及は、多年魯の所業を惡むよりして樺太嶋におゐて恐らくは魯と隙を生ずるに至らん歟魯は強國なり不用の地に向て強國と鋒を争ふは甚だ日本の爲に取らざる也故に果して予が近日側聞せし如く「クリル」全嶋と引替にて雙方一致するに至らば日本は其國威を損せず魯は雜居の地え罪人を送るの惡評を免れ兩つながら其宜を得ると謂ふべし予又聞く樺太嶋は日本の爲に全く利益なしと果して然らば新に得たる「クリル」嶋を好む者に貸して些少たりとも其利を占るに如かず Something is better than nothing と云々余素より微笑して答へざりしが是れ亦以て局外漢の一見を徴するに足れり因て并せて茲に録す

不承知の趣に付其旨本國へ申遣候處本國よりの命令にて  
拙者當表に於て境界一條委細の談判を遂げ其願末を可申  
越旨申來り條約は東京におゐて我外務卿と貴公使「スツ  
ルウエ」君と取結ぶ筈に相成居候然るに只今貴諭の趣に  
ては貴政府今度は當表に於て拙者と條約御取結被成度様  
に相聞候

如何にも左様にて候、昨年は拙者貴命の如く申上候得共其後  
拙者改て境界談判の調状を受け引續是迄貴下と屢次及御談判  
今日迄に立至候に付願くは當表に於て條約も取結全く此一事  
を成就致度義にて候

然らば兎に角御持越の御案文拜聽の上何分の返答可致候  
於是て「スツレモウホフ」氏貳通の書附を讀下し文且つ  
曰くこれは我皇帝陛下格別に貴國と交誼を篤ふせんと  
欲せらるゝにより是迄に一致せられし義にて候と云々  
但し其書通は「スツレモウホフ」氏より拙者宛の書面に  
て其大意魯帝には日本帝と交誼を永久に篤ふせられん  
との至情よりして是迄雜居より生じて兩國交誼の妨碍  
となる者を除き別紙の通懇篤の件々を以て其誠を表せ  
らるゝに付ては日本國皇帝陛下も御同懷を以て御一致

あらん事を切望す云々等の義を述たる者なり、他の壹  
通は即ち條約案文にて大略左の如し

(記註外編)  
第一款 兩國皇帝陛下ハ大政大臣「プリンス、ゴルチャコフ」ニ命  
ジ、大日本國皇帝陛下ハ海軍中將兼特命全權公使板本武揚ニ命ジ、  
双方一致ノ上テ條約ヲ確定セシム  
第二款 兩國皇帝陛下ハ其所領タル「クリル」全島共  
計十八島(即チ第一「シムシユ」島、第二「アライド」島、第三「バ  
ラムシル」島、第四「マカナルシ」島、第五「ヲネコタン」島、第  
六「カリムコタン」島、第七「エカルマ」島、第八「シヤスコタン」島、  
第九「ムシユル」島、第十「ライコケ」島、第十一「マツア」島、第  
十二「ラシヤ」島、第十三「スレドニワ」及「ウシシル」島、第十  
四「ケトイ」島、第十五「シムシル」島、第十六「プロトン」島、第  
十七「チエルボイ」及「ブラット、チエルボエフ」島、第十八「ウル  
イ」島)ヲ日本國皇帝陛下ニ讓リ日本國皇帝陛下ハ右「クリ  
ル」全島ノ權利ヲ占メ「シムシユ」島ト「ラバツカ」岬ノ海峽ヲ以  
テ兩國ノ境界トス  
第三款 各島ニ在ル各政府ノ動産及不動産ハ各政府ニテ買取ルベシ  
夫ガ爲ニ各政府ヨリ官員ヲ遣ニ其場所ニ差遣シ土地受取並ニ物  
品檢價等ノ用意ヲ爲サシムベシ、樺太島ニ在ル日本政府附ノ動  
産並ニ不動産ノ總價八萬三千八百七十五圓ハ取調ノ上「クリル」  
諸島ニ在ル魯政府ノ動産並ニ不動産ノ價ヨリ差引キ殘金ハ六ヶ

月内ニ比特堡府銀行ニ於テ渡ス可シ

第四款 各島ニ在ル各民(日本人及魯人)ハ去留ヲ任意ニ任セ留ル者ハ  
各舊來ノ所有物ヲ私有スルノ權利ヲ保存シ隨意ニ業ヲ營ミ自個  
ノ宗旨ヲ奉ズルヲ許ス只其支配權利ハ新領主ニ歸ス可シ、各島  
ニ住ム土人ハ三ヶ年内ニ去留ヲ氣儘ニ決セシム

第五款 「クシユンコタン」又「カルサコフ」岩ノ港ニ來ル日本國旗ヲ  
揚タル船々ハ十ヶ年間一切無稅ナリトス十年後ニ改正スルト否  
ラザルトハ其時ノ機嫌ニ關ス

第六款 「フホツク」海諸港ニ來ル日本國旗ヲ揚タル船々ハ魯國ト最  
親睦ナル國ノ船同様ノ權利ヲ與フル事但シ他國ノ事  
此中ニ關ス

第七款 此條約ハ各全權記名後六ヶ月内ニ兩國皇帝ノ批准ヲ比特堡府  
ニ於テ取替ス可シ六ヶ月ヨリ早ケレバ更ニ可ナリ

右は「スツレモウホフ」氏の讀過するに隨て隨記せる者  
なれば用語は少異あるべしと雖ども其趣意は異なる事  
なし勿論肝要の條款は拙者反覆推問せしものなり

拙者此書面を貴下に差出す事を肯ぜざる譯は貴政府におゐて  
御異論等差起り其議決せずして永引く時は此書も遂に篋底に  
歸するも知るべからず然るときは拙者我皇帝ニ對し卒爾の段  
面目無之によりてなり

一 御覽の通只今拙者各條款を筆記せしを以て此書面の大意  
を摘み早速電信を以て本國に報知し并せて結約の全權も  
委任有之候様可申立候

左様致度候我皇帝は成丈け速に此事を結了して貴國との交際を  
親睦にせられ度御意にて候我皇帝當夏も例年の通外國へ旅行せ  
られ候に付其前に條約取結に相成候様致度就ては貴下結約の全  
權を成丈け早く御委任相成候様致度稿案の文體杯は貴下御委任  
を被蒙候上にて尙又篤と御示談相遂げ改訂致候ても宜敷候

一 貴皇帝御懇篤の意は拙者委細拜承いたし候何れ本國より  
何分の命令差越次第早速爲御知可申候

致承知候

右にて畢る

「ラバツカ」は「カムサツカ」地方の盡頭なり

註 本號文書ハ五月十六日(條約調印後)東京ニ到達セル處  
右對話書中ノ條約案第七款ノ記事ニ關シ左ニ附記セル  
如キ電信往復アリタリ

(附記一)

明治八年五月十八日東京發  
コレマテ東京ニテ批准取換ス事ト思ヒシニ第七回對話書中  
七款ニ右ハ彼特堡ニテトアルハ如何

(附記二)

明治八年五月十九日魯都發  
時日ノ費ト不要ノ手數ヲ省カン爲メニ豫テ電報セシ通り東

京ニテ批准ノ事ハ既ニ約定セリ

七六 四月四日 寺島外務卿ト露國代理公使トノ對話書

樺太へ人ヲ遣シ調査セシムル旨ノ樺本公使ヨリ

ノ電信ニ關シ談合ノ件

附記一、三月二十五日及三月三十日露國駐劄樺

本公使ヨリ寺島外務卿へノ電信綴合文

二、四月四日寺島外務卿ヨリ露國駐劄樺本公使宛

(電信)

樺太へ人ヲ遣シ調査セシムル趣旨問合

ノ件

三、四月四日露國駐劄樺本公使ヨリ寺島外務卿宛

(電信)

右ニ對シ回答ノ件

第五十號之内

明治八年四月四日於外務省寺島外務卿魯國公使スツ

ルウエ應接記之内

一昨日附御書拜見せり樺本公使よりの電報不分明の處相

むる爲め官員派遣の事ならん

一クリル諸島に貴國人凡人程住するや

一拙者の見しは數百人なれと凡そ二千人居は住せん右島

に住人の多少に付損益は無之候只ラツコ獵多分に有之

候故此利益廣大なり是貴國の大利を起さん

一夫はウルツプならん

一其北方なりラツコは北による丈良好の品多し樺太にて

壹枚五十ドル位の品北によると百十ドルの價有之候

一右の條は未だ決定と申儀にも無之候間閣下丈えの話と被

致度候

一此度御決定相成候節は御報知相願候其期は何頃なるや

一電報不明の廉問合せに遣し有之故返事次第決定可致候

一御見込は如何樺本君より右定約へ調印の權御委任御遣

し被成候事歟

一然り

一電線の損所も修復出來候間速に御返事は參るへし

註 右ニ「電報不明の廉問合せに遣し有之」トアルニ關シ寺

島外務卿ト露國駐劄樺本公使トノ間ノ往復電信左ニ附

記ス

六 樺太千島交換條約締結ニ關スル件 七六

分り候哉

一分りたり樺太の代りにクリル諸島を我政府へ御渡相成る  
事兩島クリルに住する人民は其領主の管轄を可請事樺太  
に在る建家カラル悉皆貴政府於て買取る事右諸島に住する人民  
三年間は去就勝手たる事兩國より官員を同地え差遣し取  
調へさせる事

一拙者方への通信は左程詳數無之其件々は元來我政府の  
見込なる事は既に承知致居候拙者方への通信は樺太の  
代りにクリル諸島を貴政府へ渡す事其終りに右の事は  
樺本君より外務省へ電報の上許可を得可事と有之候

一右條中人を遣し調べさせるといふ事不分明故今朝問合せ

置候

一拙者の考は其地に在る總ての建家を我方え買取候事故

兩方より人を遣し取調べねはならぬ故の事と存候

一勿論の事也其内に凡積りの金高書載有之候故疑數故問合  
せ置候

一旦又樺太に住する貴國人今度魯領になりたる事を不知

故に貴國より人を遣し其旨を公布シクリルに於ても然  
り我官人を遣し此度の儀を報知し其人民をして信せし

(附記一)

明治八年三月廿五日及卅日發ノ電信綴合文ヲ成ス左ノ如シ  
魯政府ハ詰リ左ノ事マデニ承諾セリ千島ヲ殘ラス渡ス事故  
府ノ動産不動産ヲトモニ買取ル事五ニ早ク人ヲ遣リテ調へ  
ル事「千島ノ魯人ハ日本政府ノ支配カラフトノ日本人ハ魯  
政府ノ支配」ソノマ、營業シ土人ハ三歳内ニ去留ヲキメサ  
セル事、久春古丹ハ十歳無稅港其後ハ更ニキメル事、御訓  
狀ノ六七八ノ事、伯得堡ニテ條約ヲ結ブ事、右ニテヨクバ、  
結約ノ御委任狀ヲ早ク可被差越「日本政府ノ動産不動産ハ  
九萬三千八百七十六圓ナリト魯政府ヘシラセ置タリ、右可  
然ハ其事務ヲ行フ爲メ電信ニテ全權ヲ附セラレタシ尤便次  
第書面ノ全權狀ヲ送ラルベシ」

(附記二)

明治八年四月四日東京發  
去月三十日の電信にて已に魯政府へ讓渡代金の高を知らせ  
たる旨申越れたり何故互に早く人を遣りて調べる事を要す  
る哉更に申越さるべし

(附記三)

明治八年四月四日魯都發

知らせ置きたるは元直にて今の價ひは立合にて調らべ若し魯政府の建物千島に有ときは日本政府にて買取等なればなり

七七 四月九日 寺島外務卿ヨリ 露國駐劄根本公使宛(電信)

樺太島代物トシテ千島全島ヲ我ニ收ムル時ハ更ニ他物ヲ望ムハ不可能ナリヤ否ヤ等ニ關シ問合ノ件

明治八年四月九日東京發

クリルを不殘取るときは外にかわりの者を望む事出來ぬ哉又我より樺太の建物の價をしらせ置たれとも魯政府はクリルの建物の價は知らせ得るか

註 右電信ニ對スル樺太公使ヨリノ返信ニ關シテハ次掲七八中ノ「」昨九日東京午後四時半發線の秘號電信ノ項參照

七八 四月十日 露國駐劄根本公使ヨリ 寺島外務卿宛

全權を近日の中拙者え御命令可相成御話有之たりとて同氏より「スツレモウホフ」氏え以電信申越たる趣に付拙者は未た可否とも承知不致旨答置申候併不日何分の御沙汰可有之と待居候

一昨九日東京午後四時半發線の秘號電信同夜二時到來御申越の旨致承知候即ち只今(十日午后八時)左の通以電信及回答候

Monsieur Terashima Affaires Etrangères Tokio Japon. Résultat première question reçu après long debat recevoir plus impossible. Seconde question, montant évalue presque rien mais sous peu quelques informations ultérieures possible. バラムシル日本政府ニソクセバ、毎年税を出シテカリタシト我ニ願出シ、タシカナル亞米利加人アリ エノモト

「クリル」諸嶋を不殘相渡候事と樺太嶋に在る我政府動産不動産を彼方にて買取候事は相應に議論相詰め候上にて魯政府同意致候義に付もはや此上外に代物を論候とも事實難行に付大體右にて御決着の方可然存候尤結約の全權御委任有之候上は小節目は臨機を取計を以て我方に利益を取候積

千島全島ヲ日本政府ノ有トシ樺太島所在日本政府所有ノ動産不動産ヲ露國政府ニテ買收ノ事ニ談判落着シタル旨等報告ノ件

附屬書 三月三十日及四月五日露國駐劄根本公使ト露國亞細亞寮頭兼外務大輔トノ對話書 樺太千島交換條約書ノ調印及批准等ニ關シ協議ノ件

六月三日着

六月五日條公え差出す

別記第二十四號

以公信致拜啓候然らば東京二月七日附の一切公信書類隨に落手御申越の件々逐一致承領候其後昨今迄數度の秘號並に通常電信往復は素より既に御承知の義に付別に不贅候

一當月五日拙者當表外務省え罷越「マリヤルズ」船一件書類魯帝御名宛にて表向差出し申候秘露公使は不快に付以書記官同日書類差出し申候委細は別紙同件公信にて御承知可有之候、同日外務大輔兼勤「スツレモウホフ」氏申聞候には其表在留魯公使「スツルウエ」氏え閣下今般樺太嶋一件結約の

に候得共是は預め申上候事難相成候

一近主釜泊人殺一件吟味裁判書類此程沿海道より相届き亞細亞寮より差越候得共只今魯文翻譯中に付何れ後便御報可申候

一先頃申進候樺太嶋動産の金高九千八百三拾圓(拾三圓)は全く寫字の誤にて右は壹萬九千八百十三圓にて候間左様御承知可被下候尤此儀は三月三十日當表發線秘號電信に合高九萬三千八百七十六圓と申進候間(不動産七萬四千零六十三圓、動産一萬七千七百七十六圓)既に御承知の義には候得共爲念申進置候尙此義別紙對話書第八回にて御承知可被下候將「クリル」嶋魯政府建物の義も是又同書にて御承知可被下候

一「クリル」諸嶋の書類別紙の通翻譯爲致候差進候分御披閱可有之候外に航海の一助とも可相成「クリル」諸嶋景色の圖等并せて九枚差立候乍併是は荷物に屬し候間大凡一周日位は遅れて御落手可相成と存候是迄其表より御差越の版行書類坏も常に一周日許後れて落手致候

一今般外務小丞森山氏朝鮮國爲理事官被差遣候に付其御委任狀書類等御差越被下御注意の段委細致承知候當政府今日に至る迄朝鮮國の義に付ては一向發語無之候に付勿論此

方よりも一語も吐出し不申候蓋し魯國は其沿海道地方も未  
た萬事不整理に付朝鮮國杯の義に至ては本邦人の推察する  
程の深意は差詰め無之様子に相見候尤沿海道地方民口相増  
兵備稍整ふの秋に至れば皇國より朝鮮え對しての舉動を注  
意して時宜に寄り其間に隱然混入する事は必然可有之候得  
共目今は左様の委一向相見不申候一體亞細亞國在留各國公  
使等狡猾伎倆と本國政府の了見とは稍齟齬する所無きにし  
もあらざるは閣下御承知の通にて候

一三月卅一日秘露公使「ラウアレ」氏の妻時候病にて死去い  
たし候に付當四月三日「コール、チプロマート」一同葬式に  
相臨申候、魯政府よりは「ゴルチャコフ」侯の代として「ス  
ツレモウホフ」氏罷越候外に魯帝の命にて式部頭其外一二  
の高官等其席に相臨申候共に大禮服なり  
一「イスパニヤ」國より今般全權大使當表え罷越（魯政府は  
數月前「アルフォンソ」を認可せり）兩三日前謁見相濟舊公  
使は出立致候同國「カルリスト」黨の亂未だ平定不致候へど  
も「カルリスト」老將「カブレラ」氏の布告書一出以來降伏者  
次第に相増し其上「ドンカルロス」の倉庫空竭に相成候に付  
不遠中平定可致との取沙汰にて候

一外務大丞鹽田氏並に電信權頭石井氏當表電信會議に被罷  
越候段は貴報にて承知其外右會議開席の日限御尋に付即日  
以電信及回答置候勿論二氏來魯の段は當外務省え相届け申  
候同伴は「スツルウエ」氏よりも既に申越居候  
一當四月六日東宮の奥方御分婢一女子を擧られ候に付爲祝  
罷越候（但し姓名を簿に記して去る而已）名を「キシニヤ」と  
命ぜられ母子共に御壯健の由  
四月十日

榎本 武揚

寺嶋外務卿殿

追啓當表も追々暖氣に向ひ、日も次第に長く相成本日、々  
出、朝五時三秒、日没、夕七時五分にて候途に六月中旬頃  
に至れば眞の不夜城と相成申候、「ネワ」河は猶依然氷合致  
居候得共氷上馬車の通行はもはや四五日前より相止り徒歩  
而已にて候乍去郊外は殘雪猶二尺を存せり、舊冬より酷寒  
の節とても「レウミニール」氏氷點下二十度を越たる事は僅  
に兩三次にて其餘は大抵氷點下十三四度より十七八度位に  
て止り候、雪は平地上四尺に足らず河氷は厚さ三尺に過ぎ  
ず、造屋の結構極て堅牢なるを以て嚴寒の時と雖ども室内

は常に春の如し只冬分の長きを以て五六月の交より皇帝始  
富貴の人々並に「コールチプロマート」も悉皆旅行或は田舎  
住居致候に付都下は却て寂寥と相成申候

（附屬書）

對話書第八回

明治八年三月三十日午前比特堡府亞細亞寮におゐて

全權公使 榎本 武揚

通辯 公使館附屬 ボン ベ

「亞細亞寮頭」 スツレモウホフ  
兼外務大輔

一過日御持越の條約御草案の大意は既に電信を以て本國え  
申遣候に付何れ不遠返答可有之存候若し本國にて承諾有  
之上は拙者結約の全權を貴政府に表するに電信文にて  
も宜敷哉否らざれば少なくとも二ヶ月は手間取可申候

（注）右は電信にて御申越有之様致度候貴下結約御委任の電報御落  
手次第其寫を當外務省え御差出し可有之然る上は拙者尙貴下  
と過日の條約案文を詳細御相談の上確定可致勿論其本書に御  
記名被成候節は電文にあらざる御委任狀を要し候に付夫迄の  
間には郵船にて御委任狀御申越有之様致度事にて候  
我皇帝は來る五月下旬には外國へ御出立可有之に付可相成は  
其前に双方全權の記名相濟我皇帝の批准も爲濟度候

「スツルウエ」氏は過日電信を以て拙者貴下と談判一致いた  
したるに付日本政府右を御承允の上は當表に於て條約取締に  
可相成段爲知置申候其譯は同氏事元來此件全權の委任を帶居  
候へばなり

一承知致候、借先達て樺太嶋に在る我政府動產不動産の價  
を書面にて差進候節動產の價壹萬九千八百拾三圓なるを  
寫字者誤て壹萬の字を脱し申候此段御斷置申候就ては右  
書面え御書入置可被下候

（注）一承知致候、貴下より御差越の代價は素より双方官員立合検査  
の上確定可致義に付更に差支無之候殊に動產は時に損失及増  
減致候ものに付當表にて確定は難致事にて候

一御同論に候、只過日貴下御持越の條約案文中に拙者より  
申進置候代價御書入有之候に付他日の間違を避ん爲め右  
様申上置候義にて候

（注）一條約案文中に代價認入候は各政府附の動產不動産は互に買取  
るといふ基礎を髓める爲めに書加へ置たる迄にて本條約には  
素より認入るべき義には無之候畢竟此件は互に買取るといふ  
基礎を表する迄にて價の當不當は實地に就て相定り候義にて  
候

一宜敷候

右にて畢る

四月五日亞細亞寮に於て前同氏と對話

「クリル」諸嶋に在る貴政府附の建物は凡何程の價なる  
歟未だ御調無之哉

〔(朱書)〕右は東察加え不申遣候はでは憚なる事相分り兼候然るに同所  
迄は電信線無之に付多少の時月を費し可申候、拙者相考候に  
「クリル」嶋には我政府の建物は殆ど可無之と存候、千八百  
六十年迄は「クリル」諸嶋を「リユン、アメリカン」社中  
賃附置候處六十年に政府引上候節社中附屬一二の建物を政  
府にて買上候へども今は既に破損せしも不可知、何れの道極  
て瑣々たる者に可有之に付貴政府御心配被成候程の義には決  
て無之候

一併有無とも拙者本國え申遣さざるを得ず候

〔(朱書)〕然らば内務省え問合せ何とか取調出來次第早速御報可申候  
一承知いたし候

七九 四月十七日

寺島外務卿ヨリ  
露國駐劄本公使宛(電信)

樺太千島交換條約締結ノ全權委任狀送付ニ關シ  
通知ノ件

明治八年四月十七日東京發

コレ迄ノ申立惣テ承諾セリ即チ締結ノ全權ヲ附ス委任狀ハ  
鹽田出立ノ節贈ルベシ人ヲ遣リテ調ベルニハ其人ノ官職及  
期日ヲ報ゼヨ

八〇 四月十七日

露國駐劄本公使ヨリ  
寺島外務卿宛(電信)

樺太、千島ニ於ケル私有物ハ相互ニ不買ノ約束  
ナル旨竝ニ千島ニハ露國政府ノ建物皆無ノ旨報  
告ノ件

明治八年四月十七日魯都發

私<sup>オライエイトフラスチ</sup>有<sup>ハ</sup>物<sup>ハ</sup>タカヒニカワヌヤクソク<sup>オヒシヤルインホルメーション</sup>公<sup>告</sup>ニ  
クリルニハ魯政府ノタテモノ無トナリ

八一 四月十九日

露國駐劄本公使へノ樺太境界ニ關スル條約締  
結ノ全權御委任狀

御委任狀

海軍中將兼特命全權公使 榎 本 武 揚

樺太境界ノ事朕カ勅命ノ條款ヲ遵奉シ伯得堡府ニ於テ魯國  
政府ト締結ノ全權ヲ委任ス

明治八年四月十九日

御 名 御 璽

奉 勅 外務卿 寺 島 宗 則 花 押

八二 四月十九日

三條太政大臣ヨリ露國駐劄本公使へノ  
訓條

樺太境界ニ關スル露國政府トノ談判ニ就キ心得  
方指令ノ件

訓條

海軍中將兼特命全權公使 榎 本 武 揚

今般魯西亞國政府ト樺太地方ノ儀談判ニ付猶稟陳ノ趣アル  
ニヨリ更ニ左ノ訓條ヲ附ス宜ク遵守シテ失フ事ナカルヘシ

第一款

樺太全島魯西亞國支配ニ歸スト雖モ楠溪ニ輸入シ及ヒ輸出

六 樺太千島交換條約締結ニ關スル件 八二

スル我國民ノ商物ハ締結後十歲内ハ稅ヲ課ス事ナク其後ニ  
至レハ兩政府ノ協議ヲ經テ收稅ノ有無ヲ定ムヘキ旨ヲ約ス  
ヘキ事

第二款

明治七年三月ノ訓條中六七八三款ノ主意ニ原キ條約ヲ結フ  
ヘキ事

第三款

樺太島ニアル我國官私ノ建棟及ヒ其他ノ不動産ハ引拂ノ時  
魯西亞政府ヨリ相當ノ代價ヲ以テ買取シムル事

第四款

代地タル「キユリル」諸島ニアル魯西亞國官私ノ建棟及其他  
ノ不動産ハ引拂ノ時日本政府ヨリ相當ノ代價ヲ以テ買取ル  
ヘキ事

第五款

右二款ニ付其代價ヲ定ムルニハ双方ヨリ期限ヲ約シ官員ヲ  
派出シ樺太并ニ「キユリル」諸島ニ於テ動不動産ヲ取調フル  
事ヲ約スヘキ事

第六款

「キユリル」諸島ト樺太島ニ住スル蝦人ハ各政府新所領ノ地

ニ改テ轉住スルト否サルトハ彼輩ノ所望ニ任セ三歳内ヲ期シテ其去留ヲ決セシムル事ヲ約スヘキ事

第七款

各民是迄在住セル地ヲ引拂フ事ヲ望マスシテ依然其地ニ於テ生計ヲ營ムヲ願出ルトキハ各政府之ヲ拒ム事ナシ只其民ハ新領主ノ國律ヲ以テ支配シ其民ノ苦情等ヲ舊領主政府ニ於テ關係スル事ナキヲ明治七年三月ノ訓條十二款ヨリ甲乙丙丁ノ條款ニ原ツキ結約スヘキ事

明治八年四月十九日

太政大臣 三條 實 美 花 押

八三 四月十九日

露國駐劄樺太公使ヨリ  
露國外務大輔宛

樺太千島交換條約締結ノ全權委任アリタル旨ノ

電報到着シタル旨報知ノ件

三拾七號

千八百七十五年四月七日<sup>十九</sup> 比特堡府帝國日本公使館  
に於て

別記第二十五號

以公信致拜啓候然當四月十七日午後七時五分東京發線の秘號電信同日午後十時到來御申越の旨左の通正に承知仕候電文

「レ迄ノ proposition スベテ承諾セリ、即チ結約ノ全權ヲ付ス、委任狀ハ par depart de Shiota 贈ル可シ、人ヲヤリテ調ベルニハ其 Prévenez date et position du personnage 寺嶋

於是翼十九日右全權御委任の趣別紙<sup>(註入)</sup>三十七號の通常外務省え表向差出し且一二の事柄を「スツレモウホフ」氏と及談判候條別紙對話書第九回にて御閱讀可有之候

同二十日午後二時十分東京發線の秘號電信同夜十一時到來御申越の旨左の通承知仕候電文

Privilèges de propriété et pêches ノ事ニ付 préalablement ミスエガタキ事アルガ故ニ實際取調ノ上

ナラデハ本條約トナサル事ヲ假條約中ニ書加ヘ可シ御申越の意を察するに人民所有物及漁業の特典に付ては拙者當表にて判然取極候ては落度有之たる節不都合との御注意と存候に付(拙者所帶の御訓狀中に詳載有之ども)同伴に就ては條約面或は條約附録中に後來不都合を生ぜざる様

六 樺太千島交換條約締結ニ關スル件 八四

拜啓、樺太嶋と「クリル」諸嶋交換の義に付ては兼て及御談判置たる基礎に從ひ猶御相談を遂たる上にて其條約を取結べき全權を今般我政府より拙者え委任致候旨以電信申越候間此段及御報候但し右委任狀は鹽田氏持參にて來る六月二十日頃當表到着可致候敬具

榎本 武 揚

外務大輔 べ、スツレモウホフ君閣下

八四 四月二十四日

露國駐劄樺太公使ヨリ  
寺島外務卿宛

樺太島中日本人所有ノ動産不動産及漁業權ニ關

シ實地調査ノ上ナラテハ本條約トナシ難シトノ

寺島外務卿ノ訓令ニ基キ露國全權ト折衝シタル

願末報告ノ件

附屬書

四月十九日露國駐劄樺太公使ト露國亞細亞寮頭  
トノ對話書

樺太島中日本政府所有建物實地調査ニ關

スル件

用語に注意し而して貴諭の御趣意も書加可申候得共「本條約トナサル」との語は條約文に書加がたき義に付「實地取調ノ上ニテ委曲可取極」と書入候積に候何となれば今般拙者結約の全權を奉じ條約面に記名致候上は格外不都合有之外は兩皇帝其條約面に御批准可有之義に付右様なる不當語を用候譯には參兼候條御承知可有之候將又御申越の本條約及假條約の字義は各全權記名濟の者を假條約とし兩皇帝批准濟みの者を本條約と名付られ候義と相察申候由是相考候へば御來意にては前文特典の義實際御取調相濟不申中は我政府條約面に御批准不被遊との義に可有之若し左様の思召に候は、其取調不相濟中は拙者も條約面に記名致候譯には相成不申第一當國全權人も無論記名致間敷と存候就ては御申越の件を條約の附録に書加置而して各皇帝の批准は其前に被爲濟候歟或は實地取調相濟たる御沙汰有之候迄拙者結約の期を相延し候より外致方無之と差詰相考候に付即ち過る二十一日左の通以秘號電信及伺候義にて候

電文 Telegram of yesterday ノ事ハ實地取調ノ上ニテ定

メント Separate article ニ書加ヘ置ケバ其調前ニテ

中 treaty 〃 ratify 〃 〃 〃 榎本





故に前文二者の中貴政府何れなりとも御撰び可有之拙者の考には前條の方双方の爲め可然存候如何

〔朱書〕拙者丈は御同説に候得共太政大臣え申入たる上ならでは獨斷いたし兼候

一尤只今申上候義は拙者一個の考に付貴政府御一致とあらば其段急に以電信本國え申遣し返答を可待候間至急御決議有之度候

〔朱書〕致承知候、一事何度候義は過日條約案文貴下御見込の應御書加相成候上は直に御記名被成候哉

一 只今及御談判たる一條相定候上は直に記名可致候、夫の實地取調の件は双方より早く人を差出し候様御互に電信にて申遣候は、格別手間取れ申間敷候

〔朱書〕併右は各全權記名の後當方にては「シベリヤ」總督方え以電信申遣候積にて候、條約案に添たる Declaration に書載たる各政府動産不動産引受方の義は御異存無之候哉

但し右 Declaration に建物等は双方官員實地立合検査の上其届書に基き樺太嶋建物等は「クリル」嶋魯政府建物代價より差引殘金は各地受取渡濟の後六ヶ月以内日本政府え相渡可申と有之渾て先便差進候條約案文開取書に同じ

一 異存無之候併拙者の考には此件も亦我政府條約批准前に實地立合検査爲相濟候見込かと被察候其故は前文特典實地取調の同時に致候方便に候へばなり

〔朱書〕條約案に貴下御見込御書入は何頃御差越可相成哉

一 四五日中に差進可申候其前に前文の段「コルチャコフ」候より御決答有之度候

〔朱書〕致承知候

右にて畢る

右の通なる次第柄に付魯政府より決答有之次第早速以電信前文の段相同可申候條約案文は只今差上兼候間右案文之此方書加可申廉々雙方一致相成候上にて原文翻譯兩通并せて差進可申候品に寄り記名前に以電信其大略御報可及候

四月廿四日夜

榎本武揚

寺嶋外務卿殿

〔附屬書〕

對話書第九回

明治八年四月十九日午後比特堡府亞細亞寮に於て

全權公使 榎本武揚

通辯 公使館御雇 ボンベ

〔朱書〕外務大輔兼勤 スツレモウホフ

一 今般別紙の通拙者結約の全權本國政府より以電信申越候間此段爲御知申候

この特別紙三十七號の書翰を遞す「スツレモウホフ」氏一讀し了りて

〔朱書〕致承知候此書面は早速「ゴルチャコフ」氏を以て皇帝え奏聞の上此方にては皇帝より結約の全權を被命候者有之様可致候

一 就ては過日拙者方え御持越有之たる條約の御草稿御差越有之度左候へば拙者閱讀の上猶書加候廉々可有之候

〔朱書〕過日の草稿は只大意を述候迄の義に付今般更に微細の廉々をも書入文面を改め候上にて拙者貴館え持參可致候に付貴下御熟讀の上御異存の應有之候は、猶御談判可致候我皇帝出立の期も最早相迫居候に付立前に各全權條約面に一致相成候様致度候

一 致承知候結約の義貴政府御差急きに付ては貴下御參考迄に一事申入度義有之即ち樺太嶋にある我政府建物等雙方立合取調の一條にて候右代金は僅に拾萬圓に充たざる小高なるに雙方立合検査等にて異論紛出せば空く時日を費すべし其上彼地は航海の季節限りあるを以て坐ろに時機

を失ふ事あるも測るへからず故に彼地立合検査の手續を省き右金高を直に我方に御渡有之候へは餘程時日を省き可得を以て雙方の便利に可有之と存候

〔朱書〕併各地受取渡の節は雙方より役人立合條約文を各民に可申渡に付其節建物等立合検査いたし候方可然候

一 各地受取渡の節は勿論貴論の如く可致善に候得共右は各皇帝條約面に批准相濟たる上の義にて建物等立合検査の義は時日を費すべきを以て其前より取掛らざるを得ず候

〔朱書〕立合検査は條約批准後にては宜き事にて候併其以前より取掛り候とも何れも御相談次第にて都合好き方に從ひ可申候金高は僅の義なれども雙方役人立合の上列然公私の品物を分たざる時は後日これは我か私有にして官物にはあらぬ杯訴出る輩可有之も難測に付矢張立合検査は要用にて候尤當方より差出候役人は其場に於て異論を不申立只其實地の有様を取調候様可申聞置候

一 然らば何頃何様なる役人を御遣に相成候積に哉前以て御打合せ置其旨を本國え可申遣候

〔朱書〕差遣候役人の員數及位級等は東「シベリヤ」總督より人撰可致義に付豫め申上兼候得共何れも是等は條約文附録に記載いたし不都合無之様可致候間後日に可達御相談候

一致承知候、

倍外に一事改めて申入候昨年拙者差出し置候樺太嶋人殺一件の覺書に對し右罪人裁決の御辯解を今般條約取結の前に貴政府え請求可致旨改めて本國より命令有之候尤同伴に付過日御差越の沿海道裁判所の裁決書は拙者熟讀致候處不充分の廢有之本國政府え其儘難差遣候間明日以書面其廉御尋問可致候間御辯解有之度候

一右一件は大に我人心に關係有之事にて候  
〔(未考)一致承知候〕

一過日御話申上置候萬國電信會議の席え「ボンベ」氏を花房氏え爲通辯差添出席爲致度段内務卿より御回答有之候哉  
〔(未考)一致承知候〕

右にて畢る

八五 四月二十六日 露國駐劄樺太公使ヨリ 寺島外務卿宛(電信)

露國政府ハ所有地及特許權利ノ調査以前ニ樺太千島交換條約ニ批准ヲ與フルコトヲ欲セサレトモ現在人民ノ特許ヲ有スルコトヲ保證セル次第

報告ノ件

明治八年四月廿六日魯都發  
雙方議論ヲ詰メタル後魯政府ハ批准ヲ所有地及特許ノ權利等ノ取調前ニ附スルヲ欲セスサレトモ同政府ハ現在ノ人民生涯ハ是迄ノ所有特許ヲ有スル事ヲ保證セリ閣下ノ決議ヲ贈レヨ左ナクハ條約ニ調印スル能ハス

八六 四月二十七日 寺島外務卿ヨリ 露國駐劄樺太公使宛(電信)

千島ニ於ケル露國人ノ所有地及特許權利ヲ調査シ相當ト認メタル上ハ樺太千島交換條約ニ調印スヘキ旨指令ノ件

明治八年四月廿七日東京發  
クリルニ在ル魯人何程ノ地ヲ有シ何程ノ特許アルヤヲ魯政府ニ聞科シ事理相當ト思フナラバ調印セヨ其條約ヲ我政府ニ送ラバ批准ヲ與フル遲延ナカルヘシ

八七 四月二十七日 露國駐劄樺太公使ヨリ 寺島外務卿宛(電信)

樺太千島交換條約ハ調印後六ヶ月以内ニ東京ニ於テ批准交換ヲナシ所有地及特許權利ハ實地調査ノ上日本駐劄露國公使ト決約スルコト提徑ナルヘキ旨申出ノ件

明治八年四月廿七日魯都發

コ、モト調印済ヨリ六ヶ月内ニ批准ヲ東京ニテ取換ストシ所有及特許ハ實際取調ノ上ソコモトスツルウエト取極メニナルトセハ早道ナリ至急御返事下サルヘシ

八八 四月二十七日 露國駐劄樺太公使ヨリ 寺島外務卿宛(電信)

樺太千島交換條約締結ニ關スル最後訓令ノ電文不明ニ付更ニ明瞭ナル回調ヲ送付アリ度旨申出ノ件

明治八年四月廿九日魯都府發

閣下ノ返答分明ナラズ我此程ノ最後電報ニ對シテ分明ナル

六 樺太千島交換條約締結ニ關スル件 八七 八八 八九

モノヲ至急御差越可被下候

八九 五月三日 寺島外務卿ト露國辦理公使トノ對話書

樺太島問題實地調査ニ關シ協議ノ件 第六十號

明治八年五月三日於本省寺島外務卿魯國公使と應接筆記

一柯太一件 禮畢

〔(未考) 柳公〕

一過日も御面晤致置候柯太一件は先大要丈は榎本公使貴國政府と及御談判相定り候へ共實地取調方等に至ては拙者閣下と御談示の上取計度存候  
實地に就き可取調事三四ヶ條有之候其中第一は我政府にて樺太島に取設置候建物類は悉皆貴政府へ譲り渡シクリル嶋に在る貴國政府にて建設の分は我政府にて可引受と致約定候よし然る處クリル島中には貴方にて被取建候もの無之趣又雙方人民の私有物は動産不動産を不論都

て不買取旨結約致し候よしの處クリールの方人民所有の地面等に付ては是迄どれ丈の權利を許し有之しや右等は悉く實地に至り不取調は不相成候

取調の義は於貴國雙方調印の日より六ヶ月中に相運度旨榎本より申越候處彼我の間遼遠隔絶往復不容易義に付先十二ヶ月の期を約し置其上六ヶ月也七ヶ月位にて取纏度候へ共幾千が預備の月有之候方可然義と存候

〔朱書〕

〔公使〕

一 彼地には魯政府より官吏往來致居候義に付貴國よりも官員出張の上協議調査致し候は、容易の事に可有之且大要が決定候上は細目丈の事故格別日月を費し候義は有之間敷依て拙者は六ヶ月にて十分取調可相成事と存候

候

〔朱書〕

〔公使〕

一 然り六ヶ月位にて取調可付候へ共自然航海中風波等の爲空敷數日を可費も難測兎角十二ヶ月位を期し候方可然と存候他條約上に付ては十八ヶ月を限り候例も有之候且取調の義は閣下と御打合の上可取計旨申來候邊も有之旁以及御協議候義に候

〔朱書〕

〔公使〕

一 閣下御承知の如く最北の嶋嶼邊は九月に至り候へは堅氷を結ひ航海も不相成候依て其期限を定候ならば六七八の間に不致は相成間敷當年とても八月を過候ては不相成候と存候

一 當年も九月迄とし僅か五ヶ月也六ヶ月は一ぱい入用の處右の通り一ヶ月不足にて夫是を勘合候ても六ヶ月より延期の方可宜と存候

一 雙方の調印後れ候ては不相成候に候へ共調印さへ相濟候は、取調の方は少々位延引致し候とも不苦事と考候

一 調印の後れ候事は決て無之候

一 九月と相成候へは航海不出來義に付夫迄に不建時は來年の事に候

一 御尤の事に候

一 拙者の考には非常の差支有之候外五ヶ月を期し候方可然もし右期限内に取調不相附候時は尙何程かの期を延し候とも本件には差障無之旨結約致し置候ては如何哉軍艦を差遣し候とも貴説の如く海上風浪等の難も不可測義に付前顯の通致し置候は、差支有之間敷存候且不

得已差支云々も口上にて御約束致し置候方宜敷公然書面に認候は不都合と存候

一 右延月の義は假令は風雨其他天災の外委曲不申來候等の事故あらんも難測是迄は都て電信而已にて致往復候事故兎角十分を不盡候夫等の用意の爲日月を延す事なれば矢張書面に記載致し候方可然と存候

一 御協議にて取調候にも拙者存居候丈は大略閣下も御承知の事に可有之候間六ヶ月を期し候は、十分の事と存候

一 十分とは存候へ共どれ丈か猶豫無之候ては不都合也今月敷を増し候とも夫れが爲め格別遷延も致す間敷可成早く取纏度候へ共眞に用意の爲に延期の御相談に及候事也

一 六ヶ月内取調の事は魯國にて御談判ありし由に候へは夫れを延候ては宜敷も有之間敷且軍艦にて往來致候事故二ヶ月半位にて可宜と存候

一 取調丈には二ヶ月半も懸り候は、可相辨候へ共前にも陳せし如く自然何等の事故あらんも難計と慮り若干の延期を申入候事に候

一 萬一天災地異等の爲め延期相成候とも決て條約面には

差碍申間敷候六ヶ月を期し候は雙方此一件を早く結局ならしめんとの意に出候事と存候

一 全體實地取調の事柯太の方は貴方にて御調査有之候事と存候へ共クリールの方は此方にて可取調答なるも那の地方は是迄甚た不明に付大略の處取調越候様榎本へ申送り候へ共未だ其回答無之候素より雙方共詳審取調すは不相成候事也

一 クリール嶋取調の節も柯太島を調査致候節も都て雙方より官吏出張俱に取調候答夫れは六ヶ月にて十分と云談判にて右期限を被約候事と存候

一 多分左様ならんが夫等の邊榎本より委敷不申越候故不明に候

一 彌彼地に至る時何地に幾干日逗留何地には何程位と云事も不相分且官員出張取調來候ともどれ丈の事を調來候哉も難圖又九月よりは航海測量も不出來候事故六ヶ月より延し候方に致度候

一 閣下は何地に幾敷日を費し候哉の邊御見込不付候とも六ヶ月中には必ず調の出來候事と存候且彌延期の方可宜御見込に候は、榎本君より我政府へ御相談有之候方

可然哉と存候

一取調は此方にて致し候事也且榎本より委敷は不申越候へ共調の事は閣下と御相談致し候様來信有之候得(マ、)き閣下へは貴政府より何事も御申越無之候哉一何も申越候事無之候

拙者は榎本君より閣下へ被申送候義を魯政府より拙者へ申越候事と見做過般來及御相談候義に候該件は最重大の事にして雙方

皇帝陛下の允准を以處置致し候事にて六ヶ月期限も我皇帝へ伺候上榎本君より被申送候事と存候且右期限を多く延し候ては却て貴國の御爲不宜事と拙者親縁の者より内密申來候事御坐候

一右期限は貴國政府と結約致し候事とは不申越候閣下と御打合の上確と可相定旨申來候此方よりクリール嶋へは初て渡航致し候事故未た何事も不相分出張の官吏取調來候ても尙政府にて審査等にて多少の日月を經費可致候一體貴方にては日本の都合は深く御存なき事と存候榎本も参り居候へ共委任致置候權限外の事なれば同人の取計にも不相成候事也

一取調の事拙者へ我政府より委任相成候事に可有之と存候へ共未た何も申來候事無之彌委任相成候上は種々問合候事も可有之候乍然六ヶ月内には可相辨事と存居候拙者にて六ヶ月内に取調方如何哉と不審有之候へは必閣下へ延期の事可申上候へ共六ヶ月にて十分と存居候故斯く云々陳述致し候事に候

一榎本よりの電信も片言隻語にして如何様の都合に可致等委敷不申來只取調方は閣下と御打合致し候は、可宜旨申越候擬彌實地取調方に付ては何様の手續に致し可然哉一電信はいつ御落手に相成候や一去る廿七日也

一拙者の考には實地調査の節は先柯太島へ雙方より官員出張一々取調候上一旦立歸り尙又クリール島へ雙方官吏出張取調歸國の上雙方共政府へ申立候手續に致し候方可然と存候尤格別多くの官員出張致し候譯にも無之軍艦一艘へ雙方の官員乗組候て可宜候

一夫等の事を極るに如何可致哉一未た我政府より拙者へ委任無之義に付確と難申上候一然らば「書面を指し」此返事を先申送るへし其上にて彼方

よりも司令あらん

一取調方閣下と拙者御相談にて可致事は本國にて調印の日直に拙者え指令有之候筈に候

貴方にて拙者より早く御聞込の義は爲御知被下度候

一諾

一取調方閣下の御所見は如何に候哉

一一體柯太を管轄支配するは開拓使の主任にして多く同使にて處置致し候事に候依て同島取調の爲出張するも開拓使の官員也クリール島迎も矢張同様の事に候

一樺太也クリール也何れも同く僻地にて寒氣酷烈故可成速に調済に相成候様致度候

一然り乍然六ヶ月にては更に豫備の日無之候事故自然不都合もあらん歟と懸念致し候

一尙委細他日の御面晤を期し候

右にて畢る

九〇 五月四日 寺島外務卿ヨリ 露國駐劄樺本公使宛(電信)

調印後六ヶ月以内ニ東京ニテ批准交換ノ事了承ノ旨回答竝ニ樺太千島ニテ兩國人民ノ所有地及漁業權特許等ノ取調及取極ノ事ヲ日本駐劄露國公使ニ委任アル權露國政府へ申出ヘキ旨指令ノ件

明治八年五月四日東京發

其許調印済ヨリ六ヶ月内ニ東京ニテ批准取換ノ事承知セリ樺太クリールニテ雙方ノ人民所有特許等取調及其取極メル事ヲ速ニスツルウエニ委任アルベシト魯政府へ申立ヨ

九一 五月七日

樺太千島交換條約

註一、明治八年五月七日彼得堡ニ於テ調印

同年八月二十二日批准

同年同月同日東京ニ於テ批准書交換

二、本條約ハ佛文ノミヲ以テ記載セラレ居ルモ記錄中ニ綴込アル「武揚譯」トアル和譯文ヲ參考ノ爲併掲セリ

(和譯文)

條約

Sa Majesté l'Empereur de toutes les Russies et Sa Majesté l'Empereur du Japon, désirant mettre un terme aux nombreux inconvénients qui résultent de la possession en commun de l'île de Sakhaline et consolider la bonne intelligence qui existe entre Eux, sont convenus de conclure un Traité de cession réciproque, par Sa Majesté l'Empereur de toutes les Russies du groupe des îles Kouriles, et par Sa Majesté l'Empereur du Japon de Ses droits sur l'île de Sakhaline (Krafto), et ont nommé à cet effet pour Leurs plénipotentiaires, savoir :

Sa Majesté l'Empereur de toutes les Russies :

Le Prince Alexandre Gortchacow, Son Chancelier de l'Empire, ayant le Portrait de Sa Majesté l'Empereur enrichi de diamants, Chevalier des Ordres Russes : de St. André en diamants, de St. Vladimir de la I classe, de St. Alexandre Newsky, de l'Aigle Blanc, de St. Anne de la 1<sup>re</sup> classe et de St.

大日本國皇帝陛下ト  
全魯西亞國皇帝陛下ハ今般樺太島即薩哈是迄兩國雜領ノ地タルニ由リテ屢次其間ニ起レル紛議ノ根ヲ斷チ現下兩國間ニ存スル交誼ヲ堅牢ナラシメンカ爲メ  
大日本國皇帝陛下ハ樺太島即薩哈上ニ存スル領地ノ權理  
全魯西亞國皇帝陛下ハ「クリル」群島上ニ存スル領地ノ權理ヲ互ニ相交換スルノ約ヲ結ント欲シ

大日本國皇帝陛下ハ海軍中將兼在魯京特命全權公使從四位  
榎本武揚ニ其全權ヲ任シ

全魯西亞國皇帝陛下ハ太政大臣金剛石裝飾魯帝照像金剛石裝飾魯國シント、アンドレアス褒牌シント、ウラジミル一等褒牌アレキサンドル、ネフスキー褒牌白鷲褒牌シントア  
ンナー等褒牌及シントスタニスラス一等褒牌佛蘭西國レジ

Stanislas de la 1<sup>re</sup> classe, Chevalier Grand-Croix de la Légion d'Honneur de France, de la Toison d'Or d'Espagne, de l'Annonciade d'Italie, de St. Etienne d'Autriche, de l'Aigle Noir de Prusse en diamants et de plusieurs autres Ordres étrangers ; et Sa Majesté l'Empereur du Japon :

Le Vice-Amiral Ju-sie Enomotto Takeaki, Son Envoyé Extraordinaire et Ministre Plénipotentiaire près la Cour de Sa Majesté l'Empereur de toutes les Russies, lesquels ont arrêté et signé les Articles suivants :

Article I.

Sa Majesté l'Empereur du Japon, pour Elle et Ses héritiers, cède à Sa Majesté l'Empereur de toutes les Russies la partie du territoire de l'île de Sakhaline (Krafto), qu'Elle possède actuellement avec tous les droits de souveraineté découlant de cette possession, en sorte que désormais ladite île de Sakhaline (Krafto) tout entière appartiendra intégralement à l'Empire de Russie et que la frontière entre les Empires de Russie et du Japon dans ces parages passera par le détroit de Lapérouse.

ウン、ド、オノール大十字褒牌西班牙國金膜大十字褒牌澳太利國シント、エチーネ大十字褒牌金剛石裝飾宇露生國黑鷲褒牌及其他諸國ノ諸褒牌ヲ帶ル公爵「アレキサンドル、ゴルチャコフ」ニ其全權ヲ任ゼリ  
右各全權ノ者左ノ條款ヲ協議シテ相決定ス

第一款大日本國皇帝陛下ハ其後胤ニ至ル迄現今樺太島即薩哈島ノ一部ヲ所領スルノ權理及君主ニ屬スル一切ノ權理ヲ全魯西亞國皇帝陛下ニ讓リ而今而後樺太全島ハ悉ク魯西亞帝國ニ屬シ「ラベルズ」海峽ヲ以テ兩國ノ境界トス

Article II.

En échange de la cession à la Russie des droits sur l'île de Sakhaline, énoncée dans l'article premier, Sa Majesté l'Empereur de toutes les Russies, pour Elle et Ses héritiers, cède à Sa Majesté l'Empereur du Japon le groupe des îles dites Kouriles qu'Elle possède actuellement, avec tous les droits de souveraineté découlant de cette possession, en sorte que désormais ledit groupe des Kouriles appartiendra à l'Empire du Japon. Ce groupe comprend les dix-huit îles ci-dessous nommées : 1, Choumchou, 2, Alaid, 3, Paramouchir, 4, Makanouchi, 5, Onékotan, 6, Harinkotan, 7, Ekarna, 8, Chiachkotan, 9, Moussir, 10, Raikoké, 11, Matoua, 12, Rastoua, 13, les îlots de Srednéva et Ouchisir, 14, Kétoï, 15, Simousir, 16, Broton, 17, les îlots de Tcherpoï et Brat Tcherpoïeff et 18, Ouroup, en sorte que la frontière entre les Empires de Russie et du Japon dans ces parages passera par le détroit qui se trouve entre le cap Lopatka de la péninsule de Kamtchatka et l'île de Choumchou.

Article III.

La remise réciproque des territoires désignés dans les deux articles précédents aura lieu immédiatement après l'échange des ratifications du présent Traité et les dits territoires passeront à leurs nouveaux possesseurs avec les revenus à dater du jour de la prise de possession; mais la cession réciproque avec droit de possession immédiate doit, toutefois, être considérée complète et absolue à dater du jour de l'échange des ratifications.

La remise formelle sera effectuée par une Commission mixte composée d'un ou de plusieurs agents nommés par chacune des Hautes Parties contractantes.

Article IV.

Dans les territoires réciproquement cédés par les articles précédents sont compris le droit de propriété sur tous les terrains publics, terres inoccupées, toutes les constructions publiques, fortifications, casernes et autres édifices qui ne sont pas propriété particulière. Toutefois, les constructions et les biens mobiliers appartenant actuellement aux Gouvernements respectifs seront constatés et leur

第二款全魯西亞國皇帝陛下ハ第一款ニ記セル樺太島即薩哈  
噠島ノ權理ヲ受シ代トシテ其後胤ニ至ル迄現今所領「クリル」群島即チ第一「シムシ」島第二「アライド」島第三「バラムシル」島第四「マカナルシ」島第五「ラネコタン」島第六「ハリムコタン」島第七「エカルマ」島第八「シャスコタシ」島第九「ムシル」島第十「ライコケ」島第十一「マツア」島第十二「ラスツア」島第十三「スレドネワ」及「ウシ、ル」島第十四「ケトイ」島第十五「シムシル」島第十六「プロトシ」島第十七「チェルボイ」竝ニ「ブラット、チェルボエフ」島第十八「ウル、プ」島共計十八島ノ權理及ビ君主ニ屬スル一切ノ權理ヲ大日本國皇帝陛下ニ讓リ而今而後「クリル」全島ハ日本帝國ニ屬シ東蔡加地方「ラバツカ」岬ト「シムシ」島ノ間ナル海峽ヲ以テ兩國ノ境界トス

第三款前條所載各地並ニ其地產ハ此條約批准爲取換ノ日ヨ

リシテ直ニ全ク新領主ニ屬スル者トス但其各地受取渡ノ式ハ批准後雙方ヨリ官員一名又ハ數名ヲ撰テ受取掛トシ實地立會ノ上執行フベシ

第四款前條所記交換ノ地ニハ其地ニアル公同ノ土地、人ノ下手セザル地所、一切公共ノ造筑、壘壁、屯所、及ビ人民ノ私有ニ屬セサル此種ノ建物等ヲ所領スルノ權理モ兼存ス

現下各政府ニ屬スル一切ノ建物及動產ハ第三款ニ載スル雙方ノ受取掛役取調ノ上其代價ヲ按查シ其金額ハ其地ヲ新ニ領スル政府ヨリ出ス者ナリ

évaluation sera vérifiée par la Commission citée dans l'article troisième; le montant de l'évaluation sera remboursé par le Gouvernement auquel passe la possession du territoire.

Article V.

Il est réservé aux habitants des territoires cédés de part et d'autre, sujets Russes et Japonais, de conserver leur nationalité et de rentrer dans leurs pays respectifs; mais, s'ils préfèrent rester dans les territoires cédés, ils seront maintenus et protégés dans le plein exercice de leur industrie, droit de propriété et religion, sur le même pied que les nationaux, à la condition de se soumettre aux lois et à la juridiction du pays auquel aura passé la possession des territoires respectifs.

Article VI.

En considération des avantages résultant de la cession de l'île de Sakhaline, Sa Majesté l'Empereur de toutes les Russies accorde:

1° aux bâtiments Japonais le droit de fréquenter le port Korsakow (Koussoun-Kotan) en franchise de tout droit de port et de douanes, pendant la

période de dix années à compter de la date de l'échange des ratifications. A l'expiration de ce terme il dépendra de Sa Majesté Impériale de toutes les Russies de maintenir encore cette franchise ou de la suspendre. Sa Majesté l'Empereur de toutes les Russies reconnaît, en outre, au Gouvernement Japonais le droit d'établir un Consul ou Agent Consulaire dans le port Korsakow.

2° aux bâtiments et aux commerçants Japonais pour la navigation et le commerce dans les ports de la mer d'Okhotsk et de ceux de Kamtchatka, ainsi que pour la pêche dans ces eaux et le long des côtes, les mêmes droits et privilèges que ceux dont jouissent dans l'Empire de Russie les bâtiments et les commerçants des nations les plus favorisées.

Article VII.

Prenant en considération que, quoique les pleins-pouvoirs du Vice-Amiral Enomotto Takeaki ne soient pas encore parvenus à destination, un avis télégraphique constate leur expédition du Japon, on est convenu de ne pas retarder davantage la signature du présent Traité, en y stipulant que la

第五款交換セシ各地ニ住ム各民(日本人及魯人)ハ各政府ニ於テ左ノ條件ヲ保證ス、各民並共ニ其本國籍ヲ保存スルヲ得ル事、其本國ニ歸ラント欲スル者ハ常ニ其意ニ放セテ歸ルヲ得ル事、或ハ其交換ノ地ニ留ルヲ願フ者ハ其生計ヲ充分ニ營ムヲ得ルノ權理及其所有物ノ權理及隨意信教ノ權理ヲ悉ク保全スルヲ得ル全ク其新領主ノ屬民(日本人及魯人)ト差異ナキ保護ヲ受ル事雖然其各民ハ並共ニ其保護ヲ受ル政府ノ支配<sup>フェリスチオン</sup>ニ屬スル事

第六款樺太島<sup>即薩哈</sup>ヲ護ラレシ利益ニ酬ユル爲メ全魯西亞國皇帝陛下ハ次ノ條件ヲ准許ス

第一條日本船ノ「コルサコフ」港<sup>即「クシ」ニ來ル者ノ爲</sup>メニ此條約批准爲交換ノ日ヨリ十年間港稅モ海關稅モ免スル事、此年限滿期ノ後ハ猶之ヲ延スモ又ハ稅ヲ收メ

シムルモ全魯西亞國皇帝陛下ノ意ニ任ス  
全魯西亞國皇帝陛下ハ日本政府ヨリ「コルサコフ」港ヘ其領事官又ハ領事兼任ノ吏員ヲ置クノ權理ヲ認可ス

第二條日本船及商人通商航海ノ爲メ「ヲホツク」海諸港及東察加ノ海港ニ來リ又ハ其海及海岸ニ沿テ漁業ヲ營ム等渾テ魯西亞最懇親ノ國民同様ナル權理及特典ヲ得ル事

第七款海軍中將榎本武揚全權委任狀ハ未タ到來セズト雖トモ電信ヲ以テ其送致スル旨ヲ確定セラル、ニ由リ其到ルヲ待タズシテ此條約面ニ記名シ其到ルヲ待テ各全權委任狀ヲ相示スノ式ヲ行ヒ別ニ其事ヲ記シテ以テ左券トスヘシ



formalité de l'échange des pleins-pouvoirs aurait lieu dès que le plénipotentiaire Japonais se trouverait en possession des siens et qu'un protocole spécial serait dressé pour constater l'accomplissement de cette formalité.

Article VIII.

Le présent Traité sera approuvé et ratifié par Sa Majesté l'Empereur de toutes les Russies et par Sa Majesté l'Empereur du Japon et les ratifications en seront échangées à Takio (Yeddo) dans le délai de six mois à compter de la date de la signature, ou plus tôt si faire se peut.

En foi de quoi les plénipotentiaires respectifs l'ont signé et y ont apposé le cachet de leurs armes.

Fait en double original, à St. Petersbourg, le vingt-cinq Avril mil huit cent soixante-quinze, co-sept Mai  
respondant au septième jour du cinquième mois de la huitième année Meiji.

GORTCHACOW. ENOMOTTO TAKEAKI.

(L.S.)

(L.S.)

第八款此條約ハ大日本國皇帝陛下並ニ全魯西亞國皇帝陛下  
五ニ相許可シ而シテ批准スヘシ但シ各皇帝陛下ノ批准爲  
取換ハ各全權記名ノ日ヨリ六ヶ月間ニ東京ニ於テ行フ可  
シ

此條約ニ權力ヲ附スル爲メ各全權各其姓名ヲ記シ並ニ其  
印ヲ鈐スル者ナリ

榎本 武揚(印)  
ゴルチャコフ(印)

九一 五月七日

樺太千島交換條約ニ屬スル公文

註 本「條約ニ屬スル公文」ハ佛文ノミヲ以テ記載セラレ居ルモ記錄中ニ綴込アル「武揚謹譯」トア  
レ和譯文ヲ參考ノ爲併掲セリ

(和譯文)

條約ニ屬スル公文

日本國皇帝陛下ノ政府ト魯西亞國皇帝陛下ノ政府ハ本日兩  
帝國間ニ結ヒタル條約第四款ニ載タル件ヲ完成セン爲メ下  
名ノ者協議ノ上左ノ條款ヲ定ム

第一款魯西亞帝政府ハ本條約ノ旨ニ基キ日本政府附ノ建物  
及動產ヲ引受ヘキヲ以テ其代價ヲ日本政府ニ拂フ事ヲ承  
諾シ日本政府ヨリ報知セラレシ金額即チ棟數壹百九拾四  
軒代價七萬四千零六拾三圓日本ド及動產ノ代價壹萬九千  
八百拾四圓ヲ以テ其物價檢査ノ基本トス

soixante quatorze mille soixante trois jens (dollars du Japon) et pour les biens mobiliers dix neuf mille huit cent quatorze jens.

Article II.

La commission mixte instituée par l'article III du Traité de ce même jour procédera en commun à la constatation et vérification des constructions et des biens mobiliers devant passer respectivement dans la propriété des Gouvernements de Russie et du Japon. Après la réception du rapport de la commission concernant la transmission respective des territoires, constructions et des biens mobiliers, ainsi que la constatation du montant définitivement arrêté comme indemnisation due au Gouvernement du Japon, cette somme, défalcation faite du montant qui du même chef reviendrait au Gouvernement de Russie, sera payée à St. Petersbourg soit au Représentant diplomatique de l'Empereur du Japon soit à tout autre agent de Sa Majesté dûment autorisé à cet effet, pas plus tard que dans les six mois à compter de la transmission officielle des territoires, constructions et biens mobiliers mutuel-

第二款本日取結ヒノ條約第三款ニ掲グル各地受取掛雙方役人ハ各地ニ在ル建物及動産ノ兩政府ニ歸スヘキモノヲ檢査シテ其代價ヲ決定スベシ  
右雙方役人ヨリ各地並ニ靜動二産受取渡濟及其決定セシ代價ノ届書落手ノ後魯西亞政府附ノ物品代價差引キ剩餘金額ハ各地並ニ靜動二産公然受取渡濟ヨリ六ヶ月内ニ比特堡府ニ於テ日本公使又ハ日本國皇帝陛下ヨリ別段ニ其命ヲ奉ジタル役人ニ渡スベシ

lement cédés.

Article III.

Pour compléter et développer l'article V du Traité signé ce même jour quant aux droits et à la position des sujets respectifs restant sur les territoires réciproquement cédés, ainsi que relativement aux aborigènes de ces territoires, un article supplémentaire sera négocié et conclu entre le Gouvernement du Japon et le Ministre Résident de Russie à Tokio (Yeddo) qui sera muni à cet effet de pleins-pouvoirs.

Article IV.

Les arrangements contenus dans les trois articles précédents auront la même force et vigueur que s'ils avaient été insérés dans le texte du Traité signé ce même jour.

En foi de quoi les Plénipotentiaires respectifs ont dressé la présente déclaration et y ont apposé le cachet de leurs armes.

Fait en double expédition à St. Petersbourg le vingt-cinq Avril mil huit cent soixante-quinze corsept Mai  
respondant au septième jour du cinquième mois de la huitième année Meiji.

第三款本日結約ノ第五款中ニ陳スル交換セル各地ニ留ル各民ノ權理及地位並ニ各地ニ住ム夷族ノ義ニ付テハ東京ニ於テ日本政府魯西亞辨理公使ト尙之ニ附録ス可キ條款ヲ取極ム可シソノ爲メ入用ナル全權ヲ魯公使ニ附スル者ナリ

第四款前條ニ載タル議定セシ件ハ同日記名セシ本條約ノ列ニ加ハタルモ同シ權力アル者ナリ

右ヲ確定スル爲メ下名ノ者此公文ヲ作り以テ各其印ヲ調スル者ナリ

明治八年五月七日即一千八百七十五年四月二十五日比特堡府ニ於テ

GORTCHACOW. ENOMOTTO TAKEAKI.  
(L.S.) (L.S.)

九三 五月七日 露國駐劄樺本公使ヨリ  
寺島外務卿宛(電信)

樺太千島交換條約調印終了其ノ他細目ニ關シ報  
告ノ件

明治八年五月七日魯都府發

閣下最後ノ電信ニ基キ本日條約ニ調印セリ兩國人民ノ去留  
ニ付其留ル者ハ雙方同様都テ現在ノ權利特許ヲ保チ其國法  
律ノ保護ヲ受ケ次テ瑣細ノ件及土人ノ事ハ東京ニテスツル  
ウエト取極ムヘシ領地ノ交付ハ批准ノ後ニ在リクシニコ  
タンニ日本領事ヲ置ク事ハ承知サレタリ都テ其他ハ兼テ通  
信ノ通ナリ魯國ニテハ速ニ理事官ヲ命スヘシ而シテ其ウラ  
ジラストツクヨリ出立ノ期ハスツルウエニ告知スヘシクリ  
ルニハ政府所有物全クアラサレハ取調ハ無益ナリ早便ニテ  
寫シ送ラン

榎本武揚(印)  
ゴルチャコフ(印)

九四 五月八日 露國駐劄樺本公使ヨリ  
寺島外務卿宛

樺太千島交換條約調印ノ儀並ニ條約本書ハ不日  
志賀書記官ヲシテ携帶歸國セシムル旨等報告ノ  
件

別記第廿六號

以公信致拜啓候然ハ昨七日正午太政大臣兼外務卿「プリン  
ス、ゴルチャコフ」氏ノ官邸に於て拙者義同氏結約全權の委  
任狀(註 眞格ラス)披見の上互に今般の條約面に無滞記名調印相濟  
申候條約文ハ世界普通の例に照し双方佛語を相用即ち別紙  
寫の通にて翻譯文乙號相添差進申候但し條約文ハ貳通にし  
て一ハ其文彼を先にし一ハ我を先にして言を立たる者にて  
其彼を先にしたる者ハ我政府の方に取置き我を先にしたる  
者は彼方に取置候尤魯帝御批准に可相成ものは別に立派な  
る紙に認めたる者にて右は本日御批准相濟「バロン、ローゼ

ン」氏新に横濱副領事  
に任せられし人二周日間に帶携出立可致候間着早々魯  
公使より可差出候就ては我 天皇陛下御批准に可相成者は  
東京に於て相當の御仕立に相成其上にて御批准可被遊義に  
て候

將又「ゴルチャコフ」氏並に拙者記名調印致候條約本書は今  
般三等書記官志賀親朋に爲持差進可申候同人義もはや當公  
使館に於て格別の御用向も無之候に付今朝左の通申渡候

三等書記官 志賀 親朋

今般兩全權記名條約の本書携持至急歸朝可被致候事  
五月八日

榎本武揚

志賀親朋義當表出立は今より二周日位と見込居候其故は同  
人召連參居候弟義先頃より餘程の重病にて候間今一周日餘  
も見屆彌連戻り候義難相成候は、當表に引留世話いたし置  
後より差戻し親朋義は右に關らず出立爲致候積にて候  
一「スツルウエ」氏東京に於て本條約第五款の「シュツブレ  
メンテール、アルチクル」取極の全權委任本日電信にて申  
遣たる趣其の委任狀は前文「バロン、ローゼン」氏近日の中  
持越候積「スツレモウホフ」氏申聞候

一魯政府より可差出「コミシ、ネル」は樺太嶋にある我政府  
附靜動二產取調並に各地受取渡の事丈けを任せられ候者に  
て候其出立日限は未だ相分り不申候  
一「クリル」諸嶋には定住の魯人壹人も無之只折々渡來の上  
土人より獸皮等を買取候商人有之而已に付別に土地並に漁  
場等所有の者杯は無之段「スツレモウホフ」氏吳々も儘め申  
候就ては條約第五款に添ふべき「シュツブレメンテール、ア  
ルチクル」は只々樺太嶋にある我人民の上而已に關する事  
を御取極並に土  
人の事に可相成義にて候左候へば開拓使え御問合  
有之候は、樺太嶋の人民所有權利及特典は明細相分り可申  
に付「スツルウエ」氏との御應接も乍ち抄取可申又我皇帝御  
批准の義も六ヶ月以内に十分相濟候義と存候  
一魯帝に陪從して「ゴルチャコフ」氏は本日晩方獨逸國へ出  
立被致候右に付今般條約文の清書は亞細亞寮役人大急相認  
候に付「サガリン」の名を貳通とも誤て「カラフト」の名より  
先に相認候乍去「サガリン」と申も元來魯名にも無之世界普  
通の名目に有之其上書改候時刻無之に付其儘に致置候此段  
爲念申進置候勿論其餘の事は二通共文體の前後錯綜無之候  
一昨日記名相了たる後「ゴルチャコフ」氏左の詞を陳述せり

本日ノ事實ニ兩國ノ幸ナリ難居ノ儘ニテハ尙來兩國間ニ  
葛藤ノ起ルハ免ル、能ハザル所ナリ君今此重件ヲ擔當セ  
ラレ本日ノ約ヲ結ビ以テ各民ノ難事ヲ除キ以テ更ニ兩國  
ノ友誼ヲ益堅フスルノ地ヲ爲セシ事予偏ニ兩國ノ爲ニ之  
ヲ賀ス予願クハ君ノ永ク世ニ在テ今日ノ驗ヲ尙來ニ目證  
セラレシ事ヲ

拙者亦これに答ふるに左の語を以てす

今日ノ結約尙來兩國ノ人民更ニ益親睦スルニ至ルノ手引  
トナルハ予ガ信ズル所ナリ予モ亦君ノ予ニ望ム所ヲ以テ  
君ニ望ム

一昨餘事并せて附録いたし候舊冬迄亞細亞察權頭たりし、  
「フステンサーケン」氏「ボンベ」氏に語て曰く予今般條約の  
濟しを聞悦に堪へず予は日本を慕ふ者なり故に常に樺太雜  
居の黒雲一點夙晚兩國の天を覆はん事を憂苦せしが今幸に  
其跡消たれば我政府は必ならず務て日本國との交際を厚ふ  
するなるべきは疑を容れず云々

一先の當表在留佛國大使「ゼネラール、レフロ」氏會て來  
訪せられ語次偶然樺太嶋の事に及べり、「レフロ」氏曰く  
予樺太嶋の事久敷決せざるを聞けり必らず之を決せんと欲

て候同氏は一體人望無之而已ならず其管轄地方諸事不行届  
により近々免職可相成趣に候就ては先年來樺太嶋不行届の  
段も其中に籠居候賦とも被察候

一前外務大輔「ウエストマン」氏事其後追々快氣相成近日療  
治の爲め外國へ出立の積にて候又「ゴルチャコフ」氏留守中  
外務卿代理は「バロンジ・ミニ」氏に命ぜられ「スツレモ  
ウホフ」氏は外務大輔兼勤被免申候此事同氏の面目を失ひ  
候義に付不平の故にや六ヶ月の休暇を願出し本日より亞細  
亞寮へ出勤致不申候一體同氏は極伶俐に候へとも資性急躁  
にして堂々たる風儀無之其上皇帝にも太政大臣にも得られ  
ぬ由「ジヨミニ」氏は即ち昨年「ブリュッセル」府交戰條規  
會議の「プレシデント」となりし人にて度量ある人物に相見  
申候

五月八日

榎本 武揚

寺嶋外務卿殿

乍餘事過る三日より當表「ネワ」河氷解相成連日好天氣打續  
き始て春色を催申候尤草木の萌芽は未だ出不申候

せば兵に問ふの外なかるべし危事と謂ふべし云々  
一米公使の論は既に先頃申進たり只當國海軍大將「ブーチ  
ヤチン」氏は魯政府樺太全嶋を望むの舉を以て不可とし常  
に曰く此事特に日本國に對して不平を抱かしむる而已なら  
ず其實魯政府の經濟をも并せて害する而已にて更に益なき  
を知らざるは當初「ムラビヨフ」氏の惑によつて起れる者な  
り云々

一先便別記廿五號四月廿四日追啓末段に申進候掛合同以來  
昨日條約相濟候迄の次第柄は既往の事にて差詰め不用に  
付讓後便申候只貴論の御批准一件に付ては頗る面倒の應接  
有之候

一近主釜泊罪人裁判書の義に付再應問合の返書昨日落手致  
候今便には翻譯間に合兼候間是又讓後便申候

一海浦に於て源助非命の一條彼地應接書拜接然るに右は當  
表に於て可掛合程の證詰も無之候に付尙樺太嶋に於て委細  
裁判の模様相分り次第尙御申越可有之候尤此件樺太嶋より  
届書等相届き候哉否昨日「スツレモウホフ」氏え及催促候處  
未た何とも不申越候に付尙又以電信可申遣旨相答申候

一沿海道惣督海軍少將「クロン」氏は近日の中免職の筈に

九五 五月十日 露國駐劄榎本公使ヨリ  
寺嶋外務卿宛(電信)

千島ニハ露國人ノ特權存セサル趣亞細亞寮頭ノ  
言明アリタル旨報告ノ件

明治八年五月十日魯都發

「スツレモホフ」ノ言フニハ「クリル」ニ於テ魯人永住ノモノ  
ナシト依テ特權ナシ志賀條約ヲ持參スル事

九六 五月二十三日 寺嶋外務卿ト露國辦理公使トノ對話書

樺太千島交換條約ノ批准交換並ニ理事官派遣等  
ニ關シ協議ノ件

第六十六號

明治八年五月廿三日於省寺嶋外務卿魯國公使スツルウ

エ氏との應接對話

○樺太談判一件

一兼ての一件未だ不相分電信を以て可問合哉と存候

一巨細の義は電信にては不相分候其内書翰到來可致候間  
四週間程御待可被成候

一 ラチフビケーション取交せの事彼得堡に於てするや東京にするや疑敷故尋遣し候處東京にて取交す趣申越候

一 然らん

此時公使横文書を示し暫時間英語應答

一 サガリン地方は格別なれとも其他は動物はあるにもせよ不動物なる建物等は無之所致別に官員立會候には及

間敷と相考候條約書はいつ調印済にて何頃差立に相成候哉相分り居候歟

一 去る七日調印済にして貴府在留の官員志賀なる者携帶歸

朝の筈也目今旅中ならん

一 五週間にして到着せん

一 然り七月七日頃には着せん

貴政府於て派出理事官は何頃御申付に相成凡そいつ時分御差出に可相成哉豫め問合せ申度候

一 拙者方へは只理事官を可命とのみ有之候へとも榎本氏

よりの電信には速に可命とあれば多分急に可命と存候御

問合相成候も差支無之候へとも夫にては催促する様に相

當り候間今少し御見合被成ては如何

一 別段差急き候義には無之候得共此方於て船の用意等有之

一 榎本より時々申越候事有之候故大概は相分り居申候

卿公書を公使に示して曰

一 此書は榎本より遣し候物即貴政府の御考也併し是にて調印せしや否は相分り不申候得共大旨意は相違有之間敷候間貴政府の御考も是にて略相分り可申候依て御見合の爲め此書の寫を可差進候

此書七條あり第四條に宗教の事を載せたり且サガリンクルに在る兩國人民去就は望次第且所有物は從來の通り事業は各自勝手次第宗旨は各自の信仰に任ず支配の權は新規の領主に屬すとあり後條に條約取交せの事彼得堡に於てすと有之候得共此事は東京と相改り申候即此書案を以て條約調印致候義故差て改正相成條は有之間敷候此書の寫可差進候間此餘の御考も有之候へは御相談可致候

一 其書何頃御落手相成候哉

一 五月十二日也

一 マリヤルツ船一件我皇帝陛下へ御差出に相成候哉

一 未た何とも不申越候

註 「卿公書を公使に示し」云々トアル書ハ七五附屬書ト同

候間差迫り候ては不都合の義有之候故也

一 兎も角も四五日御まち可被成候

一 承知せり

一 理事官派出前土人の權理の義に付豫め御相談致置度候

一 榎本より申越せしには同地受取渡済の上は土人の支配は

新規の領主に屬すと且同所居住の日本人は三ヶ年間は其

管下に屬せざる事也

一 夫等の事は相分り居候其餘の事を御相談致度候

同所に居る魯人は其各自信する所の宗旨を守り日本人

は同所に在るも佛法を信向する妨げなしといふ等の事

也

一 宗教は其儘に差置といふ事は榎本の對話書中にも相見へ

居候併し同所に貴國人長く住居致候者は無之日本人は隨

分久敷住居罷在候左すれば此事實は只日本人の爲めのみ

也

一 夫等の事を豫め極度候

一 宗教の事は既に決定致居候此他の事とは如何様の事なる

や 一種々有之候間目錄にして御目にかけて可申候

一 ナリト認メラル

九七

五月二十四

寺島外務卿ヨリ 露國駐劄榎本公使宛

既ニ樺太千島交換條約調印ノ上ハ樺太境界談判

ニ關シテハ最早考慮ノ要ナキ旨等回答ノ件

明治八年五月廿四日附

三月十三日附別記第廿一廿二號公信第六回對話書及スツレモウコフ氏之可被遣書面大意書共本月十一日到手引續き別記廿三號三月廿八日附及第七回對話書等は同十六日到手何れも披讀および候國界談判の儀に付種々の御苦慮遙察候事に候樺太島中分界の方より替地受取相當の條約取結候て結局相成候儀は御發航前にも粗御相談もいたし置候通りの儀にて我政府にも異議無之處に候御降心可有之尤右等は既に電信を以て復の末疾く御調印にも及候儀故今更御答申進候迄にも無之候得共御來書御報まで一應申述置候

一 クリル島我所轄に歸し候後は米人ヘーエス氏バラムシル島借用いたし度旨云々其表在留米公使スカイレル氏より申出候由にて云々御見込の所をも御申越承知致候右は篤

熟議の上可及細答候

一 先便對話寫差進候後猶當地在留魯公使と對話の趣別冊對話寫差進候間右にて御詳知有之度候其他電信往復寫をも爲御心得差進候

一 御國界談判議決該條約既に調印に及候電報御座候間右條約の大意各在外我公使えは今便及通報候

一 樺太島上にある日本政府公有物の實價先般御通電の趣には九萬三千云々と有之今般御申越とは一萬の差有之候へ共公信上御申越の員數を以て正數と心得申候爲念申添置候也

註一、右文書ハ寫ニシテ發受者記載ナキモ寺島外務卿ヨリ榎本公使宛ト認メラル

二、右ニ「別冊對話寫」トアルハ「九六」及五月十三日寺島外務卿ト露國辦理公使トノ對話書(省略)ヲ指ス

九八 五月二十九日 寺島外務卿ト露國辦理公使トノ對話書  
千島殘留人民ニ對スル處置ノ件

明治八年五月廿九日於省寺島外務卿露西亞國公使スツルウエ氏ヘ對話

日本人と土人とは區別せしなり

區別ある様相見居候(朱書)「條約草案指示シ」此前の處は日本人從是は土人なり

取調の官員派出せば日本人漁業場ある處を細かに巡覽可致事に候

御相談の趣旨は其邊に非ず又電信の趣を以て夫是紙上に掲て御相談可致候

大體の處已に出來致居候間此後は爲し易き事に候  
畢

九九 六月十日 露國駐榎本公使ヨリ 寺島外務卿宛(電信)

露國理事官決定シタル旨等ニ關シ報告ノ件

明治八年六月十日魯都發

魯國ノ理事官ノ任ニ當ルモノ既ニ決セリ同人輩ハ先ツ東京ニ來ルベシ尤出立ノ期日不遠報スベシ且此輩ハ地所及特許ノ公然交換スル事ノミヲ任セラレタリ且彼等ハ閣下トスツルウエト議定スヘキ添個條ヲ其地方ニ觸レ可シ閣下此ノ添個條ヲ議定スル前ニ樺太取調必用ト思ハルレハ日本官員ノ

六 樺太千島交換條約締結ニ關スル件 九九 一〇〇

一應禮畢

一 クレール島人民の事

殘り人民の儀閣下御望に候は、電信を以問合可申  
左様致度候

(朱書)「約定書案を示シ」

此案文の通約定せば「兩國政府は取調の爲官員派遣」云々又拙者落手せる電信に「コンミシ、ネル」云々に依れば雙方より官員派遣するは當然

然り

(朱書)「約定書案を示シ雙方暫時英語」

過日御引合意味は之と異なり

此條約案と落手電信の事に付舊人民の爲め規則を立度候暨ば如何様の事に候哉

殘る人民の儀に付閣下と御相談の上取極致度事に候

七ヶ條の案の内異り候儀二三有之彌變り候儀有之候は、前以何程か考案致置度候

只今可及御談ケ條は四ヶ條に候即第四條には殘り人民の事に候

(朱書)「暫時公使より英語にて」

ミヲ同所ニ派シ現今存在ノ地所權利及特許等ノ目錄ヲ作ラシムベシ此コトハ魯國ニ取リテハ更ニ構ナシ理事官ノ受タル指令ハ既ニ我方ヨリ通シ置キタル樺太ニ在ル政府ノ所有物ノ價ニ基キ之ヲ受取ルヘシト(但シ實地ニ臨ミ意外ノ差違ナクハ)クルル島ニ在ル魯人ノ特許ハナキヲ以テ同國政府ハ同島取調ヘニ及ハジト

一〇〇 六月二十日 露國駐榎本公使ヨリ 寺島外務卿宛

露國理事官所持ノ訓狀寫ヲ送付ノ旨通達ノ件

附屬書 露國理事官訓狀寫

八月六日到

在露日本公使館來信別記第二十九號拔萃

過日以電信申進候魯國「コミシヨネル」發制ノ期ハ未タ報知無之候得共其所帶訓狀原文ノ寫ハ本日亞細亞寮權頭ヨリ借受候間不取敢翻譯爲致原文相添差進申候別紙甲ハ原文乙ハ翻譯ニ候

六月二十日

榎本 武揚

二三三

寺嶋外務卿殿

(附屬書)

乙

市川文吉口譯  
花房義質筆記

譯文

一千八百七十五年四月廿五日日本政府と取結ひたる條約を施行するため魯國委員え渡す訓條の寫

第一、委員等は江戸え到着せば日本在留の我辦理公使に見え同人と相議して其到着を日本政府え報告し且日本政府に於て條約批准相濟たらしは何時も其ヶ條を取行へき様用意既に整ひたる旨をも申入るへし

第二、委員等我辦理公使と相議の上、今度可取替地方を巡廻するため日本政府より派出する委員等も共に我艦に乗らしめて可然と見る時は其趣を日本政府え申入れ同航すへし

第三、双方より可讓地方を巡廻する順序は我辦理公使と日本政府と相議して定る所に從へし  
第四、條約に記載せる地方受取渡しの式は萬國普通の成規

たる節は委員は東「シベリヤ」總督の指揮に從ひ彼地に於て假に文武の官衙を設立すへし且我政府に歸する所の所有物并に諸建築を保存する手立をなすへし

第八、「サガレン」嶋を日本人より受取る節委員は日本政府に屬せる動産不動産の價付を検査し目錄通りに受取へし  
第九、「サガレン」嶋に在る日本政府の所有物の價は既に條約中に差定めたるものあるを考え委員等は日本委員の作れる價付に可成丈異言すへからす

第十、委員は此外尙「サガレン」嶋にて日本人民の有せる家數并に手入れせる土地の高を調らへ且日本人の來りて漁、獵をなす所々をも取調へきをも任せらる

第十一、委員「サガレン」嶋に在ては支配向の事件は凡て東「シベリヤ」總督の指揮を仰き交際向の事件には凡て日本在留我辦理公使の指圖を受べし

一〇一 六月二十二日 外務大丞等ヨリ  
調所開拓幹事宛

露國理事官千島樺太調査ニ先立ち來航ノ由同國  
公使ヨリ申出アリタル旨報知ノ件

に從て行ひ即國旗を並へ揚げ且下し、其受取渡しの由を其土地の人民に布告すへし

第五、「サガレン」嶋の我方え讓らるへき部分を受取節其地に在る日本人民え布告するに、彼等は條約の第五條に從ひ其本國に歸るも或は魯西亞國に屬し又は屬する事なくして其儘其地に留るも自由たるへく且其留るものは其地にて我國法并に地方顯官に柔順し、信教の自由を得、所有の權理漁魚の權理を得る事我國民同様たるを得へきを以てするを怠るへからす

第六、右に同しく「クリル」諸嶋を日本政府え引渡す節も委員等は其地の人民に布告するに住民等若し魯國境内え引移らんと欲するものはそれ／＼の手當をなし遣すへく又其儘其地に留らん事を望むものは日本政府及其顯官に柔順して、信教、所有、漁魚、の自由を保存するを得へしとの事を以てすへし

「注」委員等は双方より可讓地方の人民の權理の事に付ては條約第五條の附録として我辦理公使と日本政府と取極へきものに従ひ我辦理公使の指圖の通り取行べし  
第七、「サガレン」嶋の南部を我領地として規式を以て受取

(本書) 即日達濟

調所開拓幹事殿

外務大少丞

嵯峨連并クリル島取調として露西亞國より理事官を派遣我當六月廿五日頃ウハジストツク出船一と先日本へ着致候旨の電報を得候由同公使より申出候尤理事官は兩人と申事也爲御心得此段申進置候也

明治八年六月廿二日

一〇二 六月二十三日 調所開拓幹事ヨリ  
外務大丞等宛

露國理事官樺太千島調査ノ報知ニ關シ榎本公使  
ヨリノ電報ト齟齬ノ點照會ノ件

嵯峨連并クリル嶋爲取調魯國理事官差遣相成候趣昨日御申越の條致領承候然る處先頃榎本全權公使よりの電報にてはクリル諸島は魯國にて別段取調不致趣に有之昨日の御書面とは齟齬の様存し候夫々都合も有之候間調不調何れ歟判然致承知度且ウハジストツクと申は何れの地方に御坐候歟是又御指諭相成度此段至急及御照會候也

下ケ 札

八年六月廿三日

開拓幹事 調所 廣 丈

外務大少丞御中

(下ナ札)(朱書)

御來書御尋の趣は魯國書記官來省申立候意は理事官來廿五日ウハシストツク出帆丈の事に止り曉曉連とクリルの兩洲迄と儘に申立候事には無之候間左様御承知可被下候ウバシストツクは則朝鮮の北隣なるボシエツト灣の港名に有之候也

六月廿三日

外務大少丞

開拓幹事殿

一〇三 六月二十六日

魯國駐樺本公使ヨリ 寺島外務卿宛(電信)

魯國理事官浦潮斯德ヲ出發東京ニ赴クヘキ旨報

告ノ件

明治八年六月廿六日魯都發

魯ノ理事官陸軍大佐及文官ノ役員都合二名東京ヘ向七日ノ内ニ「ウラシオストツク」ヲ發ス日本官員ハ魯理事官取調ヘニ行クトキ其便船ノ機會ヲ得ル事易シ

一〇四 七月七日 寺島外務卿、黒田開拓長官等ト魯國辦理

樺太千島交換條約ニ關シ討議ノ件

明治八年七月七日於省寺島外務卿露西亞辦理公使スツルウエ氏ヘ對話黒田開拓長官長谷部中判官

一應禮畢

一樺太一件

(朱書) 公使クリール島國ヲ示シテ英語

彼地ヘ罷越人家其外委曲取調ベサセタリ

(朱書) 「此時條約書ヲ示ス」

第三條ノ處双方ヨリ委員ヲ出シテ請取渡可致事也前以承知致度ハ過日ノ電信ニモ閣下造家等ノ事御委任可相成趣右ハ如何

落手いたし候

(朱書) 「黒田曰」

時任外一員ヲ派

此官員ハ黒田長官從行セシメタル

外務卿(朱書) 之ヲ承ケ繼テ

只今長官申陳候通兩員已ニ彼地ヘ遣ス管也

(朱書) 「外務卿又條約ヲ示シ」

第四條ニ總テケ様々ノ物ハ政府ニテ所領スルトアリ乃政府ノ有トスルトノ意味ナリ

土地ヲ政府ヨリ政府ヘ差渡トスト云事ハ乃其一體ノ土地

其外政府ノ建物ノ事也

(朱書) 「長田此時佛文ヲ譯シテ陳述ス」

公使佛語長田ニ語ル」乃政府トノ云ヒ也ト

第五條乃今度御約來可致積リ也

附録ノ第五ケ條ニ増加スル積リニ候哉

此事ヲ跡ニ殘シテ

第八條ノ東京於テ六ヶ月内ニナチヒケーシヨシヲ取替ス事

後日誌賀書記官持歸ル旨ナリ

自分ノ方ヘハ一口承知不致候ヘ共必志賀ヘノ托事ト存候

志賀歸朝ノ上ハ必明瞭ニ至ルヘシ

第一動産不動産ノ價ノ元直ヲ載セリ乃樺本公使派遣ノ節調

タルヨリ前ノ調ヘナリ故少差違アリ假令ヘハ建物ノ數ガ

樺本ノ相越時ハ家數百九十四アリシ也其後建造シタレハ二

百〇四軒ニ相成申候乃十家ヲ増セリ夫丈ノ價ヲ増セリ併

此中動産一萬九千八百十四是ハ第一ケ條ニ載スル如ク也

(朱書) 「此時外務卿長官示談」

先刻申家數其頃二百〇四棟アリシヲ誤テ百九十四ト樺本ヨリ云ヒシナリ

其后新築増シテ其數今明細記シテ可差出

樺本申陳動産調ノ類一萬九千前ニ出ス

夫々大概望ノ者ニ與ヘ殘ルハ僅々而已殘ル物ハ金ニシテ三

百十二圓四十錢六厘

道路橋梁ハ樺本ノ調中ニナシ之ヲ増加セリ此金一千九百四

十五圓八十七錢四厘一毛也

夫レ乃政府ノ所有ナリ樺本ノ持書中ニ洩ケ居レリ

官ニテ畑ヲ制スルアリ金高ニシテ二百二十圓

政府ニテ植物スル爲メ畑ヲ製スル可然ヤ否ヤ植物ハナキ

ヤ

(朱書) 「長谷部曰」年々植テ之ヲ食ヒ又植ユルモノ也其他悉ク私有

物ニ有之候

第四條ニ不耕地モ之ヲ渡ストテ建物動産ハ價ヲ定メアリ

耕地ノ價ハ條約ニナシ

其邊理事官來テ談判面倒ナリ或ハ昨年耕シテ今年ナキ物

モアリ

尤僅ノ物ナレトモ御注意申上置候ハ乃條約面ニ載無之ナ



ケレハナリ

御注意ノ處致承知建物ニ差別アルハ譬ヘハ石垣等ハ建物ノ内ニ入ルベシ土丈ノ所ニテ作物ハ之ニ入ルヘキモノ歟橋梁ハ建物也四ヶ條ニ建物ノ事計アリ道路石垣ハ建物デナシ

譬ヘハ壞レル處ニ石ヲ据ユルハ此類ナルヤ如何

拙者ノ考ニハ條約ノ事ニ付談判ヲ爲ス石ヲ敷キ杭ヲ建ツル等委細ノ事ナシ建物ニ屬セス土地ニ付屬セルモノ也

〔公使長田ニ向テ暫時佛語應答〕

製作物ニモ土手ヲ以テ製作物トスルハ不似合ナリ

石垣畑地等ノ處混淆セシナリ之ヲ委細ニ明瞭シタク度道路

橋梁榎本ノ申立中ニナシ

〔外務卿官舎圖書ヲ公使ニ渡ス又新增等書漏ノ廉ヲ記シタル書類ヲ公使ヘ渡〕

今度來ル官員ヘハ一抄ヲシテ渡サズンベ困却スベシ

然リ

其事ハ閣下ヨリモ理事官ノ關係ナリ

第三條ノ處ノ御談ニハ殘ル人民ノ事ニ付附録ニ記スル是ハ如何様ナル工合ニテ可扱ヤ御相談可致存候

〔公使又書類ヲ熟覽シテ〕

五ヶ條ニ増加致度事ナリ

我國ニテハ魯國人民クリール島ニテハ該人民殘リ度者等其權理ヲ保ツベシ

是迄住居セシ人民歸リ度者ハ其歸ラル、期限ヲ定メ居家等賣拂テ其間ニ可致事ト存候

譬ヘハ可引拂者アリ私築物モ銘々アリ金高二萬八千計ノ物ナリ然レトモ其住否ハ觸告ノ上ナラデハ不相分サリ迎家ヲ引ク者モ無之候ヘ共之ヲ讓リ渡不致候テハ不相成候就テハ其國ヨリ出稼ノ人民モ些少故其邊ニテ迷惑ヲスル者モアルベシ

譬ヘハ所有不動産アル人民ニテ立拂ヲ不好者ハ日本人民ノ權理ヲ有シ住居スルモ差支ナシ

夫ニ付附録ハ何程ノ事ヲ増載可申哉

是今私ノ考ニ動産ヲ買フモ不動産ヲ不買モ互ニ權理ニ可任事ナリ

一々住居ノ人名ヲ載セ誰々ハ何々方向ト書記シテ可然哉然ラハクリール島貴國人ナキ上ハ全ク土地ノ人民計ニ有之候國ノ人民ト土人トニ係ル事件ハ二ツアリ御國人在留ノ者

條目ヲ作ラザルヲ不得候

夫ヲ製造可致候

何日ニテモ宜敷候

御互ニ廉ヲ擧ゲテ記スベシ

附録ハ佛文ニテ可然哉

然リ本文ハ佛文ニテ宜シ

〔公使又暫時英語外務卿ヘ話ス〕

目錄書ヲ拵ヘテ御談可致候

〔公使圖ヲ示シテ又英語ニテ〕

地名ヲ讀示ス「ヲネコタン」「マトワー」地名云々

〔公使又英語〕

六月廿五日フラシヨウストツク地ヲ發スル積ニテ當七月十五日ノ積ナルニ七月二日ニ發シタレハ必當月末ニ延着スベシ尤一直ニ航セハ早ク來着スヘシナレトモ薪水等ノ都合モアリ又函館ヘ立寄等ニテ少シク延着可致存候

〔此時條約附屬ノ公文第一款ノ下ケ札ヲ魯文ニ譯シ公使ヘ渡ス〕

其譯ヲ御一覽ノ上價ノ事ヲ定メ及ヒ規則ノ事ヲ極ムヘシ

官員彼地ヘ相越時ハ指令書ヲ可相渡候付貴政府ヨリモ管轄官ヘ指令書ヲ御附可被成候

クリアルヘ貴領事ヲ被遣候哉  
家モナキ土地故漁獵人ノ外ニ可相越モノナシ必誰モ行クヲ不好只獸類多處ニテ難遊也

其案件ヲ密ニ可取調候

致哉其邊ヲ御相談可致候

レリ何々ノ事ヲ遵守セヨ何々ノ事ヲ施行スル云々ヲ告知可

互ニ土地ヲ交換セシ以上其土人ニハ扱今般日本ノ領地トナ

〔此時公使暫時英語ニテ外務卿ニ語ル〕

人ノ去ラント望ム者ハ之ヲ許シ就カントスル者ハ之ニ停ム

杯ノ事ヲ記スベシト思フナリ

規則中必用ノ者ハ「クシン」「コタン」ニ我國領事ヲ遣リ土

如何

委細此條約ニ洩レタルヲ附録トナスヘキトノ事ニ有之候

土人ノ事ニ付互ニ規則ヲ盡ヘ彼地ニ可遣官員ニ附スヘシ

〔外務卿長官ト示談シテ〕

右ハ之レニ記載アリ其附録スベキノ條件アリ如何

リ度者ハ之ヲ殘シ移リ度者ハ之ヲ移ラシメン

ハ其權ヲ有セシムベシ又貴國領事モ派遣セシムヘキニ付

保護セシムベシ乍併土人ノ期限ヲ定メサルヲ不得或ハ殘

夫等指令書ヲ互ニ示ス杯ノ事ヲ附録ニ載スベシ

其指令文ハ如何

文ハ附録書ニ加入ニ不及

差違セヌ様相願申候

然リ

畢

一〇五 七月九日 寺島外務卿ヨリ  
三條太政大臣宛

樺太千島交換條約附録ニ就キ黒田開拓長官ト協

議ノ上露國公使ト談判ニ著手スヘキヤ否ヤ伺ノ

件並ニ之ニ對スル三條太政大臣指令

〔(案書) 甲第六十七號〕

樺太境界談判の義に付上申

樺太境界談判の義既に榎本全權公使魯國都府に於て條約調

印相濟候に就ては右附録の義は當地に於て談判可致答にて

魯國辦理公使スツルウエ氏本國政府より委任相受居候趣に

付黒田開拓長官へ打合右條約附録談判に涉り可申哉相伺候

御許可の上は同長官へも其段御達相成候様致度此段上申候

也

八年七月九日

外務卿 寺島宗則

太政大臣 三條實美殿

追て若御委任狀等要し候節は猶上申の義も可有之候

〔(案書) 上申の趣開届開拓長官へ別紙の通相達候事

明治八年七月廿三日

〔(案書) 太政大臣 三條實美印

一〇六 七月二十日 寺島外務卿ト露國辦理公使トノ對話書

樺太千島交換條約附録ニ關シ談判ノ件

明治八年七月廿日於本省寺島外務卿魯西亞國辦理公  
使スツルウエ氏對話譯官マレンダ長谷部開拓判官長

田外務六等出仕陪席

一北地互換條約一件

一應禮畢て

〔(案書) 記者出席前よりの續話〕

一淨書の時に至らば成るべく文章を晚くし其意味を充分

ならしむる様致し度候

一御尤なり

〔(註) 中略〕

〔(案書) 自是公使は約定草案を一讀す長田氏屢佛語を以て其意を譯  
示す〕

一第二條の趣旨は如何

一夫れは先きに別紙の第二款の條下を玩味せば其一條の意  
味は了解可相成候

〔(案書) 公使又第二款を讀む長田氏亦譯示する事屢なり〕

一三年の後魯人たらん事を望むとも難許事なり

〔(案書) 長田氏亦佛語を以て答る事あり

公使は己の持ち來りし約定草案を出し讀むに従つてマレンダ  
譯言する則如左〕

一樺太に移住したる日本人民は今般土地互換の後ち他の  
地に轉居する事を不望ものは其儘其地に住居する事を  
得べし此者は日本人民の權利を失ふ事勿るべし併し其  
地に在住中は其地官吏の設くる規則を遵守すべし且其  
者の動産不動産は是迄の通り自由に其者の所有たるを  
得べし

一理事官えは其人民所有の土地を調査するの任を托すべ  
し因て樺太島に残らん事を望む者には理事官其地の所

有たる證書を與ふべし

〔(案書) 記者退席し數語 存命中無稅たるべし是れ殘居の日本人  
を開落したり〕

に特別を與ふるものなり

一其地に殘居する日本人の宗旨は魯人の如く自由たるべ  
し而して此條に増加せん事を要する事あり他ならず千  
島に殘居する魯人も同様自由宗旨なるべしとの數語な  
り

一其義は條約書に掲載せり併し更に夫々え布告せざれば不  
相成候

一樺太に在る土人は三ヶ年間に其方向を定め居去を決す  
べし

一蓋し土人の爲めには此一文にて充分なるべし

一若し土人中移籍を望み而して何等の都合に因りて期限年  
間外住居せん事を請ふ者あらは許しても可ならん歟如何  
とならば三年間内は其方向を勝手にし得るものなればな  
り又其地も日本人の住居不相成との譯にも無之旁我籍に  
入て其地に住するも差支あるまじ然らば此れを第二條に  
差加度候

一其義は條約面に於て如何

一元と條約面に充分ならざる故夫れを推論して此談に及びしなり

一條約面に魯西亞人及び土人と區別してあり是れは自ら權理に輕重あるなり試に見よ千島の土人樺太に轉居すれば則魯人たり樺太の土人千島に移らば則日本人なり若し其移轉を自由に爲さしむれば親子兄弟其籍を異にし必不都合あるべし既に我外務卿より拙者への書簡中にも約定には日本人と土人とは格別の別を設くべしと申來候夫是拙者の考には素より其人種は異なり右風教も不行届早く其籍を決せしめ移轉せしめざれば混雜を生ずる哉必せり近例を掲げんに米領を譲り受けたる事あり此時も三ヶ年を以て去就を定めたり又先頃佛領を字國に渡したる時も同様たり

一御尤なり實地に於て必然らん

〔自是公使は我草案の約定書を読む〕

第三款を読む

一雙方打合の上命すべし

〔(案書) 第四款を読む〕

一此條は結末に附すべし

る處に候

右にて畢る

一〇七 七月二十三日

三條太政大臣ヨリ  
黒田開拓長官宛

樺太千島交換條約附録ニ關シ寺島外務卿ヨリ露

國公使トノ談判ニ當リ打合アルヘキ旨達ノ件

樺太境界條約附録ノ儀當地ニ於テ談判可致答ニテ魯國辦理公使スツルウエ氏本國政府ヨリ委任相受居候趣ニ付外務卿寺島宗則ヨリ談判可致候條諸事打合可申此旨相達候事

明治八年七月廿三日

太政大臣 三條 實美

開拓長官 黒田清隆殿

一〇八 七月二十日

露國辦理公使ヨリ  
寺島外務卿宛

露國理事官長崎へ到着近日横濱へ向ケ出帆ノ旨  
通達並ニ條約本書等交換等ノ爲露國外務省員既  
ニ來者アリタルニ關シ會談シ度旨申出ノ件

六 樺太千島交換條約締結ニ關スル件 一〇七 一〇八

一條約第六款の第二條に日本人は自由に入港し漁業する事を許せり而して魯人は千島に到るの要用はあらざれども三ヶ年間は移居する者もあるべければ右期限内は船舶の入港する事を御許し相成ても可然右を此一條に差加へ度候

一御尤の御談示なり乍去此條を將來の爲めに設けしものに只今御咄の趣は將來の事に關する譯には無之候

一千島へ航するとも貿易や漁獵をするにあらず

一右等の事は別に約定面を掲載不致も宜敷程の事なり

一條約は佛文にて記載候譯に付今日御示しの書類等も都て翻譯の上猶雙方の意見を合し一部と爲し其上にて御相談可致候又三ヶ年間に樺太及び千島の土人轉籍移居を望む者はいつれの地へ願出如何の手段にて其望みを果させ可申哉夫等の義も巨細取調御相談可致候

一多分次便には理事官への示令書寫到來可致左すれば猶夫れを以て御相談致し可成雙方の示令齟齬不致様仕度候

一瀨協なる者此程歸朝定て貴館えも罷出たるなるべし何角貴國官吏の周旋を請け萬事都合宜敷拙者に於ても深謝す

No. 103

Yokohama, 13 July 1875.

Милостивый Государь.

Имъо честь увѣдомить Ваше Высокопревосходительство, что я получилъ вчерашняго числа телеграмму изъ Нагасаки о томъ, что русскіе Коммиссары прибыли туда и черезъ три дня наѣдутъ выѣхать отсюда въ Yokohama. Я ожидаю ихъ сюда дней черезъ семь или восемь.

Вѣсть съ тѣмъчитаю долгомъ также довести до свѣдѣній Вашего Высокопревосходительства, что третьяго дня прѣхать курьеромъ изъ С. Петербурга чиновникъ Императорскаго Министрства Иностранныхъ Дѣлъ Баронъ Розентъ и привезъ мнѣ всѣ бумаги относящіяся до заключеннаго въ С. Петербургѣ трактата.

Не найде-ли Ваше Высокопревосходительство возможнымъ назначить мнѣ свиданіе 28го или 29го числа сего мѣсяца, для переговоровъ о мѣнѣ ратификацій, и о заключеній дополнителной статьи.

Въ ожиданіи благожеланнаго Вашего отвѣта

ОСТАВЬ СЪ ОТЛИЧНЫМЪ ПОЧТЕНІЕМЪ

искренно преданнымъ Вамъ,

К. СТРУВЕ.

Его Высочайшаго Личнаго Секретаря

Терасимъ Муненори,

etc., etc., etc.

(右和譯文)

第三百三號

以書翰致啓上候陳ハ我理事官等長崎ニ到着三日過ノ後横濱  
ニ向ケ出帆致シ候積リノ趣ノ電報同所ヨリ昨日落掌致候間  
七八日ノ間ニハ右理事官等當所エ來着可致ト存候右ノ趣ヲ  
閣下エ申上候ナガラ一昨日我外務省ノ官員バロンロゼン我  
都府ヨリ使員トシテ到着致シベトルブルグニ於テ取結ビタ  
ル條約ニ關スル悉皆ノ書類ヲ持參致シ候依テ右條約ノ批准  
ヲ互換并ニ其増加ノ箇條ヲ設定ノ儀ニ付御談判ノ爲メ當廿  
八日或ハ廿九日ニ御面會被下ノ御都合御座候哉  
御懇篤ノ御返事ヲ佇望スル所也

横濱

明治八年七月廿五日

露國辦理公使

スツルウエ

外務卿 寺島宗則閣下

註 右ニ對シ七月二十七日附寺島外務卿ヨリ露國辦理公使  
宛書翰ヲ以テ右ノ趣了承竝ニ明二十八日午前九時半面  
會スヘキ旨回答アリタリ

一〇九 七月二十八日 寺島外務卿ト露國辦理公使トノ對話書

樺太千島交換條約批准竝ニ附錄等ニ關シ協議ノ

件

八年七月廿八日於本省寺嶋外務卿露國公使と對話筆記

一 樺太一件

一 送越候書類は此件に關係する書類なる歟

一 關係の書なり因て右書に附録を可屬是非附録を不附は實

用ならず

一 約定書本紙は志賀可持越併右寫書は來候義に可有之

一 寫書は先日到來に付其寫は御送申置候

一 貴國皇帝陛下の御調印は別紙に可相成歟

一本紙に餘地あらは夫に調印可相成餘白なければ別紙に可

相成候

一 御調印は別紙に相成度其故は始に全權の官員に此事を

任し候旨を書し奥に皇帝陛下御調印相成たし尤前に佛

文譯次に魯文を以て反譯有たし

一 其體裁等の義如何可有之是迄の例も有之此度の分は如何

可致哉

一本約定書は本文は佛文にて譯は日本文夫に魯文と相成

居候拙者方へ本書の分來居候間此分閣下え可入御覽候

一 右本書は表紙天鷲絨にて糸綴に有之紙製の箱に入有之

候

一 先日閣下え御面晤の節和文の譯可呈様申上置候へとも

多忙未た不出來候に付長田氏を一日拙館え御遣被下度

候

一 何日宜哉

一金曜日ならば差支なし

一 皇帝陛下御調印可相成體裁は斯いたさは如何

一 日本文の處に皇帝陛下御調印右譯の佛文の處に閣下御

調印魯文に我皇帝右譯佛文に我全權調印いたし可然候

六 樺太千島交換條約締結ニ關スル件 一〇九

一 是迄の體裁と餘程違ふ

一 右は本書に無之比準書の處を右の如く可致各國何れも

如此體裁なり

一 可然候

一本國より送來し候書も御覽に入たし尙御談判も可致來

三十一日朝出頭可致御差支なき哉

一 差支なし

一 貴國皇帝陛下の御玉璽は如何様なる哉

一 我皇帝の分は朱の印影なり

一 我皇帝の印は蠟製にて箱に入れ有之候

(朱者)  
〔此時公使横文差出互に英語の談あり〕

一 何れ此分も持歸反譯の上一同可呈候

一 理事官の到着は何頃歟

一二日前長崎港を發し候理事官貳名の外書記官貳名程可

罷越且長崎よりヲラロースキーも罷趣候併同氏は水曜

日に可來右理事官より二日程可後

一 我理事官も總て貴國の理事官と萬事同様の振合にいた

したし

一 先日皇帝陛下え謁見いたし候提督乗組の軍艦の交代艦

二四五

去る二日前長崎へ到着いたし候併避暑としてウラジストクえ廻來九月頃には横濱へ可來候  
畢

一一〇 七月三十一日 寺島外務卿ト露國辨理公使トノ對話書

樺太千島交換條約附錄ノ條項ニ關シ談判ノ件

明治八年七月三十一日於本省寺島外務卿露公使え對話

○樺太嶋交換一件

一應禮畢て

〔朱書〕公使樺太島交換の約定書を持來し卿公へ示す此間英語にて數回談話ありたり

一約書附録は本務の官吏と充分商議不致は不相成因て本日は細密の御談判も難致只拙者の氣付き候廉のみ御談判可致候

一本日開拓使官員は出席不仕候哉

一調査不行屆候故出席不仕候

〔朱書〕卿公附録書の草案を繕し

一此戊號則e印の條下の本國に去らんとする云々とあり此

去字に付て二様の考あり一體該島則樺太えは夏時の際來居する者多候故冬分は家屋のみ残り置居住人は無之左れば多間該島を去つて他所に往く者も則其地を去るといふべし併し此人は全く該地を去りたるにはあらざるなり明年夏時に至れば復ひ歸住する者なり又其地の家屋を毀ち全く他に轉移し復ひ歸住せざる者あり是も又其地を去るといふなり然らば此去の字はいつれに可屬歟御意味を發揮と致し置度候

一閣下より御遣しの此の書面の第五款に其地を去るとあり夫れと同意味なり

一書面を調る時には夫迄の氣も不着候

一此去るといふ此地の不動産物をも賣拂ひ復ひ歸住せざる事をいふなり

一左すれば一讀にして其意味の了解候様に認め度候

〔朱書〕此間英語にて小話あり

一丁號則i印の條下に生涯租税を拂ふに不及とあり此地は前述の通り常住の者無之候左れば生涯といふは今日其地に在る戸主のみをいふ歟又は其家のあらん限りといふ意味歟

一生涯といふは本國政府より申越たる義にて年限を不定

殊に貴國人え實を與へたる特別なり將來に到らは十五年と歟二十年と歟年限を不設は相成間敷候へとも先づ只今の處にては此儘御差置の方可然と存候

一本國より被申越たる事歟

一電信にて生涯免稅たるべしと申越候又年限を定むれば其期に到れば何等の事由あるも其明文に順はざれば不相成左すれば其時に臨み悲嘆の者も可有之夫れ等を斟酌し年限を不定義に付假令は當時の戸主死去し其子の代に相成るとも我政府にては必是迄同様の特許を可與事と存候

一將來夫れ等の悲嘆者も可有之と存候間預め何置候なり

一一體我政府此條約を認むる時は格別に貴國人の爲めに特許を與へたる譯に有之候閣下も如御承知同盟國え對し一國に許す特別は他國えも同様不差許は不相成義に付此事に付ても將來或は他國より同様の特許を請求候者出來可致哉も難計因て此ヶ條は刪去可致候左すれば漠然たる故期限も無之又他より同様の請求も申出間敷候

〔朱書〕此時草案の丁號の全條を塗抹す

一いまだ翻譯も充分ならず又其本務の官吏えも商議し然る後御談判可致候

一理事官兩三日の内には到來可致候其節は同道出省御面晤相願度候

一承知

一約書批准相濟候は、謁見相願度其節は理事官えも同様謁見被仰付度本人の名譽とも相成候

一いつれ其節

一今後いつ御面晤可仕候哉

一來月三日はいか

一承知

右にて畢る

一一一 八月二日 寺島外務卿ヨリ 三條太政大臣宛

露國理事官横濱來者ニ付右接待掛及樺太派遣ノ我國理事官ヲ任命アリ度旨上申ノ件竝ニ之ニ對スル三條太政大臣決裁

〔朱印〕  
〔甲第百八十四號〕

樺太爲交換露國理事官來着ニ付接待并我理事官御撰  
任ノ儀上申

樺太交換ノ爲露西亞國ヨリ派遣相成候理事官バロンロゼン  
儀一昨卅一日横濱來着致候ニ付テハ我方於テモ同様理事官  
被仰付度依テハ於開拓使適任ノ者撰擧候様至急同使へ御沙  
汰相成度且又右理事官滯留中同使ニ於テ接待掛ノ者申付時  
々尋問等致候様都テ御達有之度此段上申候也

八年八月二日

外務卿 寺島 宗則

太政大臣 三條實美殿

〔朱印〕  
〔上申ノ通〕

太政大臣 三條實美殿  
實美印

明治八年八月四日

一一二 八月二日 露國駐劄本公使ヨリ  
寺島外務卿宛

樺太島所在日本政府所有建物讓與代金並ニ實地  
調査所要月數等ニ關シ報告ノ件

は後便清書の上差進可申候

一三菱會社の汽船外人に被雇東察加「ベトロバウロフスク」  
港え赴きし事並に「ウラジホストツク」え官員被差遣候等は  
又承知仕候兩所とも僻地には候へども我國産の穀物、鹽、  
飲料類等輸入致候は、相應の「デマンド」可有之に付本邦小  
商社の小貿易には可也の利分可有之と存候只彼地よりの輸  
出品は皮類魚類の外は何も有之間數被存候但し「ウラジホ  
ストツク」の方は材木の輸出追々可有之候

一「マリヤルス」仲裁一件を擔當せし當政府役人え賞牌を賜  
り候事世界一般の通習に付是非御採用有之度候右專任の者  
は先便申上置候通外務四等官に當る「エンゲルハルト」氏の  
外過日拙者一存丈けを以て問合せ候處同氏下役「プロセ」  
「バラス」<sup>横濱在留</sup>「ローゼン」<sup>副領事</sup>の三人有之趣猶其外にも相灌  
れ不申爲め當節閉合最中に候間近日の中人名役名とも取調  
可申進候將同伴に付ては「プリンスゴルチャコフ」氏並に外  
務大輔「ジョミニー」氏えも是非下し賜わるべき習慣にて候  
「ゴルチャコフ」氏えは無論一等賞牌にあらざれば不都合に  
て「ジョミニー」氏「エンゲルハルト」氏えは二等にて可然哉  
に存候其他の者えは位級と骨折とにより三四五等にて可

九月廿五日到

別記三十二號

以公信致拜啓候五月廿四日附貴書親並に對話書電信往復寫  
とも并て落手被開いたし候來書中樺太嶋上日本政府公有物  
の實價電文と公信とは壹萬圓の差有之候に付公信の方（即  
ち八萬三千圓の方）を以て正數と御認被爲候趣有之右は電  
文の方（即ち九萬三千圓の方）正數にて候尤此儀は既に公  
信を以て申上置其上條約面にも載せ有之候事には候得共貴  
諭に對し爲念回答いたし候

一其表應接書中實地取調月數の事屢次御懸合有之候得共右  
取調の義は既に以電信及御報置候通魯政府方にては不要の  
件と看做し居日本政府よりの御申立に確證有之上は「スツ  
ルウエ」氏事直に其件を承諾致答に相成居候に付別に何ヶ  
月迄と期限を定候約は無之只條約批准は記名後六ヶ月内に  
東京に於て爲取替の答に付其前に被爲濟候方可然事にて候  
畢竟實地取調は我より要せし事にて彼は無頓着に候尤同伴  
に就ては「スツレモウホフ」氏の口上前後矛盾せし所有之候  
に付先頃確と及懸合當日要件丈は即ち六月十日發線の電信  
を以て申上置候間疾に御承知に可有之候に付其節の對話書

然歟尤等級は御國制可有之候得共右は手前義「ボンベ」え問  
合候處丈け申述たる義にて候又魯帝陛下えも一等賞牌御贈  
相成候ては如何可有之哉尤これは御差圖有之次第打合せ致  
候事入用にて候に付此段伺置候將又當國海軍大佐「ナジモ  
フ」氏は三四年前「ラドローン」嶋<sup>小笠原嶋の南にあり</sup>より邦民の騙  
拐せられて彼地に苦役せられてありし者を助け來たりし人  
に付乍別慶同人えも相當の賞牌を賜りて可然存候

一朝鮮琉球の近況御申越被下委細承領仕候朝鮮は自然關係  
も有之候に付此後も尙委細御申越被下候様相願候、魯領黒  
龍江及烏蘇哩地方の滿州と接壤の地は滿州政府隱に魯を忌  
み其人民の相通するを嚴禁致候有様甚だ目今朝鮮の我を待  
つの形勢に類似致居候魯は朝鮮の方え領地を廣むるより烏  
蘇哩地方の國境を改正せんとして時機を待居様子に候其一證  
には魯國有名の陸軍大佐「ウニコフ」氏の建議書中に「ボン  
エツト」港の地方は南東に細くして其裏手の方直に支那領  
滿州に接近するを以て國境を猶西北の方に廣め且「ハンカ」湖  
即盛京後通志圖の西北岸をも一圓魯領にせざれば支那人の襲  
來を防禦するに便なり云々と相見居候朝鮮の方は現下猶  
高閣に束ね置候却て平常の雑話中に朝鮮は遂に日本の有と

なるべし杯申居候者も有之候程なり

一 花房書記官は依然留置不苦段の御電報承知いたし候

八月二日

榎本 武揚

寺嶋外務卿殿

追白本日到手の「タイムズ」に左の一事電報にて載せ有之候  
Paris, July 28. The moniteur states that the negotiations between England and France for an exchange of territory on the west coast of Africa have just been concluded. England will cede the Gambia in exchange for Dabon, Great Bassam, Assime, and the rever Mellacoree, both Powers thus bringing their possessions into greater contiguity with each other. Subjects in the ceded territory are guaranteed the full rights of British subjects, and vice versa.

(The Times, Thursday, July 29, 1875)

一一三 八月三日 寺嶋外務卿等ト露國辦理公使トノ對話

樺太千島交換條約附錄案條項ニ關シ協議ノ件

明治八年八月三日於本省寺嶋外務卿魯公使え對話長谷部開拓判官長田外務六等出仕臨席

○樺太論

一 約書附錄案の第五條の文中に「ラフリカーション」といふ文字有之右は何等の意味なる哉

一 其加といふ意味ならず貸借の意なり能く考るに此文字は不用に付刪去可致候一體此條下は殊に繁雜に付幾條にか分ち見易からしめん

一 又其次に其地に常住せん事を望む者の爲めに記載せし數語あり而して此條中に三年間に移轉せん事を望む者の便法を不記は如何

一 一體いつれの地に多く住居致し居候哉不分明に付委員の去りたる後は楠溪に在る日本領事官に願出ると歟或は其地方の我官吏に申立ると歟不定は不相成第一此條は餘り短簡なる故意味も徹底不致に付是も亦條を分ち件を逐ひ詳細に記載候てはいか

一 委員は一時出張する而已に付右官吏の去りたる後は何處へ願出ると歟いふ事を明細に不定置は不都合に有之候

〔記者退席〕

一 明日理事官同道第九時參省仕度候

一 承知候

一 第二條の末文にある保護證書の渡方は素より委員の任なれとも隔絶の地に在居候ものも可有之因て悉皆割與を待ては數月を費し可申左すれば時候にも係り甚不都合に付渡殘りの分のみ其地の者に托し引去り候方可然候

〔記者退席〕

一 楠溪に在る公廳の内一ヶ所は我領事廳に可用と存候間御護り難申候

一 夫れ等は條約え記載候にも不及明日理事官參省仕候間其節兼て御廻し有之候家屋書の内第何番は御引渡無之旨被仰聞候へは宜敷候

一 家屋は夫にても可宜候へ共地面は拜借せざれば不相成候一 地面を御借し申候共地租杯を取立候義は有之間敷且同所え領事館建設の義は本條約に明文有之義に付茲に論ずるには及間敷候

〔案書〕  
〔此時繪圖を以て樺太島現今の漁獵場を示す〕

公使此繪圖を借受けん事を望む曰く他に控あり返却に不及と

六 樺太千島交換條約締結ニ關スル件 一一四

〔答たり〕

一 領事館家屋の義は指令狀を委員に渡し實地に於て選ばしむる方可然と存候

一 其議に定むべし

一 彼地は時候に係る事故可成秋の内に取纏め候様致し度就ては大體を定細末の事は楠溪の領事と地方官にて取極め候様に致し度候

〔案書〕  
〔公使一通の譯文を出す曰く〕

一 是は魯文にて記載有之批准の譯なり

〔案書〕  
〔子安少丞數通の約書案を持出し公使に示す此間數回英佛語にて談話ありたり〕

右にて畢る

一一四 八月四日 寺嶋外務卿ト露國辦理公使、露國理事官トノ對話書

樺太千島交換條約附錄案條中樺太島ニ於ケル邦人ノ出入ニ際シ届ノ要否並ニ漁獵等ニ關シ協議ノ件

八年八月四日於本省寺嶋外務卿露國公使并理事官と對  
話筆記

侍席 長谷部開拓中判官  
長田外務省六等出仕

○樺太島一件

一 貴下は我國え初の御出敷

外務卿露國公使對し

一 初に候今般長崎え到着夫より横濱え着港いたし候到着  
以來至所目に觸候もの都て珍敷事に候

一 貴國より我國は定て熱し候義に可有之長崎と同所の暑氣  
は如何

一 我國を發る時は未た此暑氣を不知併拙者着港以來冷涼  
なるは我國の冷氣を携帶來候様に被存候

一 拙者今般樺太嶋一件に付我政府吾に理事官を被命派出  
いたし候此上は尙貴國との親睦愈厚からん事を願ふ

一 御官職は如何

一 ポルコウニク(則英ノコロネル)にして參謀局長に有之候

一 此度は樺太嶋え貴國軍艦にて直に御出敷

一 此爲兼て横濱港え軍艦壹艘碇泊罷在候夫に乘組參候積

一 然り

一 不立去の建物敷又は不動産物等人に讓候節は是非届可  
致善也理事官は専ら貴國人の同所え多人數來るは我國  
益に付可成貴國人え便利を可與心得に候

理事官

一 若向後兩國人民の内に喧嘩等をなし候節其取締は何に  
てなすか

一 夫々新管轄の方に可屬サカレンは貴國千島は我國なり

一 支那國との堺にウスリーと云地ありてマンサと云ふ一  
の人種あり此地其取締なき處屢不都合を生し候に付既  
に兵隊を出取締候様立至り候因て前以其取締被致置た  
し

一 是迄同所に有之獵場え日本人行時はクシンコタンの官廳  
え届をなし行き又は獵場え直に行しは跡にて前同廳え届  
出候様致候は、其人名等も相分取締出來可申候

一 夫は好都合未だ露國に於て日本人の保護をなさず追て  
は保護行届候様可致候

一 右建物不動産物等の義も右附録に載可置

公使云

一 夫には及間敷理事官と領事との間の結約にても可然候

貴國理事官と一同乘組度其邊の事に付ては萬事御協議  
致たし

一 其事は萬端御相談可致候

(朱書)「此時露公使繪圖を披き外務卿と英語談判」

理事官云

一 吾此度樺太嶋一件に付我政府の命を受出張候上は取締  
向を專一とし貴國人え便利を與候様可致旨の下命に付  
其旨を遵奉し候

公使對し

一 御談申置候附録中我人民出入の届は兎も角彌同所を立去  
候節建物等は持去候敷又は其儘差置候敷其節は是非其次  
第届出候様可取計事になし其事も増加致置たし

(朱書)「此時露公使と英語談判あり」

公使云

一 勿論人の出入は逸々届には及間敷

一 右は勿論に候へ共同所え建家等を補理致置候を彌止むる  
時は届をなすなり右はフリウレシを返す迄の次第なり

一 併新に借地等は貴國領事の手を経て可借受

一 更に借受候は其手順可致右は是迄取立有之候建家等を云  
なり

一 日本人の在留中其取締は貴國領事にて所轄可有之候

(朱書)「此時露公使と外務卿英語にて談判あり」

一 漁獵の事に付ては黙許の姿に差置別段條約等なき方可  
然候

一 右は何故黙許に致敷

一 條約取結置候へは外國人えも其免許を與へねはならず  
此獵は貴國人而已に許候因て條約不取結方可然候

一 我國人も右場所の漁獵は爲引拂候積其邊の義に付我軍  
艦も貳艘程差出有之候且條約面にサカレンとありてヲ  
コツク海とはなし夫に條約を致せは各國人へも許さね  
はならず因て此義は書簡の往復に取極置たし

一 漁獵致候もの人員等の爲の條約は如何

一 當今同所え住居致居候もの事に付候約を可致

一 昨今住居無之日本人同所え留るは纔なり

一 夫は日本人員の出入を領事に於て簿に載置は夫にて可  
然候

(朱書)「此時外務卿露公使と英語談判」

理事官

一 サカレンに建物等ある事は承知罷在候へとも獵場并開  
墾地等の處坪數等承知いたし度候間右調書も有之候は



御遣被下度候

- 一 認候上可差出尤坪敷の處委しく不分獵場敷等は相分居候間其分可差出候田畝等は纒なり
- 一 右は我政府え上申の入用に付可相成は坪敷等相分候様いたし度
- 一 獵をなし得物は直に船に積入持歸候故同所え住居不致因て田畝等はなし
- 一 貴國理事官と一同同所え赴夫々取調候に付ては理事官と其前會同協議致たし
- 一 諾且貴公使とも兼て申談置候は我理事官へも貴國理事官え被與候此件に付候權限を與候に付其趣承知いたし度
- 一 右は條約面の五ヶ條と附録との趣を人民え及布告候迄の命令に候なり
- 一 右坪敷等の義は同所に至らば可分敷可成速に承知いたし度
- 一 一直に相分候
- 一 同所え可赴軍艦等は御用意相成居候歟
- 一 函館に淺間艦を用意罷在候

- 一 其艦は大なる歟
- 一 我日進艦位の艦に候
- 一 同方は海面の氷早き故可成速に可赴都合に致たし
- 一 未た大丈夫
- 一 然共千嶋の方は秋末に至り風強く又霧多し閣下の御見込は如何千嶋の廻進を先になす歟サカレンを先になす歟
- 一 跡に至差支多き方を先にし差支なきを後に可致
- 一 其邊の義は理事官え御任有たし
- 一 然り千嶋邊の航海熟練のカヒテイん玄武艦え乗組居候此艦は今北海道に參居十七日頃ならては歸艦不致故に其邊今難決候
- 一 千嶋の航海は貴國艦御熟練に付貴軍艦に我理事官も乗組可然樺太は當方も委敷故其節は兩艦にて可然候因て其邊今日難決候間此長谷部判官を横濱御旅館え明日可差出何時御差支なき哉
- 一 何時にても差支なし可相成は明日午前九時半御入被下度候

〔朱書〕此時露國より持來候本條約書の箱を繕一同一見の上我公使

より送致の寫書と校合す  
畢て退去

一一五 八月七日 太政官史官ヨリ  
外務大丞等宛

長谷部開拓中判官、時任開拓使出仕ニ對シ樺太千島交換ニ付理事官仰付アリタル旨通知ノ件

附記 八月七日長谷部開拓中判官等ニ對スル露國理事官滯京中ノ接待係仰付ノ辭令

〔朱書〕  
八月七日

開拓中判官 長谷部辰連  
開拓使六等出仕 時任 爲基

今般樺太嶋交換に付理事官被 仰付候事

右の通本日御達相成候條爲御心得此旨申入候也

明治八年八月七日

史 官

外務大少丞御中

註 長谷部開拓中判官等ニ對スル露國理事官滯京中ノ接待係仰付ノ辭令左ニ附記ス

六 樺太千島交換條約締結ニ關スル件 一一五 一一六

〔附記〕

開拓中判官 長谷部辰連  
樺太島交換ニ付魯國理事官滯京中接待係被仰付候事

八等出仕 小野寺魯一  
樺太島交換ニ付魯國理事官滯京中接待係申付候事

明治八年八月七日

開 拓 使

一一六 八月九日 露國辦理公使ヨリ  
寺島外務卿宛

條約附錄案文及露國理事官持參ノ指令書並ニ理事官ノ現地巡廻等ニ關シ報知ノ件

No. 105 28 Юли 1875г.  
Токохама, 9 Августа

Милостивый Государь,

Слѣшу препроводить при семъ къ Вашему Превосходительству составленный сообще съ Вами проектъ дополнительныя статьи, съ тѣми попутными и измѣненіями, которыя были предложены

Вамъ. Полагаю и надѣюсь, что теперь изложено все достаточно ясно и обстоятельно, и что можно будетъ безотлагательно приступить къ снятію двухъ копій для подписанія и приложенія нашихъ печатей.

Прилагаю при семъ также и переводъ съ инструкции, данной нашимъ комиссарамъ; въ дополненіе къ оной придегся дать въ руководство имъ копию съ самаго трактата, съ деклараци и съ дополнительной статьи.

Насчетъ раздѣленія комисси на двѣ части для одновременнаго посщенія Сахалина и Курильскихъ острововъ, я по сіе время еще не получилъ отвѣтной телеграммы. Какъ только получу отвѣтъ я не премину сообщить Вашему Превосходительству содержание онаго.

Буду ожидать отъ Вашего Превосходительства приглашеніе прѣхать въ Министерство для окончательнаго совѣщанія; для меня всякій день и часть удобна.

レノ時日ニテモ貴省エ出頭差支無之候教具

明治八年八月九日

露國辦理公使

スツルウエ

外務卿 寺島宗則閣下

別紙指令書譯文ハ原書ニ付テ可見

一一七 八月十一日 太政官史官ヨリ  
外務大丞等宛

黒田開拓長官ニ千島出張仰付アリタル旨通知ノ件

附屬書

八月十一日三條太政大臣ヨリ黒田開拓長官へノ  
辭令

千島出張仰付ノ件

〔案〕 八月十二日 第十六號

別紙の通り黒田開拓長官へ御達相成候間此段爲御心得申入候也

八年八月十一日

史 官

六 樺太千島交換條約締結ニ關スル件 一一七 一一八

Объ отличнѣмъ почтеніемъ

Искренно преданный Вамъ

К. СТУРВЕ.

Его Превосходительству

Герасимъ Муненори.

etc., etc., etc.

(右和譯文)

閣下ト與ニ認メ候處ノ條約増加ノケ條ノ案文閣下ヨリ御示シ被成候改換増加ヲ右ニ書キ入レ今不取敢差上候拙者思考候ニハ今右中悉皆ノ事十分明白細密ニ記載有之候ニ付我等調印ノ爲メ右ニ通ノ寫ヲ遅延ナク謄寫ニ取懸リ候事宜敷ト存候

我理事官持參致候示令書ノ翻譯モ別紙相添ヘ差上候右ノ示令書ノ外又條約并ニ布告及ビ増加ノケ條ノ寫書ヲ指導ノ爲メ理事官等エ授ケ置キ候方要用ト存候

樺太并ニクリル羣島ヲ同時ニ巡回ノ爲メ理事官二手ニ分レノ義ハ未ダ拙者返信ヲ落手致シ不申候エ共右來着次第早速閣下エ其意趣ヲ御報知申上候

結局御談判ノ爲メ閣下ヨリノ御案内待居候拙者ニ於テハ孰

外務大少承殿

(附屬書)

開拓長官 黒田清隆

御用有之クリル諸島へ出張被 仰付候事

明治八年八月十一日

太政大臣 三條實美

註 是ヨリ先開拓判官ヨリ院省廳府宛七月三日附書翰ヲ以テ「開拓長官黒田清隆先般樺太洲へ出張ノ處御用相濟昨二日歸京相成候條此段爲御心得及御廻達候也」ト廻達シ居レリ

一一八 八月十三日 寺島外務卿ト露國辦理公使トノ對話書  
樺太千島交換條約ノ實施ニ關シ協議ノ件

第一百十一號

明治八年八月十三日於省寺島外務卿露國公使ト應接筆記

一 柯太島交換一件

禮畢

一 楠溪迄出張致シ居候理事官ハ函館迄呼寄セ同港ヨリ其軍

艦ニ乗組クリルノ方へ出張候方可然哉ト存候

一其義拙者於テ異存無之候乍然未夕艦將へ不申聞候間今夕申談其上否可申上候

一長谷部ハ貴國軍艦ニテ箱館迄出張爲致度及御依頼候御都合如何哉

一別ニ差支モ有之間敷候へ共其逆モ一應申談候上御報可及候

一當方ヨリモ何レ出艦有之候へ共其艦當時函館ニ滞泊致シ居候故イツ頃歸航候哉日時モ難測候間右様及御依頼候事也

一批准ハイツ頃ニ候哉

一閣下ト拙者ノ間ニテ此條款ヲ取極其上ニテ批准日時モ可相定候依テ條款ハ可成速ニ決定致度候

一箇條中三年ノ間ニ双方ノ人民移住致度節ハ何レへ可申立哉ノ廉無之理事官出張中ハ同官へ申出候様布告致シ候テモ宜敷候へ共其後ハ如何スヘキト云事無之候

一第四條中へ日本人ノサガレンニ住シ工業ヲ營ムヲ願モノハ許可ス可シ露人ノクリルニ住ムモノモ同様ト云事

ヲ書加候ハ、簡易ニシテ可然哉ト相考候

第九條ハ除去候テ可然敷又双方土人ノ移住ニ付テハ三年ノ間一年一兩回宛政府ヨリ船舶ヲ送り其移住ヲ助力可致旨可書加敷

一土人移住ノ節ハ政府於テ助力可致ハ勿論ノ事ナレトモ別ニ條款中へ書加候程ニモ至ル間敷敷

三年中ニテモ土地ト人民トハ其管轄異ナルモノ故前ニモ演述セシ通移住ノ節何レへ可申立哉トノ事ハ書加置候方可然候

一夫レハ双方理事官實地目撃ノ上一旦歸來候間右等ト商量談議致シ候方可宜候

或ル一商客ノクリルニ往來スルモノアリ其客ノ說ニクリル人ノ情態ヲ察スルニ双方譲リ渡シ相濟候上ハカンシヤツカ又ハ樺太へ必移轉可致趣ニ候

一御連名ヲ以テ其土人ニ布告不致ハ不相成候夫レハ如何ノ御見込哉

一日本人へハ日本政府ヨリ布告シ露人へハ露國政府ヨリ布告致シ候方可然ト存候

一一九 八月二十二日

露國トノ樺太千島交換條約附錄

註 本「條約附錄」ハ佛文ノミヲ以テ記載セラレ居ルモ記錄中ニ綴込アル「長田銈太郎譯」トアル和譯文ヲ參考ノ爲併掲セリ

Article supplémentaire

Conformément à l'article III de la déclaration, signée à St. Petersbourg, le 25 Avril 1875, correspondant au 7<sup>em</sup> jour du 5<sup>em</sup> mois de la 8<sup>em</sup> année Meiji, et pour compléter et développer l'article V du traité signé le même jour, quant aux droits et à la position des sujets respectifs restant sur les territoires réciproquement cédés, ainsi que relativement aux aborigènes de ces territoires, Sa Majesté l'Empereur de toutes les Russies et Sa Majesté l'Empereur du Japon ont nommé pour leurs plénipotentiaires, savoir :

Sa Majesté l'Empereur de toutes les Russies :  
Son Chambellan et Conseiller d'Etat actuel Charles Struve, Son Ministre Résident au Japon ;

(和譯文)

條約附錄

明治八年五月七日即チ千八百七十五年四月廿五日露國聖比特堡府ニ於テ調印濟ノ公文第三款ニ基キ及同日調印ノ條約第五款ノ旨趣ヲ完全ナラシメ且施行センカ爲メ雙方讓與濟ノ領地ニ在住セル各政府臣民ノ權利及其身分且兩地方土人ノ事ニツキ日本皇帝陛下及全露西亞皇帝陛下ハ爲メニ各全權委員ヲ命シタリ即チ日本皇帝陛下ハ其外務卿寺島宗則ヲ之レニ任シ又全露西亞皇帝陛下ハ侍從兼國議院議員日本在留辦理公使シヤル、スツルウエヲ以テ此ノ任ニ宛テ雙方委任ノ書ヲ照應シ狀實良好ニシテ其至當タルヲ見テ左ノ條款ヲ合議決定スルモノナリ

et Sa Majesté l'Empereur du Japon : Son Ministre des Affaires Etrangères Terashima Munenori ;

lesquels, après s'être communiqué leurs pleins pouvoirs, trouvés en bonne et due forme, sont convenus de ce qui suit :

a. Les habitants des territoires cédés de part et d'autre, sujets russes et japonais, qui désireront rester domiciliés dans les localités qu'ils occupent actuellement, seront maintenus dans le plein exercice de leurs industries. Ils conserveront le droit de pêche et de chasse dans les limites qui leur appartiennent actuellement et ils seront exempts leur vie durant de tout impôt sur leurs industries respectives.

b. Les sujets japonais qui resteront dans l'île de Sakhaline et les sujets russes qui resteront dans les îles Kouriles seront maintenus et protégés dans le plein exercice de leur droit actuel de propriété. Des certificats leur seront délivrés constatant leur droit d'usufruit et de propriété sur les immeubles qui se trouvent actuellement en leur possession.

c. Une pleine et parfaite liberté de religion est

accordée aux sujets japonais résidant dans l'île de Sakhaline, ainsi qu'aux sujets russes résidant sur les îles Kouriles. Les églises, temples et cimetières seront respectés.

d. Les aborigènes, tant de Sakhaline, que des îles Kouriles ne jouiront pas du droit de rester domiciliés dans les localités occupées par eux actuellement et de conserver en même temps leur sujétion actuelle. S'ils veulent rester sujets de leur Gouvernement actuel ils devront quitter leur domicile et s'en aller sur le territoire appartenant à leur Souverain ; s'ils veulent rester domiciliés dans les localités qu'ils occupent actuellement, ils devront changer de sujétion. Il leur sera toutefois accordé un terme de trois ans, à dater de la notification à eux du présent article supplémentaire, pour prendre une décision à ce sujet. Pendant ces trois ans il leur sera maintenu le droit de pêche, de chasse ou de toute autre industrie qu'ils exerçaient jusqu'à ce jour, aux mêmes conditions, en ce qui concerne les privilèges et obligations qui existaient pour eux jusqu'ici dans l'île de Sakhaline

第一條  
交換濟ノ各地ニ住ム日本及露西亞ノ臣民現ニ其所有セル地ニ在住セント願フモノハ自個ノ職業ヲ十分營ムヲ得且其保護ヲ受クベシ又現在所有地界限中ニテ漁獵及鳥獸獵ヲ爲スノ權ヲ有シ且其生涯中自己ノ職業上ニ關スル諸稅ヲ免スベシ

第二條  
樺太サガ島及クリル島ニ在住セント決定スベキ各臣民ハ所有ノ權利ヲ有スベシ又現今所持ノ不動產ヨリ收入スル物件及所有ノ權利ヲ證明セル證書ヲ渡シ置クベシ

第三條  
樺太サガ島及クリル島ニ在ル各臣民ハ自個ノ宗旨ヲ尊崇スル事全ク自由タルベク又禮拜堂寺堂及墓所ハ毀害スヘカラス

第四條  
樺太サガ島及クリル島ニ在ル土人ハ現ニ住スル所ノ地ニ永住シ且其儘現領主ノ臣民タルノ權ナシ故ニ若シ其自個ノ政府ノ臣民タラシキ事ヲ欲スレハ其居住ノ地ヲ去リ其領主ニ屬スル土地ニ赴クベシ又其儘在來ノ地ニ永住ヲ願ハバ其籍ヲ改ムヘシ各政府ハ土人去就決心ノ爲メ此條約附錄ヲ右土人ニ達スル日ヨリ三ヶ年ノ猶豫ヲ與ヘ置クヘシ此三ヶ年中ハ是迄ノ通り樺太島及クリル島ニテ得タル特許及義務ヲ變セシメテ漁獵及鳥獸獵其他百般ノ職業ヲ營ム事妨ナシトイヘトモ總テ地方ノ規則及法令ヲ遵奉スヘシ前ニ述フル三ヶ年ノ期限過キテ猶雙方交換濟ノ地ニ居住セン事ヲ欲スル土人ハ物テ其地新領主ノ臣民トナルヘシ

et aux îles Kouriles, mais pendant tout ce temps ils seront soumis aux lois et aux réglemens locaux. A l'expiration de ce terme tous les aborigènes qui se trouveront domiciliés sur les territoires réciproquement cédés, deviendront sujets du Gouvernement auquel aura passé la possession du territoire.

e. Une pleine et parfaite liberté de religion est accordée à tous les aborigènes de l'île de Sakhaline et des îles Kouriles. Les temples et les cimetières seront respectés.

f. Les arrangements contenus dans les cinq paragraphes précédents auront la même force et vigueur que s'ils avaient été insérés dans le texte du traité signé à St Petersburg le 25 Avril 1875.

En foi de quoi les Plenipotentiaires respectifs ont signé le présent article supplémentaire et y ont apposé le cachet de leurs armes.

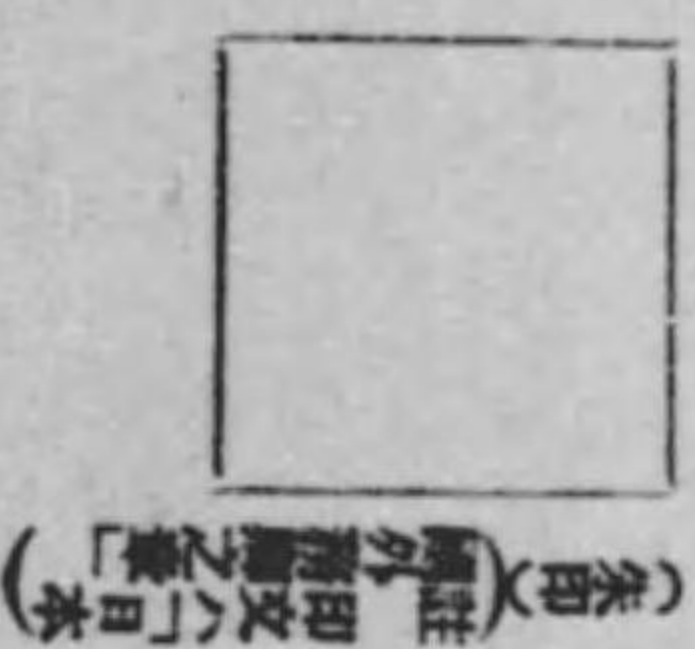
Fait en double expédition à Tokio le vingt deuxième Aout de l'an de Grâce mil huit cent soixante quinze, correspondant au vingt dixième cent soixante quinze, correspondant au vingt deuxième jour du huitième mois de la huitième année Meiji.

第五條  
樺太島及クリル島ノ土人ハ各自個ノ宗旨ヲ尊崇スル事全ク自由タルヘシ又寺堂及墓所ハ毀害スヘカラス

第六條  
此條約附録ノ右五ヶ條ニ載セタル議定ノ件々ハ明治八年五月七日聖比特堡ニ於テ調印濟ノ條約ニ加ヘタルモ同シ權力アルモノナリ  
右ヲ確定スル爲メ各全權委員此條約附録ヲ作り二通ト爲シ以テ各其印ヲ調スルモノナリ  
東京ニ於テ

明治八年八月廿二日

C. STRUYE. TERASHIMA MUNENORI.  
(L. S.)



(朱印) 寺島外務卿ヨリ  
三條太政大臣宛

一一〇 八月二十三日 寺島外務卿ヨリ  
三條太政大臣宛

樺太千島交換條約本書交換並ニ條約附録調印濟ノ旨報告並ニ右條約布告ニ關シ上申ノ件

〔案書〕  
〔甲第貳百號 八月廿三日達了〕

三條太政大臣殿

寺島外務卿

樺太千島交換條約本書爲取替濟并に附録調印濟の儀に付上申

樺太千島交換條約昨廿二日爲取替相濟且右條約附録書魯國辦理公使スツルウエ氏との談判相整本日於外務省調印相濟候間條約書并附録譯文相添此段致上申候就ては右條約交換濟の儀即今御布告不相成様いたし度其譯は今般交換の本條

六 樺太千島交換條約締結ニ關スル件 一一〇 一一一

日本外務卿 寺島 宗 則(印)  
露西亞國辦理公使 セ、スツルウエ(印)

約并調印の附録本書共同公使より本國政府へ差送り同國帝の允許を経候上にて双方政府月日打合の上同日各人民へ公布いたし度其以前は一般へ不相洩様いたし度旨此程同公使より懇々申立右は尤の次第にて交際上關係重大の事件は結果公布候までは嚴重相秘候事交際上一般の成規にも有之旁同公使申立の通御處分相成度存候併て此段上申候也  
第八年八月廿二日

一一一 八月二十四日 露國駐劄樺本公使ヨリ  
寺島外務卿宛

樺太千島交換條約並ニ附録條約公布ニ關スル間合ニ對シ回答ノ件

二六三

〔十月廿二日到〕  
別記第卅四號

以公信致拜啓候然ハ昨廿三日午前十時五十分東京發線の電信同日午後九時三十分到來御申越の旨左の通承知いたし候  
批准取替ハセ並ニ附錄條約記名トモ二十二日ニ濟タリ、  
布告ノ事ハ魯政府ト打合セノ上此方へ返答スベシ、聖上  
ヨリ「マリヤルス」仲裁御禮宸翰ハ明日ノ郵船ニテ贈ル可  
シ

寺 嶋

今朝拙者右電報持參當外務省え罷越候處「ジョミニ」氏留守に付亞細亞寮權頭「メルニコフ」氏に面會右の段申聞候處  
同氏大悅「スツルウエ」氏よりは未だ何の報知も無之段申聞候さて御申越の布告一條は恐くは附錄條約義魯帝の批准なき前に於其表御布告に相成候ては如何との御配慮なるべく被察候へとも右は勿論我政府におゐて御勝手に御布告有之可然義にて當政府え打合候程の義とも不被存候得共御命令の通本日同氏え一應問合候處同氏申聞候には兩皇帝御批准相濟たる公然條約を布告する事素より各政府の自由にて附錄條約も「スツルウエ」氏記名調印相濟たる上は貴政府にお

八月廿四日

榎 本 武 揚

寺 嶋 外 務 卿 殿

先便一寸申上置候「トルコ」屬國「ヘルゼゴフヒナ」の一揆其後愈盛に相成遂に二三日魯魯字澳三大國の使節より「トルコ」政府え申入右一揆は三大國の岡士より「ヘルゼゴフヒナ」に在る岡士休兵申通し其上双方理否取札の上兵に血らずして無事に取静めんとの事に相成昨日「トルコ」政府は其旨承諾致たる由本日の新聞に記載有之候左候へば「ドノ、プリンシパリチ」は多分是迄より一層「フリー」に相成可申而して遂には全く「インデペンデント、ステート」と相成可申被存候

一一一 八月二十五日 寺嶋外務卿ト露國辦理公使トノ對話書

樺太千島交換條約書交換ニ關シ協議ノ件

第二百十號

明治八年八月廿五日於本省寺嶋外務卿露國公使スツルウエ氏と應接筆記

一 樺太島一件

六 樺太千島交換條約締結ニ關スル件 一一一

みて本條約と共に御布告相成當方に於て聊差支無之義は申迄も無之候へども御電報の趣若くは何か別の思召にてもこれあるにや否らざれば御申越被成候程の事には無之に付兎も角も「スツルウエ」氏より電報落手致候迄御返答御待合これありては如何と申候に付其意に任せ「スツルウエ」氏の電報落手の上は拙者方え早速相廻し吳候様頼置申候、夫はそれれに致置拙者御申越の意味を反覆相考候に前文申述候より別に御趣意も有之間敷哉に存候間本日談判の意に基き不取敢只今左の通以電信及回答候

Russia will publish it in his usual manner No objection for us to do the same Enomoto.

但し魯西亞にては兩皇帝批准相濟たる上は右の趣を「セナート」え相示し 魯國の「セナート」は我國大審院と元老院を合體の權有之其議官は皆國家の元老にて選舉は帝の特權にて候 其上にて司法省え廻し遍く布告する趣申聞候  
一 拙者義實は今早朝字國え旅行の積の處昨夜の電信に付今日は出立見合彌明日より二十日許留守に付花房書記官臨時代理いたし候就ては拙者留守中代理にて可相辦事丈けは同人より可及御答候爲念此段并て申進置候

禮畢

一 過日御面晤の節クルル島の方は貴國政府より布告し柯太の方は此方より布令すと及御打合置候處右は如何の御都合哉當方は先づ右の心得にて布告文等取調候事也

一 交換の實不被行候内は露國官吏柯太に駐留致し候事も不相成候右故過日御打合の通にて可然歟  
規則中建物之事は露國理事官の目前於て取調べくとあり是は双方相談の上可相定事と改度候

一 意味は其通り也乍然譯文の不宜より文面上不明了に相見候是は別に改る迄もなく字句を少々添削致候而已にて可宜候

一 大凡御相談も相纏り候是にて宜候は、明日淨書爲致度候間貴方にも其御都合に相願候

一 諾  
一 理事官は多分明後廿七日乘艦廿八日則土曜日に發錨の都合に候

一 長谷部は始貴國軍艦へ乗組の義及御依頼置候處此方より出艦有之候由に付同人は多分其船にて出張可致候貴國艦長へも其旨御通知被下度候

一諾

右にて畢る

一三三 八月二十七日 露國辦理公使ヨリ 寺島外務卿宛

漁獲ノ爲千島ニ移住シタル露國人ノ有無調査方

露國理事官ニ指令セラル旨等報知ノ件

附屬書 九月六日露國辦理公使ヨリ同國理事官ノ

千島居住ノ露國人ノ有無調査ニ關スル指令

書和譯文

No. 107. Yokohama, <sup>15</sup>/<sub>27</sub> Августа 1875г.

Милостивый Государь,

Имѣю честь уведомить Ваше Превосходительство, въ дополненіе къ прежнимъ момътъ словеснымъ заявленіямъ, что по немѣннѣю вѣрнымъ свѣдѣнію о тѣхъ немногихъ русскихъ жителяхъ, которые, какъ я уже имѣлъ случай Вамъ сообщить, года два тому назадъ перекътали будто, бы на Куриль-

скіе острова для звѣриного и рыбнаго промысла, и указать Г. Матюнину, которому предстоитъ сдать эти острова Японскому Комиссару, захватить сначала, если возможно, въ Петропавловскѣ, гдѣ онъ можетъ собрать свѣдѣнія о жителяхъ на Куриллахъ. Тамъ же мѣстныхъ власти указать ему, на какихъ именно островахъ проживаютъ эти немногіе люди. Я думаю, что всѣ эти жители въ продолженіи 2хъ, 3хъ лѣтъ уйдутъ отсюда, и имъ объявлено будетъ, что Правительствомъ наше окажетъ имъ содѣйствіе, въ случаѣ еслибы они пожелали переселиться въ русскія владѣнія.

Что же касается до тѣхъ трехъ купеческихъ семействъ, о которыхъ я имѣлъ честь Вамъ сообщить въ прежнихъ разговорахъ, то я о нихъ имѣю лишь частныя и весьма неопредѣленныя свѣдѣнія; сколько мнѣ известно, то они наводятся на Урупъ, на сѣверной оконечности Самуира и на Шумшъ.

Прилагаю при семъ для свѣдѣнія Вашего

Превосходительства переводъ момътъ указаній Г. Матюнину по сему предмету.

Съ отличіемъ почтеніемъ

Искренно преданный Вамъ

К. СТУРВЕ.

Его Прюг Терасимъ Муненори.

(右和譯文)

以手紙致啓上候陳者過日閣下エ申上置候通り二年前漁獸獵ノ爲メクリル島エ移住セシ露國人民ノ義確報無之ニ付貴政府エ右羣島ヲ引渡シニ任ゼラレタルマチウニン氏エ能フナレバ先キニベトロバウロスケエ立寄り同所ニ於テ右羣島住民ノ義糺聞可致様指圖致シ置キ候左候エバ右地方官ヨリ執レノ島ニ於テ若干ノ人民ハ住居致シ漁獸獵ヲ營業致ス乎ノ義聞知出來候拙者ノ考ニ於テハ右ノ悉皆住民ハ二三ケ年中ニ右クリル島ヨリ去歸可致ト存候若シ右住民ヨリ其願望致シ候節ハ我政府ヨリ其手當ヲ遣ワスノ趣右エ布告致シ置キ可申候

諸先日閣下ト御談話ノ節申上候商人ニ附屬ノ荷藏ノ義ハ至極不確定ノ私報有之右ハ三ヶ所ニ有之由即チウルブ島及ビ

六 樺太千島交換條約締結ニ關スル件 一三三

シムシル島ノ北邊而シテシエムシヤ島ノ三島ニ有之ト得知致シ居リ候

右前文ノ義ニ付マチウニン氏エ渡シ置キ候指圖書ノ別紙譯文閣下ノ御心得ノ爲メ御廻シ申上候敬具

露國辦理公使

スツルウエ

外務卿 寺島宗則閣下

(附屬書)

翻譯

日本國ニ於テ露國辦理公使ヨリ同國理事官マチウニン氏エ授與セシ書翰ノ寫

ベトルブルグニ於テ我當年四月廿五日取り締ビタル條約五ヶ條ニ増加トシテ當地ニ於テ取り締ビタル箇條ノ拔萃貴下エ相贈リ申候右中今般交換スル土地ニ於テ住居スル人民エ一切關係スル所ノ權利特許ノ義ニ付簡要ノ示旨記載有之右條約ノ趣意施行ノ爲メ我内務卿ヨリ貴下エ授與シタル指令書ノ六款取行ノ節ニ其但シ書ニ從テ右拔萃ニ適合ノ處分有之度日本理事官エクリル諸島ヲ引渡ス爲メ日本ノ船艦ニテ右島々ヲ巡回可被成ニ付先キニベトロバウロスケエ過リ此

處ニテ右クルル諸島及ビ其住居ノ者共ヲ御聞糺シ被成方便  
利ト存候我ガ得知スルハ右諸島ニ於テ唯三ヶ所ノミニ住民  
有之即チウルブ島シムシラ島ノ北邊及ビシユムシヤ島此三  
ヶ所エ御廻リ其住民エ貴下ノ指令書六款ノ趣及ビ右住民ニ  
關係スル所ノ別紙附録<sup>(註見テラス)</sup>ノ披露ノ趣ヲ布告有之度

右諸島ヲ日本政府エ引渡ノ爲メ我國旗ヲ降シ日本國旗ヲ懸  
グルノ禮式ヲ右三ヶ所ニ於テ行フ可キ筈ニ候エ共我ガ得知  
スルハ右海岸エ寄着ハ甚ダ困難ニテ晴天ニテモ六ヶ敷義ニ  
付今茲ニ其委細ノ指揮ヲ貴下エ致シ難シ

貴下日本理事官ト又横濱エ歸着ノ節クルル諸島ニ於テ住民  
ノ員數且ツ右ニ在ル私有物及ビ貴下ノ指令書六款ニ基ツキ  
我政府ヨリ手當致ス可キ所ノ我國領地エ轉歸ヲ願望スル人  
民ノ員數ヲ實地ニ於テ御取調我ニ報知被下度蓋シ右ノ報知  
ニ付又日本政府ト談判可致事ナレバ甚ダ我ガ爲メニ緊要ニ  
有之候

千八百七十五年八月廿五日

一一四 八月三十一日 森外務少輔ヨリ 露國駐劄板本公使宛

の險等を慮リ斯く決議致候黒田開拓長官も今日は當地出發  
玄武丸にて箱館へ出帆致候筈に候夫よりクルル諸島巡見可  
致右は爲手都合理事官請取渡濟の諸島等踵て巡見致候儀に  
候右に附ては魯公使より開拓長官の如き高貴の官員クルル  
へ御派出相成候ては實際上不都合可有之なと申聞候得共右  
は理事官の所爲査勘候爲彼地に赴候旨意には毫も無之只々  
同邊巡行も明年と申候得は餘りに遅延候に付不取敢一應巡  
見の儀にて全く此方手都合の爲而已に止り候旨申聞置候勿  
論實際の處も左様に御さ候間自然彼の政府より貴下へ右一  
條に付申出候得は前文の段御合審可然御答被成へく候  
其地にて條約御調印前拙者よりもクルル諸島在住の魯人儀  
に付特許を有するや否得貴意其後貴下より再三スツレモウ  
コフ氏へ御問合せに被及候處同所には永住の魯人無之依て  
特許も無之旨スツレモウコフ氏請合候段電信を以て御申越  
に相成候に付其心得にて條約御調印の儀も及指令候儀に候  
處當今に至リスツルウエ申聞候には魯の一人兩三年前  
より彼地に在住漁獵致居既にウルツブシムシール、シムシ  
ヤ島には倉庫も有之候旨申聞大にスツレモウコフ氏の言と  
は相違致居候右は將來を考へ度々足下と電信にて御打合せ

六 樺太千島交換條約締結ニ關スル件 一一四

條約本書交換附録條約調印後兩國理事官樺太千  
島へ發向ニ關シ報知並ニ千島在住露國人ノ有無  
ニ就キ問合ノ件

八月三十一日差立

榎本公使え別信案

以手紙致啓上候然は過る廿三日電信を以て申進候通り同日  
境界條約御批准取替せ相濟且又附録も同様拙者并スツルウ  
エ氏と調印致し候即ち別紙寫壹冊差進候間御一覽有之度候  
同廿三日は公使及理事官一同謁見被仰付其後延遠館に於て  
晚食御饗應有之候廿八日兩國理事官も一同魯國軍艦にて箱  
館迄罷越同所に四五日間碇泊夫より樺太の方は長谷部中判  
官及其他魯國理事官バラバシユ及ソロビヲフ共一同同國軍  
艦へ乗組取調交換可致將又クルル諸島の方は時任開拓五等  
出仕及魯國理事官マチュニ一名にて調査の爲彼地へ出張の  
筈尤右は御國軍艦日新艦にて罷越候事に確定相成候即ち別  
紙指令書寫<sup>(註見テラス)</sup>は魯國理事官へ附與被致候者に基き夫々折衷を  
加へ候全體取調の儀に就ては双方一同にて樺太クルル共罷  
越可申答の處彼地に於ては氣候も追々寒氣に赴き加之風波

候儀に有之候處右様の次第不都合に存候間別紙<sup>(註見テラス)</sup>の通掛合書  
スツルウエへ差遣し候處其後返報差越不申右は長谷部出發  
の際に立至り返答を要し候儀に付相促候處急迫中充分の返  
答差越可申問合無之旨にて短文の返書差越候右文中にはク  
ルル諸島中魯人六十より八十人程も有之へくやに推考被致  
候儀申述來り候に付最初は魯人壹人と申聞又六十乃至八十  
人可有之なと申聞候は前言を食むに似たるを以て更に其事  
明瞭承知致し黒田長官今日出帆致候に付委細申聞置度に付  
昨日談判の緒を開き候處右六十乃至八十人と申候者土人及  
前述致候商人壹名の手下と被察候旨申述候に付左候得は特  
許等有之間布旨一應述置候尤前條スツルウエ陳述の儀は惣  
て臆測に出候事故確乎信用は不致候得共彼の言語曖昧大に  
不都合の次第右故猶今日貴下迄別紙電信<sup>(註見テラス)</sup>を以て申進候通に  
候間是又御心得迄に申進置候猶委細後便可申進如此候也

八月三十一日

外務卿寺島宗則代理

森 有 禮



一二五 九月八日 寺島外務卿ト露國辦理公使トノ對話書

千島居住ノ露國人ノ有無ニ關シ協議ノ件

附記一、寺島外務卿ヨリ露國駐劄樺本公使ヘノ書翰案  
千島居住ノ露國人ノ有無ニ關シ打合ノ件

二、千島居住露國人ノ有無ニ就キテノ往復  
電信ニ關スル露國在劄花房外務書記官  
覺書

第百廿五號

明治八年九月八日於本省寺島外務卿露國公使と應接

筆記

一 柯太一件

禮畢

一過日御面接の節御話し申置候通樺本公使への書簡案入貴

覽候

一「公使一讀し了り」書中傳聞云々と有之候處傳聞と御認に  
ては少數望も過ぎ候様存し候間風説と御改めにては如  
何

一傳聞も風説も大概同じもの亦別に改るにも及間敷候尤箇  
様相認候へ共當方にては既に電信を以て問合相濟候事故  
末文は削除致し候方可然と相考候

「筆者書簡案を一覽不致候事故此處接何の事を指し候事哉不  
相分候」

一拙者も實地經驗不致候事故理事官歸り候迄は發輝と致  
し候事不相分候

一然り「クリル」島に永住の人民無之と云説は餘程以前の事  
に付爾來移住の人民有之も難計候其邊は御同様實地に不  
涉候事なれば不分明也何れ理事官目撃の上夫々處置方  
も可有之候

一然り

「此後洋語にて御對話故筆記せず」

畢る

註一、右對話書ニ謂フ「書翰案」左ニ附記ス但既ニ右對話書  
ニ謂フ訂正ヲ加ヘラレタルモノト認メラル

(附記一)

以別啓申進候然は兼て電信を以て屢御懸合に及候クリル諸  
島魯國人民永住の者有無及特許の儀に付貴下より段々魯國  
外務大輔スツレモウコフ氏へ被問合候處同氏返答にはクリ

○シウールナルトサントペテルスプールと申新聞紙は至

極手廣く且實際上の事等明細に記載有之候哉に承知候  
間當省へ備置度候間新聞紙舖より直に當省へ差越候様  
御申付有之度尤代料の義も館費用内より御拂被成へく  
候

註二、右追啓ニ「別紙電信寫」トアルモノ見當ラサルモ「電  
報ノ御答」云々トアル往復電信ニ關スル文書左ニ附  
記ス

(附記二)

九月九日付書翰に添え樺本氏え遣したる書付

九月二日午前九時四十分寺嶋卿より樺本君に宛東京を八月  
卅一日午後三時に發せられたる秘號電信を落手せり其意を  
譯解する如左

「カネテ スツレモウーホフ 儲メルニハ クリルニ  
ロ  
ヂン エイジウ ノモノ ナキヲ モツテ 條約ノ ウエ  
ニ キサイノ 特許ヲ アタフル モノ 無ト リカイ  
セリ 然ラバ マンイチ ロジン エイジウ モノ アル  
無ト ミトメベシヤ 魯政府ニ 今一度 儲メベシ」

此電報一應打見たる所にては其意「萬一にもある事なしと  
認て可なりや」といふものゝ如くなれとも「然らば」といふ

ル島に於ては魯國人民壹人も住居不致從て特許も無之段五  
月九日の電報を以て御申越有之致承知候就ては別段クリル  
島取調にも不及唯該島請取渡の式施行致候て相濟候事と存  
候處今度我理事官并魯國理事官彼地へ出發致候前より魯國  
公使スツルウエ氏傳聞候趣にはクリル島中には兩三年前よ  
り魯の一商人住居致漁獵等致居既にウルツプ、シムシール、  
シムシヤ島には倉庫も有之右商人の手下には多少魯人も罷  
在候哉の由にて兼て貴下より御申越有之候スツレモウコフ  
氏の言とは相違致し不都合に御座候依て段々同公使と談判  
の末同公使には右様の儀未其政府より通達無之に付公使よ  
り其政府へ可相伺旨に候尤當方にては右の義に付九月二日  
發の電報の御答にて魯政府へ御問合相濟候間其趣相心得居  
候此段得貴意候也

明治八年九月

外務卿

樺本全權公使殿

○追て本文の儀に付別紙電信寫差進候

○先便樺太交換條約附錄差進候處原文の方取落候に付今

便差進候

より「萬一」とかより来る語勢によりて熟考すれば「萬一魯人永住のものあるとも無しと認めて可なりや」といふものゝ如し若し其意ならんには無の上に「とも」を脱したるなるへし然とも語數字の電信局にて算する所と紙面と符合するを以て見れば脱落あるへしとも見へず依て唯「あるなしと認んや」との意なるへしと終に考定たり左すれば「スツレモウーホフ」君か榎本君に再三慥めたる事にて此上此地にては知れ難き事なれば今改めて問ふも益なかるべく且假令義實か疑ふこと脱誤ありて少しく他の意を含るにもせよ既に條約にも「若しあらは」とまで書載たる程のものを今更「あるともなしと認めてよし」といふ答あるまじきは明かなれば何れにも不要の問の様に覺ゆれとも「今一度魯政府に慥めへし」と明に指揮あるものを其儘になすへき理もなければ直に車を馳せて外務省に至り「スツレモウーホフ氏六ヶ月の賜暇中代理たる」亞細亞寮權頭「メリニコフ」氏に逢んとせしに同氏不在にて差向此事を突然談すへき人もなき故一應歸館し翌三日午前十一時再ひ行て「メリニコフ」氏に面し

「拙者昨日東京外務卿よりの電報を得たり其趣は「スツレ

いふ心配は魯政府又は其委員のなすに任せて足れるか如し故に更に「メリニコフ」氏に向ひ

「然らば唯今拙者か寺嶋卿を答るには唯魯政府は其内務省に知れたる永住の魯人「クリル」になしと慥めらるゝとのみ申遣すへし左すれば雙方委員は不要の手續を省き要用なる嶋々に於てのみ請取渡しの儀式をなすと賦或は萬一魯人の在るを見出したる時は其來歴を糺し特許を受へきものなるや否を決する等の事は實地に於て委員か相當と見る方法を用て簡便の取計をなすへしとおもふ也」と云しに彼方にも同様におもふとの事故歸路直に左の通り電信せり

Terashima Gaimushio Tokio

Russian Government assures that there is no Russian inhabitants known to Ministry of Interior

Enomotto absent

Hanabusa

時に明治八年九月三日午後一時二十分なり

花房 義 質 誌

一一六 十月十二日

黒田開拓局長ヨリ  
院省廳局府宛

モウーホフ」君か榎本君に慥めらるゝに「クリル」嶋には永住の魯人なし依て條約に記載せる特許を與ふへきものなしと果して然らば日本政府は彼嶋には永住の魯人なしと認め可ならんや且萬一これあるも正しき永住の魯人にあらすと見て可ならんや今一度貴政府の意を慥めよとの事なり」と述たるに「メリニコフ」氏答て

「これは兼て「スツレモウーホフ」君か榎本君に述たる通り當地にては内務省に問合せたれとも知れざる故伯得堡の政府に知れたる永住の魯人はなしとの外答え方なし去れとも委員若し彼地に魯人の永住するあるを見出し其ものは許可を正しく得て住るの證據あるものならば其ものは正しく條約上の權理を有すへきものとせざるを得ずこれ條約にも「若しあらは」と記したる所以にあらすや」と述ふ

依て考ふるに我日本人民の特許およひ所有の樺太に在るものを魯政府に證徴して其保全を計るは日本政府の務たるに等しく「クリル」に在る魯人の特許およひ所有の保全を計るは魯國政府の務に屬せる事なれば此事は甚た我政府の關するを要せざる事なり然れば魯政府の詞を其儘に信してまづなしと取極め置て害なかるべく而して若しありはせぬかと

千島ヨリ歸京シタル旨通達ノ件

番外第十八號

拙者義御用有之先般クリル諸嶋へ出張ノ處本日歸京致候條爲御心得此段及御通達候也

明治八年十月十二日

開拓長官 黒田 清 隆

院省廳局府宛

一一七 十月十二日

開拓大判官等ヨリ  
外務省宛

長谷部、時任兩理事官樺太千島交換ノ受與式終了ノ上歸京セル旨通知ノ件

(参考)  
第七百三十五號

開拓中判官長谷部辰連開拓使五等出仕時任爲基樺太島クリル諸嶋交換ニ付理事官トシテ出張被仰付候處受與ノ式相濟本日歸京致候段正院へ御届致候條御心得之爲此段及御通知候也

八年十月十二日

開拓判官

外務省御中

一一八 十月三日(假)

長谷部理事官ノ樺太島引渡手續書

附屬書一、九月十九日樺太島中日本所屬ノ地方ヲ

露國政府へ讓渡ノ日露兩國理事官證書

二、樺太ニ於ケル日本人民漁場ニ關スル長

谷部理事官ノ調査書

樺太島引渡手續書

本年八月二十八日魯國理事官一同々國軍艦フサジニツクヘ

乘込當地出發九月九日樺太楠溪へ着港ス

同日樺太東部家屋其外檢査トシテ小實ヨリ以北靜河迄同

艦ニテ巡航各所ニ於テ實地査了シ同十八日楠溪へ歸航

同十九日午前十一時楠溪ニ於テ地方引渡ノ式ヲ行フ左ノ如

シ

御國旗ノ下ニ於テ魯國陸兵凡一大隊整列兩國官員相會  
シ兵卒盡ク捧銃シ御國旗ヲ卸スニ當リ陸兵并兩國軍艦

ノ者モ可有之哉ニ推考セリ

從前我漁民ノ開業セシ地界并特許ノ概略五號別記ノ通取調

彼ノ理事官ニ引渡ス

但シ我カ人民ノ開墾地等取調ヲ要スル旨彼ヨリ示談ニ

付從前着手スルモ現今荒廢其界限ヲ辨知シ難キ旨ノ書

面ヲ送り置ケリ

該嶋ニ於テ我人民ノ墓地并民屬建家漁船等置據ノ分各冊調

書ヲ添ヒ同斷引渡置ケリ

明治八年十月

開拓中判官 長谷部辰連

註 本號文書日附ヲ缺クモ長谷部理事官歸京ノ日附ニ據リ  
假ニ十月十二日トセリ

(附屬書一)

明治八年五月七日即チ千八百七十五年第四月廿五日露國聖

比特堡府ニ於テ日本國ト露西亞國ト取結ヒタル條約ニ基キ

左ニ姓名ヲ記シタル日本帝國政府ノ理事官ト露西亞帝國政

府ノ理事官ニテ樺太島<sup>即チ薩</sup>哈連島ノ中日本國ニ所屬ノ部分ヲ以

テ露西亞帝國政府へ定規ニ從ヒ引渡濟ノ證トシテ明治八年

九月十九日即チ千八百七十五年九月七日「アニワ」灣内楠

六 樺太千島交換條約締結ニ關スル件 一一八

ヨリ各二十一發ノ祝砲ヲ發シ畢テ彼ノ國旗ヲ揚グルモ  
亦前ノ如シ

同日地所引渡ノ式ヲ畢リ該地人民へ普ク布達シ及ヒ別記壹

號地方受取渡ノ證書ヲ魯國理事官ト交付セリ

同二十日該島西部點檢トシテ同艦ニテ楠溪出發白主ヨリ以

北鶴城迄巡航各所檢視ノ次第ハ東部巡航ノ如シ

同廿四日鶴城ニ至リ家屋其他ノ引渡方全ク終リ官屬建家代

價七萬九千九百四拾三圓四拾三錢壹厘道路築造費千九百四拾

五圓八拾七錢五厘諸材置據ノ分代價七百八拾二圓六拾錢八

厘三口合金七萬四千六百七拾壹圓九拾壹錢四厘全ク魯國政

府ヨリ可請取分ニ決定<sup>(金省略)</sup>三四號各冊書載ノ通請取渡ノ證ヲ

交付セリ

但楠溪官邸ノ内一棟彼ノ理事官ニ圖リ我日本領事館ノ

爲メ殘シ置

該嶋居住ノ人民前條布達ノ意ニ基キ各其情願ヲ問ヒ候處差

向キ居留其業ヲ營ムヲ請フ者之レアラズ

全島土人同シク布達ノ意ヲ明告シ其去就ヲ尋ヌルニ一心皇

國ヲ仰キ即時移住ヲ請フ者八百四拾壹名假ニ北海道宗谷郡

ニ渡航セシメタリ東西巡航ノ節尙其意ヲ察スルニ此後移轉

溪ニ於テ我等兩名此證書ヲ取認メタルモノナリ

楠溪ニ於テ

明治八年九月十九日即チ千八百七十五年九月七日

日本國理事官

開拓中判官從五位 長谷部辰連印

露西亞帝國政府理事官

ゲネラル、シタブ、ボウコウニク  
バラバシ

(附屬書二)

樺太州人民漁場調

一楠溪之部

楠溪 橫百四拾五間 六ヶ所 大泊 橫四百六拾間

ヲフイ泊 橫八拾間 縦百貳拾間 ユウトタンナイ 橫三拾五間

ウンラ 橫百六拾間 縦百五拾間 ウシユンナイ 橫四十五間

一小實

壹ヶ所 橫百八拾間 四ヶ所 橫四十五間

一東富間之部

東富間 橫九十間 縱七十間 東富間 橫百八十間 縱九十間

一榮濱之部

ヲチヨホカ 橫百貳拾間 縱九十間 アエロフ 橫百四十間 縱三十間

榮濱 横百拾間  
 ホロエンルンカ 横六十間  
 一 静河之部 拾貳ヶ所

ヨウコツ 横貳百間  
 ハツヘト 横三十間  
 ヲクシウス 横三十間  
 サツカリ 横貳百間  
 トマメト 横貳百間  
 アシケ 横貳百間  
 一 西富間之部 拾三ヶ所

西富間 横三百間  
 アツケフシ 横九十間  
 ヲホトマリ 横百貳拾間  
 ウエントマリ 横三十間  
 ラクマカ 横百拾間  
 トマリボ 横百五十間  
 トウコタン 横百四十間  
 一 西白濁之部 貳ヶ所  
 西白濁 横百八十間  
 ベシホナイ 横六十間

「ウルツプ」三島見聞記

クリル諸島受取手續書

明治八年九月五日於函館魯國理事官マチーニン氏ト共ニ軍艦日進號ニ乗組ミ九月十一日東察加ノペートル、パウルスキ港ニ着航セリ同所地方代理宜「ボ、フ」氏ヨリ聞得タル趣ハ「シムシウ」「シムシール」「ウルツプ」三島ニ住民アリ宗門ハ希臘宗ナリ諸島中ニ政府附屬ノ所有物ナシ諸島ニ麥粉其他ノ物品ヲ運輸シ毛皮ト易ル條約ヲ政府ト北米ノホッチンソン、コーリ商社ト一千八百七十二年ヨリ向三ヶ年取結ヒ其期限ハ魯國今年一月一日ニ終レリ現今諸島ノ交易魯商ヒレベウス氏ノ手ニアリトナリ人員其他ノ事ハ地方官未タ廻島セサル故ニ明白ナラス

同十八日魯ノ軍艦ガイタマーク號ト我日進艦同港ヲ解纜シ「クリル」最北島「シムシウ」最南島「ウルツプ」ニ到ルヲ約スレトモ東北風大ニ起リ狂濤ニ害メラレ雲霧四方ヲ塞キ途ニ約ノ如クナル能ハス只シムシール島ニ上陸セルノミコレ航海季節ヲ失ヘハナリ依テ北海道根室港ニ到リ更ニ玄武艦ヲ以テ同月廿六日マチーニン氏ト共ニ同港ヲ發セシニ雲霧

右書載ノ地界ハ從來人民ノ爲メ特許ヲ以テ諸稅ヲ免シ漁獵ノ權利ヲ與ヘ自由ニ其業ヲ營ムヲ得セシメ置キ候場所ニ付取調御心得迄ニ申入候也

明治八年九月

日本國理事官

開拓中判官 長谷部辰連

一二九 十月三日(假)

時任理事官ノ千島受取手續書

- 一、千島居住露國人ノ土地建物所有認可ニ關スル日露兩國理事官證書
- 二、九月千島諸島人民ニ從前ノ通食料品其他ヲ給與スヘキ旨ノ日本理事官ノ諭告
- 三、十月「シムシウ」島及「ウルツプ」島ニ於テ千島諸島讓渡式舉行アリタル旨ノ露國理事官ノ證書和譯文
- 四、十月八日露國理事官ノ千島諸島居住ノ露國人員等調査書和譯文
- 五、時任理事官ノ「シムシウ」「シムシール」

深ク風起ル故ニ到ル處唯布告文ヲ與ヘ國旗ヲ上ケ受與ノ式ヲ行フノミ

御指令書第四ヶ條乙ノ件ニ云々掲載有之候得共同島人民ハ漁獵ノ爲メ住居ヲ移シ易ク且ツ群島ニ散在セル故一々布告行届キカタク先ツ別記一號ノ通り其職業ヲ失ハシメザルノ證書ヲ與ヘタリ

クリル諸島ノ儀ハ其地ヨリ生スル食料ノ乏シキヲ以テ人民ノ去就ヲ各地ニ決定スルハ全ク他ノ地方ヨリ輸送スル食料ニ關係シ且ツ從來米國ヨリ回漕スル服食器用等ト獸皮ト交易シ來リシニ付別記二號ノ通り諭告セリ

最北ノ「シムシウ」最南ノ「ウルツプ」島ニ於テ「クリル」島諸島請取渡ノ式ヲ行ヒシ證書別記三號ノ通り受取置タリ御指令第八條民政官衙ヲ建ツヘキ地方ヲ撰フヘシト掲載有之候得共前件ノ通り航路不穩カ故ニ巨細ノ取調出來兼タルニ付何レノ場所ニテ可然旨上申致シ難シ

「クリル」諸島ニ於テ魯國住民別紙四號ノ通り「シムシール」ニ五十九人「ウルツプ」ニ三十三人渾テ魯領ニ轉移ヲ望ム趣ナリ土人ハ「シムシウ」ニ三十三人現今「ヲネコタン」島等ヘ居留ノ者ヲ合セ七十七人其他各島ノ分ハ未審且ツ其去留モ

未タ決セス

「クリル」諸島ニ於テ魯國政府ノ建物及不動産ハ一切無之  
「シムシウ」「シムシール」「ウルップ」三島見聞ノ概略別記  
第五號ノ如シ

明治八年十月

開拓使五等出仕 時 任 爲 基

註 本號文書日附ヲ缺クモ時任理事官歸京ノ日附ニ據リ假  
ニ十月十二日トセリ

(附屬書一)

一號

證 書

「クリル」諸島「シムシウ」ニ住スル魯國人民ノ同島ニ永住  
スル者ニ證據ヲ與ヘリ、「クリル」諸島ヲ日本政府ヘ受取レ  
リ乍然是迄住民ノ所有スル建家藏畜藏及ヒ其他ノ建物アル  
地面又現在住民ノ田畑ニ使用スル地所モ同シク更ニ異論ナ  
ク其者ノ所有トス

右件々ニ於テ一千八百七十五年 十月二日 姓名ヲ記ス  
九月廿一日  
一千八百七十五年四月二十五日 日本 政府ト取結ビタル條約  
ヲ遂クル爲メニ任セラレタル

日本理事官

魯國理事官テイトウリヤールノイ、サウエートニツク、マチューニン

本書ニ相違ナシ

日本理事官開拓使五等出仕

時 任 爲 基

テイトウリヤールノイ、サウエートニツク、

マチューニン

(附屬書二)

二號

クリル諸島住民及土人共ヘ

今度「クリル」諸島ヲ魯國政府ヨリ日本政府ニ受取タルニ付  
住民ノ食用品其他需用ノ物ハ従前ノ制度ニ照準シ日本政府  
適宜ノ方法ヲ立年々輸送差支ナカラシムル條各得其意聊疑  
念スル事ナク安堵致スヘキ事

明治八年九月

日本理事官

開拓使五等出仕 時 任 爲 基印

(附屬書三)

三號

證 書

日本政府ト魯國政府ト取結ヒタル條約ニ基キ「クリル」諸島

ハ樺太島ノ交換トシテ日本政府ニ讓レリ此條約中ノ「クリ  
ル」諸島ヲ日本政府ニ引渡シニ關係シタルケ條ヲ全ク仕遂  
ル爲メ一千八百七十五年九月廿二日 明治八年 十月二日「クリル」諸島  
ノ最北島「シムシウ」ニ於テ魯國旗章ヲ下シ日本國旗ヲ揚  
ケ萬國普通ノ定法ニ循ヒ其式ヲ行ヒ又最南島「ウルップ」ニ  
於テ同年同月廿四日 明治八年 十月四日 前式ヲ行ヘリ此事件ニ付同島  
人民モ共ニ立合ヘリ

魯國理事官

マチューニン印

(附屬書四)

第四號

魯國理事官マチューニン氏タリル諸島人員等ノ調書

ウルップ島住民ノ調 アレウート人種

- 一 ベートル、ナイチニク 同島ノ 戸長
- 二 同人妻 エウゲーニヤ
- 三 アンデレイ、カイシヤック
- 四 同人妻 アンナ
- 五 同人男子 アルセンチイ
- 六 同人女子 アガーヒヤ

六 樺太千島交換條約締結ニ關スル件 一一九

- 七 同人女子 アレクサンドラ
- 八 エゴール、パヂョウク
- 九 同人妻 エレーナ
- 十 アルシェーミイ、パヂョウク
- 十一 同人妻 マールファ
- 十二 同人男子 イワン
- 十三 同人女子 マーリヤ
- 十四 ニコライ、パヂョウク
- 十五 ステパン、カヂチヤク 舞夫
- 十六 同人男子 パーウエル
- 十七 クズマ、ミアク
- 十八 同人妻 イバートラ
- 十九 同人女子 マリーヤ
- 二十 イワン、ナネホン
- 廿一 同人妻 アレキサンドラ
- 廿二 同人女子 アガフェーナ
- 廿三 キリヤン、ニコラエフ
- 廿四 同人妻 ナスターシヤ
- 廿五 同人女子 アンナ

廿六 同男子 グリゴリーイ  
 廿七 同女子 エカテリーナ  
 廿八 同女子 マリーヤ  
 廿九 ワルホローメ、キンヂニゴリー  
 三十 同人妻 ダーリヤ  
 三十一 デイモフエー、イシテフターク  
 三十二 同人妻 プラスコーウヤ  
 三十三 ワシーリイ、ハーシク  
 「ウルツプ」島ノ住民ハ渾テ露領ニ轉移スル事ヲ望メリ  
 彼等蠟虎ヲ獵スルヲ以テ産業トナセリ千八百七十五年ニ於  
 テ唯十五頭ヲ獵獲ス  
 「ウルツプ」及ヒ「チルボン」兩島ニ此産業ヲ營メリ「ウルツ  
 プ」沿海ニ多ク鱒及ヒ「バルチウス」魚名ヲ産ス  
 此島ノ戸長ノ畜藏ニ現今殘餘ノ物品ハ麥粉十二俵火藥六ブ  
 ード一ブードハルソ本邦四頁三百二十知鉛六ブート茶一箱半砂糖三ブードナリ  
 現今缺乏スルモノハ食鹽、シヤホン、蠟燭ノ三品ナリ  
 今年三隻ノ帆船スル米國旗章ヲ揚ゲ臘虎獵獲ノタメ此嶋ニ來レ  
 リ此三船中ヨリ一人ノ米國人今此地ニ在留セリ然レトモ我  
 不幸ニシテ已ニ日本國旗ヲ同島ニ揚ケ護與ノ後ニ米國人ナ

ル事ヲ知ル故ニ之ヲ戸長ニ尋問スレハ米人魯國ノ籍ニ入ラ  
 シ事ヲ望ミ茲ニ遺住スト答フ其戸長ノ言フトコロ亦信シ難  
 シ疑ラクハ彼皮革ヲ買聚ムル者カ又臘虎ヲ獵スル者ナラン  
 カ  
 米國人臘虎ヲ獵スルニ炮發ヲ以テスルカ故住民ノ獵獲年ヲ  
 逐ツテ減少スル事ヲ一般ニ愁訴ス  
 獵業ノ時期ハ魯曆五六七ノ三ヶ月ニアリ  
 「シムシール」島住民ノ調 アレウード人種  
 一 キリーロ、ガルキン 同島ノ戸長  
 二 同人妻 アンナ  
 三 同女子 フェオドーシヤ  
 四 同女子 タチヤーナ  
 五 同男子 ミハイル  
 六 プロコービイ、ボ、フ  
 七 同人妻 アガーヒヤ  
 八 イヌケンシイ、ガルキン  
 九 同人妻 アンナ  
 十 同女子 アクローリナ  
 十一 同女子 ウリータ

十二 シメーチエ、シテバーノフ  
 十三 同人妻 ナターリヤ  
 十四 同男子 ベートル  
 十五 同男子 セウエリヤン  
 十六 同女子 アグリーナ  
 十七 アレキセイ、ホロシエフ  
 十八 同男子 アウドノム  
 十九 同男子 エヒーム  
 廿 セルゲイ、ホロシエフ  
 廿一 同人妻 エウゲーニヤ  
 廿二 ザハル、ホロシエフ  
 廿三 クリム、ロシエフ  
 廿四 同人妻 アニーシヤ  
 廿五 同人男子 パーウエル  
 廿六 同男子 マヌイル  
 廿七 同人女子 アグリシーナ  
 廿八 ホロシエフノ母  
 廿九 メホージイ、シシニツエン  
 三十 同人妻 アレキサンドラ

三十一 同男子 デミード  
 三十二 同男子 ステパン  
 三十三 同男子 ヨアン  
 三十四 ナタリヤ、シシニツエナ  
 三十五 プロコービイ、ボ、フ  
 三十六 同人妻 ナシターシヤ  
 三十七 同人男子 デミヤン  
 三十八 ステパン、ベシエンコフ  
 三十九 同人妻 マリーヤ  
 四十 同男子 ヨアン  
 四十一 同人女子 アクリーナ  
 四十二 ミハイル、ベシエンコフ  
 四十三 同人妻 アガーヒヤ  
 四十四 同男子 イノケンチー  
 四十五 同女子 マリーヤ  
 四十六 アレキサンドル、ロシエフ  
 四十七 同人妻 マトリヨーナ  
 四十八 同女子 ナスタリヤ  
 四十九 ウオシリイ、ペレジーク

- 五十 イリヤ、メルシエニク
  - 五十一 マールフ、ゴルキナ寡婦
  - 五十二 同男子 ウラジミール
  - 五十三 同男子 イグナーチイ
  - 五十四 同女子 マリーヤ
  - 五十五 グリゴリーイ、キチン
  - 五十六 同人妻 ヘウローニヤ
  - 五十七 同人女子 アンナ
  - 五十八 同女子 アクリーナ
  - 五十九 同人女子 エウドーキヤ
- 此島ノ住民渾テ魯領ニ轉移スルヲ願フ  
同島ノ住民魯曆五六七ノ三ヶ月ヲ以テ近傍ノ第四島ノ間ニ於テ獵業ヲ營ム
- 「シムシール」島ニ從前蠟虎繁殖ス當今ニ至テ甚タ滅却ス千八百七十四年ニ於テ百二十頭ヲ捕獲シ千八百七十五年ニ至テ唯六十頭ヲ獲ルノミ是則米國帆船屢々諸島ヲ廻掉スル爲ニ之ヲ獲ル甚タ尠シ
- 狐獵ハ魯曆十一十二ノ二ヶ月ニアリ蓋シ狐ニ三種アリ灰色狐、黒狐、赤狐ナリ千八百七十四年僅ニ十五頭ヲ獲タリ

魚ハ唯鱒ノミヲ産ス

「シムシール」島ニ魯商「ヒレベウス」ノ蓄藏アリテ其手代此處ニ居住シテ之ヲ管轄ス今其藏中ニ殘餘ノ物品鳥麥粉二百十三ブード二十斤麥粉百二十九ブード十斤魯産ノ麥粉七十ブード米十九ブード精製ノ砂糖三十六ブード二十斤茶四百斤火藥十ブード鉛十六ブード三十七斤チエルカス産ノ煙草十二ブード三十斤ナリ食鹽ニ於テハ缺乏ニ及ベリ

千八百七十五年九月一日ニ至リ魯商「ヒレベウス」ヨハ「アレウト」人ノ負債スル者乃チ

ミハイロ、ベシエンコフ九百四ループル 一ループル凡ツ本邦三分ニ當ツ 五百  
コペーカ 百コペーカヲ以テ一ループルニ當ツ 「キールル、ガルキン八百六十六ループル八十七コペーカ」第一「プロコービイ、ポポフ」千二百七十七ループル五十二半コペーカ「シメーヂュ、ステバーノフ三百五十九ループル」クレム、ロシエフ九百二十ループル七十半コペーカ「メホージイシシュツェン八百二十九ループル四十九半コペーカ」ステパンベイシエンコフ六百四十五ループル六十六半コペーカ「第二「プロコービイ、ポポフ」八百三十三ループル五十四半コペーカ

右總計七千二百九十九ループル九十三半コペーカ」ナリ

「クリル」諸島一般ニ通用スル貨幣ノ位紙幣ヲ以テ算ス是則紙幣三ループル五十五コペーカ」ヲ以テ銀貨一ループルニ當ツ

シムシール島住民 乃チ土人ナリ ノ調

- 一 クリ、ヤン、ストロビエフ
- 二 デミトリイ、チエルネーフ
- 三 レーヂニイ、ストロビエフ
- 四 ダニイル、ブリッテン
- 五 パーウエル、ブリッテン
- 六 アレキサンドル、チエルネーフ
- 七 イワン、チエルネーフ
- 八 ヒヨードル、チエルネーフ
- 九 セメン、ワシリエフ
- 十 デラシン、イワノフ
- 十一 ワシリイ、カラシリーニコフ
- 十二 アキシヤ、カラシリーニコフ
- 十三 ミハイル、ブリッテン
- 十四 アウエルキイ、フリッテン
- 十五 セルギイ、チエルネーフ

- 十六 アンデレイ、チエレネーフ
- 十七 マクシム、チエルネーフ
- 十八 タチヤーナ、ストロヂイフ
- 十九 アンヒール、チエルネーフ
- 二十 マリーヤ、ストロヂイフ
- 二十一 マリーヤ、ブリッテナ
- 二十二 イロンド、ブリッテン
- 二十三 ハリスチーナ、チエルネーフ
- 二十四 ステパニード、チエルネーフ
- 二十五 マクラーナ、チエルネーフ
- 二十六 ルケーリヤ、カラシリーニコワ
- 二十七 エウダーニイ、ブリッテン
- 二十八 マールハ、ブリッテン
- 二十九 エウタラクシヤ、チエルネーフ
- 三十 ワルワラ、チエルネーフ
- 三十一 ヘオドウシヤ、ストロヂイフ
- 三十二 ナストーリヤ、チエルネーフ
- 三十三 ルケーリヤ、チエルネーフ

「オネコタン」諸島住民 乃チ土人ナリ ノ調

- 一 ヒヨドル、ノウ+ガラブリン
  - 二 ナスドーシヤ、ノウ+ガラブリン
  - 三 ニキーホル、ノウ+ガラブリン
  - 四 ウ+サリヤン、ノウ+ガラブリン
  - 五 アントン、ノウ+ガラブリン
  - 六 トムナ、ノウ+ガラブリナ
  - 七 ワルワラ、ブリッチナ
  - 八 イワン、ブリッチン
  - 九 マールファ、ブリッチナ
  - 十 ダニイル、ブリッチン
  - 十一 ヨーナ、フリッチン
  - 十二 ガウリイル、チエルネーフ
  - 十三 イリーナ、チエルネーフ
  - 十四 プロコービイ、チエルネーフ
  - 十五 ダーリヤ、チエルネーフ
  - 十六 アンナ、チエルネーフ
- 「シアシコタン」諸島住民乃チ土人ナリノ調
- 一 アレキサンドル、ノウ+コフ
  - 二 ニコライ、ストロチーフ

- 三 ヤコーフ、ストロチーフ
- 四 マクリナ、ストロチーフ
- 五 アウドーチャ、ストロチーフ
- 六 ウリヤーナ、ストロチーフ
- 七 カールフ、ロモーフ
- 八 ベラゲーヤ、ロモーフ
- 九 オシン、ロモーフ
- 十 チホン、ブリッチン
- 十一 グリゴリーイ、ブリッチン
- 十二 コンコールジャ、ブリッチン
- 十三 エヒーム、ブリッチン
- 十四 ヘロノンチイ、ブリッチン
- 十五 チモヘイ、ブリッチン
- 十六 ソヒヤ、ブリッチナ
- 十七 エウ+ローシニヤ、ブリッチナ
- 十八 ヨーナ、ストロチーフ
- 十九 ヒリム、ストロチーフ
- 二十 ウラジミル、ストロチーフ
- 二十一 エリセイ、ストロチーフ

二十二 バウエール、ストロチーフ

二十三 ラウレンチイ、ストロチーフ

土人自己ノ島中ニ永住スルヤ否ヤ未タ決定セス

明年五月渾テ土人「シムシウ」島ニ來會セントス

米國人屢々「オネコタン」島ニ來リ土人捕獵スル蠟虎皮ヲ強テ交易ヲサシムルニ因テ之ヲ隱ス爲ニ土中ニ埋貯スルニ至ル千八百七十五年「オネコタン」「シヤシコタン」兩島ヨリ蠟虎皮五十九枚ヲ本島「シムシウ」ニ送レリ

「シムシウ」島ニ絶エテ蠟虎ヲ産セズ

蠟虎ノ獵ハ魯曆五六七ノ三ヶ月ニアリ若シ海面氷合シ獵業ヲナサル、トキハ多月ヲ以テ好時節トス

今年米國人來船シ土人ト蠟虎皮七十九枚ヲ交易セリ當夏魯商「ヒレベール」シヤシコタン「嶋」ニ要用ナル物品ヲ自ラ齎ラシ來レリ

オネコタン島ノ住民自ラ糧食等ヲ乞求ムル爲メニ「シムシウ」島ニ來航ス千八百七十三年冬「シムシウ」島ニ於テ狐百二十頭ヲ捕獵ス翌年ニ於テ唯六十頭ヲ獲タリ

「シムシウ」島ノ沿海ニ種々ノ昆布ヲ産ス土人ノ採テ食料ニ供ス

「シムシウ」島沿海ニ産スル魚類バルトウス魚名 未詳 鱒 鱒ナリ

「シムシウ」島ノ諸川ニ多ク赤カリスナヤレイバ、ゴムフシヤム魚、鮭、鯉游泳ス同島ニ五葉松ノ果實ブルシニク、マロシカ、シークシア草果アリ蕪、大根、馬鈴薯、等ノ如キ根生ノ菜類善ク繁殖ス又種子ヲ以テ萌生スル穀類等ノ生殖スト雖トモ不斷ノ暴風ニ害セラレ實ヲ結フ能ハズ同島ノ沿海ニ海豹オシロシ、海馬シマウマ甚タ多シ

年々春ニ至テ第二海峽ヨリ多クノ鯨魚來レリ同島ニ魯商ヒレベール「シムシウ」ノ蓄藏第二海峽ノ海岸ニアリテ其手代居住ス且ツ土人二戸アリ他ノ土人ハ「シムシウ」島北海岸ニアルレイブイナボ湖ノ邊ニ住ス

牧草ハ甚タ多ク繁茂ス

千八百七十五年九月二日魯商「ヒレベール」ノ藏中ニ殘餘スル物品ハ麥粉十六半ブード鳥麥粉八十二ブード精製ノ麥粉五十三半ブード上好米國產ノ麥粉五ブード半外國產ノ鳥麥四十ブード食鹽八十ブード砂糖十六半ブード茶二百五十斤米三十ブード精製ノ大麥三ブード鹽藏肉七ブード火藥七ブード鉛九ブードナリ

一千八百七十五年九月一日ニ魯商ヒレベール「シムシウ」ノ手代土人ノ負債ヲ計算スルニ「アレキサンドル、ノウ+コフ」七百



八ルーブル九十三コペーカ「グリコリーイ、ブリッテン百七十四ルーブル六十コペーカ」ヨリナストロチエフ二百三十六ルーブル五十五コペーカ「チモフェーフ、ブリッテン八百一ルーブル五コペーカ」ニコライ、ストロチエーフ七百八十二ルーブル五十コペーカ「ヒヨドル、ノウ・ガラープリン九百三十八ルーブル七十コペーカ」ダニイル、ブリッテン百五十七ルーブル四十コペーカ「カールプ、ロモフ六百四十三ルーブル七十五コペーカ」キブリヤン、ストロチエーフ千九百ルーブル「ヤコフ、ストロチエフ三千六百三ルーブル二十一コペーカ外ニ二千四百八十七ルーブル九十四コペーカ」チホン、フリッテン三百ルーブル九十コペーカ「チルネーフノ兄弟三千六百八十二ルーブル」レオンチイ、ストロチエーフ百四十ルーブル「ワシリーイ、カラシリーニコフ四百九十二ルーブル」セメン、カラシリーニコフ百四十ルーブル

右總計一萬七千八百八十九ルーブル五十八コペーカ  
通用貨幣ノ位紙幣ヲ以テ算ス

前條ノ調書ハ諸島ノ住民ト魯商ヒレベウス」ノ手代ヨリ  
聞キ及ビシ件々ヲ記ス

溪流ニ頼リ井水ナシ小樹ノ枝及海濱ニ漂着セル流木ヲ拾ヒ集メテ薪ニ供ス五葉松、ドロノ木、アリト雖トモ烈風冰雪ノ爲メニ壓セラレ偃蹇地ニ伏シ荆棘相間ハル是以テ其土室ノ屋裏ニ用ユル所ノ材ノ如キモ流木ヲ採棄シテ始メテ之ヲ建立スルヲ得

一「クリル」諸島ノ土人ノ性ハ北海道ノ蝦夷人ニ大同小異ナレハ馳逐奔走ニ長シテ工作樹藝ノ業ニ熟セズ其服食器用ハ大凡米國ヨリ輸送スト雖トモ精良ノ物品アル事ナシ酒菓ノ如キニ至テモ猛烈ナル下品ヲ好ミテ和良ノ上品ヲ要セス身ニ歐魯ノ服ヲ着スルモ徒既スル者多シ其履ハ海豹等ノ革ヲ以テ之ヲ作ル樺太州土人ノ製ニ甚タ異ナラス

一「シムシウ」屹立セル山脈ナシ只平坦ナル高原ニシテ其高キモ凡ソ四百尺ニ過キス一般ニ沮洳ノ地多ク故ニ雜軟ナル野草蔓生シテ牧畜ニハ適當ナラント見ユレトモ惜ラクハ烈風ヲ避クベキ廣澤ナキヲ以テ野畜ノ保存シ易カラザルベキヲ余上陸セシ時灣頭ニ於テ只牛一頭ヲ見ルノミ之ヲ保全スルモ亦甚タ難シト云フ鶏ヲ飼エリ皆魯西亞ノ種ナリ馬鈴薯麥粉ノ如キモノヲ混合シテ練リ交ヘテ與ヘ食セシム

一千八百七十五年 魯曆九月二十八日  
日本十月 八日

函館ニ於テ

(附屬書五)

第五號

シムシウ島

一「シムシウ」ハ東察加岬ニ隣リ南西ニ一小灣アリ「マイロツハ」ト稱ス「ハラモシリ」ニ對峙シテ海ヲ夾ム是ヲ第二海峽ト唱フ住民ハ「クリル」人種<sup>即土</sup> 三十三人ニ過キス一商人アリ「ヘリヒース」ノ手代ニシテ「バリエフクト」ト名ツク家屬七人アリ今ヲ距ル事四年前「ベイトパウロスク」ヨリ轉住セルヨシナリ外一小寺及ビ二梁ノ庫アリ寺僧ハ一ヶ年一回ツ、「ベイトルパウロスク」ヨリ來ルト云フ而シテ又「クリル」諸島ノ宗門ハ一般ニ「グリーキ」宗ナリト云フ

一「シムシウ」北部ニ湖アリ流レテ海灣ニ注ク前ニ記セル土人ハ多ク此河畔ニテ漁業ヲ營ムヲ以テ多クハ此灣ノ近傍ニ土室ヲ作りテ住在セリト云フ

一人民多クハ魚肉ヲ以テ常食トナス鱈、鱒、尤多シ飲水ハ

一「シムシウ」周海ニハ臘虎ヲ見ス故ニ土人ハ多ク「ヲネコタン」及「シ、コタン」ノ二島ニ出張シテ臘虎ヲ捕獲ス現今二島ニ居留セル土人ハ合シテ七十人アリト云フ來千八百七十六年春二島ノ人民ヲ來會セシメ今回「クリル」諸島ヲ日本政府エ引渡シタル布告ヲ敷カン事ヲ「マチュリーニ」氏ヨリ達セリト是他ナシ二島ノ地タルヤ冬間ニ非レハ臘虎獵ニ從事スル事能ハザルヨシヲ在住商人ヨリ説話セリ其他ノ諸島ニ於テハ專ラ魯曆ノ五六七ノ三ヶ月ニ獵業ヲナセリト云フ

一手代「バリエフクト」曰ク未タ寒暖計ヲ以テ溫度ヲ檢スル事ナシト雖トモ此灣ニ貯ヘシ魚物ノ凍ラザルヲ以テ他ノ近傍ノ島嶼ヨリ稍暖温ナルヲ徵セリ是近島火山ノ多ク憤焰スル故ナラント今ヲ距ル事三年前<sup>千八百七十二年</sup>「シ、コタン」ノ火山一時ニ沸憤シ爲メニ死スル者十三人アリシト云フ東察加ヨリ北海道駒ヶ岳ニ至ル其火脈一線ナルモ亦ト知スヘシ

一灣内東風尤烈シ飛鳥方向ヲ失フ時トシテハ海潮ヲ吹送リテ窓壁ヲ襲フ故ニ降雪四方ニ飛散シテ地上ニ積ル事多カラス而シテ雪ハ年々十一月下旬ヨリ降り始リ翌年四月ニ

至リ全ク消解シテ地面ヲ現シ五月ニ至レハ良春美景トナ  
ル是以テ終歲航路ノ尤穩ナルハ七月ト八月ニシテ春間ハ  
瓦斯甚深シト云フ

一 本年七月九日米國スクーネル一艘來レリ<sup>(註 樺太)</sup>如圖キ旗ヲ船  
頭ニ掲ケ船號人名未詳ナレトモ數人上陸シ手代ノ家ニ來  
リ土人ヲ雇ヒ上ケテ臘虎獵ノ補手トナサンコトヲ要スレ  
トモ手代之ヲ密獵船ト見テ其求メニ應セザリシト語レリ  
一 馬鈴薯ハ六月一日種ヲ蒔九月十二日頃之ヲ收入ス其作得  
セルモノ我輩ニ饗セリ其形チ圓積三寸有餘ノモノアリ併  
シ<sup>(註 圓積)</sup>野鼠及土龍多クシテ作物ヲ害スル少ナカラズト云  
ヘリ

一 「クリル」人ノ住所ハ蝦夷人ノ如クナレハ區畫ヲ定メタル  
畔圍及垣籬ノ類ナシ思フニ地割等ノ事ニハ曾テ着手セザ  
ルモノト見ル是レ魯政府ノ出張所ノ無キ所以ナリ故ニ不  
動産ニハ心付カザル風習ナリ

シムシール島

一 「シムシール」島ハ「ウルupp」島ヲ距ル事北緯線ノ凡ソ一  
度有餘ニシテ初回日進艦ヲ北東ニ面セル「プロートン」港

ルモノニシテ他ノ所轄ハ既ニ廢スレトモ只獨リ「クリル」  
諸島ニノミ今尙行ワル、モノナリ。黑狐一枚五十ループ  
ル<sup>我カ</sup>ナリト云フ

一 陸地ニハ茶類及ヒ蕪菁ハ植藝スレトモ馬鈴薯ハ不熟ナル  
ヨシナリ然レトモ恐ラク住民ノカラヲ土地ニ盡サマルニ  
由ルナラン「シムシウ」ハ五十一度ニ接シテ尙能ク收得  
スルヲ以テ準知スベシ  
一 今年ヘリビュース」氏ノ手船、鹽ヲ輸センガ爲メ又此灣  
ニ來ル約ヲナセリト云フ

ウルupp島

一 「ウルupp」島ハ樺提島ヨリ北東七里餘ノ海ヲ隔ツ支那人  
水先ト題セル英人ノ著述書ニ據ルニ南北五十里<sup>凡ソ我ニ</sup>  
東西十五里或ハ七八里東南面ニ一灣アリ英人之ヲ「タワ  
ノ」ト呼ヒ土人之ヲ小舟灣<sup>シロボチナナガワニ</sup>ト呼フ南北凡ソ四町正シク東  
ニ面スルヲ以テ東風ニハ船ヲ泊シ難シ南ノ灣岬ヨリ二十  
町有餘ノ海中ニ一巨岩アリ水面ヲ拔ク事凡ソ十間周圍  
之ニ稱フ船舶之ヲ標的トナシ入津ス故ニ魯人之ヲ常燈ト  
稱ス英人ハ其形チノ亞弗利加ノ砂漠、古墳<sup>ヒキマツド</sup>ニ似タルヲ以

ニ織シテ上陸セリ(英國船將此港ヲ發見セルヲ以テ直チ  
ニ其人名ヲ以テ港名ニ冠セリ)

一 人種ハ「アリュウウテ」(今ヲ距ル事十二三年前北米「アラ  
スカ」<sup>古來魯西亞米利堅ト稱</sup>「アット」等ヨリ轉住セシメシ  
人種ナリ)ニシテ男女五十九人アリ「ヘリビュース」氏ノ  
一商店アリ手代一人ヲ置ケリ一庫別ニ一住家アリ三人ノ  
家族ナリ

一 灣南一樹林アリ「シムシウ」ノ比ニ非スト雖トモ圓經五  
六寸ヨリ大ナルモノ少シ而シテ人民日用ノ焚木ハ多ク海  
濱ニ漂着セル流木ヲ用フ飲水河流ニ依レリ然レトモ又一  
井ヲ見タリ

一 野草亦他島ニ異ナル事ナシ牡牛一牝牛二頭ヲ見ルノミ  
一 土人曰ク十一月ノ中旬ヨリ十二月ノ際、雪尤多シ翌年四  
月ニ至リ全ク消解ス灣中ハ冰凍ヲ結フ事ナシト云フ

一 「シムシール」ノ物産ハ臘虎、狐、及黑狐、ナリ而シテ海  
豹<sup>シムシール</sup>シムシール(海豹ノ一種)ヲ捕獲シテ食料トナス本年臘  
虎ノ獵數六十枚ナリト云フ其上革ハ一枚百五十ループル  
我三(「クリル」ノ貨相場ハ五ループル)ヲ以テ「ドル」ト  
ナス即チ二十年前魯國ニ行ワレシ「アツシクナー」ト唱フ

テ古墳岩ト呼フ灣内ニ流アリ南ニ位セルハ廣サ五間深サ  
股ヲ沒ス淵ル事二町分レテ二流トナル「北東ニ位セルハ  
廣サ一間深サ僅ニ脛ヲ濡ス河邊ニ長サ五六間廣サ三尺餘  
ノ細網アリ之ヲ以テ魚兒ヲ捕フルモノト見ユ」灣ノ近傍  
丘陵多ク相接ス道路未タ開ケズ蕪草蔓々タレトモ野畜ヲ  
見ス鷄數十羽アリ

灣頭十二戸三十三人はレ全島ノ總計ナリ倉庫一アリ其他  
皆ナ土室ナリ<sup>北海道土人ノ土室ニ大同小異ニシテ</sup>人種ハ「ア  
リュウウテ」ノ名又「クリヨール」種ニシテ(歐洲種ト「ア  
リュウウテ」種ト接シテ生シタルモノヲ「クリヨール」ト  
號ス)衣服ハ魯西亞製ナレトモ汚穢粗惡ヲ極ム習俗皆ナ  
甚ヲ好ミ酒ヲ嗜ム「ジン」、燒酎、鬼殺シ草、等ハ尤其ノ  
垂涎スル所ナリ

一 該島彌望一畦ノ圃ヲモ見ス土ヲ穿ツ所ノモノハ<sup>(註 圖略)</sup>  
ヲ用ユ是レ魯米等ニテ作リシモノナラン鶴嘴、熊手、曼  
鈎ノ類ヲ見ス

一 山野ニハ黑狐、狐、狼、海河ニハ臘虎、海豹、海豹、獺  
ノ獸ニシテ多クハ「チルボイ」島(「ウルupp」ヨリ東北ニ隣  
レル島)ニ於テ漁獵ヲナシ其他ニハ出ツル者ナシト云ヘ

一 本年月日未詳米國密獵船二艘此地ニ來リシト語レリ亞人「チエームス」ニモ印度人一人隨ヘリ玄武丸士官根岸美佐男之ト相語リテ生國等ヲ尋問セシヨシヲ語レリ「チエームス」ノ來歴ハ別紙四號理事官「マチューニン」氏ノ調書ニアリ  
一ヶ月跡バーチ號ノ「スクーネル」一艘來灣セリト云ヘリ  
時 任 爲 基 記

一三〇 十月二十四日 三條太政大臣ヨリ 寺島外務卿宛

樺太島羣國ヘ引渡濟ニ付同國政府ヨリ受取ルヘキ金額領收ノ儀ハ外務省ニテ取扱フヘキ旨指令ノ件

外 務 省

今般樺太島羣國ヘ引渡相濟候旨別紙ノ通開拓使ヨリ申出候ニ付同國政府ヨリ受取ヘキ金額領收ノ儀ハ其省於テ取扱ヘク此旨相達候事  
明治八年十月二十四日

太政大臣 三 條 實 美

註一、本號文書ニ謂フ「別紙」ハ一八八本文ト同文  
二、本件ニ關シテハ十一月二十四日附三條太政大臣ヨリ外務省ヘノ達書ヲ以テ「右金額領收ノ上ハ大藏省ヘ可相納」旨更ニ達アリタリ

一三一 十月三十一日 寺島外務卿ヨリ 三條太政大臣宛

樺太千島交換條約布告ニ關シ上申ノ件並ニ之ニ對スル三條太政大臣指令

附 記 十一月十日樺太千島交換條約ニ關スル太政官布告

〔案〕 甲第二百五十九號

千島樺太兩島交換條約相濟候に付右條約書公告の儀 上 申

千島樺太兩島交換條約の儀は露國政府ヘ打合の上御布告可相成筈に付先般露都在勤榎木全權公使より同政府ヘ爲打合候處兩國皇帝御批准相濟たる條約を公告する事素より各政府の自由に有之候間聊差支無之旨申聞候由今榎木公使よ

リ致報告候就ては右條約書は早々御布告相成候方可然尤も公文并條約附録は御頒布不及義に存候此致致上申候也  
八年十月卅一日

外務卿 寺 島 宗 則

太政大臣 三條實美殿  
〔案〕 一上申ノ趣第百六拾四號ヲ以テ布告候事

明治八年十一月十日 太政大臣 三條實美印

註一、右指令ニ謂フ第百六拾四號太政官布告左ニ附記ス

〔附記〕 第百六拾四號

今般露西亞國ト千島樺太兩島交換條約別紙ノ通取結相成候條此旨布告候事  
明治八年十一月十日

太政大臣 三 條 實 美

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐ミタル日本皇帝此書ヲ以テ宣示ス朕全露西亞皇帝陛下ト望フ同シ朕ハ樺太島薩哈連島ノ内朕カ所領タル部分ヲ全露西亞皇帝陛下ヘ讓與シ全露西亞

六 樺太千島交換條約締結ニ關スル件 一三一

皇帝陛下ハ其所領タル千島群島アイランズノ全部ヲ朕ニ讓與スル事ヲ五ニ決シタルヲ以テ雙方ノ全權重臣明治八年五月七日彼得堡ニ會シ其條約ヲ締盟調印セリ即其條款左ノ如シ  
樺太交換條約〔註九二ノ和譯文〕  
千島交換條約〔下同文ニ付省略〕

朕親シク右條約ヲ通覽シ其旨ヲ至當トス故ニ今此書ヲ以テ之ヲ全ク證認批准シ天地ト悠久ヲ期シ總テ條約中所載ノ條款ハ正ニ之ヲ遵行セン事ヲ約ス右定證トシテ爰ニ朕カ名ヲ親記シテ國璽ヲ鈐セシム  
神武天皇即位紀元二千五百三十五年  
明治八年八月二十二日

御名 國璽

奉 勅 外務卿 寺 島 宗 則

註二、右條約布告アリタル旨十一月二十日附寺島外務卿ヨリ各國公使〔露國ヲ除ク〕宛書翰ヲ以テ通知セリ

一三二 十一月五日 寺島外務卿ト露國辦理公使トノ對話書

樺太島所在日本人民所有ノ建物處分ニ關シ協議ノ件

百四十七號

明治八年十一月五日於省寺島外務卿露國公使スツルウ  
エヘ對話時任開拓判官侍座

一禮畢

一クリール島ノ事〔此時記者暫ク退席此時公使英語〕

夫ニハ甚因却樺太島ニモ同種類可有之存候

其人民金ヲ拂フ事記載アリヤ

政府所有家屋ノ方ハ子細ナシ人民持ノ方ニハ御申聞ノ様ナル類アルベシ三年后迎モ住居シ得ヘキ譯ニ有之候

今御話申ス旨趣ハクリール島ニ家屋ヲ建ツルハ當然ナリ

右ハ新築ヨリ在來ノ家ヲ買受ル方便宜ナルベシ

立拂ハ三年間ニ限ルニ非レハ其上ニテ買否モ相決可申事ト存候

貴政府彼地ニ御目的アラバ御相談可申則如是ナレハ建家

人モ幸甚ニ有之候

未其邊ノ場合ニ不至候

御懇意故私情ヲ以申上候次第ニ有之候其島ニ在住ノ人民ハ來年ノ半バ頃ニハ引移ル筈申居候

先日閣下ヘ申上候通ニ委官ノ取調書反譯出來申候可入御覽候

其外理事官在留中何か御問合ノ事ハ無之哉

我理事官ヨリ取調書モ已ニ政府ヘ差出候間外ニ伺度義無之候且双方委員ノ調書ヲ批准シ見度候過日黒田長官モ彼地相

越候ヘ共時節柄惡敷十分觀盡サズ候間來春好時氣ヲ待テ再

巡覽セザル内ハ考案モ付兼候儀ト存候

右ノ家ヲ買受ル等譬ヘハクシン、コタン、ニテ御引合可致

哉又ハ閣下ト於此地御引合可致哉其邊モ追々勘考可致候

成丈拙子ヘ御談可被下候

諾

シベリヤ惣督ヨリ昨年同島ヘ軍艦ヲ廻ス積ニ有之候

樺太ノ方モ以前ヨリ漁業等致候者モ有之候并或ハ家ヲ捨テ

立去杯申者モ有之其邊ハ頗ル困リ居候

政府ハ人民ノ世話ヲスル者故貴政府於テモ移住等御配慮

有之候ハ、格別長引申間敷候

樺太ニ在ル貴政府ノ建物ヲ可受取官吏ヲ被命候トノ御書

簡過日到來右ハ既ニ御命シ相成候哉

未ダナリ貴國ヨリクリールヘ被遣ル、官員ト同時ニ相成様

致度候

此程ハ横濱ヨリ東京ヘ我公使館ヲ移ス事アリテ頗多用ニ

取紛レ未返翰不差上候

右御返翰ヲ以テ何ツ頃彼地ヘ人ヲ被遣ル、トノ事御申越被

下度候

一週間ノ内ニハ返翰可差上候甚延引恐縮此節人ヲ被遣候

テモ彼地祝日ニ相當官廳等閉鎖有之候間可成先ヘ寄り候

方都合宜敷候クシンコタンヘハ派遣ノ貴國官員アリヤ

未タ之ヲ不遣併シ近日ノ内必派遣可致候

彼地ヘ領事官可遣積リニ候ヘ共未タ其人物ヲ定メズ

兩國政府ノ希望スル彼地於テ貿易ヲ開キ土地繁榮ニ到リ

交通自在ヲ得ベキ時ハ諸事箱館於テ取扱候テモ都合可然

候

一三三 十一月二十日 露國駐劄樺太公使ヨリ

千島諸島ニ露國人居住ノ有無並ニ露國政府ノ權

太千島交換條約布告ノ期日等報告ノ件

一月十二日到

別記第三十七號

以公信致拜啓候然ハ九月十日附尋常公信別啓並に附錄條約

佛文等落手御申越の件々逐一領承いたし候

一御申越の「クリル」嶋上魯人住居有無の一條「スツルウエ」

氏申立當政府の申口と不合の段過日亞細亞寮權頭「ニメル

コフ」氏と面晤の節申談候處同氏申候には「クリル」嶋に魯

人有之以上は當表内務省にて承知可有之處同省にては全く

承知無之段髓め候に付ては品に寄り東察加地方長官の許可

而已にて罷越居候者有之に哉又は許可を乞予して恣に住居

致居候者有之に哉其邊未タ一向相分り不申不都合の義に候

得共「クリル」諸嶋え赴きし理事官より未タ音信無之に付何

とも決答難致段申聞候何れの道條約面には「レシプロカル」

の明文有之候間表立「プロテスト」致候譯には參兼候へども

右住居魯人特許等の義に付不得其意廉有之候は、御申越次第如何様にも掛合可申候、同伴に付拙者留守中花房書記官より差立候電文は朱書御推察通當方より差立候義にて誤字は全く途中の誤にて候

一「ジールナル、ド、サンベートルスブルグ」は魯十一月一日(即我十一月十三日)より其表を新聞社より直に相贈候様申付置候間御請取有之義と存候

一花房義實御宸翰携帶歸館いたし儘に落手致候魯帝御歸京の上謁見相願捧呈可仕候其節の言上振御申越承知いたし候御宸翰に添御申越の「マリヤルズ」一件取扱役員夫々相當の御謝品可有之段御申越に候得共右は先頃申進置候通賞牌に無之ては不體裁に候間篤と御勘辨有之度候

一拙者並に其他の者魯國賞牌着用の義に付御申越の電信誤字を推察して左の如く了解致候

Acceptance of decoration authorized but not wearing them until our government issue Japanese new decorations

賞牌貰受ハ許可ス然レドモ我政府日本新賞牌布告ニナル迄ハ着用スベカラズ

付右は落手後別に布告致候見込の由も申聞候

Gouvernement Russie publiera traité un de ces jours, Article additionnel après réception acte original

一千嶋海嶺の義に付ては一般の規則追々御設立可相成儀と存候當政府に於ても魯領歐亞海岸に未だ一般の漁獵規則無之に付歐洲各國の規則を折中して一規則を設立せん爲め先年より取調中の趣承及候に付通日其書類借受在各國我公使館え同書類取寄方及依頼置候右書類相集候は、「ボンベ」氏に大綱を爲調右を翻譯の上全書類と并て差進可申候右は近年「エトロフ」嶋に於て外國人擅に鷹虎獵いたし殊に千嶋群嶋悉皆我所領と相成たる上は右規則設立は尙更肝要に可有之と存候

十一月廿二日

榎本武揚

寺嶋外務卿殿

雜報一則

一近日歐洲一般「ボリチック」上の要件は所謂東洋問題の一案にて諸新聞紙上紛々議論有之専ら魯西亞政府出兵用

六 樺太千島交換條約締結ニ關スル件 一三三

就ては近日謁見の節も着用不相成將又當冬より春に掛け數次可有之御招待の節も同斷に付何卒日本賞牌御布告早く有之候様渴望致居候此事事に似たりと雖とも交際上の禮數におゐて關係も有之殊に魯帝御直筆御記名の着用許可狀も過日拙者頂戴致候間願くは我 皇帝陛下より着用御差許の詔を奉戴度候魯帝陛下よりの着用許可狀譯文別紙<sup>甲</sup>號差進申候

一當十一月十日午後三時十五分東京發線の電信森氏支那全權公使に蛟嶋氏外務大輔に被任候段翼十一日午后十二時に落手如貴命早速在各國我公使館え轉電いたし候さて一事申進度義は是迄當公使より在各國公使館え轉電可致旨御申越の度毎に telegraphiez toutes nos légations même Amerique の六語有之候得共以後は All の一語にて同様の意味に解し可申候間左様御認め可有之候尙此種の略語に付ては追々可申上事も可有之候

一樺太千島交換條約書魯政府にては近日の中布告可致見込にて國例に依り右條約書を司法省え相廻し置候間同省より下け次第布告相成可申旨過日亞細亞寮權頭參館申聞候間即日以電信左の通申進置候尤附錄條約は未だ原文落手不致に

意の取沙汰日々斷へ不申其實情は各國新聞紙上に記載致候程の事には無之候得共當表陸軍將官等より承候處にては魯兵物體一令の下十日間に戰爭仕度相整可申哉否検査最中の由に候右は畢竟澳國に於て所謂「バルカン」半嶋を占め候へば魯國「コンスタンチノッポル」を占るの宿望に妨碍を生し候は勿論に付如是用意ある義にて魯國の巷説にては品に寄り澳國と交戦に及ぶも知るべからず杯唱居候左程の義には有之間數候へどもいつれ「ドノウ、プリンシパルチー」一件に付三大國より「トルコ」政府え迫り「スラフ・ニー」の基督民を保護すると「トルコ」國會計改正一條の保證を要し可申と被察候其方法如何なるは一疑團にて畢竟其爲め當國にて隠然兵備の策を施し居候義と存候

註 「九月十日附尋常公信別啓」見當ラサルモ既掲一二五附記一八同書輪ノ案文ト認メラル

事項七 琉球藩處分ニ關スル件 (第六卷事項八、第七卷事項一參照)

一三四 三月二十八日 清國駐劄臨時代理公使ヨリ 寺島外務卿宛

琉球貢使ノ入清ニ就キ清國政府トノ交渉ニ關スル文書送付ノ件

急報

過日琉球貢使當地へ來朝候付此義御指令は未承候得共現前の處自ら職分を量り清政府へ先及談判候手續並往復文書鈔錄等左に取捕呈進候且又當地各國公使より含のため談判模樣承り度申候故右書類一覽候處在御國各公使へも該公使等より書簡を以可申送趣に付此段聲明候也

明治八年三月廿八日

駐京臨時代理公使 鄭 永 寧(印)

寺島外務卿殿

注 右ニ「清政府へ先及談判候手續並往復文書鈔錄」トアルハ一三五ノ前半並ニ同附屬書一七ヲ指スモノト認メ

ラル

一三五 四月三日

琉球貢使ノ入清ニ關シ清國駐劄臨時代理公使ノ清國政府トノ交渉手續書

附屬書一、三月二十二日在北京帝國公使館ヨリ在北京琉球藩使臣宛書翰寫

使臣ノ入清ニ關シ報告ノ爲出頭アリ度旨通達ノ件

二、三月二十三日琉球使臣宿所警固ノ清國官吏ヨリノ回答書寫

琉球使臣へノ書翰ハ取次難キ旨回答ノ件

三、三月二十三日清國駐劄臨時代理公使ヨリ清國總理衙門宛書翰寫

琉球使臣ノ入清ニ關シ對談シ度旨申出

八、三月三十一日清國駐劄臨時代理公使ヨリ清國駐劄英國公使宛書翰寫

帝國公使ト清國政府トノ交渉ニ關シ在北京外國使臣ノ會議ヲ開カレ度旨申出ノ件

九、三月三十一日清國駐劄英國公使ヨリ清國駐劄臨時代理公使宛書翰寫

帝國公使ト清國政府トノ交渉ニ關スル報知了承竝ニ在北京外國使臣ノ會議ニ關シテハ追テ通知スヘキ旨回答ノ件

一〇、四月一日清國駐劄英國公使ヨリ清國駐劄臨時代理公使宛書翰寫

在北京外國使臣ノ會議ハ必要ナシト認ムル旨回答ノ件

一一、四月二日清國總理衙門ヨリ清國駐劄臨時代理公使宛書翰寫

琉球使臣ニ對スル清國政府ノ處理ハ從來ノ慣例通ナルニ付過日ノ面談ニ關スル鄭公使ノ日本政府宛報告ニ對シテハ干與セサル旨回答ノ件

ノ件

四、三月二十三日清國總理衙門ヨリ清國駐劄臨時代理公使宛書翰寫

琉球使臣ノ入清ニ關スル面談ノ時日回答ノ件

五、三月二十五日清國駐劄臨時代理公使ヨリ清國總理衙門宛書翰寫

琉球使臣ノ入清ニ關シ取調へ度キニ付右使臣ノ一員ヲ帝國公使館ニ出頭セシムル様幹旋アリ度旨依頼ノ件

六、三月二十七日清國總理衙門ヨリ清國駐劄臨時代理公使宛書翰寫

琉球使臣ノ來貢ハ慣例ニ從ヒ接受スヘク其ノ他ハ清國政府ニ於テ與リ知ラサル旨回答ノ件

七、三月二十八日清國駐劄臨時代理公使ヨリ清國總理衙門宛書翰寫

琉球使臣ニ對スル處置ニ關シ本國政府ニ報告ノ必要アルニ付過日面談ノ概要略述ノ件

一、四月三日清國駐劄臨時代理公使ヨリ清國總理衙門宛書翰寫

琉球使臣ニ關スル從來ノ交渉顛末ヲ帝國政府へ通達請訓スル旨回答ノ件

琉球貢使入清に付鄭臨時代理公使與總署往復事略

明治八年三月

廿一日英國公使館附書記官メヨル氏囑候は琉球人可入京との風聞あり但着京せしや否未知由右に付我館僕支那人に命し其着せしや否を探らしむ

廿二日朝館僕歸來清二月八日即我三月十五日琉球使臣上下拾八人

來京現在城内四譯館に住居する趣を復命す本署即與書記生等評議し別紙甲號の書信を送るに該館守門の支那人共拒て不取次趣を復命す琉球人は御國語に通し候故即ち加藤書記生秀一自下に該使員へ引合へきため前號の書信を携へ又支那人へ通辨のため鄭永昌隨同差遣候處門番共拒て容れざる故押て内廳の堂前へ至るに館内支那人共許多團集し其内に辨髮廣袖の者一二人立交たるを見秀一即ち對話するに搖頭不言一語通せざる者の如く竟に避て内に入る不得止支那人

の中赤帽を冠たる頭分體の者へ對し我々は日本公館の使者にて琉球使臣へ用事有之罷通たり此旨使臣へ被申入へくと傳話せしむるに使臣は他出中にて在館せず且此館は内務府及禮部衙門の管轄にて我々を被附置使臣來務を辨するの外決して他人を入れ交通せしむへからざるの嚴令なりと答ゆ秀一云く琉球は我本國の屬藩たるを以て今度來京に付ては我公使より其使臣を招き問ふべき爲め此書信を送る也使臣歸館せば之を渡さるへし彼云使臣他出中に付我等其書を預り置難し秀一云然は明朝再以我館僕差送へければ必使臣へ達せられよ萬一故障の事あらは其趣を從使臣自筆答書遣候様被申通度と相託して別る

廿三日又館僕に命し書を四譯館に送る且昨日の談意を申合たり彼赤帽吏書信の又來るを見依然不接只廳裏に入出數遍するのみにて我書遂に達するを得ざる故我館僕は其趣意書を索むるに彼より別紙乙號の回條を與ふる本署據此同日午後丙號抄録の通以啓文總署へ掛合同夜從彼丁號抄録の通答覆し來る

廿四日午後三時本署轎を命し總理衙門へ赴て面商す恭親王、毛昶熙、崇厚、夏家鎬、周家楨、列席接話

我日本署大臣今日面商を請ふ所は昨日及啓達候通此程我國藩屬たる琉球人來京せしと聞於本署は我政府及該藩より均く未た何分の報知も不承且該使臣等到京數日を経れとも本署へ一度の問候も不致甚不審を懷き本署へ該使臣を相招き一應可及詢問と書信を差送る即ち如此と甲號の書信を當面開封口譯し而して館門之を拒み且該處は内務府及禮部衙門の管轄とて琉球使臣を擁閉し本署公館の書通を阻絶す

因て其趣意書を要するに守館の支那人書答する所如此と乙號の回條を看せしむ是に據り貴國自ら禁令有て該使臣の他人と交通するを杜くを知る抑琉球は既に我國の藩屏たれば今度例貢の爲め貴國に來ると雖も該藩王は我本國へ命を請ふ

答且我本國より貴國へ駐京公使を被差置候義も該藩へ頒布相成居候上は該藩は勿論來京の使臣より我公使館へ對し一問候を通せざるの理無し旁勸考するに萬一該藩此事を我か本國へ不告して來るも難計若し自ら欺て派使せしならば則ち二君に事ると申者にて甚不相濟事なり我本國不見不知の時は兎も角現在本署爰に居ながら豈默視するを得んや依之是非とも該使員を我公館へ呼出し藩主より彌我本國に告明せし事にや其實否を可取糺心得なれとも

四譯館は内務禮部二大人の管轄にて外人を構ひ書通を拒むとあれは從我強て其人を呼出す譯にも不至去迎之を見遁しては本署の職掌不相立我國政府の咎免れざる所なれば今日我職掌に仗て此情理を陳述す何卒貴王大臣より内務府及禮部衙門へ該使臣を我公使館へ被差出候様御掛合有之度所冀望也

彼曰昨日貴大臣の來翰を接し其旨趣を推酌して我等已に答ふる所を内議したる也抑我中國外藩貢使を接待するに國初以來一定の例典を按照して之を受遣する事即内務府禮部兩衙の專掌と爲る貢使京に入るや之を我館舎に居き日に廩膳を給す而して彼れ方物を呈進し陛見を了れば之に皇曆を授け恩賚を賜ひ即日辭京歸國せしむ事如此に止まるのみ故に他外の事に涉らしめざるため該部より委員を附置之を警固する也即ち此周總辦も從前禮部に在り屢貢使の事務を親歷辦過し來る固より使臣を擁閉し他接を阻絶するの義には非されとも歷屆已に久しく守館吏の如きは本部の命を重んじ如此言はざるを得ず貴大臣幸に之を諒せよ

毛曰是は琉球使臣に限て如此するに非らず此他朝鮮貢使の

如きも亦之と異なる事なし

我曰貴國の貢使を接する例は既に命を聞けり只我職掌上にて屬國人へ一應の詢問を遣置かん爲め其使員を我公館へ暫時被差出候様貴王大臣より該管衙門へ御掛合有之度所願は如何御辦理可被成哉

彼曰是は前にも申述る通り内務禮部にて典例を按定して專掌する事故本衙門には何分右典例を動かすの權なし

我曰本署には我屬國人を見るの權有り貴王大臣只其典例を奉して我請求を顧みざるに似たり若し終に一面詢せざる時は我政府に對して不相濟也此時果實を排出して酒を進む

崇曰貴國の琉球に於ける猶英國の印度に於けるがごとき敷我曰該藩は舊薩摩侯に附庸たる久し維新以來皇室に併歸したれど南海中臺灣の一島にして國力孱弱風氣柔懦大に事へされは立つ能はず所以に今日専ら矜恤を加へ之を保護する也何んぞ印度の比に當らんや

周曰琉球島は已に貴國の州郡に籍隸せしや或は仍屬藩諸侯の名義なるや

我曰我國向に封建の制を廢したれば琉球をも早く郡縣と爲すへきに彼の國俗今尙自ら力むるに疎きを以て我

に照覆あらは此れを併せて本國に咨明し以て後日の證徴に備ふへし

彼曰諾

右にて畢る

廿五日午後一時別紙戊號抄録の通總理衙門へ照會せしに羊字貳拾貳號光緒元年貳月拾捌日值日官聯の收票來る

廿七日午後四時己號抄録の通總理衙門照覆來る

廿八日總署の照覆例の恍惚文なる故午後三時庚號抄録の通以專啓總署王大臣へ達置く從總署羊字二十六號光緒元年二月二十一日值日官英の收票來る

同日午後六時英威圖氏註 英名より書記官メー前にマヨルと書せしは誤なりルスを遣して其屬下の通辦官清國雲南に於て官兵に殺害せられし一件を通告す此日番外急信を發す

廿九日昨今佛代理公使Rochchouart氏より書記官を遣し其在御國公使へ爲心得可申送旨を以て我琉事談判の模様を探問するに因り本署存案の與總理大臣往復せし丙丁戊己庚五號の文件鈔録を之に與へ去り又同様一通を英公使含のため持參し威圖氏は雲南一件取査中公務煩重ならんと察しメールスへ託して之を致す

皇上の深仁其王を冊封して琉球藩王と爲し華族に齒列して邸を東京に賜ひ郵船局に令し常に汽船を發して彼諸島に航せしめ以て彼の臣民の我國に往來するに便ならしめ又農桑の器械種子を下賜し枝島に至る迄徧地に稼穡を勸め務て寸土も瘠壤無らしめ一民も飢餓無らしめん事を期す其自ら力め業を樂むに及ひ然後郡縣に籍隸せしむへしとの旨なり

恭曰琉球進貢の使臣從前會て其國の日本に屏藩たるを稱せし事なし故に我中國其來るを接待するは從前の典例に依て動かさざるを是とす貴大臣職掌を盡さんため該使員を喚出す事は本衙門の能く辦理する所に非らず他日貴本國より將來の事を該國王に向つて理論處分有らは可ならん琉球王より例に違ひ貢を進し使を派し來る上は我中國固より成典に由て速に其使命を遂げ歸國せしむるへし故に貴大臣の請求を成す能はざる也

我曰既に如此説く本署姑く之を論すまじ但我職任の在る所之を行ふに或は盡し或は盡さざるも均く我政府へ報明せざるを得ず故に本署今日面商請求せしだけの情理を公文に明書し重ねて照會を行はん貴大臣も亦答話の旨を明亮

午後佛公使を訪問す彼曰今度の事も亦日清の一難論と思へり我等和親國の同職は是等の端緒に就て其事件を成丈け安全ならしむるに注意し各意見を述へ以て友誼を表するは實際の法にして我國貴國と親好如此正に力を盡すの時也威圖氏は久く清都に在りて公使の領袖たる故右總署の應答振を同氏へ細告せは即ち貴下の爲めに各國公使を該館へ會同して事の理非を兼評すへし此儀速に該公使へ御依頼有りたし

我曰琉球使臣は我政府の明許を経て此に來りしや否本署未だ知らず且本國より何等の命令も不來惟我現前の職分丈談判せし手續書類を昨日本國政府へ送報し靜に其命を待のみと心得たれとも貴下の言は爲我政府深く幸とする所なり乍併威圖氏には現在難差置急務有るを知る今我不急とする事を以て之を煩さん事不本意に候

彼曰然らば書簡を以て依頼せらるへし  
我曰今朝貴下へ送りし書類と同様の一通を該氏へも送置たる故從是面會を乞ひ貴意を述て依頼すへしと相別れ即威圖氏に面話す氏曰今朝御回の書類我未だ一閱に暇あらず必ず熟讀の後自ら來て答復すへしと



三十日午前十時佛公使書記官を遣し來て英使既に應せしや否を問ふ我述るに前話を以てす彼喜はざる色あり故に又威圖氏へ往て其意を問ふ氏曰文件は已に閱悉したれとも今日尙公事忙く貴下の事を辦する暇なし請ふ明日自ら貴府に來て面覆するを待てと因て歸路之を佛公使に報す彼曰威圖氏は性慢にして急に事を辨せざる人なり書簡を送れば各國に會同の事に關する故若し自身に不得止事有る時は其會議を次國に譲らざる可らず唯面談に任せなは此議を何れの日に興すや不可知と自ら佛文にて書簡の下案を作りて我に與へ速に清書せしめて英館へ送れと勸む我曰我書記官佛文を善くせず後刻貴書記官に就て教を受清書致候様申付べしと約して歸る午後八時書記生高尾恭治を佛書記官方へ遣して其讀授を請はしむ歸來曰佛公使の意必速に清書して今夕中に英館へ達すへし且此書を我より稿案せし事彼に向て説く可らずと

三十一日午前八時一號の佛文書簡を恭治に命しメールスに因て之を威圖氏に達せしむメールス其佛文なるを怪て問ふ恭治告るに故を以てすメールス笑て之を威圖氏に達す氏敢て收せず即ち之を返却して別に二號の書翰を我に與ふ是よ

一語を我節略に掲書したれば直に干係を畏れ中國從不過問と書き終に貴署大臣の節略は面述の辭と大同小異無きにもあらされとも可不論也なと、模糊に寫出し論せざる可き也と讀まん乎論せざる可けんやと讀まん乎實に把握し難しと述ければ此書記官も大に笑て是は總理衙門得意の大妙手也と云へり此夕威圖氏來て別を告る云く明日正午當地を出發して上海へ下り雲南事件を查辦すと匆々而去

三日午前十時送別のため英館へ到るに威圖氏早出立後にて送別に來り空しく歸る客多かりしと因てメールスに面話し辛號の啓文を示し歸路又獨逸書記官に抄さしめ米公使へも此意を述聞候處何れの意見も更に與總署兎角の論を須ひす只貴國政府の命令を待つか上策と存る旨を申候故此日壬號の通總署へ答覆書を送候  
右事情手續要略申啓候也

明治八年四月三日

鄭 永 寧(印)

(附屬書一)

甲

當國之此程各員御着相成候趣傳承致し候然るに其本藩より

七 琉球藩處分ニ關スル件 一三五

り先に佛公使又書記官を遣して英使の所答如何を問ふ我今朝彼に投したれとも未た其復書を得ずと答ふ此日米國公使頃る前代理公使ウキルリヤムス本國へ歸りし故其代書記兼繙譯官を披露のため同道して我寓に來り因て琉使の事を問ふ我細に話答するに該公使も此件は固より各國の評議を容るゝ所なく自ら貴國政府の命を待つ事當然なりと云へり四月一日獨幽公使昨夜威圖氏の回章を見るに因り琉使の件を詳知せんかため其書記官を遣して我書類を借觀す悉く之を抄さしむ此日威圖氏より三號の書翰を我に送る

二日午前十時恭治を英館へ遣し我は氏の教言に聽從せん事を回答せり午後佛公使又書記官を遣して模様を問ふ我曰貴國公使爲我政府厚情を盡さるる處感謝無限然れとも老輩の威圖氏既に二號の通手數を盡し又三號の通原文を看せしむ看勸諭せらるれば我亦敢て聽從せざるを得ず故に各國會議の事を威圖氏に請求せし一號原文を取戻して爰に在り是は本國に送り我政府をして貴公使の好意淺からざる處を知らしめんと欲する爲め也子歸て我か爲めに之を大人に謝せよ此時總署王大臣より辛號の啓文を送來る即ち佛書記官へも之を示し先日恭親王より我に向て貴國自ら理論を行へと面述せし

も又我本國よりも何等報知無之何たる官級の官員何名派員相成候哉不解候に付一應御尋問およひ度義有之候間事理答應可相成官員壹名明廿三日第十時當假公館迄御差出し可有之候也

明治八年三月廿二日

東交民巷外洋辦館借店

大日本駐清假公使館

琉球藩派員御中

(附屬書二)

乙

此次琉球使臣在四譯館宿住原奉

國王派委呈進例貢惟此館係

內務府大人管轄有二部大人論不準

琉球國使臣向各國大人來往接拜故此信未敢投遞將原信交還

還

(附屬書三)

丙

逕啓者頃聞琉球國人到京本署大臣以其藩屬本國未知何者之來欲喚一名來寓面詢一切故作差人致書館次據差回云該

三〇三

館門人不肯收信等語復令往問再三據館中人回條內稱此館係內務府及禮部衙門管轄有二部大人諭不准琉球使臣向各國大人來往接拜故此信未敢投遞將原信交還等情本署大臣知此未便造次茲擬于明二十四日兩點鐘時隨貴衙門面商此事未識值否先此佈請  
回音並頌  
台社

名另具 三月二十三日  
鄭 永 壽

中堂  
王爺  
大人

台 啓

(附屬書四)

丁 運復者頃接  
來函明日兩點鐘來署面商事件等因本爵及各位大臣定于明日三點鐘在署相候屆時務希  
惠臨惟本爵此數日內公事甚忙如實不能分身到署臨時當有各位大臣在署候晤以便面商一切此復願頌

日社

二月十六日

恭親王 沈桂芬 崇 綸 毛昶熙  
董 恂 崇 厚 成 林 夏家鎬  
鄭大人台啓

(附屬書五)

戊 大日本署理欽差大臣鄭

爲

照會事頃聞琉球使臣到京本署大臣以其藩屬我國而本國及該藩均未咨會本署來人亦未通報殊爲詫異當因不解該藩所派是係何官何姓爲何事來立即致書該使館次喚取通達事理一員來本公署面詢一切不意差書入門被却空自回來復令往問其故據守館中國人回條內稱此次琉球使臣在四譯館宿住原奉國王派委呈進例貢惟此館係內務府大人禮部大人管轄有二部大人諭不准琉球使臣向各國大人來往接拜故此信未敢投遞將原信交還等情本署大臣查琉球爲本國屏藩雖此次來

貴國呈進例貢自應請命我國遵行況我國與  
貴國換約已派秉權大臣駐劄燕京之事早經通行曉悉在案乃

大清欽命總理各國事務

軍機大臣大學士管理工部事務文  
軍機大臣協辦大學士兵部尚書沈  
戶 部 尚 書 董  
頭品頂戴兵部左侍郎崇  
三品頂戴通政使司副使夏

爲

該藩王派委使臣前來  
貴國不應絕無一書致問本署該使來已旬日不應不一通候本署由是觀之似係瞞過我國而來若然則明明是事二君以自欺也本署大臣斷難坐視所以必欲喚取該員確詢該藩曾否報明我國實情惟所居之四譯館既係內務府及禮部衙門管轄不准該使臣等與別國人來往則本署大臣未便強而致之然未喚詢該員眼前放去本署大臣難免疎曠之咎故不得已瀝情備文照會  
貴王大臣可否咨行該部傳放該使員內一名到本公署俾便面詢一切據實陳報我國以供職任希即查照施行須至照會者  
右 照 會

大清欽命總理各國事務王九大臣

明 治 八 年 三 月 二 十 五 日

(附屬書六)

巳

工 部 左 侍 郎 成  
工 部 尚 書 崇  
吏 部 尚 書 毛  
軍機大臣大學士管理吏部事務寶  
和 碩 恭 親 王

大日本署理欽差大臣鄭

光 緒 元 年 貳 月 貳 拾 日

(附屬書七)

庚

專啓者前經面商照請傳放琉球使員到本公署面詢一事昨准

貴王大臣覆文只稱中國一邊官話將本署大臣在春風中聆誨之處並未實敘末用一切情形前已面述數字虛結而已本署大臣前以面商所請不見允准邀有明文原期據此回明本國用達彼此情理各有不得已也今讀覆文自能理會若以把似別人應難通曉因此特將前聆面述之情節略言明

本署大臣原稱琉球爲我屬國今該使臣來京本署有權喚取面詢因內務府禮部着人擁閉使臣不准接拜外人請即由貴衙門咨部傳放

貴王大臣則云各國貢使來京向由禮部等衙門管理率遵一定例典誰敢動得琉球貢使來我中國有二百年從未提其藩服日本之說貴大臣所請非本衙門所能辦理將來貴國自向琉球理論可也該國遵例進貢派使來京中國自當按照成典早予遣回銷差是以貴大臣所請不能行

本署大臣乃云既如此說姑且不論但我職任應辦之事行或不行俱要回明本國政府今日所述言語彼此須有明文以昭後憑等情

當日已承

貴王大臣面允即將原請事理備文照會今准覆文並未將其面述之情敘明恐于別人難以暢悉併此節略呈明本國以備參考用特

專函送請

貴王大臣查照並頌

台社 鄭永壽 三月二十八日

中堂

王爺

台 啓

大人

(附屬書八)

Peking, le 31. Mars, 1875.

Monsieur le Ministre,

Ayant le désir d'entretenir les Représentants des puissances alliées du Japon et de la Chine qui se trouvent en ce moment à Péking d'une difficulté qui s'est élevée entre le Tsong li Yamen et moi, je viens prier Votre Excellence en qualité de Doyen du Corps Diplomatique de vouloir bien demander à Vos collègues, le jour, l'heure et le lieu où ils voudront bien se réunir sous Votre présidence pour entendre cette communication.

Je saisis avec empressement cette occasion pour renouveler à Votre Excellence les assurances de ma haute considération.

(附屬書九)

NAGAYASU TEY.

Peking, 31st. March, 1875.

My dear colleague,

I have made a memorandum of the substance of the Despatches of which you have communicated the text to me in Chinese.

This will be circulated this evening, and I shall be able to learn tomorrow or next day their news regarding a conference, as soon as I am in possession of their opinion I will write to You again.

I remain

Yours truly

WADE.

Mr. Tei Nagayasu,

Chargé d'Affaires

of Japan.

(右附屬書九和譯文)

一

在北京千八百七十五年第三月三十一日

貴下支那文を以て拙へ知照被及候趣既に抄録せり

右は今夕回達可致積り且又右我同職へ可會議に付ては明日敷明後日中彼等の回答を御報可致候余同職の思慮を得し上は速に御告知可致候謹具

日本代理公使

鄭永寧 貴下

(附屬書一〇)

Peking, 1st. April 1875.

My dear Colleague,

In accordance with my promise of yesterday, I have communicated to the other foreign Representatives the substance of the correspondence that You sent me to read a day or two ago. I think that, with every desire to serve You, there is a general opinion that our interposition, in the present instance, would be of little material advantage to You. I have not pressed my colleagues, consequently, to name a day for a conference.

Should You continue, however, to regard a conference as desirable, I need not assure You that I am entirely at Your service.

Believe me  
Yours truly  
WADE.

Mr. Tei,  
etc., etc., etc.

(右附屬書一〇和譯文)

三 在北京千八百七十五年第四月一日

貴下

一昨日御約束致し置候儀は一兩日前拙者一覽のため御送相成候書面の情實を以各使に普達致し置候余以爲らく今貴下に扶助せんと欲し各取扱處の主意は大概一般の意見なるへし現今の場合足下のためには聊好機會にも可有之候へ共余においては此會議を日限して同職に催すを必要せナ  
貴下御請求の集會は暫く御見合の方可能存候右は御職掌に對して可辨理等に候へ共余は之を敢て緊要と爲さる所なり

ウ エ ー ド

鄭永寧君貴下

(附屬書一一)

辛

逕啓者昨准

來函以琉球使臣來京一事將日前本王大臣與貴署大臣面述各情開具節略以備參考等因前來查此事情由前於本月二十日照復貴署大臣在案茲復准來函詢問查琉球入貢中國二百餘年皆由禮部等衙門管理其是否兼屬貴國中國從不過問此次該國派使來京中國按照成典由禮部等衙門辦理本衙門不能干預此係實在情形即希貴署大臣據此查照至貴署大臣此次節略與前日面敘之辭不無大同小異可不論也並頌  
時社

二月二十六日

鄭大人

啓  
恭親王 寶 鑒 沈桂芬

毛昶熙 董恂 崇 綸  
崇 厚 成 林 夏家鎬

(附屬書一二)

壬

逕覆者前具節略送請查照一事昨准  
爾稱查琉球入貢中國二百餘年皆由禮部等衙門管理其是否兼屬貴國中國從不過問此次該國派使來京中國按照成典由禮部等衙門辦理本衙門不能干預此係實在情形即希據此查照至其節略與前日面敘之辭不無大同小異可不論也等因前來本署大臣前此所准

覆文併此節略早已送呈本國茲復准此即當照錄續行咨回此復並候  
日社

名另具 四月三日  
鄭 永 寧

台 啓

中 堂  
王 爺  
大 人

一三六 四月二十八日

寺島外務卿ヨリ  
清國駐劄鄭臨時代理公使宛

琉球貢使ノ入清ニ關シテハ暫ク見逃シ置クヘク

且近日内務省ノ處分アルヘキ旨通知ノ件

附屬書一、琉球藩ヨリ入清ノ進貢使一行官名人數表

二、明治七年琉球出發ノ入清進貢使一行名簿

附 記 明治七年七月十二日琉球藩内務省移管ノ

達書

四月廿八日達

琉球貢使清京に赴候一條に付此程中より御申越の件々承知右に付談判の儀暫時御見合可然旨既に本月十九日附公信及廿三日附電信を以申進候間疾御承知と存候就ては此方出張の琉球藩役人共え一體の事情取糾相成候處別紙寫の通申出勿論我許可を得候事には無之候へ共彼方にては數百年來慣行の舊例を脩候迄にて特別の譯にも無之趣強て譴責方も無之事に可有之候間其表取扱振も右に准し候筋故百事先御見逃し被置候様致度内務省於て近々説諭およひ不遠御所分可相成事に候間其上は改めて申進候義可有之候猶此段申進候也

寺島外務卿

鄭臨時代理公使殿

(附屬書一)

隔年進貢の時船兩艘秋渡翌年夏歸帆渡唐人數役名左の通

- 一進貢使一人 大夫一人 才府二人
- 大通事二人 北京大通事一人 官舎二人
- 脇通事一人 存留脇通事一人
- 北京大筆者一人 大筆者二人 脇筆者二人
- 總官二人 與力一人 儀者一人
- ノ二十人

此隨從并船方共都合百八十人

内北京行人數左の通

- 進貢使 大夫 北京大通事 北京大筆者 與力 儀者
- ノ六人

此隨從十二人

右の内北京行人數は福州着早速出立二ヶ月程在京にて福州之罷歸り翌々年夏接貢船より歸帆且存留脇通事并隨員七八人程は於福州公務爲辦達方在留歸帆右同斷餘は翌年

夏歸帆

接貢の時船一艘渡唐歸帆前條同斷

- 一才府一人 大通事一人 官舎一人
- 存留脇通事一人 大筆者一人
- 脇筆者一人 總官一人
- ノ七人

此隨從并船方共九十一人

右の内存留脇通事は福州在留にて翌々年夏歸帆餘は翌年夏歸帆

亥四月

(附屬書二)

去年進貢船兩艘十月十八日如支那出帆仕候北京行人數左の通

- 一進貢使 國頭親雲上
- 一大夫 玉那覇親雲上
- 一北京大通事 湖城里之子親雲上

一北京大筆者

上江洲筑登之親雲上

一進貢使與力

糸満里之子親雲上

一大夫儀者

城間筑登之

外隨從十二人

亥四月

註 明治七年琉球藩ヲ外務省ヨリ内務省ニ委管セル達書左ニ附記ス

(附記)

〇七月十二日

(達書)

琉球藩

其藩事務自今内務省ニ於テ管理候條此旨相達候事

(太政官日誌)

一三七 五月十四日

松田内務大丞ニ對スル琉球藩差遣ノ辭令

七 琉球藩處分ニ關スル件 一三七

附記 六月十二日右松田内務大丞出發ニ關スル記事

第一號

内務大丞 松田道之

御用有之琉球藩へ被差遣候事

明治八年五月 日

太政官

(奉使琉球始末)

註一、右辭令ハ「太政官日誌」ニハ五月十四日ノ項ニ掲ケテ

二、右松田内務大丞出發ノ日ノ記事左ニ附記ス

(附記)

註六月 十二日午前十時ヲ以テ品川港ヲ發艦ス同航スル者ハ余之副行ニ命セラレタル内務六等出仕伊地知貞馨余之隨行ニ命セラレタル内務八等出仕中田鷗隣内務權大録種子島時恕該藩内務省出張所在勤ニ命セラレタル内務中録河原田盛美該地物産取調ニ命セラレタル勸業寮九等出仕栗田萬次郎勸業寮十四等出仕大柄樂之助勸業寮御雇山名貫美ニ該地分營建築

ノ取調ニ命セラレタル陸軍少佐長嶺護陸軍大尉宮村正俊陸軍等外出仕神谷範二該藩吏池城親方與那原親方幸地親雲上及ヒ其屬吏等都テ七拾餘名船ハ則チ該藩ニ所賜ノ大有號ノ蒸氣艦ナリ

(奉使琉球始末)

一三八 五月二十日

寺島外務卿ヨリ  
清國駐劄鄭使代理公使宛

琉球藩ニ關シテハ内務省處分決定迄清國政府ト

ノ交渉ヲ差控フヘキ旨指令ノ件

附屬書一、五月八日大久保内務卿ヨリ三條太政大臣宛書翰寫

翰寫

琉球藩處分ニ關シ伺ノ件

二、上京琉球藩吏ヘノ説諭往答始末書寫

三、五月九日琉球藩處分ニ關スル三條太政大臣ヨリ内務省ヘノ指令寫

大臣ヨリ内務省ヘノ指令寫

四、五月十七日大久保内務卿ヨリ三條太政大臣宛書翰寫

書翰寫

琉球藩ニ對スル處置ノ著手順序ニ關シ伺ノ件並ニ之ニ對スル三條太政大臣決

裁

鄭署公使え別信案

以別信申進候琉球藩の義に付別紙甲號の通内務省伺書え御指令有之猶乙號の通實際着手の順敘内務卿より伺出伺の通御指令相成候條爲御心得兩様共寫御廻し申候右に付本月廿七日頃内務大丞松田道之奉特旨該藩え被差遣近々下手相成右成果の實況都度々々報告可有之積に付追々可及御報知候尤貴下御職務上清國政府え對し該藩人取扱方は右處分行屆候後に無之ては却て不都合可有之に付右に付改て及指令候迄は萬先便申進置候通御心得何事も其儘に被成置輕易の舉動無之様御注意有之度候尤前文別紙は兩服とも福島領事えも相廻し廟算所在をも示諭至候事に候右可得貴意如此候也  
第八年五月廿日

外務卿 寺島宗則

尙以乙號伺書中廢徹遲速の義は一時該藩の都合に任せ云々と有之候は藩都合見計處分可及との意味の條此又爲御含申進候也

一明後廿二日勸業寮七等出仕武田昌次渡清に付別紙案文の

通内務卿より李鴻章への文書齎候間此意爲御心得寫差進候

註一、右ハ「別信案」トアルモ達セラレタルモノト認メラル

(附屬書一)

琉球藩處分方之儀伺

琉球藩官員へ説諭往復ノ顛末大要別紙ノ通ニ有之其内爲謝恩藩王上京ノ儀ハ彼等ノ存付ニテ此ニ至ラシメ度反復婉曲ニ申入書面ヲ以歎願ノ末一層嚴重及示諭候得共約リ藩王承知ノ上ナラテハ出京官員ノ手限ヲ以決着ノ權利無之趣ヲ以陳謝シ鎮臺支營設立藩制改革ノ條ニ於テモ同様故障申立候藩王ノ上京ハ少シク御用恕有之候ハ、官員赴任ノ上更ニ説諭ヲ加ヘ成ヘク來朝候様取計フ心得ニ候支營御設立ハ即今難被捨置急務ニ付御請ノ有無ニ拘ハラヌ御施設相成度儀ニ候間至急陸軍省へ御沙汰有之度藩政改革モ同段ノ儀ニ付適度ニ應シ施行致度存候隔年朝貢福州琉館廢止ノ件々ニ至テハ清國御交際上ニ係シ頗ル重大ニ有之候ニ付飽マテ保護ノ道ヲ盡シ粗藩治ノ體段ヲ定メ漸次推及ノ存慮ニ候處清國在留代理公使鄭永寧琉球藩使節北京到着衙門應接ノ始末伺越候趣モ有之且新帝即位ニ付其儘被差置候ハ、福州琉球館

七 琉球藩處分ニ關スル件 一三八

在留ノ者ヨリ藩元へ報知次第舊例ニ依リ賀慶使ヲ差立ルハ按中ニテ此期限モ近日ニ迫リ居候琉球藩御處分ノ儀ハ目今内外共致注視候折柄ニテ賀慶使ノ發遣ヲ默止致シ候テ御國權ニ相拘ハリ難被差置儀ト心配仕候乍去頑僻固陋ノ琉人何程丁寧ニ説解ヲ加ヘ候共違カニ承諾致シ候程無覺東抑清國關係ノ事ハ畢竟政府ノ御着目ニ依リ預メ標準ヲ立テ施設ノ順敘ヲ内定致シ置度存候間前件緩急輕重酌量ノ上廟謨御確定何分御下命有之度別紙應接書類等相添此段相伺候也  
明治八年五月八日

内務卿 大久保利通

太政大臣 三條實美殿

(附屬書二)

琉球藩官員へ説諭往答ノ始末

三月三十一日

今般御用召ニ付致上京候池城親方與那原親方幸地親雲上ヲ呼出シ御召呼ノ御用筋一往拙者ヨリ内達致スヘキ旨太政大臣ヨリ承知致候今般蕃地御征討ノ原由ハ去ル明治四年其藩管内ノ島民六十餘名臺灣島へ漂流土蕃ノ爲ニ殺害セラレ或ハ掠奪ノ難ヲ蒙リ殘暴ヲ極メシ始末ヲ聞食サレ人民保護ニ

付捨置レ難キ政府ノ義務ヨリ右談判ノ爲清國ニ公使ヲ派遣シ我所轄中ノ人民將來右様成殘暴ノ害ヲ蒙ラシムルニ忍ヒス巨萬ノ金額ヲ費シ問罪ノ師ヲ差向ラレ多少ノ將士瘴虜ヲ犯シ紛骨碎身忠力ヲ盡シ戰沒物故セシ者モ鮮カラス其際ニ當リ清國政府異議ヲ生シ更ニ使節ヲ差立ラレ幸ニシテ和議ニ決シ征蕃ノ役義舉ト見認將來蕃民ヲ化シ航客ノ安寧ヲ護シ我意トスル處ヲ意トシ處分可致トノ旨ヲ盟ヒ撫卹銀ヲ差出シタル都合ニ到レリト雖トモ其際談判中屢破レントスルノ勢アリテ若シ彼ヨリ兵端ヲ啓カハ已ヲ得ス相應スヘキトノ御決定マテニ相成 聖上敷慮ヲ惱マサセラレ政府大臣方ノ苦心如何計ソヤ是全ク其藩管內人民ノ爲ニ起レル事ナリ斯マテ御配慮ヲ掛奉リシ儀ヲ藩王及ヒ各達ハ何様心得ラレタルヤ

琉官曰ク御内諭ノ趣承知仕候評議ノ上御返答申上ヘシ御處分ノ得失厚薄ハ是迄各方ノ心中ニアルヘシ存慮ノ程承リ度

琉官曰ク誠ニ以御手厚御取扱ニテ藩王始メ幾重ニモ難有奉存儀ニ御座候

難有トノ儀ナラハ口上計ニテハ淺深厚薄ノ程分リ難シ其難

有實ハ何ヲ以テ表セラルヘキヤ

琉官曰ク退テ評議ノ上可奉伺候

開國ノ氣運ニ際會シ舊弊一掃御親政ノ世トナリ歐米及ヒ清國トモ條約ヲ結ヒ彼是公使ヲ派出シテ互ニ在勤シ大ニ昔日ノ面目ヲ改メ百事字內ノ公法ニ基キ御處分有之其人民ヲ保護スレハ夫レ丈ノ道ヲ盡サ、レハ公法ニ戻リ他日ノ障害ヲ來ス譯ナリ殊ニ琉球ハ所屬未定ノ如ク獨立ノ形ヲナスヲ以テ亞西亞航海ノ便ヲ開ク爲此土ニ據リ修船場トセント企望スル國モアル由ナレハ豫メ公法ニ照シ異議ヲ受サル程ノ備ナケレハ其期ニ臨ミ何程哀訴歎願アリテモ最早如何トモスヘカラス旁深遠ノ廟議ヲ以テ其藩保護ノ爲鎮臺支營ヲ那覇港上ニ召建ラル、御内決ナリ且其藩管內ノ島民臺灣島へ漂到セシモ堅牢ノ船無キヨリ生シ近年藩内ノ船舶諸方ノ洋中ニ於テ困難ニ遭ヒ適出來ノ產物海底ニ沉没スル儀惘然ニ思食サレ別段ノ譯ヲ以テ蒸氣船一隻下賜受害難民ノ家へ撫卹米ヲモ賜與ノ積リニ候厚キ御趣意ノ程能々被相心得度此内現在餘儀ナキ情合有之御請難致トノケ條アラハ幾度モ承知可致乍去舊習ニ拘泥シ目前瑣々タル小得失ヲ以テ陳述アリテモ御採用相成間敷外ニ内達ノ件々モ候ヘトモ今日ハ先ツ

此ケ條ノミ示諭ニ及ヒ候  
琉官曰ク篤ト評議ノ上可奉伺候

四月八日

三名出省申出ルニハ此程御内諭ノ趣評議致シ候處琉球ハ南海ニ僻在シタル僅カニ周圍百餘里ノ小島ニテ從來寸兵ヲ備ヘス禮義ヲ以維持ノ道ヲ立外國船來航ノ節モ全ク口舌而已ヲ以テ應待シ今日マテ無異ニ治リ來リ候新ニ兵營ヲ御設立相成候ハ、夫丈外國ヨリモ手強ク押掛リ却テ困難ヲ生シ可申外國船來著ノ折ハ御出張ノ官員モ候得ハ一々御相談ヲ遂ケ處置致シ重大ノ事件ハ時々伺越候ハ、不都合ノ事ハ有之間敷且愚昧ノ下民兵士ニ對シ如何成失敬ヲ生シ混雜ヲ醸シ出スモ難計候間支管御取立ノ儀ハ御用捨被下度蒸氣船下賜ノ儀ハ幾重ニモ難有次第ニ候得共御直管以來屢御手厚御取扱ヲ奉蒙此上重大ノ御品頂載仕候テハ恐入ル仕合清國御談判ノ末ニ候得ハ彼國ニ對シテモ如何ト存候間御申上度撫卹米ノ儀モ其節藩王ヨリ夫々致扶助置候事故是以御申上度前條申上候通琉球ノ儀ハ僻遠ノ土地ニ候間萬事從前通り被召置被下度旨演說ノ上書面ヲ出ス

各方案内通り西薩摩ヨリ東北奥羽ニ至リ殘ル所ナク畫一ノ

郡縣トナリ制度一變セシニ無之哉然ルニ琉球ニ限リ藩ニ列セラレ制度其外改正アリシ事アリヤ是殊遇ニ非ラスヤ固ヨリ好シテ御著手有之儀ニ非レ共世上ノ沿革ハ氣運ノ然ラシムル所以ニシテ其節ニ應シ之カ措置ヲ爲サレハ相叶ハサル事ニテ今日ニ至リ名分條理ニ關シ差置レ難キ事ノミ無據御改正ノ儀ニ候說諭ヲ加ヘ人氣ヲ調和シ之ヲ施行スルコソ執政ノ任ナリ行レ難キ事モ盡力ノ功ニヨリ幾分カ成功アル者ナリ此段ハ能々諒承有之度支管設立ノ事モ多少ノ手敷ニ及フ事ナカラ公法上差置難キ所ヨリ其藩保護ノ爲遠大ノ御評議ヲ以テ御著手有之事ニ候蒸氣船下賜撫卹米賜與ノ儀モ厚キ御趣意ニ應セス筋ナキ故障被申立候テハ不都合ニ可有之不條理ノ申譯ニテハ大臣方ニ向ヒ申解難致旨前日說諭ノ意ヲ擴充シテ反復諭解シ書面ノ趣ハ目前瑣々タル申譯ニテ心ニ落サルニ付一往差返候猶評議ノ上否ノ趣致承知度旨ヲ申聞ク

同月十八日

三名并ニ在勤津波古親方出省再往ノ御說諭ヲ蒙リ御趣意ノ程深ク奉波受候間蒸氣船及ヒ撫卹米下賜ノ儀ハ御請仕候鎮臺支營御設立ノ段ハ一藩ノ人心ニ關シ清國ニ對シテモ不相

濟他日如何成難題ヲ受ルモ難計御座候間御用赦被下度旨申立第一號第二號ノ通書面ヲ出ス

支營ノ儀ハ此内ヨリ縷々申述候通り即今難被捨置急務ヨリ御決議相成タル事ニテ此度御着手中ノ要領ニ有之清國ニ對シ不都合モ有之トノ事ナレトモ冊封ノ御請モ致シ東京ニ官員モ在勤セシ事ナルニ此一事ニ限り清國ニ對シ不相濟トノ申立モ承知難致不得心ノ事ニ候勿論分營ヲ置候事今日ニ始リ候義ニ無之兼テ陸軍省ノ取調モ有之既ニ政府ニ於テハ御内決相成居候故夫等ノ情實ヲ申立有之候テモ御採用可相成義ニ無之候乍去是迄再三示諭ノ上是非トモ御請難仕トノ事候得ハ此上何ケ度申入候共同様ナレハ形行ヲ以上申イタシ候外無之候就テハ政府ニ於テ如何ノ御沙汰可有之哉難圖拙者ニ於テモ申上ラル、ノ旨趣萬々尤ト不存候故款願ノ趣御採用有之候様盡力ハ不相叶候ニ付其段ハ分テ申入置候間可被心得何レ形行ヲ以上申可致追テ何分ノ御達シ可有之儀ト存スル旨申聞ク

同月廿三日

四名呼出シ鎮臺支營ノ儀申立ノ趣上陳致シ置候先日モ申入ル通り申立ノケ條拙者ニ於テモ更ニ至當トハ存セス自ラ何

依テ陳述ノ件々第三號ノ通書面ヲ渡ス

同廿八日

四人出省此内ヨリ細々御内達ノ趣謹ンテ御請申上候其内藩治御改正ニ付テハ體裁ハ何卒從前通被召置被下度體裁ヲ改ムル事ハ藩王攝政ヘモ申聞サレハ我々共ノ手限ニテハ御請難致旨演述書面ヲ出ス

今日ニ臨ンテハ名分條理ニ關スル事ハ必ス御改正無之テハ叶ハサル譯ニテ全ク體裁ヲ改スト言フ事ハ承リ屆難ク候猶又御趣意ヲ參酌評議被致度旨申聞ケ書面ヲ返ス

五月二日

四人出省一昨年モ制度ハ不被召替旨御達相成上下共安心仕居候間何卒體裁ハ是迄通被召置被下度旨演舌第四號先外務卿ノ口達書ヲ添ヘ前日ノ書面少シク文字ヲ改メ第五號之通差出ス

此程ヨリ度々御内論ニ及タル件々御請相成候儀モ鮮ナカラス御説諭ノ詮相立拙者ニ於テモ幸甚ニ候其内藩王謝恩ノ儀ハ上下ノ分ニ於テモ演説ヲ待ス輩下ヘ拜趨可有之コソ當然ノ儀ニテ固ヨリ泰然安居セラル、譯ニ有之間敷支營設立藩制改正ノ條モ再三申述ル通即今難被差置要務ニ付御着手ノ

分ノ御達シ可有之候間左様可被相心得其餘ノ件々内達可致各下承知通り積年一定シタル制度ヲ改メ藩ヲ廢シ縣トナサレシモ時勢ノ變遷ニヨリ如此ナラサレハ不相叶トコロヨリ御處分爲有之事ニテ數百年人心ニ凝結シタル君臣ノ情義ヲ割キ各藩異議ナク命令ニ從ヒシモ人々不忍ノ私情アリト雖モ時勢ノ沿革ヲ參酌義理ノ大小ヲ識別シテ朝旨ヲ遵奉セシモノナリ琉球ニ限り藩ニ列セラル、モ一般ノ制度ニ觸レ不體裁ノ儀ナカラ右ハ特旨ヲ以テ其儘被召置差向御着手無之テ叶ハサル事ノミ御施行ノ譯ニ候府縣同一ノ制度ニ被召變度儀ナレトモ舊來ノ習風モ有之一時ニ面目ヲ難改儀可有之ニ付御用捨被爲在適度ニ應シ改正粗府縣ノ制ニ準セラル、御内決ナリ是等ノ爲人撰ヲ以テ官員出張可被仰付且藩内一般明治ノ年號ヲ奉シ年中ノ儀禮等御布達通り奉行可被致刑法ハ國家ノ重事故司法省ノ定律通り御施行ノ筈ニ付刑法取調ノ爲擔任ノ者兩三名上京候様可被取計人才ヲ養育スルハ政務中ノ急要其藩ノ盛衰ニ關スル事ナレハ往々要樞ノ職ニ任スヘキ見込ノ者學事修業時勢通知ノ爲人撰ノ上上京可被申付トノ趣曲折ニ論達ス

琉官曰ク御ケ條多端ニ付御ケ條書ヲ以テ承知仕候得ハ仕合

譯ニ有之披見スルニ先外務卿ノ口達書ハ藩ノ一字ニ有之素ヨリ藩マテモ廢セラル、ト言フニハ無之況ヤ蕃地御征討以來形勢モ推移リタレハ一律ニ難申候御趣意ノ程貫徹候様内達ニ可及旨分テ太政大臣ヨリ承知ノ上御内論ノ儀ニ候處要領ノ件々ニ至リテハ筋ナキ故障ノミヲ以テ陳述御請不被致御説諭申候詮モ不相立全ク拙者ノ不行屆ヨリ情義徹底不致儀ニ可有之ト職掌ニ對シテモ不相濟殘念ノ次第ニ候各方モ藩王ノ命ヲ受ケ御召ニ應シ上京ノ事ナレハ時勢至當ノ事ナラハ快ク御請致サレ奉命ノ任ヲ全セラル、コソ當然ナルヘキニ斯マテ御手厚御趣意ヲ露程モ汲受ナク依然タル從前通ノ心得ニテ瑣々タル事ヲ拾ヒ集メ申立ラル、儀一圓了解致シ難ク候少シハ前後ノ勘考モ有之藩王ノ爲行先ノ事マテモ注意アリ度者ナリ今日迄ノ成行ヲ以テ上申ノ積ニ候處未タ情義ヲ盡サ、ル事モ可有之哉ト厚意中ヨリ今一往存慮ノ程申入候様被相心得候哉承知致シ度

琉官曰ク退テ評議ノ上御返答可申上候間兩三日御用捨被下度

初メ御内達ニ及ヒシヨリ往復ノ間時日遷延遂ニ今日ニ至リ大臣ニ對シテモ無申分仕合何レ明日ハ上陳不致候テハ不相



叶儀ト存候必スシモ別ニ答酬ヲ要スルニモ非ス今日御内諭ノ趣ニ依リ更ニ評議ノ廉モ候ハ、明朝マテニ承知致シ度琉官曰ク承知仕候

同日

午後四人私宅へ入來藩王上京ノ條ハ私共不調法ニテ御内諭ノ趣分明ニ諒得仕兼今日迄判然タル御答不申上奉恐入候右ハ重事件ニテ清國ニ對シテモ差障リ有之遠方へノ旅行ニ付テハ藩内一般ノ人心モ安シ間敷殊ニ藩王ハ兼々病身ニモ候間何卒此儀ハ御用捨被下度

以テノ外ノ申分ト存候定テ各方ノ心得違ニ可有之當輩ノ人ト雖トモ恩義ヲ受クレハ往テ謝スルハ通常ノ禮ナリ況ンヤ君臣ノ間ニ於テヲヤ莫大ノ恩義ヲ荷ヒナカラ事ヲ左右ニ托シ相拒マル、コソ奇怪ナリ昨年征臺ノ舉ヨリ清國談判ノ結局ニ至ル迄不容易國家御大事ニ及候モ畢竟琉球人民ノ爲ニ起リ候事ニアラスヤ右御手厚御取扱ノ次第ハ藩王初メ受テラレタル段申サルレトモ定メテ通徹致シタル儀ニ有之間敷往時ト變リ航海ノ道モ開ケ數日ヲ經スシテ坐ナカラ着京ノ事ニ候藩王全クノ病身ナラハ其職ヲ奉シ居ラル、道理モ無之右様ノ申立ニテ御開濟相成者ト被存候哉ノ旨申聞ク

ニ御座候

洞察被成下此一條ハ願意相達候様偏奉敷願候

情實ヲ察セサルニアラス候得共不勘辨ノ書面何ケ度承知候テモ致落手候儀不相叶候

註二、右附屬書ニノ附屬書類ハ總テ省略セリ

(附屬書三)

琉球藩處分ニ付内務省へ御指令

伺之趣清國關係之儀兩國交際ニ差響キ尤重件ニ候得共昨年征臺清國談判結局ニ至リ候上ハ今後琉球藩舉動ニ依リ大ニ御國權ニ相係リ其儘難差置候條左ノ條件ノ通可相心得事

但實際處分ニ付ハ官員派出被

仰付候上緩急見計ヒ可取計事

一從來同藩之儀隔年朝貢ト唱へ使節ヲ派遣シ或ハ清帝即位

ニ付慶賀使等ノ例規有之趣ニ候得共今後可廢止事

一福州ニ在ル琉球館可廢事

但貿易上ニ付存在致度候ハ、凡テ在廈門領事管轄ヲ受

從前之通差置人民往來在住致候儀ハ不苦候事

一從前藩王代替之節清國ヨリ官船渡來冊封受來候趣ニ候得

共今後可廢止事

琉官曰ク難有御趣意ハ藩王初メ實々深ク汲受奉リ候得共何分清國ニ對シ申譯無之ニ付御禮等改テ不申上儀ニ御座候何分吟味ノ上御返答可申上候間兩三日間御用捨被下度報上ノ時日ヲ過シ不都合ノ事ニ候得共其爲ニ一日ハ用捨可致候間明後日ハ必ス返答可被申候

同日

四人出省支營御設立政體御改正ノ儀ハ我々共迄ニテハ迎モ御請仕ル權無御坐候間藩元評議ノ上御答へ申上度旨演舌第六號ノ通書面ヲ出ス

依テ第七號ノ通說諭シ承知ノ證ヲ出サシム

同月四日

琉官四名出省藩王爲謝恩上京之儀猶又評議仕候處就病氣御斷申度趣ヲ以別紙號外之通書面ヲ出ス

此書面ノ趣甚不都合之次第ニ候幾回モ申入候通不容易高恩ヲ荷ヒ書面ヲ以御禮申上ルナトトハ君臣上下ノ分を辨ヘサル譯ニ候如此申立ヲ拙者ヨリ上申イタシ候儀不相調旨ヲ以差返ス

實體所勞ニテ不得止御理リ申上候義ニ候間幾重ニモ事情御

一藩王爲恩謝來朝并ニ藩政變革官員派出等之件々兼テ許可致置候ニ付猶着手ノ順叙緩急等取調可伺出事

一今後琉球藩ト清國トノ關係ハ都テ外務省ニ於テ引受處分可致事

明治八年五月九日

(附屬書四)

琉球藩上京官員ニ說諭往復之顛末取調伺出候處御指令之趣致承知候然ル處條款處分ニ付ハ官員派出被仰付候上緩急見計可取計云々御達ニ付猶又着手順叙ノ見込左件ニ申上候

一清國關係之事ハ都テ脈絡致候故下ノ四ヶ條共御廢止之命令書派出之官員へ御下渡於藩元嚴達爲致其内賀慶使派遣隔年朝貢之二件ハ其期限モ差迫リ不可差置急務ニ付御請之有無ニ不拘斷然差留可然哉在北京及福州琉球館及ヒ藩王代替ニ付冊封廢止之二件ハ時期切迫ト申ニモ無之候間廢撤遲速ノ間ハ一時該藩之都合ニ任セ可然哉

一藩王爲謝恩上京之件ハ派遣ノ官員ヨリ反復說諭承伏爲致度候得共若就病氣事實不得止節ハ延期間濟差向親族名代ヲ以上京爲致可然哉

一鎮臺支營設立之儀ハ既ニ御達濟ニ付陸軍省派出之士官當

省派遣ノ官員ト同時出張諸事協議ヲ遂候様同省へ御下命有之度

一明治之年號ヲ奉シ年中ノ禮式御布告通遵奉之件

一刑法之儀司法省定律通奉行爲致候ニ付差向取調ノ爲メ擔當ノ者上京之件

一少壯之者學事修業時世通知之爲上京之件

前三ヶ條御請仕候得共遲緩ノ琉人實際猶豫モ難圖候間派遣ノ官員ヨリ督責速ニ履行可爲致候

一藩政改革之儀モ御請仕居候得共猶又説諭ヲ加ヘ適度ニ應シ着手爲致度布置之體段ハ豫メ御治定之御旨趣派出之官員へ爲心得度候ニ付御沙汰有之度依テ爲御參考別紙ヲ以相伺候

右件々至急御下令有之度琉藩之儀兼而上申仕候通名分條理而已ヲ以一時ニ致變革候儀ハ至難ノ情實有之候ニ付先藩治ノ體面ノミヲ改メ事務ヲ各官ニ配當セシメ現實之取扱振ハ從前之通据置其餘ハ一切不問ニ置キ漸次人氣ノ折合ヲ見定メ順叙ヲ追ヒ着手致シ度存候此段相伺候也

明治八年五月

内務卿 大久保利通

太政大臣 三條實美殿

一何之通

明治八年五月十八日

註三、右文書日附ヲ缺クモ一四〇ニ「去ル十七日太政大臣へ御何相成タル七ヶ條」云々トアルニ據リ五月十七日何出タルモノト認メラル

一三九 五月二十九日 松田内務大丞ヨリ 大久保内務卿宛

琉球藩王ノ對遇方及藩王、藩吏トノ音信贈答謝絶ニ關シ何ノ件竝ニ之ニ對スル大久保内務卿指

令

附屬書 五月二十三日松田内務大丞ヨリ東京出張琉球藩 吏宛書翰寫

贈品返却ノ旨通知ノ件

第二號

今般琉球藩へ差遣被 仰付候ニ付清疏之上心得方伺書一該藩主ハ名ハ藩王ニ候共當今一等官ニ被置候儀ニ付則チ他ノ一等官人ニ對スルト同一規之對遇ヲ爲シ尤モ今般奉命御用筋ニ付テハ諸般指揮之權ヲ以テ對遇致シ候テモ可

然哉

一該藩王ト政府ト該藩吏ト内地官吏ト之間其對遇交際之體裁ヲ察スルニ該藩ハ小ナリト雖モ自ラ一ノ君主國ノ體ヲ爲シタルヲ以テ其政府ニ事フルハ所謂附庸國主ノ其本屬ノ國ニ事フル如ク藩吏ノ内地官吏ニ接スルハ外國人ノ我カ官吏ニ接スルカ如ク其音信贈答ノ煩ナル實ニ其弊ノ多キヲ視ル然レトモ人間交際ニ於テ音信贈答スルハ道理上ニ戻ラサルヲ以テ他人ノ贈物ヲ拒ムノ理ナク受ケテ之レニ酬ユルノ理アリ只其人ト交際ノ厚薄ニ依リ我レニ贈ルヘク我レ之レヲ受クヘキ義アル乎如何ヲ明ニスルニアル耳然レハ音信贈答ハ漫ニ非トシテ排斥拒絶スヘキノ道理アラサルニ似タリト雖モ其弊害ハ之レヲ避ケ之レヲ矯メサル可カラサル儀ト存候抑モ今般下官奉命御用筋之中ニハ彼藩制改革之條件モ御座候處先ツ其身ト彼藩王及ヒ藩吏ト之交際上ニ於テ其弊タリ害タルモノヲ踏ミ行ヒ候テハ則チ自ラ藩制改革藩風矯正ノ機關ニ差響キ公務上ノ損害不少ニ付斷然藩王ト藩吏トヲ不問音信贈答一切謝絶致シ度ト存候右ニテ從來政府之該藩ヲ對遇上ニ於テ差響キ等之事共ハ無御坐哉

七 琉球藩處分ニ關スル件 一三九

(附屬書)

別紙

諸君御清適奉賀候然レハ昨日ハ種々ノ佳品御惠贈被下奉多謝候其節ハ他行中留守居ノ者トモヨリ彼は御談判ニ及ヒ候趣ニテ失待ノ段多罪々々就テハ早速拜納致シ度ノ處抑モ諸君ト拙者ト舊懇交アルニアラス畢竟職務上ノ御面識ニ候得ハ此ノ御贈品モ亦自ラ職務上ノ音信ニ屬シ可申ニ附テハ則

但シ既ニ過日當地在留琉官ヨリ種々之品物ヲ贈レリ依テ別紙之通書翰ヲ贈リ贈物不殘返却ニ及ヒ置申候爲御參考供御一覽候

明治八年五月廿九日

内務大丞 松田道之

内務卿 大久保利通殿

指令

一第一條ハ何之通

第二條藩風ヲ矯正スル緊要候條音信謝絶之儀尤ノ事ニ候猶厚ク注意從來ノ習俗一變御旨趣貫徹候様盡力可致事

明治八年六月五日

内務卿 大久保利通印

(奉使琉球始末)

テ職務上ニ取り之ヲ受納スヘキ筋無之加之拙者儀今般貴藩ニ差遣ノ命ヲ奉シ候上ハ諸君ト拙者トニ於ケル職務上ノ交際猶一層切要ニツキ此贈答等ノ如キハ勉メテ御互ニ謝絶致シ度旁以テ佳品其儘返上致シ候條御握手下サレ度折角ノ御厚志ニ戻リ候段不本意ニ候ヘトモ在職ノ身不得止ノ段宜シク御酌量下サレ度右要用如斯ニ候也敬白

明治八年五月廿三日

内務大丞 松田道之

高安親方殿  
津波古親方殿  
與那原親方殿

(奉使琉球始末)

一四〇 五月二十九日

松田内務大丞ヨリ  
大久保内務卿宛

琉球藩出張中ノ取計方針ニ關シ何ノ件並ニ之ニ  
對スル大久保内務卿指令

第三號

哉

一數百年ノ例規ヲ清國ヘ一言モ不告シテ廢止ノ儀ハ難致ニ付一應彼ノ國ヘ謝辭ヲ送り度トカ又ハ年來ノ恩義モ有之大小ノ勢モ異ナレハ當藩ヨリ謝絶ノ表ヲ送ル事能ハス去トテ此儘不告シテ絶ツ事不能トカ兩様ノ中ヲ申立候ハ、都テ清國ニ對シテ應接ハ政府ノ御引受ニ付該藩ヨリ直々應接ハ致ス間數依テ命令ノ通り速ニ遵奉可致旨申達シ可然哉

一賀慶使進貢使ノ發遣ヲ止メ候ハ、必ス清國ヨリ嚴重ノ督責ヲ受ケ之ニ答ルニ無辭當藩ノ存亡ニ關スル等申立候節ハ該藩ハ固ヨリ吾日本政府ノ管轄タル事明白ナリ故ニ清國ニ對シテハ政府ニ於テ御處分有之事故該藩ヘ督責致シ候節ハ該藩ニ於テハ唯吾日本政府ヨリ差留メラレタル儀ニ付此一條ハ萬事吾日本政府ト談判可被致旨ヲ以テ返答ニ及ヒ置可申旨申聞ケ可然哉

一藩制改正ノ儀ハ遂ニハ府縣同一ノ制ニ至ラシメラル、御趣意ニテ右御着手ノ初步ト存候然レ共猶藩王ニ被任置候上ハ小島ト雖トモ自ラ立君政治ト見做シ藩王ハ天皇陛下ニ對シ君臣ニシテ藩内ノ人民ハ藩王ヘ對シ又

今般琉球藩ヘ差遣被 仰付候ニ付着琉之上取計方伺書  
一去ル十七日太政大臣ヘ御伺相成タル七ヶ條ヲ旨トシ着  
琉之上緩急前後見計ヲ以テ着手致シ可然哉

一七ヶ條ノ旨ヲ體任スルハ勿論ノ事ニ候得共成功ヲ目的トシ或ハ寛ニ出テ或ハ猛ニ出テ臨機說破致シ可然哉

一清國關係ノ事御廢止之命令書相渡候節ハ別紙<sup>(註一四三)</sup>口演書ヲ添ヘ猶又形勢情實ヲ陳實陳述差置レ難キ次第申入度存候右之通取計可然哉

一命令書ハ藩王ニ面會ノ上直受ニ非サレハ不相渡所存ニ御座候乍去若哉藩王病氣ニテ事實不得止時ハ攝政ヘ相達シ可然哉

一清國ノ關係謝絶ノ儀ハ琉球藩第一欲セサル所ニテ藩内一般動搖故障百出如何様說諭ヲ加エ候共種々ノ苦情申立承服不致遂ニ哀訴歎願ノ爲メ再ヒ琉官上京致シ度申立ルモ難計然レトモ抑今般下官ヲ被差遣候儀ハ即チ此等處分ノ外更ニ他事無之儀故其擔任ノ權義ヲ以テ斷然採用不致命令之御旨趣是非共遵奉爲致其内寬急順序等篤ト勘考其寬ナルモノハ適宜延期ノ取計可致所存ニ御座候右ニテ可然哉又ハ其願ニ任セ再上京ヲ差許シ可申

君臣ノ名分ヲ存シ置ル、儀ニ可有之乎依テ若シ藩治改革ノ御趣意條理等尋問ノ節ハ前件ノ趣ニ基キ藩王ノ稱アル以上ハ固ヨリ立君國ニテ其人民ハ藩王ノ臣民ナリ然レトモ藩王ハ

天皇陛下ノ臣ニシテ且藩屏ノ任アレハ其人民ヲ統撫スルノ任ヲ

天皇陛下ヨリ受ケタル者ニテ其人民モ

天皇陛下ニ對シテハ即チ所謂大君トシ事ユルノ義アリ

テ維新以前ノ諸藩ノ制ト異ナル事ナシ且政治ノ本旨ヨ

リ論スレハ藩王ノ爲ニ人民アルニ非ス人民ノ爲ニ藩王アル義ナレハ乃チ

天皇陛下ヨリ人民ノ爲ニ藩王ヲ置テ假リニ君臣ノ義ヲ

結ハシメ之ヲ統撫セシメタルモノト謂フヘシ故ニ其大

制ニ至リテハ固ヨリ

天皇陛下ノ裁制ニ出ツヘキ儀ニ付當今府藩縣制置體裁ノ上ニテ其義ニ協ハス其體ニ合ハス其改メサル可ラサルノ要件ハ今ヨリ改正ニ相成筋ニテ乃チ官名ヲ改メ勅奏判ノ階級ヲ立テ藩制ノ體裁ヲ定メラル、儀ニ有之就中藩王親ラ政ヲ執ルヘキ條理ナルニ其長幼ヲ不問常ニ

攝政ノ官ヲ置クハ最モ無謂儀ニ付此等ノ如キ改正ノ第一トスヘキ筋共申聞ケ可然哉

一 藩王上京ノ儀ハ該藩ノ最モ所難ニ候處我カ政府ノ版圖タル事ヲ表シ其藩王ノ我カ政府ニ事フルノ義務上ニ於テ至要不可缺事ニ付殊力ヲ盡シ説諭致シ度所存ニ御座候就テハ説諭ノ内聊カ方便ヲ用ヒサルヲ得サルニ付該藩ノ事他府縣同一ノ制ナラハ固ヨリ管内人民ノ爲ニ謝詞トシテ上京ス可キ義務ナシ如何トナレハ管内人民ハ即チ政府統撫ノ人民ニテ其人民ノ保護ノ爲メ如何様ノ重大事務ヲ行フトモ其管轄ノ長官禮謝トシテ上京スヘキ理ナシ然ルニ今該藩ハ藩王ニシテ其人民ハ藩王ノ臣民ナレハ其人民ヲ本屬政府ヨリ保護ヲ受タレハ其藩王上京シテ謝セサルヘカラス是政府ニ於テハ其版圖ノ藩王ヲシテ其義務ヲ盡サシメ該藩ニ於テハ君主國王ノ其本屬政府ニ事ルノ體ニ於テ不可缺ノ要務ナリ故ニ速ニ上京シテ其藩王タルノ義務ヲ表セサレハ自ラ其藩王タルノ體面ヲ失フ道理ニシテ他ノ府縣長官ノ體面ト規フ同フシ勢ヒ大變革ノ舉ヲ促サ、ルヲ得サルニ至ラン依テ斷然姑息ノ情ヲ絶チ前件ノ條理ヲ明ニシテ速ニ上京

テ命令ヲ拜聽アルヘシ云々説諭致シ候テモ可然哉

但此件ハ下官ヨリ公然申聞ケ候テモ不都合モ可有之ト存候ニ付該藩在留之當省官吏ヨリ内諭ニ爲及候心得ニ御座候

一 藩王若シ政ヲ執ル事能ハサル程ノ重病ト申出候節ハ病間ヲ待テ面接ヲ要シ候テモ可然哉又ハ第四條伺ノ廉ニ引付都テ攝政ト談判致シ可然哉

一 藩王病氣ハ蓋シ實病ニ非サルヘシ若シ實病ニ非サルヲ認メ嚴ニ之ヲ督責スルトキハ事實障得ヲ生シ可申乎モ難計依テ事ニ害ナシト見込候時ハ其實病ニ非ルモ之ヲ實病ニ見做シ處分致シ可然哉尤其之ヲ實病ト視做スニハ其醫案ト藩王及ヒ藩吏トノ申立ヲ證ト致シ候テモ可然哉

一 隔絶ノ土地故差掛リノ小事件ハ臨時處分ノ上御届申出可然哉

一 人心ヲ動搖セシメサル様注意シ幾重ニモ懇篤ニ接遇致シ命令ケ條ノ外ハ不問ニ置キ可申候得共前途ハ内地一般ノ制ニ改メラル、儀ニ可有之候間將來御着手之一助ニモ可相成事共ハ取調罷歸可然哉

アルヘシ云々ト説諭致シ候テモ可然哉

一 藩王上京ヲ難ニスル情實ノ中若シ王自ラ上京スルトキハ政府又如何様ノ御下問或ハ御沙汰等有之モ難計身藩王ノ任ニ居レハ義以テ直ニ奉答セサルヲ得スト事實困却等ノ事無キニシモ非サル乎ト存候若シ然ラハ假令王上京アルトモ今般下官奉命ノ簡條ノ外ハ更ニ御下問御沙汰等ノ事無之只

天皇陛下ニ拜謁シテ恩ヲ謝シ其藩王タルノ體面義務ヲ表スル耳ト説諭致シ候テモ可然哉

一 藩王上京ヲ謝スルニハ必ス病ヲ以スヘシ然レハ今般下官着琉王ニ面接ヲ要スルトモ病ノ名アルヲ以テ勢ヒ面接ヲ謝絶セサルヲ得サル儀ト存候依テ假令病ニ因テ上京ヲ謝スルトモ其病ハ遠洋ヲ超ヘ旅行スル事難シト雖モ國ニ在テ政務ヲ執ル事ヲ得レハ政府ノ命令ヲ聽クニ代人ヲ以テスルノ條理無之ニ付病ヲ推シテ面接アルヘシ若シ面接スル事能ハサル病ニ非サレトモ上京スル事能ハサルノ身ニシテ他人ニ面接ヲナスハ法ノ上ニ於テ爲スヲ得ヘカラサルナト誤認等ノ事共ニハ無之哉若シ然ラハ法ノ上ニ於テ決シテ懸念無之儀ニ付早速面接シ

右件々相伺候間御裁決ヲ仰キ候也

明治八年五月廿九日

内務大丞 松田道之

内務卿 大久保利通殿

指令

〔朱書〕何之趣筆拾貳條攝政へ談シ不苦其餘總テ何之通可取計事

明治八年六月五日

内務卿 大久保利通印

〔奉使琉球始末〕

一四一 五月二十九日 三條太政大臣ヨリ琉球藩ヘノ達書

琉球藩ヨリ清國ヘノ使節派遣並ニ清國ヨリノ冊封ハ今廢止スヘキ旨通達ノ件

第八號

琉球藩

其藩ノ儀從來隔年朝貢ト唱ヘ清國へ使節ヲ派遣シ或ハ清帝即位ノ節慶賀使差遣シ候例現有之趣ニ候得トモ自今被差止候事

藩王代替ノ節從前清國ヨリ冊封受ケ來リ候趣ニ候得共自今

被差止候事

右之通可心得此旨相違候事

明治八年五月廿九日

太政大臣 三條 實美

註 本號文書ニ關シテハ「奉使琉球始末」ニ七月十四日松田内務大丞首里城ニテ「第八號第九號二通ノ御達書ヲ朗讀シ了テ今歸仁王子ニ渡シ且御達書ノ旨趣誤解ナカラシメン爲メ猶ホ演述スヘキ旨趣アリ即チ此一書ヲ讀知ニ及フヘキ旨ヲ述ヘ第十號ノ書ヲ朗讀シ了テ又今歸仁王子ニ渡ス」トアリ

一四二 六月三日 三條太政大臣ヨリ琉球藩ヘノ達書

明治ノ年號ヲ奉スヘキ旨竝ニ藩制改革等ニ關シ

通達ノ件

附屬書 琉球藩職制

第九號

琉球藩

一藩内一般明治ノ年號ヲ奉シ年中ノ儀禮等總テ御布告ノ通遵行可致事

一 刑法定律ノ通施行可致因テ右取調ノ爲メ擔當ノ者兩三名上京可致事

一 藩制改革別紙ノ通施行可致事

一 學事修業時情通知ノ爲メ人撰ノ上少壯ノ者十名程上京可致事

右條件之通可心得此旨相違候事

明治八年六月三日

太政大臣 三條 實美

(附屬書)

琉球藩職制

一藩 王 一等官

勅任官トス

一大 參事 一員 四等官

一 權大參事 一員 五等官

一 少參事 二員 六等官

一 權少參事 二員 七等官

以上奏任官トス藩議ヲ以テ人撰具狀ノ上

宣下アルヘシ

一大 屬 八等

- 一 權 大 屬 九 等
- 一 中 屬 十 等
- 一 權 中 屬 十一等
- 一 少 屬 十二等
- 一 權 少 屬 十三等
- 一 史 生 十四等
- 一 藩 掌 十五等

以上判任官トス藩議ヲ以テ相命シ候上届出ヘシ

一等 外 一等 二等 三等 四等

俸給ハ渾テ藩費ヲ以テ適宜給與スヘシ

(奉使琉球始末)

註 本號文書ニ關シテハ一四一ノ註參照

一四三 七月十四日 琉球出張松田内務大丞ヨリ

琉球藩王宛

琉球藩ニ通達セラレタル諸關係ニ關シ説明竝ニ右諸關係ニ遵奉セラレヘキ旨要望ノ件

第拾號

七 琉球藩處分ニ關スル件 一四三

拙者今般政府ノ命ヲ奉シ當藩ニ來ルノ主意ハ別紙ノ御達書ヲ貴下ニ渡シ猶貴下ヲシテ其條件ヲ速ニ遵奉セシムルニ盡力スルヲ以テ本旨トス故ニ今般ノ事ニ屬スル百般ノ手續ニ於テハ實際適宜ニ處分スヘキノ委任ヲ受ケタリ因テ熟ラ考フルニ今般御達書ノ條件ハ當藩ニ取テハ非常ノ事件ナルヲ以テ藩論若シ或ハ之ヲ異トシ徒ラニ紛議ヲ主張セラルトキハ第一貴下ニ或ハ命令違背ノ名狀ヲ蒙ラレン事ヲ恐ル然ルトキハ第一貴下ノ政府ニ事ヘラル、ノ名分ヲ失ハル、ノミナラス亦政府拙者ニ命シ此遠洋ヲ越テ被差遣タル重厚ナル御主意モ遂ニ徒事ニ屬セン乎如斯ハ決シテ貴下ノ本旨ニアラサルヘシ然レハ速ニ遵奉セラレンニハ審カニ條理名分ノアル所ヲ究メ而シテ理勢以テ宜シク然ラサル可ラサル所以ヲ領知セラルヘシ貴下及ヒ藩下人民一般ノ爲メニ切ニ希望スル所ナリ乃チ別紙御達書ニ更ニ拙論ヲ加ユ抑モ琉球國ノ事六國史々記等ノ諸書ニ表出シ其土地ヲ論スレハ薩摩大隅諸山ノ綿亘斷續スル所ニシテ地脈相連ナリ古昔ヨリ我カ日本政府ノ管内タル事歴々證スヘシ然ルニ中古以降我カ朝政權武門ニ歸シ兵馬騷擾遐方ヲ綏撫スルニ違アラサルノ際當時琉球國王自ラ明ニ通シ後又清ニ通シ凡ソ五百年ノ間兩屬ノ國

トナリ實ニ不條理ナリト雖トモ古今勢ヲ異ニシ當時ノ勢偶々政府ノ譴責ヲ免カレタリ爾後天下ノ形勢次第ニ變遷既ニ七百年既暨ノ政權ヲ挽回シテ御親政ノ世トナリ歐米諸國及ヒ清國ト條約ヲ結ビ彼是五ニ公使ヲ在勤セシメ大ニ昔日ノ面目ヲ改メ百事字内ノ條理萬國ノ公法ニ照サ、ルヲ得ス乃チ琉球國ノ如キ一國ニシテ兩政府ノ制ヲ受ル等條理及公法ニ於テ宜シク改メサル可ラサルニ歸ス故ニ去五年此國ヲ藩トナシ貴下ヲ藩王ニ被任一等官及ヒ華族ニ被列如キ即チ内部ニ對スル部分ニ於テ多少御着手アリト雖トモ其清國ニ關涉スル條件即チ外部ニ對スル部分ニ於テハ未タ全ク舊慣ヲ脱セサルモノアリ内部ノ部分モ亦猶ホ御處分ノ及ハサル可ラサルモノアルヲ以テ今般其不可忽條件ノミ御着手ニ相成ルナリ殊ニ琉球ノ地ハ良ヤ獨立ノ形ニ似タルヲ以テ亞西亞航海ノ便宜ノ爲メ此地ヲ以テ修船場トナサン事ヲ企望スル國モ往々アル由ナレハ我カ日本政府ノ版圖タル事ヲ判然表章セサレハ前途當藩ノ存亡ニ關係スルノ恐レナキ能ハス旁以テ別紙ノ通り被仰出タル儀ナリ固ヨリ當藩ノ情實ハ政府ニ於テモ十分洞徹アリト雖トモ前陳スル如ク百事皆ナ不得已ニ出テ仰モ世上ノ沿革ハ氣運ノ然ラシムル所ニシテ國家

ノ事亦其沿革ニ從テ裁制セサル可ラサルモノナレハ希クハ貴下能ク此理ヲ明ニシ此勢ヲ審カニシ御達書ノ條件速ニ遵奉セラレン事ヲ今此ニ御達書ノ條件ニ對シ左ノ說明ヲ加フ一從來隔年朝貢ト唱ヘ清國へ使節ヲ派遣シ或ハ清帝即位ノ節慶賀使差遣シ候例規有之趣ニ候得トモ自今被差止之條時勢次第ニ變遷今也御親政ノ世トナル以上ハ大ニ昔日ノ面目ヲ改メ百事字内ノ條理ト萬國ノ公法トニ照ラシテ御處分ニ相成ラサル可ラサル儀ハ縷々前陳スル通りニシテ則チ當藩ノ兩屬曖昧ノ體面ハ斷然改正シ我カ日本政府ノ版圖タルノ條理ヲ明ニセサレハ政府ニ於テハ我カ版圖ノ國ヲ待ツノ體ヲ失ヒ當藩ニ於テハ其本屬政府ニ事フルノ體ヲ失ヒ結局日本政府ノ體面ヲ缺損スル道理ニ付理勢一日モ差置カレ難キヲ以テ乃チ朝貢及ヒ慶賀使等ノ如キハ被差止タル儀ニ付速ニ遵奉可被致一藩王代替ノ節從前清國ヨリ冊封受ケ來リ候趣ニ候得共自今被差止之條

我カ政府ノ版圖タル以上ハ清國ノ冊封ヲ受ケラルヘキ道理無之依テ被差止タル儀ニ付速ニ遵奉可被致一藩内一般明治ノ年號ヲ奉シ年中儀禮等總テ御布告之通達

行可致之條

日本政府ノ版圖タレハ則チ此年號ヲ奉シ此年中儀禮等ヲ遵行セラルヘキハ論ヲ待タス就中年號ニ至テハ固ヨリ從來奉行ノ由ナリ然レトモ我カ日本ニ對スル事件ニハ此年號ヲ奉シ清國ニ對スル事件ニハ彼ノ年號ヲ奉スル等ノ慣行アルヲ以テ視ルトキハ純然我カ年號ヲ奉行ト名狀シカタクシ尤モ清國ノ關係ヲ免レサルノ際ハ勢不得已ト雖トモ既ニ之ヲ絶ツ以上ハ彼ヲ廢シ純ラニ此ヲ奉シ即チ内外ニ對シテ皆ナ此年號此儀禮ヲ奉行可被致一刑法定律ノ通施行可致因テ取調ノ爲メ擔當ノ者兩三名上京可致之條

刑律ヲ定ムルハ專ラ

天皇陛下ノ權ニアツテ府藩縣ノ以テ得テ制定スヘキモノニ非ス故ニ當藩從來適宜ニ制定スル所ノモノハ皆之ヲ廢シ政府ノ定律ヲ遵行セラルヘシ既ニ遵行ト決スト雖トモ其一種ノ學ヲ研究セサレハ容易ニ行フ可ラス因テ擔當ノ者上京シテ可取調トノ儀ニ付速ニ遵奉可被致一藩制改革之條

當藩之體裁タル當今ノ事實ヲ以テ論スレハ則チ立君國

ニテ其人民ハ藩王ノ臣民タル形ヲ爲シ而シテ藩王ハ固ヨリ

天皇陛下ノ臣ニシテ且藩屏ノ任アレハ其人民ヲ統撫スルノ任ヲ

天皇陛下ヨリ受ケタルモノニテ其人民モ

天皇陛下ニ對シテハ即チ所謂大君トシ事ユヘキノ義ア

ツテ維新以前ノ諸藩ノ制ト異ナル事ナシ又政治ノ本旨

ヨリ論スレハ藩王ノ爲メニ人民アルニアラス人民ノ爲

メニ藩王アル義ナレハ即チ

天皇陛下ヨリ人民ノ爲メニ藩王ヲ置之ヲ統撫セシメ

タルモノナリ故ニ其大制ニ至テハ固ヨリ

天皇陛下ノ制御ニ出ツヘキ儀ニ付當今府藩縣制置體裁

上ニ於テ其義ニ協ハス其體ニ合ハス其改メサル可ラサ

ルノ要件ハ今ヨリ改正ニ相成ル筋ニテ則チ官名ヲ改メ勅

奏判ノ階級ヲ立テ藩制ノ體裁ヲ定メラル、儀ニ有之就

中藩王親ヲ藩政ヲ執ラルヘキ條理ナルニ其長幼ヲ問ハ

ス常ニ攝政ノ官アルハ最モ謂ハレ無キ儀ニ付此等ノ如

キモ亦改正ノ要件トス

一學事修業時情通知ノ爲メ人撰之上少壯ノ者十名程上京可

致之條

當今ノ形勢ヲ熟視スルニ藩制ハ勿論藩内人民ノ知識事業  
モ其沿革ニ從テ開明進歩セザレハ遂ニ國家ヲ維持スル事  
能ハサルニ至ル而シテ其開明進歩セシムルニハ則チ文明  
ノ學事ヲ研究シ沿革ノ時勢ヲ審明ニスルニアリ今内地ノ  
景況ハ文運次第ニ開ケ時勢次第ニ新ニ駁々乎トシテ視ル  
ヘキモノアリ故ニ自今少壯敏才ノ者ヲ撰ンテ内地ニ留學  
セシメ其得業ニ隨テ藩内ノ爲メニ從事セシメ順次如此シ  
テ不絶トキハ藩内ノ有益大ナリトス是此命ノアル所以ニ  
付速ニ遵奉可被致

今般ノ御達書中ニ明文ナシト雖トモ自ラ其中ニ含蓄セル條  
件ト政府ノ命令ニ出テスシテ貴下自ラ憤發シテ其本分ヲ盡  
サルヘキ條件ト會テ既ニ御達シニ相成リタル條件トニ對シ  
左ニ説明ヲ加フ

一在福州ノ琉球館廢止可被致事

此件則チ朝貢被差止之條中ニ含蓄セリ抑モ既ニ朝貢ヲ  
絶ツ以上ハ公館ヲ存スル道理無之依テ御廢止ニ相成ル  
儀ナリ尤モ從來館中ニ於テ商賈買賣ノ事業モ有之由幸  
ヒ清國ハ條約國ナレハ商法上ニ就テ人民往來在留ノ儀

一鎮臺分營ヲ被置事

此件ハ既ニ御達ニ相成タル部ニ屬セリ抑モ政府ノ國內  
ヲ經營スルニ當テハ其要地所在ニ鎮臺又ハ分營ヲ散置

ハ我カ在厦門領事ノ管轄ヲ受クレハ不苦トノ御詮議有  
之ニ付若シ人民ニ於テ從前ノ通り商業致シ度トノ事實  
アラハ伺出ララルヘシ

一謝恩トシテ貴下上京可被致事

此件則チ貴下自ラ憤發シテ其本分ヲ盡サル、ノ部ニ屬  
セリ抑モ當藩下ノ人民臺灣島ニ漂到土蕃ノ爲メニ殘刻  
ノ害ヲ蒙リシコト實ニ差置レ難キ事件ニ付以來其害ヲ  
蒙ル者無ラシメント右談判ノ爲メ清國ニ使節ヲ遣ハサ  
レ巨萬ノ金額ヲ費シテ問罪ノ師ヲ差向ラレ戰死病没ノ  
者モ鮮カラス其際ニ當リ清國ヨリ異議ヲ起シタルニ付  
更ニ大使ヲ差遣ハサレ幸ニシテ談判和議ニ決シ征蕃ノ  
役彼政府ヨリ義舉ト視認メ今後蕃民ヲ化シ航客ニ災害  
ヲ加ヘシメス我カ意トスル所ヲ意トシテ處分致スヘキ  
トノ旨ヲ盟ヒ撫恤銀ヲモ差出シタレトモ其間屢破レン  
トスルノ勢アリテ若シ彼ヨリ兵端ヲ啓カハ已ムヲ得ス  
相應スヘシトマテニ御決定ニ相成リ

聖上敷慮ヲ惱マサレ政府諸臣ノ苦心一方ナラス是全ク  
當藩下人民保護ノ事ニ起レルナリ然レトモ其藩主ノ任  
ニ在テハ其管民ノ爲メニ速ニ上京恩義ヲ謝セラル、ヲ

シテ以テ其地方ノ變ニ備フ是政府國土人民ノ安寧ヲ保  
護スルノ本分義務ニシテ他ヨリ之ヲ拒ミ得ルノ權利ナ  
シ是斷然御達ニ相成タル所以也藩内姑息ノ人或ハ言ハ  
ン夫レ琉球ハ南海ノ一孤島如何ナル兵備ヲ爲シ如何ナ  
ル方策ヲ設クルトモ以テ他ノ敵國外患ニ當ルヘキ力ナ  
シ此小國ニシテ兵アリ力アルノ形ヲ示サハ却テ求テ敵  
國外患ヲ招ク基トナリ國邊ニ危シ寧ロ兵ナク力ナク惟  
禮義柔順以テ外ニ對シ所謂柔能制剛ヲ以テ國ヲ保ツニ  
如カスト此言ヤ琉球ヲ一ノ獨立國ト視做シ孤力自ラ他  
ニ當ルノ責ヲ有スルノ論ニ似タリ其見識亦大ニ謬レリ  
抑モ琉球ハ我政府版圖ノ一國ニシテ獨自他ニ當ルヘキ  
ノ責ナク其強ト云ヒ弱ト云フ皆ナ日本全國ノ責ナリ敵  
國外患ノ琉球ニ於ケル政府固ヨリ琉球一國ノ事ヲ以テ  
處分セス即チ日本全國力ヲ以テ之ヲ當ルヘシ彼亦琉球  
一國ヲ以テ敵トシ視ズ日本全國ヲ以テ敵トシ視ルヘシ  
故ニ豈琉球一地方ノ形ニ因テ敵國外患ヲ防クノ得失ニ  
關センヤ

前陳ノ件々ハ深遠ノ廟謨ヲ以テ御確定ノ儀ニ付舊格ニ拘泥  
シ何程苦情ヲ述ヘラル、トモ決シテ御採用ニ相成ルヘキ儀

ニ無之ニ付速ニ違奉被致度貴下及ヒ藩下人民一般ノ爲メ希望ノ至リニ不堪ナリ下悉

明治八年七月十四日

内務大丞 松田道之

琉球藩王尙泰殿

(奉使琉球始末)

註 本號文書ニ關シテハ一四一ノ註參照

一四四 七月二十九日 琉球出張松田内務大丞ヨリ  
大久保内務卿宛

琉球藩ノ清國トノ關係謝絶ニ關シテハ尙督責中  
ナル旨報告ノ件

甲號

船便ニ任セ左ノ件々具狀仕候

一下官及ヒ隨行官吏共本月八日鹿兒島港發艦十日午後三時

琉球那覇港へ着シ則同港内ニ一同止宿罷在候

一去ル十四日下官始メ一同首里城へ赴キ御達書ノ條件逐一  
相達候處抑今般御達書ノ内彼ニ於テ最モ至難トスル所ハ

候間御一覽右ニテ凡ノ事情御推知被下度候也

明治八年七月廿九日

於 琉球

内務大丞 松田道之

内務卿 大久保利通殿

(奉使琉球始末)

一四五 八月十日 琉球出張松田内務大丞ヨリ  
大久保内務卿宛

琉球藩へ通達ノ諸箇條ハ受諾セシメタルモ清國  
トノ關係謝絶要求ニ關シテハ同藩ノ事情ニ鑑ミ

心服セシメ難キ旨報告ノ件

附屬書一、八月五日琉球藩王ヨリ琉球出張松田内務大丞  
宛書翰寫

琉球藩ニ分遣隊派遣、刑法定律取調ノ

官吏竝ニ學事修行時情通知ノ學生上京

ニ關スル通達ヲ受諾セル旨回答ノ件

二、八月五日琉球藩王ヨリ琉球出張松田内務大丞  
宛書翰寫

琉球藩ト清國トノ關係竝ニ藩制改革ニ

七 琉球藩處分ニ關スル件 一四五

清國ノ關係謝絶云々ノ事ニテ此等ノ大事ニ至ツテハ藩王  
及ヒ藩吏等ノミニテ決定スル事ヲ得サル趣ニテ之ヲ王子  
諸按司及ヒ諸親雲上等ニ至ル迄意見ヲ問ヒ藩論紛紜今ニ  
返答無之候因テ藩廳又ハ首里那覇等ノ形況街説等ヲ熟視  
候ニ内實ハ余程困難ナル事情モ有之趣ニハ一度兩度猶三  
度迄モ哀訴歎願ニ及ヒ從前ノ通ニ致シ置度所存乎トモ被  
察申候然レトモ下官ニ於テハ決テ許シ申サ、ル心得ニ御  
坐候且或ハ其御請スヘキ箇條ハ御請イタシ下官今般ノ奉  
命ノ廉ハ右ニテ爲相濟清國ノ一件ニ至ツテハ今歸仁王子  
出京ノ上歎願致度所存ニテ則東京在勤琉官等ヨリ閣下又  
ハ樞機ヲ求メ夫々内願ニモ可及等ノ策ナキニシモアラサ  
ル乎然レトモ下官ニ於テハ是非共當地ニテ請書爲差出出  
京歎願等ノ儀ハ許サ、ル所存ニ御坐候間此段豫テ密ニ御  
承知置有之度候

一前件ノ次第ニ付諸事因循ニ有之候故數回督責ニ及ヒ候得  
共到底來月ナラテハ決議不相成ト存候而シテ之ニ屬スル  
諸事取纏メ候中ニハ自然九月中旬ニモ相成り可申九月中  
旬ニ至リ候得者航海甚困難ニ付歸京ハ十月ト決定罷在候  
一到着ヨリ今日迄事情ノ大略別紙奉使琉球始末草案進呈仕

就キテノ通達ニ關シ懇願ノ旨回答ノ件

三、八月五日琉球藩攝政、三司官ヨリ琉球出張松  
田内務大丞宛書翰寫

琉球藩ト清國トノ關係竝ニ藩制改革ニ  
就キテノ通達ニ關シ懇願ノ旨回答ノ件

四、八月八日琉球出張松田内務大丞ヨリ琉球藩王  
宛書翰寫

琉球藩ニ通達セル諸箇條ニ就キテノ回  
答書ニ對シ辯論ノ件

五、八月八日琉球出張松田内務大丞ヨリ琉球藩攝  
政、三司官宛書翰寫

琉球藩ト清國トノ關係ニ就キテノ懇願  
ニ對シ回答ノ件

乙號

郵船猷龍號之歸便ニ依リ一書上陳仕候抑モ下官今般奉命ス  
ル所ノ御用向着手之初ヨリ去月二十八日迄之手續ハ既ニ藩  
船大有號出發之節同月二十九日付ヲ以テ上陳且奉使琉球始  
末草案第一ヲ進呈仕候ニ付定メテ御握手被下タル儀ト奉存



候爾後順次事情手續ヲ追ヒ遂ニ本月五日ヲ以テ藩議決答ノ  
日ト定メ在那覇港ノ内務省出張所ニ於テ應接場ヲ開キ乃チ  
藩吏ヨリ別紙奉使琉球始末草按第二中ニ掲載スル所ノ第二  
十四號第二十五號第二十六號ノ書ヲ出シタルニ付熟覽致シ  
候處分營ヲ被置刑法ヲ運行スヘク學事修業事情通知之爲メ  
藩人上京セシムヘク等ノ件々ハ遵奉致シ候得共清國ニ關ス  
ル諸件ニ至テハ遵奉セサルノミナラス其款願ノ主意ニ於テ  
甚ク不條理ナル條件不少依テ下官ハ其席上ニ於テ聽許セサ  
ル旨ヲ申渡シ且條理名分ヲ枚擧シテ反覆辨論ニ及ヒ畢テ本  
日ハ各退出セシメ而シテ同八日ヲ以テ第二十八號第二十九  
號之書ヲ藩王及ヒ藩吏ニ贈テ其條理大義ヲ督責シ來ル十九  
日午前迄ニ決答スヘキ旨ヲ要求致シ置キ申候就テハ其奉否  
何レニ出ツルヤ此後ノ方向豫知シ難ク候得トモ藩情頗ル困  
難ノ景況ニ御座候依テ下官其藩議ノ景況藩吏ノ意見及ヒ藩  
内人民ノ巷說等ヲ以テ察スルニ藩議ノ基ク所ニ義アリ其一  
義ハ此琉球國ハ久シク我カ政府ト清國トノ庇蔭ニ依テ國ヲ  
成シタレハ今ニシテ清國ニ絶ツハ實ニ信義ノ道ニ於テ取ラ  
サル所ニシテ世界ニ對シテ大ニ恥ツル所ナリ況ンヤ我カ政  
府ニ於テハ最モ尊敬以テ之レニ事ヘ其保護ヲ受ケン事ヲ欲

ス故ニ永久兩國ノ間ニ事ヘテ以テ有禮有信ノ義ヲ表セント  
スルニアリ而シテ是或ハ陽ニ之ヲ唱ヘ其實別ニ主トスル所  
ノモノアルカ如シ第二義是ナリ則チ其二義ハ當藩ノ我カ政  
府ニ於ケル衣食住ヨリ其他百般ノ關藩依テ以テ成立安着ス  
ル所以ノモノハ皆ナ我カ内地ニ依ラサレハ土地人民ヲ保存  
スル事能ハス故ニ我カ政府ニ屬シテ其保護ヲ受クルハ固ヨ  
リ關藩ノ甘ンスル所ニシテ特ニ去ル五年政府ノ直管ト爲テ  
以來幾多ノ恩典ヲ蒙リ且舊鹿兒島藩ノ苛酷壓制ヲ脱シテヨ  
リ藩内ノ經濟上ニ於テ有益不少加之征蕃役ノ保護ヲ蒙ル等  
我カ政府ノ恩惠ニ感服セル事ハ實ニ當藩ノ實情ニシテ是虛  
飾ニアラサルナリ其清國ニ於ケル關藩ノ依テ以テ成立安着  
スル所以ノモノニ於テ一ツモ頼ム所ナク況ンヤ臺灣漂民ノ事  
ニ至テハ其當藩保護ノ事ハ抑モ末ニシテ其信義ノ輕薄ナル  
實ニ甚シキ等ノ事ニ於テハ固ヨリ當藩人ニ於テ着眼セサル  
ニアラサルヘシ然レトモ只徒ラニ清國ヲ恩アリ惠アリトシ  
テ之ヲ敬慕スル念ノ絶ヘサルモノハ抑モ故アルナリ何トナ  
レハ清國ニ事フルトキハ一國ノ王爵ニ被封隨テ國內ノ制度  
モ皆ナ自ラ志ニ行フ事ヲ得畢竟舊制古格ニ因襲スル事ヲ得  
ルヲ以テナリ此ニ至テハ兩國保護ノ厚薄關藩成立ノ得失征

明治八年八月十日

於 琉 球

內務大丞 松 田 道 之

內務卿 大久保利通殿

(奉使琉球始末)

(附屬書一)

第二十四號

蕃役ノ義否等ノ如何ヲ問フニ違アラサルノ情狀アリ因此觀  
之其藩内ノ情實ト云フモ平民ニ至テハ從來專制束縛ノ政治  
ニ馴致スルヲ以テ是非只其藩議ノ方向ニ從フ耳其專ラ議論  
意見ノ固着スルモノハ士族以上ニシテ最モ甚シキハ彼ノ王  
族ノ一種タル按司以上ニアリ故ニ其所論ハ其關藩依テ以テ  
成立安着スル所以ノモノ即チ藩内人民ノ公益上ノ得失ニ着  
眼セシテ其王爵ヲ維持シテ舊制古格ヲ固守スル即チ當藩  
王家ノ私利上ノ利害ニ着眼スルノ景況アリ獨リ可憐者ハ藩  
下ノ人民ナリ而シテ其藩議ノ固結苦情ノ切迫彌甚シキヲ見  
ル若シ當藩兵力アツテ人民強暴ナルトキハ或ハ我カ政府ニ  
反セサルヲ保チカクシ幸ニシテ藩ニ兵力ナク人民柔弱且純  
朴ナルニ依テ理勢我レニ敵スル事能ハサルナリ故ニ清國ノ  
一件ニ至テハ此餘幾百ノ懇諭ヲ費ストモ決シテ心服スル事  
難シ只條理ヲ執テ固ク動カス嚴威論辨シテ威服セシムルニ  
ハ如カス而シテ前途當藩御處分之事ニ至テハ當藩ノ爲メニ  
謀テ其公益タルモノヲ興シ其損害タルモノヲ除ク等猶ホ幾  
層ノ保護ヲ與ヘラレテ漸次遂ニ皇恩ニ心服スルニ至ラシメ  
ラレ度奉存候前陳ハ畢竟下官ノ愚見ニ候得共今般進呈スル  
所ノ奉使琉球始末草按第二ヲモ御參讀御取捨奉祈候也

一當藩御保護ノ爲分遣隊被置候旨太政大臣三條公ヨリノ御  
達書內務卿大久保利通殿ヨリ池城親方等在京ノ御御渡相  
成此儀不容易事件ニテ歸帆ノ上國評ヲ以テ申上候方ニ内  
願申上置候處猶又貴下ヨリ御示諭ノ趣モ致承知此上御斷  
モ難申上奉長候然ハ當藩ノ者共内地ノ衆ニ對シ萬端律儀  
可有之トノ段ハ兼々申付置候得共猶以相慎候様分ケテ申  
渡事御坐候間兵隊共ニモ御締方被仰渡人數モ成丈減少被  
仰付度尤地價一件モ致承知候得共御保護ノ爲被召立事ニ  
テ代價相下候テハ不本意候間無代ニ被仰付度奉願候  
一刑法定律ノ通施行可致因テ右取調ノ爲擔當ノ者兩三名上  
京可申付旨致承知彌差登可申候  
一學事修業時情通知ノ爲人撰ノ上少壯ノ者十名程上京可爲

致旨致承知是又上京申付候様可仕候  
右之通御請申上候也

明治八年八月五日

琉球藩王 尙

泰

内務大丞 松田道之殿

(奉使琉球始末)

(附屬書二)

第二十五號

當藩清國へ隔年之進貢或ハ清帝即位之節慶賀使差遣且清國ヨリ冊封受來候得共自今被差止且藩内一般明治之年號ヲ奉シ年中之儀禮等總テ御布告之通遵行且藩制改革被仰付候トノ件々太政大臣三條公御達書並貴下ヨリ之御示諭委曲致承知候依之諸官へモ評議之上懇願之趣左ニ申上候

一當藩之儀往昔ハ政體諸禮式等不相立候上諸篇不自由爲有之事候處

皇國支那へ屬シ御兩國之蒙御指揮漸々政體宜罷成藩用之

物件モ御兩國ヲ便致調辨其外段々蒙

御仁恤誠ニ

皇國支那之御高恩擧テ難申盡實々御兩國ハ父母之國ト擧

小邦丈人心迷亂每物行届申間敷ト別テ心痛仕居申候間御内地トハ別段之御取譯ヲ以何卒此中之通被仰付被下度奉願候

右箇條之通奉懇願候委細攝政三司官ヨリモ申上候間幾重ニモ寬廣之御仁德ヲ以御許容所仰御坐候也

明治八年八月五日

琉球藩王 尙

泰

内務大丞 松田道之殿

(奉使琉球始末)

(附屬書三)

第二十六號

當藩清國へ隔年之進貢或ハ清帝即位之節慶賀使差遣且清國ヨリ冊封請來候得共自今被差止且藩内一般明治之年號ヲ奉シ年中之儀禮等總テ御布告之通遵行且藩制改革被仰付候トノ件々太政大臣三條公御達書并貴様ヨリ藩王へ御示諭之趣具ニ拜承仕乍恐我々ヨリモ懇願之趣左條ニ申上候

一當藩之儀往昔ハ

皇國支那へモ交通迄ニテ何方へモ服屬無之政體諸禮式等不相立候上諸篇不自由爲有之事候處應安五年ヨリ支那之

藩末々ニ至リ奉仰罷在幾萬世不相替忠誠ヲ勵度志願御坐候處自今支那へ之進貢慶賀并彼ノ封冊ヲ請候儀被差止候テハ親子之道相絶候モ同前累世之厚恩忘却信義ヲ失申事ニテ必至ト胸痛仕罷在仕合御坐候間前件之情實被遊御賢察支那へ之進貢慶賀并彼ノ封冊ヲ受候儀共是迄通被仰付度

皇國御管轄之所ハ鹿兒島縣へ屬シ候仰ヨリ支那ニ對シ隱密仕來候得共支那へ申披明瞭之方ニ取計幾重ニモ御兩國之御奉公永久勸勉致度御坐候間何卒願意御採用被下度奉懇願候

一當藩之儀右ニ申上候通

皇國支那へ屬シ居候故

皇國へ奉對候テハ皇曆ヲ用支那ニ對シテハ彼曆ヲ用年中之儀禮モ御兩國ノ御格式ニ準シ行居申次第ニテ新年紀元節天長節等之祝賀彌御布告通遵奉仕候間其他是迄通被仰付被下度奉願候

一職制之儀國柄ニ應シ民心ニ隨ヒ相定古來變易無之政府御直管相成候テモ國體政體永久不相替様被仰付候段被仰渡藩内一同拜承難有安堵仕居申候處藩制改革被仰付候ハ、

管轄相成東南藩屏之邦ト被稱夫ヨリ無斷絶使者ヲ遣貢ヲ進シ支那代替之節ハ別段使節差立慶賀之禮ヲ述支那ヨリモ代々勅使ヲ以王爵冊封有之明德三年閏人三拾六姓被給諸規模相定柔遠驛ト申旅館等被給存留官詰通且藩務之用品ヲモ致調辨到清代ハ猶親切ニ被取扱進貢之規則等明清會典ニ記載相成既ニ五百年餘最通來且又慶長拾四年ヨリ薩摩へモ相隨ヒ萬端御指揮ヲ蒙漸々政體宜敷日用之物件等無支相達飢饉等之節御救筋其外段々御手厚被仰付到去申年

朝廷御直管相成益蒙

御仁恤誠ニ

皇國支那ノ御高恩擧テ難申盡右通御兩國之御蔭ヲ以一藩之備相立上下萬民致安堵實ニ御兩國ハ敝藩父母之國ト奉仰人心確乎トシテ相固リ罷在事ニテ

皇國御奉公支那へ進貢之儀ハ本藩重大之規模萬世萬代不相替忠誠ヲ勵シ度志願御坐候處自今支那へノ進貢并慶賀且彼ノ封冊ヲ受候儀被差止分ト支那相離候テハ親子之道相絶候モ同前人心迷亂候儀ハ勿論累世之厚恩忘却信義ヲ失諸國ニ對シ名分相廢永代之恥辱無此上事ニテ藩王始

舉藩一同必至ト驚痛仕居申次第御坐候間前件之情實被遊御賢察支那へ隔年進貢代替之節慶賀且彼之封冊ヲ受候儀共是迄之通被仰付被下度

皇國御管轄之所ハ鹿兒嶋縣へ屬シ候仰ヨリ支那ニ對シ隱密仕來事御坐候得共其通ニテハ別テ奉恐入事ニテ支那へ申披明瞭之方ニ取計御兩國之御奉公永久不相替致勸勉度御坐候間幾重ニモ小邦之情實御憐察ヲ以何卒願意御採用是迄通御兩國之御撫恤ヲ蒙候様被仰付被下度奉懇願候一年號并儀禮等之儀是迄

皇國へ奉對候テハ皇曆ヲ用支那へ對シテハ彼曆ヲ用年中之儀禮モ御兩國之御格式ニ準シ定置候ニ付東京ニ於テ内務卿大久保利通殿ヨリ池城親方等へ御内達之時奉願趣有之藩内一般明治之年號ヲ奉シ候様ニトノ趣意ハ被相除候ニ付新年紀元節天長節等之祝賀御布告通遵奉可仕段申上置候次第御坐候間兩屬之撤藩別段之御取譯ヲ以何卒是迄之通被仰付被下度奉願候

一當藩之儀海外之孤土ニ候得共開關以來一國之名分相立皇國支那へ屬シ候テモ難有王位冊封被爲在藩制國柄ニ應シ民心ニ隨ヒ體裁相立數百年來無變易四民各分ニ安シ

(附屬書四)

第二十八號

(奉使琉球始末)

今般御達書條件ノ貴答書ニ因リ更ニ對辨書ヲ以テ左ニ説明ス

一當藩御保護之爲分遣隊被置候旨太政大臣三條公ヨリ之御達書内務卿大久保利通殿ヨリ池城親方等在京之御御渡相成此儀不容易事件ニテ歸帆ノ上國評ヲ以申上候方ニ内願申上置候處猶又貴下ヨリ御示諭之趣モ致承知此上御斷モ難申上奉畏候然者當藩之者共内地之衆ニ對シ高嶺律儀可有之ト之段ハ兼々申付置候得共猶以相儀候様分ケテ申渡事御座候間兵隊共ニモ御締方被仰渡人數モ成丈減少被仰付度尤地價一件モ致承知候得共御保護ノ爲被召立事ニテ代價相下候テハ不本意候間無代ニ被仰付度奉願候

一此件兵隊入琉ノ上ハ前途土人ト兵員トノ間ニ生スル紛紜亦豫防スヘキハ固ヨリ至要ノ事ニシテ貴論甚タ適セリ故ニ拙者歸京ノ上ハ審カニ此貴論ノ旨趣ヲ具狀シ併テ政府ニ於テ相當ノ取締法ヲ施立アラン事ヲ上陳スヘシ而シテ此等ノ事ニ於テハ貴下藩王ノ職任ヲ以テ當藩下實際ノ景況ニ應シ如何ナル方法ヲ上請セラルモ固ヨリ貴下ノ本分タレハ願慮ナク政府ニ向テ之ヲ具陳セラル、ヲ善トス且

業ヲ勵シ平穩ニ相治來殊ニ國體政體永久不相替是迄通被仰付置度去々年外務卿副嶋種臣殿へ奉願其通被仰付且去年當藩事務於内務省御管理被仰付候段林友幸殿ヨリ御書付御渡之仰何篇是迄通ニテ更ニ相替候儀ハ無之段御同人御口達之趣ヲモ承知仕彼是藩内一同令拜承難有安堵仕濕ク御禮等申上置候次第御坐候處藩制改革被仰付候ハハ小邦丈人心迷亂每物不行屆藩内之治何共相調申間敷ト別テ心痛仕居申候間素ヨリ一國之名分王號等有之乍恐以前御内地諸藩トモ相替候次第特別之御取譯ヲ以何卒藩制不相替此中之通被仰付被下度奉願候右者國家重大之條件ニテ從前通被仰付置度舉藩一同深願罷在夫々藩王ヨリ奉願事候得共巨細之成行我々ヨリ申上候様被申付右通奉願候間幾重ニモ御採用被下度偏ニ奉仰候以上

明治八年八月五日

富川親方  
池城親方  
浦添親方  
伊江王子

内務大丞 松田道之殿

又地代金ヲ仰カサルトノ義貴論ノ篤キ如此ニ至ル實ニ感スヘシ然リト雖トモ抑モ兵營ヲ置テ國土ヲ保護スルハ政府ノ本分義務ニシテ此等ノ費用ヲ辨スル爲メ常ニ人民ニ對シテ收稅ヲ要スルナリ即チ當藩ニ於ケル其稅額多少ノ論ハ暫ク措キ常ニ若干ノ稅額ヲ收納セリ此ヲ以テ政府保護ノ恩惠ニ奉答セラル、ノ義務ハ既ニ盡セリ然ルニ今又此兵營ノ地代金ヲ自辨セラル、ハ甚タ厚キニ過ク假令上請セラル、トモ蓋シ政府ニ於テハ之ヲ聽許セサルヘシ然レトモ貴論如此忠篤ノ旨趣アルヲ拙者之ヲ止メテ擁蔽スルハ固ヨリ拙者ノ本旨ニアラサレハ審カニ政府ニ具狀シ其裁決ニ任スヘシ故ニ分營ヲ被置ノ條件政府ニ對シテノ遵奉書ニ此旨趣上請ノ書面ヲ添ヘテ出サレ地價取調書ハ別ニ拙者ニ出サルヘシ政府若シ貴論ノ上請ヲ聽許アレハ拙者ニ出サレタル地價取調書ハ不用物ニ附スヘク若シ聽許ナキトキハ此地價取調書ヲ以テ地所買上ノ手續ニ供スヘシ

一刑法定律之通施行可致因テ右取調之爲擔當之者兩三名上京可申付旨致承知彌差登可申候  
一學事修業時情通知之爲人撰之上少壯之者十名程上京可爲致旨致

承知是又上京申付候様可仕候」

此二件遵奉セラレタル以上ハ政府ニ對シテノ遵奉書ヲ出  
サルヘシ

〔朱書〕  
一當藩清國へ隔年之進貢或ハ清帝即位之節慶賀使差遣且清國ヨリ  
冊封受來候得共自今被差止且藩内一般明治之年號ヲ奉シ年中之  
儀禮等總テ御布告之通遵行且藩制改革被仰付候ト之件々太政大  
臣三條公御達書并貴下ヨリ之御示諭委曲致承知候依之諸官ヘモ  
評議之上懇願之趣左ニ申上候

一當藩之儀往昔ハ政體諸禮式等不相立候上諸篇不自由爲有之事候  
處

皇國支那へ屬シ御兩國之蒙御指揮漸々政體宜罷成藩用之物件モ  
御兩國ヲ便致調辨其外段々蒙

御仁恤誠ニ

皇國支那之御高恩奉テ難申盡實ニ御兩國ハ父母ノ國ト舉藩末々  
ニ至リ奉仰罷在幾萬世不相替忠誠ヲ勵度志願御座候處自今支那  
ヘノ進貢慶賀并彼ノ封册ヲ請候儀被差止候テハ親子之道相絶候  
モ同前累世之厚恩忘却信義ヲ失申事ニテ必至ト胸痛仕罷在仕合  
御座候間前件ノ情實被遊御賢察支那ヘ之進貢慶賀并彼ノ封册ヲ  
受候儀共是迄通被仰付度

皇國御管轄之所ハ鹿兒島縣へ屬シ候御ヨリ支那ニ對シ隱密仕來  
候得共支那へ申披明瞭之方ニ取計幾重ニモ御兩國之御奉公永久  
勤勉致度御座候間何卒願意御採用被下度奉懇願候」

此件從前ハ兩屬國ノ體タルヲ我カ政府默許ニ附セラレタ

ルモ時勢ニ因リ幸ニシテ大障碍ナシト雖モ今ヤ皇政一新  
萬機親制ノ世トナリ萬國ト交際益密ナルニ當テハ其獨立  
國タルノ本旨ヲ達スルニハ世界ノ條理萬國ノ公法等ニ照  
ラシテ其權利ヲ全フセサレハ國其國ヲ成サルナリ然レハ  
當藩ノ如キ我カ國ノ版圖タルモノヲシテ他邦ニ臣事セシ  
メ兩屬ノ體タラシムルハ國權ノ立サル最モ大ナルモノニ  
シテ速ニ之ヲ改メサレハ世界ノ輿論ニ對シ其答辨ノ條理  
ナシ是獨リ我カ政府ノ缺典ノミナラス隨テ當藩ノ存亡ニ  
關ス戒メサル可ケンヤ是今般ノ御達書アル所以ノ一大眼  
目ナリ今貴下ノ陳ヘラル、所ハ更ニ此等ノ條理ヲ問ハス  
只舊格ニ因襲シテ新規ニ就クヲ欲セス畢竟自私自利ノ苦情ニ  
歸ス且此琉球ハ地理人種風俗言語及ヒ我カ政府ノ保護ヲ  
受クル等ノ諸件ニ就テ論スルトモ固ヨリ我カ國ノ版圖ニ  
シテ所謂地理上ノ管轄ナリ之ヲ世界ノ公論ニ質ストモ誰  
カ之ヲ管轄ニアラス版圖ニアラスト言ハンヤ其清國ニ於  
ケル地理人種風俗言語等一ツモ緣由ナク只中古當國主自  
ラ明ノ招諭ニ應シテヨリ彼ノ冊封ヲ受ケシ者ニシテ而シ  
テ未タ曾テ彼ノ政府ノ保護ヲ受ケス所謂政令ノ管轄ニ似  
テ其實ナキモノナリ之ヲ世界ノ公論ニ質ストモ誰カ之ヲ

版圖ト言ハンヤ其管轄モ實有リ即チ權ノ全キモノトハ言  
ハサル必セリ故ニ清國ニ於テ琉球ハ己レノ管轄ナリト言  
フモ獨リ當藩ニ對シテ之ヲ言フ事ヲ得テ我カ政府ニ對ス  
ルハ勿論世界ニ向テ能ク之ヲ言フ事ヲ得ス何トナレハ中  
古明主ノ招諭スルヤ明カニ我カ管轄ヲ絶タシメス又明カ  
ニ我レノ許諾ヲ得ス只琉球國主ノ濫リニ應論スルヲ幸ヒ  
トシテ之レト私義ヲ結ヒタルモノ、如クニシテ世界ノ條  
理ニ照ラシテ更ニ名分ノ取ルヘキナキヲ以テナリ宜ヘナ  
ル哉我カ征蕃ノ役ヲ彼義舉ト視認メ當藩下會災人民ノ貴  
族ニ與フル若干金額ヲ我カ政府ニ向テ拂ヒタル事若シ清  
國ニ於テ琉球ハ必ス己レノ管轄ナリトシテ世界ニ向テ公  
唱スル事ヲ得ハ何ソ自ラ牡丹社ヲ處置シテ當藩下人民ヲ  
保護セサルヤ何ソ當藩下會災人民ノ遺族ニ與フル若干金  
額ヲ我カ政府ニ向テ拂ハスシテ自ラ當藩ニ授ケサルヤ何  
ソ我カ征蕃ノ役ヲ義舉ト視認メタルヤ即チ琉球ハ清國ノ  
管轄ヲ受クヘキ條理ナキノ明證歷々如此且征蕃ノ役ニ當  
リ我カ政府ト清國トノ談判結句ニ於テモ尙ホ能ク明カナ  
リ因此觀之清國ノ當藩ニ於ケルハ情義名分早既ニ廢絶シ  
テ當藩ノ清國ニ於ケル其情義ト言フモ即チ一己ノ私情耳

今清國ニ臣事スル諸件ヲ絶ツト雖モ藩王ニ於テハ其任ノ  
重キ我カ藩屏ノ職分其品位ノ貴キ一等ノ官華族ノ列ニ在  
リ藩内ニ於テハ其利用厚生ノ道ヲ達スル爲メ船舶ノ往來  
人民ノ交際萬貨ノ需用等皆ナ其自主ノ權利ニ因テ隨意ニ  
之ヲ行フ事ヲ得加之内地トノ往來前途益盛ナルモノアリ  
然レハ藩制也衣食也居住也交際也商法也閩藩因テ以テ成  
立安着スル所以ノモノニ於テ毫モ缺耗スル所ヲ見ス苦情  
果シテ何ノ苦情ナル乎今我カ政府ノ當藩ニ於ケルハ清國  
ニ臣事スルノ諸件ヲ絶タシメサルトキハ前ニ所謂地理上  
管轄ノ權利ヲ失ヒ即チ

天皇陛下ノ權利ヲ缺損スルニ至ル其義ノ關係世界ニ對シ  
テ重ク且廣シ彼ノ當藩ノ清國ニ對スル情義即チ一己ノ私  
情ト輕重如何ソヤ然ルヲ徒ラニ自私自利ノ苦情ヲ主張シテ此  
條理ヲ問ハサルハ其見識亦謬レリ就中自今我カ政府ニ屬  
スル事ヲ清國ニ向テ公告セン等ノ言ニ至テハ最モ大ナル  
謬リニシテ敬ヲ我カ政府ニ失スルノ甚シキモノナリ何ト  
ナレハ當藩ノ我カ版圖タル事萬國皆ナ能ク知ル所ニシテ  
清國ニ對シテハ猶ホ近ク征蕃役ノ始末ニ於テ我カ政府ヨ  
リ明示スル所ナリ豈ニ貴下ノ漫リニ彼レニ告ケラル、ヲ

要センヤ乞フ復此ノ不敬ノ言ヲ發スル勿レ抑モ前陳スル如キ大條理ノ動カス可ラス換ユ可ラサルモノアルヲ以テ廟議致ニ確定セリ如何ナル情實ヲ上陳セラル、トモ政府決シテ採用ナキ事ヲ知ル故ニ此款願書ノ旨趣ハ拙者ニ於テ聽許スル事ヲ得ス只速ニ遵奉セラルヘシ

(案書) 一 當藩之儀右ニ申上候通

皇國支那へ屬シ居候故

皇國へ奉對候テハ皇曆ヲ用支那ニ對シテハ被曆ヲ用年中之儀禮モ御兩國之御格式ニ準シ取行居申次第ニテ新年紀元節天長節等之祝賀彌御布告通達奉可仕候間其他是迄通被仰付被下度奉願候

此件ハ前條遵奉ノ上ハ隨テ遵奉セサル可ラサル事由ニ付清國ノ年號ヲ廢止シ我カ年號ノミヲ奉セラルヘキ事論ヲ待タサルナリ

(案書) 一 職制之儀國柄ニ應シ民心ニ隨ヒ相定古來變易無之

政府御直管相成候テモ國體政體永久不相替樣被仰付候段被仰渡藩内一同拜承難有安堵仕居申候處藩制改革被仰付候ハ、小邦丈人心迷亂每物行届申間敷ト別テ心痛仕居申候間御内地トハ別段之御取譯ヲ以何卒此中之通被仰付被下度奉願候

此件政府ニ於テ當藩ノ國體政體永久變革セサル等ノ命令曾テ無キ所ナリ只去ル六年ヲ以テ外務卿副島種臣之指揮

藩ニ被差遣タル以上ハ假令幾度歎願セラル、トモ拙者ニ於テハ決シテ之ヲ聽許スル事ヲ得ス藩議或ハ迂濶ニシテ一度歎願シテ聽許ヲ得サレハ再ヒ三ヒニ及ヒ猶ホ聽許ヲ得サルトキハ藩吏上京シテ直ニ政府ニ向テ哀願スヘシ等ノ事ナキニシモアラサル乎若シ然ラハ實ニ冗議ニシテ徒ラニ時日ヲ費ヤス耳此等無用ノ事ヲナス勿レ何トナレハ拙者ニ於テハ廟議ノ蘊奧ヲ聽得テ而シテ今般ノ命ヲ奉シタレハ其大條理ノ決シテ動カス可ラサルモノニ於テハ一度之ヲ聽許セサルモノハ假令再ヒ三ヒニ及フト雖モ決シテ聽許セス若シ藩吏上京シテ直ニ政府ニ向テ哀願スルトモ政府ハ既ニ拙者ニ委サレタレハ藩吏ノ上京哀願ニ依テ採用アルノ理ナキノミナラス抑モ拙者ニ於テ其委任ノ權ヲ以テ藩吏ノ上京ヲ聽許セサルナリ依テ明九日ヨリ日數十日間猶豫スヘキニ付此間ニ於テ彼ノ冗議贅論ヲ止メ更ニ圖ヲ改メテ正確ノ藩議ヲ盡シ來ル十九日午前迄ニ答辨書ヲ出サルヘシ若シ不得已事故ノ生スルアツテ尙ホ時日ノ猶豫ヲ請ハル、トモ來ル二十一日ヲ超過セラル、事ナカレ茲ニ待貴酬

明治八年八月八日

ニ依リ外務官員ヨリ當藩官員へ贈リタル書中ニ掲クル所ノ事ヲ指シテ言ハル、ナルヘシ果シテ然ラハ貴辨ノ旨趣ト異ナリ彼ノ書中ノ意ハ則チ藩タルノ制ヲ容易ニ變更セサルノ意ナリ而シテ今般ノ御達書ハ固ヨリ藩タルノ制ヲ變革スルノ主意ニアラス藩制ニ屬シタル職制ヲ施行スルノ主意ニシテ此藩制アレハ必ス此職制ナカル可カラサルナリ元來國ノ政體ハ時勢ノ沿革ニ從ヒ國家ヲ經營スルノ便宜ニ因テ變革セサル可ラサルモノニシテ永世舊制ヲ墨守スル事ヲ得ヘキモノニアラス則チ内外古今ノ書史ニ就テ之ヲ見レハ歷々明カニシテ尙ホ近クハ我カ邦明治初年ヨリ本年ニ至ル迄ノ間ニ於ケル其變遷沿革天下皆ナ知ル所ナリ就中近日ニ至テハ元老院ヲ被置天皇陛下無量權ノ幾分ヲ割テ之ニ附與セラル、等我カ朝未曾有ノ大變革ナリ是皆ナ時勢ノ沿革ニ從ヒ立國ノ本旨ニ基キ宜シク然ラサル可ラサルニ出ツ

琉球藩王尙泰殿

內務大丞 松田道之

(奉使琉球始末)

(附屬書五) 第二十九號

今般之御達書ニ付去ル五日ヲ以テ被差出タル貴書ニ對シ拙者ヨリ猶ホ説明ニ及フヘキ條件有之處同事ニ付藩王ヨリ被差出タル書面ニ對シ詳細辨論ニ及ヒ置則チ同職之主意ニ候間右書面御一覽之上其旨趣御體認篤ト藩議ヲ被盡度候也

明治八年八月八日

內務大丞 松田道之

伊江王子殿

浦添親方殿

池城親方殿

富川親方殿

攝政三司官ヨリ去ル五日ヲ以テ出シタル所ノ第二十六號ノ書面ノ主意ニ因レハ我カ政府ノ琉球ヲ管轄スルハ遙カニ清國之ヲ管轄スルノ後ニ在ルカ如シ故ニ藩吏ニ對シ將サニ大ニ之ヲ論駁セントスレトモ退テ考フルニ之ヲ漫リニ論發スルトキハ徒ラニ往昔ノ歷史上ニ就テ論究セサルヲ得サルノミナラス今般清國ニ臣事スル諸件ヲ絶タシムルハ抑モ末ニシテ先ツ當藩ト政府ト其管轄ノ源因ヲ論セサルヲ得サ

ルニ至リ遂ニ政府ノ當藩ヲ處分セラレ、所ノ本旨ニ戻ルニ至ラン乎抑モ琉球ハ純然我政府ノ管轄タル事ノ最モ著明ナルモノハ當藩ニ對シテハ去ル五年藩王ニ被任タルニアリ清國ニ對シテハ征蕃役ノ始末ニアリ此二ツノ者則チ世界ニ對シテ條理ノ公明ナルモノナリ豈ニ敢テ徒ラニ往昔ニ過テ喋々辨論スルヲ要センヤ依テ藩吏ニ贈ルニ只此第二十九號ノ書意ニ止メタリ是余ノ深ク注意スル所ナリ

(奉使琉球始末)

一四六 九月二十日 大久保内務卿ヨリ 琉球出張松田内務大丞宛

琉球藩吏上東中内務卿ヨリ指令アリタリト稱ス  
ル事項モ指令濟確證ノ書面無キモノハ信用シ難キ旨申達ノ件

丙號

奉使琉球始末第一二ノ書面トモ追々相達熟覽藩議紛紜ノ情態御接遇ノ顛末トモ委細了承セリ然ルニ應接中彼ノ官吏在京中拙者ノ指令ヲ受ル等云々ノ語往々相見事ニ辨論被致候義ニハ候得共以後尙何等ノ口演有之旨陳シ候トモ固ヨリ指令濟確證ノ書面アラサルモノハ決テ信用難相成ハ勿論ノ儀ニ付狡猾ノ習俗一時ノ詐術ニ出ル如キハ兼テ厚ク御心得置

可有之其餘今般ノ御紙上ニ對シ可申述義モ無之ニ付前段御答旁爲念申進候也

内務卿

松田大丞殿

(奉使琉球始末)

本號文書日附ヲ缺クモ「奉使琉球始末」ニ松田内務大丞歸京ノ途中九月「廿一日便宜ニ依リ下ノ關ニ繫艦ス偶マ郵船ノ鹿兒島ニ到ルニ會ヒ不圖丙號大久保内務卿ヨリノ書翰ヲ得タリ」ト記載セリ

一四七 九月二十日 松田内務大丞ヨリ 三條太政大臣宛

琉球出張中ノ事務ニ關シ復命ノ件

第六十四號

臣道之曩ニ命ヲ奉シテ琉球藩ニ至ルヤ先ツ命令書ヲ授ケ朝旨ノアル所即チ條理ノアル所ヲ以テ百方說諭ヲ加フト雖トモ藩議固陋ニシテ之レニ服セス漸クニシテ分遣隊ヲ被置及ヒ刑法取調ノ官吏學事修業事情通知ノ生徒上京等ノ條件ハ遵奉書ヲ呈シ且征蕃役ノ高恩拜謝ノ爲メ藩王上京スヘキ處

病ノ故ヲ以テ暫時延期先ツ今歸仁王子ヲシテ代謝セシメン事ヲ請フニ至レリ而シテ清國ニ關スル條件及ヒ職制改革ノ條件ニ至テハ頗ル苦情ヲ唱ヘテ依舊如故ヲ歎願シテ不止茲ニ其要領ヲ擧クルニ清國ニ關スル條件ニ於テハ五百年來恩義アルニ今之ヲ絶ツトキハ自ラ信義ヲ失スルノ道理ニシテ世界ニ對シテ恥ツヘシトシ且我カ政府ニ於テハ去年征蕃役ノ始末ニ於テ清國ト當藩トノ情義ハ既ニ斷絶セリトノ主意ナリト雖トモ當藩ヲ以テ之ヲ見ルトキハ征蕃役後ニ於テ依舊進貢受納ノ式ヲ行ヒ又清帝殂落ノ白詔新帝即位ノ紅詔等モ頃日到來スル等ノ事ニ依レハ其情義未タ斷絶セサルモノ、如シ又元來當藩ハ日清兩國ノ庇蔭ニ依テ國ヲ成シ之ヲ父母ノ國ト稱シテ事フルハ今ヲ初メトセス星霜頗ル古フシテ世界皆ナ知ル所ナレハ此兩屬ノ體ヲ因襲スルモ敢テ我カ政府ノ體面ヲ毀損スル事ナシトシ甚シキニ至テハ我カ政府ニ屬スルハ遙ニ明國ニ屬スルノ後ニアリトシテ之ヲ論シ其職制改革ノ條件ニ於テハ今ノ官制ハ國祖天孫氏以來ノ國體ニ依リ治務ノ便宜ニ就テ立テ則チ此國情民心ニ適應シタルモノナレハ之ヲ存シテ其障礙アルヲ見ス然ルニ今俄ニ之ヲ變更スルトキハ却テ國情民心ニ戻リ治務上ノ障礙ヲ來ストシ

且去五年副島外務卿并ニ外務官吏ヨリ國體政體永久變更セサルヲ保證セシ事アレハ之ヲ踏マン事ヲ要スル等ヲ以テセリ而シテ其中心肺腑ニ入テ之ヲ視ルトキハ種々論議ノ因テ來ルモノアリト雖トモ之ヲ要スルニ其闔藩人民ノ成立安着スル所以ノモノニ着眼セス即チ藩内公益ノ爲メニ謀ラスシテ其王爵ヲ維持シ舊例古格ヲ墨守スル所以ノモノニ着眼シ即チ當藩王家ノ私利ノ爲メニ謀ルト傍ラ清國ノ譴責ヲ恐ル、トニアツテ猶ホ甚シキハ往昔獨立國ノ體ヲ爲シタルヲ追慕スルノ念絶ヘス而シテ我カ政府ノミニ屬スルトキハ此私論ノ自由ヲ逞フスル事ヲ得ス清國ト兩屬ノ體ヲ存スルトキハ依テ以テ之ヲ逞フスル事ヲ得ルナリ故ニ從來我カ政府ノ保護ヲ受クルノ厚キ近クハ維新以來多少ノ恩典征蕃役ノ義舉等ノ如キハ清國保護ノ薄キ或ハ絶ヘテナシト謂フトモ可ナルモノト日ヲ同フシテ論ス可ラサルハ滿藩之ヲ知ラサルニハ非スト雖トモ彼ノ私論ノ自由ヲ逞フスルノ便否ヨリ論スルトキハ其保護ノ厚薄征蕃ノ義否ノ如キ之ヲ問フニ違アラサルナリ且我カ政府ノ往時當國ニ於ケル兵威以テ之ヲ征討シ治權以テ之ヲ壓制シテ苛酷域中ニ卑屈セシムルモノアレハ中心甘服セサル所アリ其當藩ニ取テ眞ニ恩惠トシ保護

トシテ見ルモノハ僅々維新以來ノ典ノミ而シテ猶ホ多少危  
 惧ノ心ヲ脱セサルナリ其清國ニ於ケルハ固ヨリ保護ノ典ヲ  
 受ケスト雖トモ亦壓制ノ沙汰ヲ受ケスシテ只王爵ノ名譽ヲ  
 持シ附庸ノ國體ヲ有ツ事ヲ得其私利上ノ便宜ニ於ケル莫善  
 於此故ニ今般我カ政府ノ命令ニ對シテハ其服否ヲ問フ抑モ  
 末ニシテ其私論切迫ノ極中心既ニ反スレトモ幸ニシテ兵力  
 ナキニ依テ其實跡ニ涉ラサルナリ於是臣道之ハ主トシテ其  
 清國ニ關スル條件ニ於ケル信義ト言フモ我カ政府ノ之ヲ絶  
 タ、シムル所以ノ條理ニ比スレハ遂ニ輕フシテ之ヲ絶ツハ  
 大義名分ニ從フモノナルノ辨情義ノ絶スルハ則チ去年征蕃  
 役始末ニ於テ日清兩政府決着スル所ノ主意ニ於テ明カニシ  
 テ依舊進貢受納ノ式ヲ行フハ元是去年ノ貢物ニ屬スルヲ以  
 テ假令本年ニ超テ之ヲ受納スルトモ兩政府決着スル所ノ事  
 義ニ於テ更ニ妨ケナク白詔紅詔到來ノ事ニ至ラハ征蕃役ノ  
 始末ニ於テ清國ノ我カ政府ニ對スルモノト齟齬運庭ノ所爲  
 ニシテ實ニ怪シムヘキノ事タルヲ以テ我カ政府ニ於テ相當  
 ノ處置アルヘシ故ニ當藩ニ於テハ此事アルノ故ヲ以テ我カ  
 政府ノ征蕃始末ニ於テ意トスル所ノモノヲ眞ナラストシテ  
 今般ノ命令ニ從ハサル事ヲ得可ラサルノ辨父母ノ國ト稱ス

ルハ則チ其恩惠ヲ受クルヲ形容シテ稱シタルモノニシテ其  
 權義ヲ稱シタルモノニ非ス其權義ヲ以テ論スレハ固ヨリ君  
 臣ナレハ一國ニシテ兩國ニ事ヘ即チ一人ニシテ二君ニ事フ  
 ル事ヲ得可ラス然レハ何レカ一方ニ屬セサル可ラスシテ而  
 シテ其所屬ヲ撰フハ閣藩依テ以テ成立安着スルニ便ナルモ  
 ノニ着眼セサル可ラス其成立安着スルニ便ナルモノヲ撰フ  
 トキハ則チ我カ政府ニ屬セサル可ラス況ヤ地理也人種也風  
 俗也言語也皆ナ我カ國ノモノニシテ天然隸屬ノ義アルヲヤ  
 且兩屬ノ體ナルモノハ世界ノ道理ニ於テ爲ス可ラサルモノ  
 ニシテ之ヲ措テ問ハサルトキハ我カ獨立國タル體面ヲ毀損  
 シ萬國公法上ニ於テ大ニ障碍ヲ來ス事アリ於是其往昔ヨリ  
 兩屬タルモ今新クニ兩屬スルモ均シク是不條理ナレハ之ヲ  
 改メスシテ因襲默許スル事ヲ得可ラサルノ辨此琉球ハ元是  
 我カ神人ノ開キタル所ニシテ中古次第ニ隸屬ノ義務ヲ盡シ  
 別シテ慶長以來ニ至テハ純然我カ版圖タル實跡彌確ナレハ  
 明國招諭ノ前後ニ論ナク且去年征蕃役ノ始末ニ於テ日清兩  
 政府決着スル所ノ主意ニ於テ明カナルノ辨其職制改革ノ條  
 件ニ於テハ往昔自ラ獨立ノ體ヲ爲スヲ以テ之レニ應シタル  
 官制ヲ設ケタリト謂フト雖トモ今ハ則チ我カ藩屏ノ任地方

ノ官ナレハ内地ノ舊藩ト異ナル事ナク當時亦一種ノ制ニシ  
 テ此藩制アル必ス此職制ナカル可ラス故ニ今般命令アル所  
 ノ職制ハ則チ此藩制ニ適應シタルモノナリ且今此職制ヲ改  
 革シテ其治務上ニ障礙アルヲ見ス何トナレハ畢竟只其官名  
 ヲ改ムルノミニ止ツテ藩治ニ至テハ刑律ヲ奉シ年號ヲ奉シ  
 頒曆ヲ奉シ貨幣ヲ用ユル等ノ如キ大典ヲ除クノ外ハ悉皆藩  
 ノ適宜ニ任スレハナリ又副島外務卿ノ口述外務官吏ノ書牘  
 ノ旨趣ハ國體政體永久變更セサルヲ保證シタルニ非ス藩ヲ  
 ルノ制ヲ變更セサルノ旨趣ナリ且元來國體政體等ノ如キハ  
 時勢ノ沿革政事上ノ便宜ニ依リ宜シク然ラサル可ラサルノ  
 理ヲ以テ變革スルモノナレハ

天皇陛下有司人民ニ至ルマテ私情ヲ以テ其宜シク然ラサル  
 可ラサルモノヲ拒ム事ヲ得可ラス況ンヤ外務卿ハ固ヨリ太  
 政大臣ト雖トモ其變更セサルヲ保證スル事ヲ得ス又保證ス  
 ヘキモノニアラサレハ當藩ニ於テモ其苦情ヲ以テ之ヲ拒ム  
 事ヲ得可ラサルノ辨等ヲ以テ條理ヲ追ヒ大義ヲ責メ或ハ寬  
 ニ出テ或ハ猛ニ且リ反覆辨論數十回ニ及フト雖トモ論屈ス  
 レハ則チ黙シ口ヲ發ケハ則復前議ヲ主張シ遂ニ條理ニ基カ  
 ス於是臣道之ハ奉命ノ權内ヲ以テ其款願不條理ナリトシテ

聽許セス命令速ニ遵奉スヘキ旨ヲ命シタリ爾後猶ホ藩議紛  
 紜其實ハ既ニ遵奉セサルニ決スト雖トモ頗ル朝譴ヲ恐テ辭  
 ヲ款願ニ假リ所陳毎ニ曖昧模糊タリ於是臣道之ハ首里城ニ  
 至リ藩王ニ面シテ大ニ論セントシタルニ藩王病ノ故ヲ以テ  
 其面接ヲ辭ス乃チ諸官百五十餘名ヲ城中ニ集メテ命令必ス  
 遵奉セサル可ラサル所以ノ條理ヲ述ヘ且若シ遵奉セサルト  
 キハ政府ニ於テ必ス嚴重ノ處分アルヘシ其處分アルハ固ヨ  
 リ之ヲ知レトモ清國ノ情義ニハ換ヘカクシトシテ遵奉セサ  
 ル乎或ハ之ヲ知ラス只迂濶ノ論議ヲ盡シテ遵奉セス他日處  
 分ノ際ニ當リ君臣狼狽ヲ嚙ムノ憂ヒ至テ始メテ悟ル乎等  
 ヲ述テ其議ノアル所ヲ質問スルニ藩吏ノ中或ハ頗ル之ヲ恐  
 ル、ノ色アルアリ或ハ當藩條理アツテ遵奉セサレハ政府ニ  
 於テ嚴重ノ處分アルノ理ナシトテ論スルモノアリ臣道之之  
 レニ答フルニ政府若シ當藩ノ款願ヲ聽許シテ遵奉セサルナ  
 レハ固ヨリ處分アルノ理ナシト雖トモ政府ハ則チ當藩ノ願  
 請不條理ナリトシテ聽許セサルニ猶ホ遂ニ遵奉セサルハ即  
 チ政府ニ反スルナリ政府若シ此反者ヲ措テ問ハサレハ國法  
 ヲ毀損ス豈ニ處分セサルヲ得ンヤ依テ更ニ圖ヲ改メテ速ニ  
 遵奉スヘシ若シ遵奉セサルニ決スルトキハ政府嚴重ノ處分

アル謹テ待ツヘキヲ述ヘテ退キ猶ホ藩王ニ對シ質問書ヲ贈ル而シテ藩吏又屢決答期日ノ猶豫ヲ請ヒ其初メ命令書ヲ授ケテヨリ殆ント五十日ニ垂ントスルニ遁辭百端藩議ノ決着ヲ告ケス其遂ニ辭ナキニ至テハ藩王病盛ニシテ決議スル事能ハサルヲ以テ至是臣道之大ニ其寬慢ヲ責メ且親シク藩王ノ病況ヲ臨檢セン事ヲ論シ遂ニ進テ首里ニ入り城郭内ノ客館ニ滯泊シテ以テ督促スルニ藩議遂ニ直ニ政府ニ向テ款願セン事ヲ主張ス臣道之ニ論スルニ道之ハ政府ノ命ヲ奉シタル委員ナリ其委員ニ於テ款願ノ旨趣ヲ不條理ナリトシテ之ヲ聽許セサルニ其委員ヲ關キ直ニ政府ニ向テ強願セントスルハ委員ヲ辱カシメ即チ政府ヲ辱カシムルノ理ナレハ道之ハ決シテ之ヲ聽許セサルヲ以テシテ其願書ヲ擯斥ス暫クシテ藩吏騒然走り來テ曰今鹿兒島在藩吏ヨリ上海新聞紙ヲ拔萃シテ報知スルヲ視ルニ清國ヨリ急ニ軍艦ヲ遣テ當藩ノ罪ヲ問フノ旨趣アリ是當藩安危ノ係ル所ニシテ藩王及ヒ諸官一般驚駭所措ヲ知ラス故ニ今般ノ藩議決答ノ如キ凡十五日間ノ猶豫ヲ請フト臣道之ハ之ニ辨スルニ凡ソ新聞紙ナルモノハ多クハ世ノ好論又ハ射利ノ徒或ハ一事爲メニスル所アル者等ノ放記ニ出レハ其真ナルモノハ十中ノ三四ナリ

若シ是真ナルトモ清國割駐ノ我カ全權公使ニ於テ之ヲ論シテ中止シ直ニ電信ヲ以テ我カ政府ニ報知スル事疑ヒナシ然ルトキハ我カ政府ハ慢然之ヲ措カス必ス清國ト談判ヲ起スヘシ若シ遂ニ艦ヲ遣ルトキハ我カ政府ハ道之一行ノ官吏及ヒ當藩ヲ保護スルカ爲メ急ニ我カ軍艦ヲ送ルヘシ而シテ清國軍艦到着スルトキハ道之當藩ニ在レハ道之之ト應接ヲナシ道之去テ後ナレハ内務省出張所在勤官吏ヲ以テ應接ヲナシテ決局遂ニ我カ政府ト清國トノ談判ニ屬シ其談判決着スル所ノ主意ニ依ラサレハ清國ハ當藩ニ向テ手ヲ下ス事ヲ得ス若シ之ニ反シテ猥リニ手ヲ下ストキハ我カ政府ハ清國トノ和親ヲ破ルニ至リ萬國公法ノ准サ、ル所ナリ清國豈ニ如斯疎暴ノ舉ヲ爲サンヤ故ニ如何ナル軍艦到來スルトモ更ニ當藩ノ憂フル所ニ非ス然レハ今般ノ命令ヲ奉スルト奉セサルトハ軍艦ノ到ルト到ラサルトニ關セス速ニ決定スヘキヲ以テス於是藩吏議論屈シタリト雖トモ中心紛紜且彼ノ清國ト未タ情義ノ絶セサル事ヲ疑フノ念益盛ナルヲ見ル而シテ藩議遂ニ窮シ斷然遵奉セサル旨ヲ以テ出シタル所ノ書面ヲ視ルニ其文句ノ間頗ル曖昧影ヲ捕フルカ如ク蓋シ他日朝議ヲ蒙ルルトキ之ニ答フル遁辭ノ餘地ヲ殘シ臣道之ノ眼界

ヲ眩マサントスルカ如シ於是臣道之大ニ其狡猾欺罔ノ所爲ヲ責メ且如此不倫ノ書牘ハ執テ政府ニ奏スル事ヲ得可ラス故ニ其遵奉セサル旨ノ明文アルモノニアラサレハ決シテ領收セサル旨ヲ以テ之ヲ擯斥シ又屢其決答ヲ督促スルニ藩議忽チ前段ニ遡ツテ復上海新聞ノ事ニ及ヒ或ハ若干ノ延期ヲ請ヒ意旨錯雜申狀不倫ナリ而シテ其實ハ藩議既ニ遵奉セサルニ決スト雖トモ只事ニ托シテ決答ノ期ヲ延シ此中自ラ頼ム所ノモノアルカ如シ於是臣道之斷然意ヲ決シテ藩吏一般ニ面シ道之此ニ臨ンテ督促既ニ數回ニ及フト雖トモ毎ニ遁辭ニ托シ要スルニ只決答ノ期日ヲ延スラ是勉ムルカ如シ其無狀ナル亦甚シ而シテ其遵奉セサルノ書ヲ呈スルモ之ヲ呈セスシテ只強願之ヲ拒ムモ其命令ニ對シテハ均シク是遵奉セサルナリ依テ道之ハ今其遵奉セサルヲ視認メタレハ直ニ此館ヲ去リ今般發港ノ迎陽艦ヲ以テ歸京シ審カニ政府ニ上陳セントス道之今此館ヲ去ルハ則チ談判破レテ去ルナリ故ニ以來當藩ヲ視ルハ反者ヲ以テ視ルヘシ復款願事ヲ以テ事トスルナク謹テ政府ノ處分ヲ待ツヘキ旨ヲ以テ論シ直ニ首里城ヲ去テ那覇ニ歸リ藩王ニ對シ一書ヲ贈リ其文中ニ政府ノ命令ヲ遵奉セス即チ政府ニ反スルノ條件ヲ枚舉シテ之ヲ

責メ且謝恩名代ノ今歸仁王子刑法取調ノ官吏學事修業事情通知ノ生徒等ノ上京ヲ中止シ藩吏一般ノ上京ヲ止メ藩吏及ヒ人民一般航海スルトキハ必ス内務省出張所ニ屆クヘキヲ要シ而シテ政府ノ處分ヲ待ツヘキ旨等ヲ述ヘテ他ノ特派公使ノ談判破ブレテ歸朝スルノ體ニ擬シ遂ニ其翌々日ヲ以テ那覇港ヲ發セン事ヲ定メ一行官吏皆ナ行李ヲ調フ而シテ臣道之窃ニ惟ルニ當藩頃日ノ無狀ナル實ニ甚シ是必ス政府ニ於テ處分ナカル可ラス且熟ラ當藩治民ノ弊害藩吏ノ所見ヲ視ルニ大ニ之ヲ破ラサレハ閩藩人民ノ不幸ナル實ニ甚シキモノアリ故ニ假令今般遵奉スルトモ前途大變革ヲ爲サ、ル可ラス而シテ今般遵奉セス即チ反シタルハ或ハ是自然氣運ノ大變革ニ赴クモノ乎加之命令ヲ遵奉セサルニ因テ變革ヲ行フハ當然ノ理アツテ彼ノ副島外務卿ノ口述外務官吏ノ書牘ノ旨趣ニ矛盾セス寧ロ改革スレハ正ニ此時ヲ然リトス依テ臣道之ハ歸京具狀ノ日三事ヲ建言セントスルナリ其三事トハ何ソ司法以テ當藩王違制ノ罪ヲ處斷シ行政以テ當藩王ニ命シテ土地人民ヲ奉還セシメ遂ニ琉球藩ヲ廢シ沖繩縣ヲ置キ軍務以テ既ニ決定シタル所ノ分遣隊入琉ノ期限ヲ早クシテ地方ノ暴舉ヲ豫防スルナリ而シテ既ニ此三事ノ案成ル



ニ及ンテ又退テ熟思スルニ抑モ政府ノ命令ヲ當藩ニ下スニ特ニ臣道之ニ命シ此遠洋ヲ超テ被遣タルモノハ何ソ蓋シ政府ノ主意タル必ス遵奉セシムヘキニアルナリ然レハ今此三事ヲ施ス理勢宜シク然ルモ政事上ノ便宜ニ於テ遂ニ其如何ナルヲ知ラス宜シク曩ニ臣道之奉命スル所ノ主意ニ廻リ一ノ便方ヲ案セサル可ラスト自反推考甚ク苦ム于時當藩ノ事情ヲ探察スルニ臣道之憤然首里城ヲ去リ將サニ歸京セントスルヨリ人心頗ル洶々藩議遂ニ三黨ニ分レ其一ハ前途政府ノ處分ヲ恐レ速ニ遵奉セン事ヲ論シ遂ニ或ハ哀訴シテ以テ臣道之ノ歸京ヲ止メントスルノ勢アリ是我カ政府ヲ恩義アリトスルノ黨ナリ其二ハ軍口我カ政府ノ處分ヲ受クルモ清國ノ情義ニハ換ヘカタク又其我カ政府ノ處分ニ於テハ百方力ヲ盡シテ廟議ヲ止ムルノ策ヲ行フヘシトシテ論ス是清國ヲ恩義アリトスルノ黨ナリ其三ハ遵奉セサルヲ得サルハ既ニ能ク領知スルト雖トモ今速ニ遵奉スルトキハ一ニハ清國ニ對シ信義ノ盡キサル所アリ一ニハ藩内遵奉セサル黨ノ人心ヲ鎮撫スルノ難キニ苦ム故ニ藩吏一度上京直ニ政府ニ向テ歎願シ遂ニ聽許ヲ得サルニ至テ而シテ遵奉スルトキハ内外ニ對シテ答辨スヘキノ辭アリトス是要路ノ黨ナリ此三黨

ノ論議紛紜而シテ遵奉セサル黨ノ論議盛ニシテ間々疎暴ノ舉動ニ亘リ爲是藩議頗ル困迫ノ狀アリ於是臣道之藩吏ニ論スルニ子等過日屢直ニ政府ニ向テ歎願セン事ヲ強願スルニ止マルヲ以テ政府ノ命ヲ奉シ委員タル道之ヲ關キ直ニ政府ニ向テ強願セントスルハ委員ヲ辱カシメ即チ政府ヲ辱カシムルノ理ナルニ依リ道之之ヲ聽許セサレトモ若シ直ニ政府ニ向テ其遵奉セサルヲ強願スルニアラスシテ一度上京歎願シテ遂ニ政府ノ聽許ヲ得サルトキハ則チ遵奉スルノ主意ニシテ其上京藩吏ハ豫メ藩王ノ委任ヲ受ケ東京ニ於テ直ニ遵奉書ヲ呈スル事ヲ決議シ且藩王ニ於テハ道之ニ對シ其旨趣ノ明文アル證書ヲ送ルトキハ藩吏上京歎願ヲ聽許スヘシ然レトモ委員タル道之ヲ關クノ理ニ於テハ前ニ異ナル事ナシト雖トモ其遵奉セサルヲ強願スルト遂ニ遵奉スルノ主意アルト義ヲ同フシテ論ス可ラサルモノアツテ且道之ニ於テハ親シク當藩近日困難切迫ノ事情ヲ視察スレハ特ニ之ヲ酌量シ一ノ便方ニ依テ行フノ旨趣ヲ以テスルニ藩議頗ル之ヲ便トシ藩王及ヒ諸官一般殆ト悦喜ノ眉ヲ開キ前日ノ酷苦ヲ忘ル、カ如クニシテ遂ニ臣道之ノ指示スル所ノ旨趣ニ隨ヒ藩王ヨリ完全ナル證書ヲ以テ藩吏ノ上京ヲ請フニ依リ臣道之

ハ奉命スルトコロノ權内ヲ以テ之ヲ聽許シ且ツ前日施ス所ノ諸官上京ヲ止ムル等ノ條件ヲ解キ而シテ藩王ノ委員三司官池城親方及ヒ隨從與那原親方幸池親方喜屋武親雲上内間親雲上親里親雲上等ヲ率ヒテ歸京セリ而シテ藩吏ニ在テハ此上京ニ依テ百方歎願シ以テ廟議ヲ動カシテ其遵奉セサルノ意ヲ逞フシ今般臣道之命ヲ奉シテ傳ヘタル命令ノ條件ハ遂ニ廢止ニ屬セシメント企望スル者アラン乎或ハ歎願シテ遂ニ政府ノ聽許ヲ得サルトキハ直ニ遵奉書ヲ呈シテ當藩ノ安寧ヲ謀ントスル者アラン乎如此二途ノ目的アルモ既ニ藩王ニ在テハ臣道之ニ對シ政府ノ聽許ヲ得サルトキハ委任ノ藩吏ヲ以テ直ニ東京ニ於テ遵奉スヘキノ明文アル證書ヲ送りタル以上ハ則チ政府聽許ナキニ於テハ到底一ノ遵奉ニ歸着セサルヲ得可ラス而シテ政府ハ曩ニ臣道之ニ命シテ該藩ニ被遣タル所ノ主意ニ於テハ毫モ不動即チ該藩ノ歎願ヲ聽許セサル事ハ臣道之ニ於テ疑ヲ容レサル所ナレハ今般藩王ヨリ臣道之ニ對シテ送りタル證書ハ即チ命令遵奉シタルモノト視做スナリ若シ上京ノ藩吏無道ニシテ證書ノ言ヲ食ミ政府ノ聽許ナキニ猶ホ遵奉セサルトキハ則チ廟議ハ彼ノ三事ヲ施スニアルノミ之ヲ要スルニ惟廟議斷乎トシテ不動ニ

アリ是臣道之ノ至願ニ堪サル所也僅々ノ文書事由ヲ盡ス事能ハス只其要略ヲ掲ケ別ニ奉使琉球始末一部ヲ添ヘ以テ謹而具狀

明治八年九月廿五日  
即自琉球藩歸京之日

太政大臣 三條實美殿

內務大丞 松田道之

(奉使琉球始末)

註 本號文書ハ九月二十七日松田內務大丞太政官正院ニ出頭ノ上三條太政大臣ニ上呈セルモノナル旨「奉使琉球始末」ニ記載アリ

事項八 小笠原島問題ニ關スル件

〔第七卷事項四參照〕

一四八 三月十八日 大久保内務卿ヨリ 寺島外務卿、大隈大藏卿、勝海軍卿宛

小笠原島著手ニ關スル四省合議案提出ニ就キ照會ノ件

三月廿四日日本書大藏卿へ廻達

小笠原嶋着手ノ義ニ付昨七年當省於テ稟議案取調及御掛合再三往復ノ末御異存無之ニ付直様上申相成候様致度旨御確答有之候間直ニ上申可取計ノ處臺著ノ事件差起和戰未決ノ場合ニ付暫時致猶豫候處右事件既ニ平和ニ歸シ此頃大内史ヨリ掛合ノ次第モ有之候ニ付テハ同嶋着手ノ義昨年決議ノ通四省ノ連印ヲ以上申致度則會議案淨寫ノ上別紙御廻申候間順次御押印ノ上御返却有之度此段御掛合旁申進候也

明治八年三月十八日

内務卿 大久保利通印

外務卿 寺島宗則殿 調印ノ上大藏卿ニ廻達候  
大藏卿 大隈重信殿  
海軍卿 勝 安芳殿

註 右ニ謂フ「別紙」ハ第七卷二三六附屬書一ヲ修正シタル四省聯合議案ヲ指ス(右修正ニ關シテハ第七卷二三九、二四〇、二四一參照)尙右合議案ハ明治八年六月十三日三條太政大臣ニ提出セラレ三條太政大臣ハ之ニ對シ同月二十九日「何ノ趣ハ前以英米ヲ始各國公使へ報知ノ上着手順序相立候義ト相心得猶四省協議ノ上至急談判可及事」ト指令セリ

一四九 四月十二日 大久保内務卿ヨリ 寺島外務卿宛

小笠原島著手ニ關スル大藏省ノ意見ニ就キ意書照會ノ件

附屬書 小笠原島著手ニ關スル四省合議案ニ對スル大藏省見込書寫

〔四月十二日 第四百十五號〕

小笠原嶋着手ノ儀ニ付正院へ上申按過日淨寫ノ上御廻申候處御省御調印濟大藏省へ回達ノ末於同省別紙ノ通り附箋ノ趣有之抑其見込タル固ヨリ一理ナキ儀ニハ無之候へトモ大凡爲事百聞ハ不如一見先以一應發艦實地檢認ノ上ニ無之テハ徒ニ席上ノ空論ニ屬シ將來着手ノ見込不相立ハ勿論其上各公使へ談判ノ致方モ有之マシク且未タ公使へ談判不致以前發艦候義ハ不苦候へトモ一度談判候上ハ右決極ニ至候マテハ發艦難相成空ク歲月ヲ過可申不都合ト存候間最前別紙議案ノ通り及御協議候處御同意相成候儀ニ有之然ルニ此度大藏省ヲヒテ更前附箋ノ趣モ有之候間御廻シ申候尙見込至急御回報有之度此段及御懸合候也

明治八年四月十二日

内務卿 大久保利通

大久保内務卿利通印

外務卿 寺島宗則殿

〔案書〕 本文ノ儀ニ付深井十等出仕參省擔任ノ向へ引會度趣申立ニ付該時取扱ノ丞出席無之旨申入候處右ニテハ書類差出置ニ付左ノ通主任ノ方へ可申進旨申置候事

八 小笠原島問題ニ關スル件 一四九

該件ハ先般來協議相濟夫々正院へ上陳ノ場合ニ至リ更ニ大藏省ヨリ別札見込ノ通り申出ニ付正院ヨリハ今以上陳無之等閑ノ旨被申越甚以着手ノ機ヲ失ヒ不都合ニ候間右見込ニ付充分ニ論議ヲ被成速ニ回答相成様依頼候事

〔附屬書〕

〔案書〕

本文一旦御協議相濟候儀ニハ候得共萬一着ヲ誤リ候へハ其關係不容易候ニ付御再思相成度見込ノ條件左ニ具陳致候伊豆七嶋其外測量ノ名ヲ以テ一艦御發遣相成云々又現今同嶋ノ實況偵察下條四條ノ目途ヲ以テ同嶋着手ノ開端有之方可然云々右ハ本邦屬嶋タル事素ヨリ判然致居候ハ不待論候得共先般來同嶋所屬ノ儀ニ付英公使等ヨリ屢尋問ノ廉モ有之候儀ハ畢竟數十年間何等ノ御處分モ無之被指置候ニ付不用ノ地ト見做シ候處ヨリ彼ノ辭柄ト相成種々異議ヲ來シ候儀ニ可有之方今ノ處ニテハ殆ト支那ノ臺灣ニ於ルガ如キ形勢ニ相成居候地ニ有之然ルヲ陽ニ名ヲ他事ニ托シ其實ハ同嶋ノ實況巡視偵察ノ爲メ諸官員乘艦發遣セン事最不可然殊ニ各國公使モ在留致シ居候ニ付今般同嶋處分可及事條等公明正大各公使へ御告知ニ相成リ彼ヨリ異議申立候ハ、同嶋



明治八年六月八日於本省寺嶋外務卿英國公使ハーク  
スと對話筆記中の抜萃

無人島の件

- 一 無人嶋所分方の義に付先般閣下敷上野氏より敷御談判  
然し右は貴國屬地敷不屬地敷其邊如何
- 一 拙者よりも及御談判候右は先年我官員を派遣し候後其儘  
にて當時所分方に付専ら評議中に有之候
- 一 右は彌貴國の屬地に爲す敷
- 一 屬地に可爲積殊に同所のものより取締方の義に付申來居  
候幾許の事をなさは取締行届可申哉其邊も協議中也
- 一 彌貴國の屬地と爲事は琉球より安し併第一屬地に至る  
に難からん
- 一 十ヶ年前敷我官員を派遣し一應取締方に手を付候
- 一 夫は英國も同様英國は既に旗章も揚置候其後米國も同  
様且魯國もありし
- 一 其跡を日本より手を付候
- 一 跡なれ共其後其儘に流行候是非同所は日本の屬地に爲  
す敷
- 一 其邊未定手を付夫丈の事ある敷徒其義の見積が第一に候

一 他國にて手を付候とも是非日本のものと爲敷  
一 最後の着手は日本屬島に違なければ他國より着手せは異  
論なきを得ず

- 一 御取締の義何頃決すへき哉
- 一 其邊如何取調居候哉海軍の船は遊び居候間格別面倒も有  
之間敷候
- 一 同所の小舟折々横濱港に來取締なきを憂ふ
- 一 此後人を殺等の事無之共難申故に何と敷取締致たし
- 一 人口も追々殖候由左すれば今日は無人嶋に非らず無政  
府島ならん
- 一 拙者へも取締の事申出たり同所へ佛國人も住居の由因  
て取締の義佛國へも申出候よし
- 一 獨逸國等には他の地方を望居候へは又同國より可致取  
締裁も難計候
- 一 同所の人口は御承知に候哉
- 一 當時百人計の由以前は七八十人計のよし

他事

一五二 六月十三日 大久保内務卿ヨリ 寺嶋外務卿宛

小笠原島着手ニ先立ち各國公使ニ諒解ヲ求ムル  
必要無シトノ外務省ノ意見ハ之ニ對スル大藏省  
ノ意見ト共ニ太政官正院へ進達セラル旨通知ノ件

附屬書 五月五日熊谷大藏大丞ヨリ内務大丞等宛書翰寫  
小笠原島へ官吏派遣ニ先立ち同島ニ著手  
ノ旨各國公使ニ告知アルヘキ旨重ネテ申  
出ノ件

小笠原島着手ノ儀大藏省異見ノ趣過日及御協議候末猶別紙  
ノ通申越候間御省御回答書共取添正院ニ進達致シ候間御心  
得トシテ申進候也

明治八年六月十三日

内務卿 大久保利通

外務卿 寺嶋宗則殿

(附屬書)

小笠原島着手上申ノ儀ニ付外務省調印ノ末御回達相成候ニ  
付當省異見ノ條件附箋ヲ以御照會ニ及候處猶又御省ヨリ外

八 小笠原島問題ニ關スル件 一五二

務省へ御掛合相成該省見込ノ次第申越候趣ニテ別紙御差廻  
シ相成候ニ付反覆熟讀致候處當初舊幕府ヨリ小笠原嶋ニ官  
吏派出セシ時ト雖モ該島寄留屬民ノ事ニ付英米公使ヨリ論  
辯候儀ハ有之候得共我國該島所轄ノ權利ニ於テハ隻詞片言  
ノ異論モ無之當省異見ノ次第ハ到底過慮ニ屬シ今般該嶋へ  
官吏派出候事ニ付決テ障碍相生シ中間敷條斷然從前協議  
ノ據置上申候方可然旨ニハ候得共過日モ縷々陳述致置候  
通萬一着テ誤リ候得ハ其關係不容易一大事件ニ付當省ニ  
於テ該省見込ノ次第了解致兼候條件尙又左ニ具陳致シ候  
外務省異見ノ趣ニハ小笠原嶋御處分ノ儀ニ付船艦御發遣相  
成官吏派出ノ上直チニ御着手相成度候得共該島ノ儀ハ我國  
ニ於テ多年何等ノ御世話不被爲在事ニ付萬一既ニ外國政府  
ノ保庇スル所ト相成居候哉モ難確知候間先ツ其實況ヲ探偵  
シ然ル後着手ノ緩急御定メ相成度旨ニ候處今日該島寄留ノ  
人民ハ英米其他島合ノ雜種ニ可有之候得ハ萬一外國政府ノ  
保庇スル所ト相成居候ハ、其保庇スル處恐クハ英米二國ノ  
外ニ出候事ハ有之間敷果シテ外國政府ノ保庇スル所ト相成  
居候ハ、四省ノ官吏其地ニ臨ミ實況ヲ探偵スル迄モ無之其  
事情相分リ可申ヨシヤ其地ニ臨ミ實況探偵シ候上ナラテハ

其事情不相分儀ニモセヨ實況ヲ探偵シ候上若シ果シテ外國政府ノ保庇スル所ト相成居候ハ、猶更異議申立候哉モ難相測其節ニ至リ彼是紛議ヲ生シ候様ニテハ實以不體裁ノ次第ニテ全ク異議ナキ事ニ候得ハ固ヨリ無論ノ儀ニ候得共萬一異議有之候事ニ候得ハ一應ノ御告知モナク該島ノ御處分相成候ハ、猶更彼ヨリ異議申立候ハ必然ノ勢ニテ御處分ノ儀到底異議有之候事ニ候ハ、前ニ發スルト後ニ發スルト遲速ノ別ハ有之候トモ其異議アルニ至テハ同様ノ譯ニテ殊ニ一應ノ御告知モナク御着手相成候ハ、異議ニ不及程ノ事ヲモ異議申立候様立至リ可申且ツ當省見込ノ次第ハ該島御處分ノ儀ニ付各國公使へ御諮詢相成候上御着手相成度云々ト該省書面ニ有之候得共右ハ決テ各國公使へ御諮詢相成度トノ儀ニ無之一應御告知相成候迄ニテ彼ニ詢リ候儀ニ無之段附箋ニ判然致居候尙又今般該島御處分相成候儀ニ候ハ、我國ノ屬島タル事判然致シ居候儀ハ固ヨリ論ヲ不待候得共如何セン我國ニ於テ數年間何等ノ御處分モ無之漠然被指置候儀ニ付隨テ外國ノ辭柄ト相成候儀モ不少到底我國所屬ノ名アリト雖モ風化ノ光被セサル殆ント其實ナキニ似タリ畢竟支那ノ臺灣島ニ於ケル如キモ其所有ノ權利判然致居候ハ、其

處分ノ儀ニ付支那政府ヨリ如何様ノ處置致シ候トモ外國政府ニ於テ敢テ一言ノ異論無之管ニ候得共我國ヨリ支那國ニ向テ其所有ノ權利ヲ爭ヒ得シ者ハ全ク其名アリト雖モ其實ナキニヨリ候事ニテ小笠原島ノ如キモ我國所屬ノ名アリト雖モ其實ナキニ至テハ相異ナラサルベク右等ノ事情モ有之候事故今般該島御處分相成候儀ニ候ハ、着手ノ大小緩急ヲ不論一應各國公使へ御告知相成候上公明正大ノ御處置有之度左候ハ、自然外國政府ノ嫌疑モナク隨テ彼是異議申立候様ノ儀モ少カルヘク御處分ノ爲メ却テ御都合ノ儀不少事ト存候間一旦御協議濟ノ上ニテ再應外務省へ御照會相成該省異見ノ次第モ有之且外國關涉ノ事務ハ固ヨリ該省ノ主任ニ付當省ニ於テ彼是異見申陳候儀如何ニ候得トモ何分重大ノ事件ニ付再應異見陳述致候條今一應御考量有之度御回答旁此段申進候也

明治八年五月五日

熊谷大藏大丞

內務少丞御中

追テ本文ノ儀ハ當省異見ノ次第無餘蘊致吐露候處此上御協議ノ場合ニ至リ兼候ハ、徒ラニ往復ヲ重ネ論辯ヲ費候

トモ時日遷延候迄ニテ終ニ結局ニ至ルノ期有之間數候條最前附箋并ニ今回ノ御報書トモ其儘相副御上申相成候様致度是亦併テ申入候也

一五三 九月二十四

寺島外務卿、大久保內務卿、大隈大藏卿、河村海軍大輔ヨリ三條太政大臣宛

小笠原島へ官員派遣ニ關シテハ出帆日限決定ノ上各國公使ニ報知スヘキ旨等上申ノ件竝ニ之ニ對スル三條太政大臣決裁

外務卿 寺島 宗則  
內務卿 大久保 利通  
大藏卿 大隈 重信  
海軍大輔 河村 純義

太政大臣 三條實美殿

小笠原島着手方略ノ義再上申案

小笠原島着手方略ノ義ニ付四省合議ノ上明治八年五月中及上申候處前以英米ヲ始各國公使へ報知ノ上着手順序相立候義ト心得尙四省協議ノ上至急可及談判旨御指令有之候ニ付尙及合議候處元來同島ノ義ハ前上申中致詳述候通リ本邦ノ

所屬ニ相違有之間數候得共舊幕府ヨリ出張ノ官吏引拂ノ后ハ別ニ渡航ノ者モ無之島中ノ實況茫乎不詳ビールス占居ノ模様等モ不分明ニ付一概ニ臆度而已ヲ以著手モ難相成ヨリ實地偵察ノ爲メ官員出張爲致候義ニ候得ハ豫メ各國公使へ談判可致筋ニ無之尤外國人多數住居候ニ付テハ全ク報知不致譯ニモ相成間數候間何レニモ官船ノ艦裝相整解續ノ日限略相定リ候上ニテ致報知度存候勿論今般四省ヨリ出張ノ官員實地ニ致處分難キ事情モ候ハ、前上申ノ通實況具狀ノ上何分ノ御指令相仰キ可申事ニ御座候依テ至當御沙汰有之度四省合議此段更ニ上申候也

明治八年九月廿四日

上申ノ趣聞屆候事

明治八年十月八日

太政大臣之印

一五四 十月七日(假)

寺島外務卿、大久保內務卿、大隈大藏卿、河村海軍大輔ヨリ三條太政大臣宛

此ノ度ノ小笠原島官員派遣ハ同島ノ現狀調査ニ止メ官廳舎取建等ニハ及ハサルヘキ旨上申ノ件

十月十九日上達

明治八年十月十七日出

小笠原島着手見込の義に付上申

小笠原嶋着手方略見込の趣本年六月十三日四省協議の上相  
一 伺候處伺の趣は前以英米を始各國公使へ報知の上着手順序  
相立候義と相心得猶四省協議の上至急談判可及旨御下令に  
付尙協議の上九月廿四日再上申仕候處上申の趣御開届に付  
ては最前相伺着手方略四條目の見込を以官員該嶋へ渡航  
可爲致の處於彼地住民歸服いたし候上は直に假官廳取建出  
張官員も引分れ處置可致見込に候得は可持越諸具用意品等  
多分に候處若住民おゐて故障等有之候節は空敷冗費に相屬  
し候間此度の義は一應探偵而已の爲四省より壹兩名つゝ渡  
嶋爲致實況相分り歸京具狀の上再渡の節諸具等可持越候積  
り四省協議仕尙又此段上申仕候也

明治八年 月 日

太政大臣 三條實美殿

四省卿連名

此回議貳通御廻申候御異議無之候ハ、御調印ノ上當省へ御返却有  
之度候也

八年十月十九日

内務省

外務省 十月二十日海

海軍省

御中

(附録二)

尙々今日中御決判ノ上海軍省へ御廻方御取計可被下候也

内務省

外務省御中

註一、本號文書日附ヲ缺クモ「十月十七日出」トアル起案ノ  
日附ニ據リ假ニ十月十七日トセリ尙「十月十九日上  
達」トアルハ三條太政大臣ニ上達トノ意ニハアラス  
ト認メラル

二、本號文書海軍省ニ廻付ノ後十月二十二日附子安外務  
少丞ヨリ小花地理大屬宛書翰ヲ以テ本號文書中ノ  
「候處若住民おゐて故障等有之候節は空敷」ナル字句  
ノ删除方ヲ交渉シ居レル處十月二十八日附外務大丞  
等ヨリ小花地理大屬宛書翰ヲ以テ昨廿七日持參越  
アリタル小笠原島着手見込ノ上申書(惟フニ改題済)

ノモノカニ外務卿捺印ヲ了シ差進ムル旨通知シ居  
レリ

三、本號文書貼紙ニ「回議貳通」トアルハ本號文書ト

「小笠原島着手主任ノ義ニ付何(省略)トノ二通ヲ指  
スノ意ナリ

一五五 十月二十日 太政官史官ヨリ  
外務大丞等宛

田邊外務省出仕等小笠原島渡遣ノ旨通知ノ件

外務省四等出仕

田邊 太一

租稅 權助

林 正明

御用有之小笠原島へ被差遣候事

製作寮六等出仕

宇都宮 三郎

御用有之英米兩國へ被差遣候事

右之通本日御達相成候條爲御心得此段申入候也

八年十月廿二日

八 小笠原島問題ニ關スル件 一五五 一五六 一五七

史官

外務大少丞御中

一五六 十月二十日 太政官史官ヨリ  
外務大丞等宛

小花地理寮出仕小笠原島出張ヲ命セラレタル旨  
通知ノ件

地理寮七等出仕

小花 作助

御用有之小笠原嶋へ出張被 仰付候事

右之通本日御達相成候條爲御心得此段申入候也

明治八年十月廿九日

史官

外務大少丞御中

一五七 十一月二日 寺島外務卿ト英國公使トノ對話書

小笠原島へ日本官員派遣ニ關スル件

明治八年十一月二日於本省寺島外務卿英國公使ハ  
クス應接記の内

- 一 小笠原嶋えは最早發行可相成歟
- 一 未だ船の事不決多分今日頃は可決候彼是取調罷在候
- 一 よき船御遣相成候哉
- 一 船の事には拙者不關
- 一 何事を御調に相成候哉
- 一 何々の事を同嶋にて取調可來との事に有之候
- 一 同島え行く船へ英人便乞出來候歟
- 一 差支は有之間數併否は拙者不心得今日初ての御申出に付
- 一 同問合可申
- 一 同島へは兼て便なし稀の便船に付貴國船に相願度
- 一 幾人に候哉
- 一 我國人壹名なり
- 一 申談可致候

一五八 十一月五日 寺島外務卿ト英國公使トノ對話書  
小笠原島へ日本官員派遣並ニ同島ノ所屬ニ關ス

ル件

明治八年十一月五日於本省寺島外務卿英國公使ハ  
クス應接記ノ内 英國領事陪席

- 一 小笠原嶋エノ舟ハ何ツ頃出帆相成候哉
- 一 今日モ承合候處未タ其舟モ不定義ニ付出帆期日モ難相分候扱兼テ御咄有之候貴國人乗組ノ儀ハ別ニ差支ハ無之候得共飲食等ノ都合ハ如何ナルモノカ
- 一 拙者方ニテ別ニ一船ヲ派出候積ニ付此度ノ便船ハ相願問數候一體同嶋ノ儀ハ貳ヶ年前ヨリモ度々相伺候義ニ
- 一 テ同地ニ在ル人民共モ管轄無之故大ニ困却致居候様子ニテ同島ニ在ル我國人ヨリモ度々申來候事モ有之候此度同嶋御着手相成候上ハ彌貴國ノ屬地ト御定相成候義ニ候哉
- 一 然リ
- 一 何等ノ緣由ヲ以テ貴國ノ屬地ト被相定候哉
- 一 是迄ノ手續モアリ又近島ノ儀故我管轄島ト定ムルナリ
- 一 近嶋ナル故屬地ト定ムルトノ説ハ難當候若シ遠近ヲ以テ屬否ヲ定ムルナラハ琉球島ハ支那ノ屬地ト云フモ可

ナラン

- 一 従前ヨリノ手續キモアリ又十年前ニハ我官吏ヲモ派遣致セシ位ナリ
- 一 官吏ヲ派遣セシハ貴國ノミナラス米魯又我國ヨリモ派遣候
- 一 夫ハ政府ヨリ命シテカ
- 一 然リ
- 一 最后ニ官吏ヲ派遣セシハ我國ナリ又近海ニ在ル群嶋ヲ其儘ニ致シ置クハ國ノ爲ニ不宜トハ古哲ノ金言モ有之旁以テ今般着手スル事ニ決定セシナリ
- 一 貴國ニテ御所轄相成候ハ、他國ヨリ異論ヲ申立問數候
- 一五九 十一月八日 英國公使ヨリ 寺島外務卿宛
- 小笠原島へ日本官員派遣ノ趣意並ニ派遣官員ノ姓名等ニ關シ照會ノ件

British Legation,  
Yedo,

November 8, 1875.

Sir,  
I should feel obliged if you would kindly inform me of the time when the Japanese vessel will sail for the Bonin Islands as soon as this shall have been determined. Also the name of the vessel and the names of the officers who are going in her, and whether the object of their mission is to establish Japanese authority in the Bonin Islands.  
I avail myself of this opportunity to renew to Your Excellency the assurance of my distinguished consideration.

HARRY S. PARKES,  
Her Britannic Majesty's  
Envoy Extraordinary and  
Minister Plenipotentiary  
in Japan.

His Excellency  
Terashima Munenori,  
Minister for Foreign Affairs  
etc., etc., etc.

(右和譯文)

翻譯文

以手紙致啓上候然ハ無人嶋え罷越へき日本船出帆の日限相  
定候次第御報知被下度且同船名前其外乗組貴國官員姓名尙  
又無人嶋を貴國政府支配に復する爲の取計を爲致候積りに  
て御遣に相成候哉否是又御報知被下度此段可得御意如斯候  
敬具

十一月八日

英國公使

ハリエスバルケス

寺嶋外務卿閣下

支配ニ復スルトハ英文ニヨレハ支配ヲ確定スルノ意

一六〇 十一月十日

田邊外務省出仕、林租稅權助、根津海軍  
大尉、小花地理寮出仕ヨリ  
寺嶋外務卿、大久保内務卿、大隈大藏卿、  
河村海軍大輔宛

英國軍艦小笠原島へ向ケ近日出航ノ由ナルモ右  
ハ如何ナル趣意ヲ以テナリヤ承知シ度旨何ノ件

外務卿  
内務卿  
大藏卿  
海軍大輔

今般私共一同小笠原島へ爲御用被遣候に付差向き左の  
一條至急御指揮被下度此段相伺候也

小笠原嶋居民處分後來の見込等は只今より期候筋に無之段  
は勿論に候處私共被遣候は本島實地の景況偵察の御趣意に  
て直様御着手相成候事には無之候へ共英國軍艦不日彼地に  
渡航可致旨外務卿殿へ申出候趣に傳聞仕候右は何等の趣意  
にて候哉私共渡海前相心得置申度左も無之渡島の上住民懷  
柔の方略等相施し候共彼軍艦渡島致し萬一紛紜を生候儀有  
之候節に臨み其所屬の權利を争ひ候儀は素より私共の權内  
に無之は無論に有之到底御趣意も貫徹不致徒に莫大の費用  
を費し候のみならず外人の嗤笑を招き候様可相成も不可測  
甚た過慮の至に候へ共苦心仕候依ては前條英艦渡航の趣意  
私共渡島前委曲被仰聞度此段相伺候也

明治八年十一月十日

外務省四等出仕 田邊太一(印)

租稅權助 林正明(印)

海軍大尉 根津勢吉(印)

地理寮七等出仕 小花作助(印)

註 本號文書ノ何ニ對シテハ同月寺嶋外務卿、大久保内務  
卿、大隈大藏卿、河村海軍大輔ヨリ右四名宛一五  
七、一五八、一五九、一六一ヲ添へ英艦ノ小笠原島渡  
航ニ關シテハ以上ノ文書ノ如クナレハ「彼地於て別に  
紛紜相生可申懸念は無之管に候萬一紛議相生し候上は  
其旨復命の上御處置の次第も可有之候間左様承知可有  
之候」ト回答シ居レリ

一六一 十一月十日 寺嶋外務卿ヨリ  
英國公使宛

小笠原島へ官員派遣ノ趣意ハ同島ヲ以テ我力政  
府ノ所轄ト決定センカ爲ナル旨竝ニ派遣官員ノ  
姓名等回答ノ件

〔英書〕  
第百十號 十一月十二日達濟

以手紙致啓上候然ハ本月八日附貴翰を以て我官員を小笠原  
島へ差遣し候旨意并官員姓名船號等御問合の趣致承知候則  
我官員派遣の旨趣は御來意の通り右小笠原島を我政府の所

八 小笠原島問題ニ關スル件 一六一 一六二

轄に相定可申見込を以て準備のため差遣候事に有之候且派  
遣可致官員は外務省四等出仕田邊太一大藏省租稅權助林正  
明内務省地理寮七等出仕小花作助海軍大尉根津勢吉外に隨  
行官員凡五名官船明治丸え乗込來る十六日頃當地出發の積  
りに有之候此段回酬得貴意候敬具

八年十一月

寺嶋外務卿

英國公使

ハリリーエスパークス閣下

一六二 十一月十日 寺嶋外務卿ト英國公使館書記官トノ對  
話書

英國軍艦ノ小笠原島派遣ニ關スル件

明治八年十一月十七日於本省寺嶋外務卿英國公使代  
ブランケット應接記の内

一貴國より無人島へ御出艦の事は如何

一ケリーと申軍艦可差送管也御國よりの出帆は何日頃  
なるや



一 凡廿一日頃にも可相成候

一 我船出帆も其頃ならん御遣しの明治丸は同所に長く留る御積りなるや

一 長くは滞留致間敷候一週間も留て歸るならん狭き所故差して夫程の用事も有之間敷候

一 其節官員も御歸國なるや

一 然り

一六三 十二月二日 小笠原島出張田邊外務省出仕ヨリ  
外務大臣等宛

小笠原島ニ於ケル英國軍艦及同島居住民ノ動靜

等報告並ニ今後ノ同島支配方ニ關シ進言ノ件

附記 十二月八日英國公使館書記官ヨリ寺島外務卿宛

小笠原島派遣明治丸ノ近況ニ關シ報知ノ件

十二月八日到

英艦歸航幸便を以一簡拜啓候 小生去月廿一日正午横濱拔錨海路無滞同廿四日早朝小笠原島二見港投錨候兼て承及候英

所謂トルトルの味まで兼て承知候事故さのみとも不存候へ共始來の人には頗る失望の體に見受申候乍末各位大人隨時便安是祈

十二月二日

田邊 太一 再拜

外務大少丞各位

尙以天野佐原何れも無事御放懐可被下候

本號文書ヲ英艦ニ依託シタル後ノ小笠原島派遣明治丸ノ近況ニ關シ英國公使館書記官ノ書翰便宜左ニ附記ス

(附記)

以手紙致啓上候然らば横濱在留我國領事ロベルトソン氏今般我軍艦クルレーウ號に乗組小笠原嶋え罷越候處昨日午後三時頃同艦横濱え致歸着候且去る三日貴國船明治丸小笠原嶋より南方に有之 Bailly 嶋え向け出帆の處風浪のため不得止事歸來リクルレーウ艦小笠原嶋より横濱え出帆の折柄明治丸小笠原嶋え致歸着候旨ロベルトソン氏より拙者え申越候間格別肝要の新聞にも無之と存候得共御報知のため此段申進候敬具

十二月八日

艦カローも引續廿六日入港横濱領事ロベルトソン氏乗組候島民此迄訴出候事件等取り糾候趣に御さ候所屬論杯には固より相渉不申且本島の所屬本邦條理は自然黙認致居候様子聊の葛藤も無之大安心仕候出立前子安君に御内談仕置候米艦隊派等の方略にも不及次第に御さ候島民に至り候ては舊年の渥恩に浴候事何れも本邦の庇護を仰度志望の様子に相見え申候就ては此已後御着手の御都合早々相運候様致度祈居候移民等の所は今般同行の華族京極高典<sup>舊蹟多</sup>頻に擔任結社開拓の志願の由に候間此上は只被派官吏保護の御手配御さ候而已に候へ共内地開港場にも難比候へ共外國人居留の上は全く内律に同しく難致何れにも此島限り一ケのコンウエンションなりノチヒケーションなり出來候て島民本邦政府のチヨチスチクシヨンに隨從爲致候丈けの御都合に相成候様に無之ては相成間敷右は外務省所任の儀と存候條御序の節長官兼え御咄被成置被下度奉存候

氣候は申迄にも無之候へ共未だ秋季下涼の候至て凌能く只碇泊場不穩候間海門より吹込強候節は航海中も同様の動搖を生し常に胸間心懸を不甞上陸候ても纒樹下溪間に一憩候まてにて可然家屋の休息可致ものなく一同困却仕候 小生は

英國公使館第一等書記官

ブランケット

寺嶋外務卿閣下

事項九 下ノ關償金米國ヨリ返還ニ關スル件〔第七卷事項五參照〕

一六四 一月十四日 寺島外務卿ト米國公使トノ對話書

下ノ關償金受領ニ就キテノ米國公使ノ見解陳述  
並ニ右償金ハ返却ノ上教育資金ニ充テシムヘシ  
トノ米國大統領ノ意向等紹介ノ件

第十號

明治八年一月十四日於外務省寺嶋外務卿米國公使對  
話書

一 下ノ關償金の義に付ては外公使は御拂入を頻りに望み候へとも拙者は同意不致其後右償金は御拂渡相成候間米國の分も同様可受取と被申候へとも拙者は其節受取不申直に自國政府に書簡を送り是は返却する方宜しかるへしと申遣し候  
拙者米國に在る時議事院の内に居り評議の節下ノ關償金は日本に返す方よろしと投票いたし候其節大統領の

メセチは御一讀被成候哉  
一讀候  
一 メセチの内に大統領は返却すへしと度々勸め候  
大統領は頻りに可返と被申候へとも議事院にて從はぬもの有之一旦は受取に相成候  
此度のメセチには下ノ關償金は利息共日本へ返すへし是は日本の人を教ゆる爲の資本にすへしと勸められ候其利息共今は四拾萬圓餘に相成候是を返すは道理と思ひ居候間返す方の論者多く候米國政府にては日本政府へ對し如此深切の取扱いたし候間日本政府にては同様御深切の御取扱有之事を望み候右返金を以學校御建築相成候は、大に爲めに可相成候  
是迄の議官等は過半大統領の意に従ひ候へとも三月は議員の交代に付新規の議員も同様大統領に同意いたし候哉否は難計候

一六五 三月二十三日 寺島外務卿ヨリ  
三條太政大臣宛

米國駐劄吉田公使ヨリ報告シ來リタル下ノ關償  
金處分ニ關スル米國議會ノ所見上申ノ件

附屬書 二月三日米國駐劄吉田公使ヨリ寺島外務卿宛書  
翰寫  
下ノ關償金處分ニ關スル米國議會ノ所見  
報告ノ件

〔甲第七十二號〕

太政大臣 三條實美殿 寺嶋外務卿

下關償金一條ニ付上申

下關償金一條ニ付米國各州議員之所見吉田全權公使ヨリ別  
紙之通り申來り候ニ付此段及上申候也

三月廿二日

〔附屬書〕

下ノ關償金ノ一條ニ就テハ當國各州議員ノ所見大抵之ヲ日  
本ニ返却スルニ歸セリト雖モ未タ區々ノ論議アツテ一定イ  
タサス候其一ハ此金ヲ以於桑港ヲリエンタル學校ヲ設立セ  
ント其二ハワイヲミン艦ノ下ノ關ニ於テ先年長州ノ炮士官ヲ

九 下ノ關償金米國ヨリ返還ニ關スル件 一六五 一六六

賞與スルニ此金ヲ以テセント其三ハ日本東京ニ英學大校ヲ  
建設シ米國ノ教師ヲシテ之ニ統領タラシメント其四ハ此金  
ヲ日本政府ヨリ得タルハ掠奪ノ所爲ニ屬スルヲ以テ彼戰爭  
中ノ經費ナリヲ差引其他ハ總テコンヂシヨ、ナシニ日  
本政府ニ返戻シ以テ掠奪ノ跡ヲ消滅セントス大凡是等ナリ  
然ルニ先信ニモ内披ヲ以申進候通當期ノ議院ハ當三月四日  
ニ至リ閉院スヘキ定規ナレバ夫迄ノ内他ニ議定スヘキ緊要  
ノ條件アツテ右償金一條ノ義ニハ涉リ難キ由ニ有之候昨今  
大博士ヘンリーへ面晤ノ節當人ノ意見ニテハコンヂシヨ  
ナク返却スルヲ最モ公然至當ナリトシ彼モ此議ヲ左袒盡力  
セリトノ親話有之候去ナカラ我日本政府ニ於テハ孰ヲ企望  
スル事モ無之儀ニ付其含ヲ以テ對話イタシ申置候右ノ趣御  
含迄ニ入御聽候也

明治八年二月三日

全權公使 吉田 清成

外務卿 寺嶋宗則殿

一六六 三月二十三日 寺島外務卿ト米國公使トノ對話書

下ノ關債金返却ニ關スル米國公使ノ意向談話ノ件

第四十四號之内

明治八年三月廿五日於外務省寺島外務卿米國公使ビ  
ンハム應接記之内

一下ノ關債金ノ一件自分は勿論返却の見込に有之候間其  
旨は政府へ申立置候英の方にては自分を勤めて同意爲  
致度様子にて新聞紙にも種々記載有之候間夫を防ぎ居  
り候元債金の高は各國相談の上取極右を分賦方に付て  
は御國には聊か關係のなき事に候米國にて返却候上は  
外にて返さぬといふは不都合なもの故新聞紙にて彼此  
戦ひ居候最初は債金を請求する事素より相當の事なり  
しか今に至りては時勢も違ひ候間取らぬ方か宜しかる  
へく被存候自分は返却する事を防止する様に新聞に書  
てあるは詰り自分を悪く申事にて是等は條約改訂の事  
等御國の肩を持候様存取り候もの有之候故の事に候

一六七 五月九日 寺島外務卿ヨリ  
三條太政大臣宛

米國駐劄吉田公使ヨリ送付シ來レル下ノ關債金  
處分ニ關スル紐直「イヴニング・ポスト」紙ノ論  
說上申ノ件

附屬書 下ノ關債金處分ニ關スル紐直「イヴニング・  
ポスト」紙論說和譯文

〔朱書〕  
甲第百貳拾號 五月九日達了

太政大臣 三條實美殿

寺嶋外務卿

下關債金之儀ニ付再上申

下關債金一條ニ付米國各州議員ノ所見過日吉田全權公使ヨ  
リ申來候ニ付上申及置候處今般更ニ同伴ニ付別紙新聞紙鈔  
譯差越候ニ付及上申候也

明治八年五月八日

〔附屬書〕

明治八年二月十八日紐育刊行エウエニングポスト新聞

鈔譯

日本下關債金ノ措置ニ關シ米國下議院ノ外國事務掛ニ於テ

議案ヲ製シ將サニ議院ニ報告セントス抑現今債金ノ惣額百  
二十萬弗ニ及ヘリ其内凡九十萬弗ハ國務省ニ於テ之ヲ融通  
運用シ漸々増殖セシモノナリ三十七萬五千弗ハ日本ヨリ尙  
米國へ回送ノタメ今現ニ英國ニアリト云フ外國事務掛ノ議  
案ニ據ルニ英國ニ在ル三十七萬五千弗ハ日本政府へ返還シ  
十二萬五千弗ハ一千八百六十三年下關ノ航路ヲ再開スル事  
ニ與リシ「ワイヨミン」「タキヤン」兩艦ノ士官及乗組ノモノ  
ニ賞與シ三十萬弗ハ國務卿ニ領置シ此金額ヨリ生スル所ノ  
殖益ヲ以テ在日本公使領事ノ譯官トシテ奉仕セシムル爲メ  
米日二國ノ少年若干員ヲ限リ語學ヲ教授スルノ費用ニ供シ  
殘額四十七萬五千弗ハ米國大藏省ニ收入スベシト余輩此立  
案ノ趣意ヲ察スルニ是ヨリ先キニ債金ノ事ニ關セシ諸論說  
ヲ折衷セル事明瞭ナリ因テ茲ニ諸說ノ大旨ヲ掲ケ以テ之ヲ  
證明スヘシ其一說ニ云此債金ハ悉皆日本政府ニ返還スベシ  
ト蓋シ此立論ノ旨趣ハ誠實ト遠謀トノ二ツノ者ニ原由スル  
ナリ其誠實トハ何ソ曰ク下關ノ航路ヲ再開セシ軍費現實五  
萬弗ニ過キス又下關ノ海峽ヲ鎖サセシハ當時日本政府ニ抵  
抗セシ逆徒ノ所爲ニシテ政府其逆徒ヲ制服スル能ハス不得  
已ヨリ各國兵力ヲ以テ討求セシモノニシテ然シテ日本ヨリ

斯ク許多ノ債金ヲ領受セシハ蓋シ日本政府ニ於テ左ノ二事  
ヲ監別セサルニ由ナリ即チ其一ハ米人ノワイヨミン艦トタ  
キヤン艦日本船トヲ率テ逆徒ヲ征服スル爲メニ盡セシ服役  
ノ輕重ヲ量ラス其二ハ米國二艦ノ兵役大英法朗西荷蘭三國  
ノ海軍ニ比較スルニ足ラサル事ヲ辨セス故ニ今現費外ノ債  
金ヲ返還スルハ誠實ヲ表スルニ由ルナリ其遠謀トハ何ソ曰  
ク現費ヲ辨償スル爲四萬二千弗ヲ領シ殘額ヲ悉皆之ヲ返還  
スル時ハ日本ニ於テハ大イニ米國誠實ノ舉タルヲ識認シ隨  
テ日本通商ノ便益モ亦應ニ盛大ナルヘシ是所謂誠實ハ即他  
日ノ便益ヲ謀ルノ意ニ由レリ外國事務掛ノ議案ハ上文論者  
ノ意ニ適セシメンカ爲メ未タ米國ノ金庫へ收入セサル三十  
七萬五千弗ノ金額ヲ返還スルノ議ヲ起セシナラン又他ノ一  
說ニ云此債金ノ幾分ハ褒賞トシテ下ノ關ノ役ニ服從セシ海  
軍士官水夫等ニ配與スヘシト其故ハ曩キニ一千八百六十  
三年米國亂ノ秋ニ方リ洋上ニ於テ捕獲ノ功アル海兵ハ各賞  
典ヲ得タリ然ラハ下關戰爭ノ時ニ方リ日本海ニアリシ海軍  
士官水夫等モ亦齊シク特別ノ賞典ヲ得ル事當然ノ事ナラン  
否ラサレハ他ノ兵役ニ服セシ同儕ノ者ハ恩典ヲ蒙リタルニ  
特ニ此輩ニ限り此權利ヲ剝奪スルノ理ニ當タルヲ以テナリ

ペンヂヤミン、エフ、ボットレル氏ハ此論ヲ固執シ全氏及全氏ノ論ニ左袒セシ者ノ執心ハ畢竟米國ニ於テ出納スルノ條理無キ金額ヨリ此賞典ヲ配與セントスルカ此說ヲ主張スルモノハ謬ニ所謂兩端ヲ持スルモノト云フベシ何ントナレハ既ニ説明セル如ク恩惠ヲ施シ以テ海軍士官ノ歡心ヲ買ハントスルモノ、如シ若シ否ラザレハ此債金ヲ米國大藏省ニ收納シ政府ノ定費ニ供セントスルナリ目今之ヲ定費ニ供スルノ最要ナルハ疑ヲ容レサルベシ即チ外國事務掛ノ議案ニ十二萬五千弗ヲワイヨミン及タキヤン艦乗組ノ士官水夫等ニ賞與セン又五十萬弗ノ高ヲ米國政府ニ收入スベシトノ議ハ殆ントボットル氏ノ論說ニ原由セシナラン又更ニ一說アリ云此債金ハ教育ノ費用ニ供スヘシト然レトモ此黨ノ内或ハ日本ニ於テ學校ヲ創立セン事ヲ希望シ或ハ米國學校中ニ就テ別ニ日本學局ヲ設立セン事良法ナリトスル者アリ即チ議案ニ日米兩國ノ少年ヲ教育スルノ資本ニ三十萬弗ヲ充テントスルハ此意ヲ達セシメン爲メナリ是ニ懸テ之ヲ觀ルニ本議ハ各論者ノ左袒ヲ得ンカ爲メニ巧ニ立案セシモノ、如シト雖トモ吾輩ハ其決議ニ至ラサル事ヲ信ス何ントナレハ現今國會ノ閉期近キニ在レハ恐クハ之ヲ討議スルノ時日ナ

カルベシ然レトモ各議員ノ異說ヲ調和スルタメニハ頗ル奇說ト謂ツベシ且議案ノ條款中ニ償金ノ幾分ハ日本へ返還スルノ議ヲ掲載スト雖トモ我國ノ損失ヲ辨償スルニ必要ノ金額ノ外悉皆之ヲ返還スルト云ニ非ス但未タ我金庫ニ收入セサル者ノミヲ返付セントシ而シテ殘額ノ内僅小ノ高ヲ以テ米日兩國ノ少年教授ノ費用ニ供セントセリ又衆議ニ適セシメンガタメ半額餘ヲ常費ニ供セントスルカ如キハ抑此償金ノ我國ニ屬スルモノカ或ハ鄰國日本ニ屬スルカノ條理ニ於テ更ニ疑ヲ容レサルモノニ似タリ要スルニ此金ハ我國ノ有力將タ否ラザルカノ理ヲ究ムルニ在ルノミ若シ我有ニ歸スレハ斯ク要用ノ時ニ方レテハ須ク之ヲ領收スベシ果シテ我有ニ屬セザレハ尙何ソ僅少ノ金額ヲ返還シ殘額ヲ抑留シ以テ我輩ノ歡心ヲ得ルヲ謀ル事ヲ爲ン若シ之ヲ取ラハ宜シク我國ニ屬ス可キノ條理ヲ辨明シテ而シテ後之ヲ取ル可キナリ

前議外務掛ニ於テ遂ニ決議ニ至ラス更ニ折半スルノ議案ニ改定セリ同月廿日刊行新聞紙ニ據ルニ左ノ如シ  
 下關債金ヲ折半シ一半ハ之ヲ日本ニ返還シ一半ハ少年ヲ募リ日本語ヲ學ハシメ在日本ノ公使領事ノ譯官ニ使用スルノ

學資ニ充ントノ議案ヲ得タリ然レトモ余輩ハ前議ニ既ニ論セシ如ク到底其金ノ所屬ヲ講究スルニ在ルノミト云々

事項一〇 秘露國風帆船「マリヤ・ルース」號ニ關スル件 (第七卷事項八參照)

一六八 一月十八日 山口外務少輔ヨリ 露國駐劄本公使宛

秘露國ヨリ露國皇帝宛提出セル「マリヤ・ルース」號一件書類ニ對スル辯論書送付ノ件

第八年第二號 マリヤリユース一件

去年九月廿六日附第廿六號信を以マリヤリユース一件書類中會て御差送(七月十日附 第九號)の書類目錄中加朱點候分即目錄中の第六第七第十第十二(別紙ア、ベ、)及第十三の書類御差越に付右へ對し答辯書取調の上御廻し可申旨去年我第二十二號十二月五日附公信(註省略)を以申進置候處右答辯書スミット氏へ相委ね此程取調出來いたし候然る處英文耳にては其政府へ御差出方旁御不都合の儀も可有之存候に付チヨードン氏へ佛文譯取調候様相命是亦今般出來別冊の通上木いたし候間則給部丈差進申候右は花房書記官にも兼て心得被居候

通右件に付ては初發よりスミット氏へ相托し爲取扱候儀にも有之且衆議の爲時日を費し遅延機會を失ひ候ては無詮儀に付右答辯書はスミット氏取調の儘差進候間篤と御熟閱の上其政府へ差出方旁可然御處分有之度別冊差進此段得御意候也不宜

第八年一月十八日

外務卿代理

外務少輔

在魯特命全權公使

榎本武揚殿

追て去年第二十九號貴信御申越の憲法類篇布告全書并新聞紙類私信類とも別紙(註省略)入記の通差送候將又先便御申越の陸軍廻しの船橋運送車雜形荷物今般佐野辨理公使持越相成陸軍省へ相廻候間此事御放念有之度候

一會て上梓いたし候マリヤリユース一件書類第一第二各五部宛御入用の儀も可有之哉存候に付今便附呈候

一スミット氏より花房書記官宛信一封是亦差進候

一六九 二月七日 山口外務少輔ヨリ 露國駐劄本公使宛

寺島外務卿ヨリ秘露國外相宛書翰内容ニ關シ回答並ニ「マリヤ・ルース」號事件裁決ニ關スル露國政府ノ費用ハ日、秘露兩國政府ニ於テ負擔スヘキ旨申出方訓令ノ件

八年第五號 マリヤリユース一件

客歲第三拾七號去月廿八日接到マリヤリユース一件書類互換ノ儀ニ付客歲九月廿七日附ヲ以秘魯外務卿へ差送候書翰寫我第拾八號公信ニ附シ差進候處右横文中 reserve ハ reserve ノ誤寫ニ可有之旨云々御論到ノ趣詳悉全ク如來示 reserve ノ誤寫ニシテ即御推考ノ通右一章ノ文意ハ

兩國政府ヨリ仲裁者へ可差出書類有之時ハ五ニ點檢ノ上仲裁者ニテ採用スルハ不肝要ト認ル書類ハ辯駁ヲ爲シテ仲裁者ノ採用ヲ拒ムノ權ヲ保存イタシ居候

トノ意味ニシテ右様秘魯外務卿へ書送候儀ハ獨リ一昨六年

一〇 秘露國風帆船「マリヤ・ルース」號ニ關スル件 一六九

六月廿五日東京約書ノ第三條中(抗論ノ證據ヲ表シ或ハ的實ノ議論ヲ申立ルヲ得ヘシ)云々ノ文意ニ基ク耳ナラス貴信第拾九號中御差送ノ書類目錄中朱點有之分ハ右書翰ヲ秘魯國へ差送候節ハ未タ當地へ不達以前ノ儀ニ付如何様ノ書類ナル歟且其他後日何様ノ書類等彼方ヨリ可差出モ難計トノ掛念ヨリノ事ニ有之候

一本年第二號信ヲ以差進候答辯書ハ秘魯政府へ相廻シ候事ト御推考ノ趣ニハ候ヘトモ右ハ我政府オキテ必ラス彼政府へ不可不送トノ義務モ無之儀ニ付旁同政府へ送り候事ハ見合尤本邦在留同國代理公使エルモール氏へハ一應心得ノ爲メ相贈候儀ニ有之候此儀廻チスミット氏ノ論ニシテ相當ノ事ト相考候間左様處分候事ニ有之候  
一右仲裁ノ儀ニ付テハ魯國政府於テモ多少失費相掛候儀ト推考候間其府在留ノ秘魯公使ト御協議ノ上右失費ハ兩政府ニテ償却可致積一應魯政府へ御申入相成候方ト存候此儀モスミット氏ノ心附ニ有之候間可然御處置有之度存候  
右貴答得貴意候也不宜

第八年二月七日

外務卿代理

三七五

榎本全權公使殿

山口外務少輔

一七〇 二月十四日 露國駐劄榎本公使ヨリ 寺島外務卿宛

露國駐劄秘露國公使到著ノ旨竝ニ同公使ヨリ豫テ交換セシ目錄外ノ「マリヤ・ルース」號事件關係書類ヲ送付シ來ルヘキ旨等報告ノ件

一在露公使館來信別記第廿號抜記

「マリヤルズ」一件書類當國皇帝陛下可差出分は既に御整頓と存候秘露公使「ラウァレ」氏は抗議一切の權を帶有し本月三日當府着致し候同人より承知致候得共拙者より回送候目錄并に書類の外彼政府より我政府へ差送り候書類は無之由尤去十日花房義實同公使訪問の節公使の話に擔夫荷主「カネヱ」の請求書類通外に昨冬國會へ差出たる此件關係一切の書類中に付て自然抗議の用に供し候もの可有之に付右請求書類譯出來の上夫の國會へ差出したる一切の書類寫(ル書中ニ在ルモノ)と共に拙者迄可相廻に付右の内

寺島外務卿殿

榎本武揚

明治八年二月十四日

にて寫入用の分有之候は、所望次第拙者迄可送と申候由右書類の性質は落手通讀の上可申進候得共萬一全く別種新規の論柄にて我政府未だ曾てこれか答辯をなすの機を得ざりし類のものにも候は、右書類は仲裁者に差出すを拒み候儀も可有之萬一差出候とも仲裁者にてこれを以て結案の基礎とせられざる様抗議致し候義或は肝要なるべくと相考居候付預め此段申進置候

一七一 二月二十七日 露國駐劄榎本公使ヨリ 寺島外務卿宛

露國駐劄秘露國公使トノ「マリヤ・ルース」號事件ニ就テノ往復書類送付等ニ關スル件

附書一、二月十五日露國駐劄秘露國公使ヨリ露國駐劄榎本公使宛書類寫  
豫テ交換セシ目錄外ノ書類送付ノ件  
二、二月十六日露國駐劄秘露國公使ヨリ露國駐劄榎本公使宛書類寫

露國皇帝へ差出スヘキ書面體裁ニ關シ打合ノ件

三、二月十九日露國駐劄榎本公使ヨリ露國駐劄秘露國公使宛書類寫  
目錄外ノ書類送付ニ關シ回答竝ニ異議申立ノ件

四、二月十九日露國駐劄榎本公使ヨリ露國駐劄秘露國公使宛書類寫  
二月十六日附書翰ニ對シ回答ノ件

五月十日到 明治八年第六號 「マリヤルズ」二件(第九回)

一去十四日別記二拾號中近日白露公使より書翰可差越答の旨等粗申進置候處去十七日別紙寫甲乙兩通の書翰一は十五日付一は十六日附にて差越候  
其乙號即十六日附のものは仲裁者へ可差出書面體裁の事打合に有之右は素より仲裁者へ可差出義にて仲裁者は即皇帝に候故其政府に於て別段の好み無之以上は直に皇帝陛下に宛差出候方相當と存候其旨別紙寫丁號即十八日付返翰第卅號に相答置候

一〇 秘露國風帆船「マリヤ・ルース」號ニ關スル件 一七一

其甲號即十五日附のものは去年六月十八日の書翰に附し差越候目錄に無之書類即「サウリ」「ヘレラ」「カネフアロ」諸氏の請求書を仲裁者へ可差出に付預め此方爲見置との事に有之右書面は「マリヤルズ」橫濱に於て差留られたるより生せる銘々損失の償還を乞ふものにて就中「ヘレラ」「カネフアロ」兩氏は其名譽を汚されたる償として各拾萬ドルツゝ合貳拾萬を請求し其他右船并に人に關せる諸費用損失の償ひ貳拾八萬二千七百拾八ルーブル五拾八セント合總高四拾八萬貳千七百拾八ルーブル五拾八セントを請求する勘定に御坐候尤右書中不當の廉は當地在留白露公使手許にて取直し候含のよしも來書中に相見候然るに此書面は既に官府の文書にあらず又世間公行の書類にもあらず從て東京約書第二款の旨にも符せず殊に此一件理否の大體を定るに據とすへきものにもあらず候故其旨丙號返翰中に相述一應異存申送置候乍併來翰の旨によれば右書類寫は白露政府より閣下へ相廻り候事と被存候間無程右書面并に其書面の義に付心得方御指圖とも閣下より御廻し可相成と存候付尙其節可申合答申添置候右は異存述置候ものにも有之殊に仲裁者理否判斷の大體に關

一札ケ下

するものにも無之且閣下彼政府より直に御受取にて無程拙者え御廻し可相成ものと存候付寫は差進不申候  
 此餘右甲號書翰に添越候は七十四年五年の公會え差出たる外交文書集一冊に候此書は西班牙語にて版行相成居り白露公使の所存にては如此公然刷行せし書類は双方隨意に可用得ものにて前以可取替部類には屬せずと見るよし來翰中に有之候得共東京約書第二第三兩款の旨は其手寫と刷行とに於て決して別あるを見ず然るを今公然刷行とすよを以てこれか別を立んとせば或は夫の東京約定中の意を變するにも至るへき歟と存候付既に一應の返詞致し置候義には候得とも尙此義は一言異存申述置方可然と存居候尤右文書集は西班牙語にて候得共「ボンベ」氏に一讀爲致肝要の件は抜譯爲致一覽の後いよ異存可申送哉否可取極考にて未だ申送らず候此後申送り候節は尙御報知可致候右文書昨今「ボンベ」氏に一讀致させ候處にては多くは亞米利加合衆國にて其公會え差出したる外交文書集中に有之ものと同物にて就中昨年六月「ラフン」氏より差越し候目錄中の書類も悉く有之様相見其他別に重要な件も見當り不申尙取しらへの上要件見當り候節は可申

進候得共多分右文書集は彼政府より閣下えも相廻り既に御一覽相成候事と存候餘は往復書面にて御承知可被下候一去年十二月五日附貴翰に十月十二日付拙者の書翰及び封中書類御落手にて答辯書御用意御取掛りの旨有之就ては此節は既に御差立相成居候事と存候十二月の期限四月七日も最早僅に四十日に相成候間不遠落手可致義と相待居候  
 右申進度別紙白露公使往復書四通の寫横文和文とも相添如此御坐候敬具  
 明治八年二月廿七日  
 榎本武揚  
 外務卿 寺島宗則閣下  
 甲乙來翰原文誤謬の廉推察にて翻譯致し候故寫は誤謬の儘出し置候  
 (下ケ札一)  
 右様の書類寫白露政府よりいまた不相廻候  
 (下ケ札二)  
 西班牙語にて版行したる外交文書集の如きものもいまた秘魯政府より廻し越さず

二札ケ下

(附屬書一)

甲

Copie N. 28.  
 Legacion del Perú.

Hôtel de France  
 St. Petersbourg, le 3/15 Février 1875.  
 Excellence

Son Excellence le Ministre des Affaires Etrangères de la République de Pérou, me transcrit avec la date du 27 Novembre dernier, une note de Son Excellence le Ministre du même département de l'Empire du Japon, portant celle du 27<sup>me</sup> jour 9<sup>me</sup> mois du 7<sup>me</sup> année de Meiji, d'après laquelle votre Gouvernement reconnaît, que celui du Pérou, l'a dûment transmis, tous les documents relatifs au cas de la "Maria Luz", contenus dans le Catalogue que j'ai envoyé à Mr. Hanabusa, alors chargé d'Affaires du Japon, avec ma note du 18 Juin 1874, et que celui-ci n'a pas excepté dans sa réponse du 26 du même mois. Ceux exceptés par Monsr. Hanabusa et desquels il a désiré obtenir connaissance, lui ont été remis par Mr Soyer, Chargé de la

Légation pendant mon absence, avec la note de 15 Septembre, et dont Votre Excellence lui a accusé réception par celle qu'il lui a fait l'honneur de lui adresser le 24 du même mois.

Ainsi a été entièrement réalisé pour Notre part, l'envoi de tous les documents compris dans le Catalogue de 18 Juin 1874.

En plus de ces documents la Légation du Pérou n'aura à faire valoir par devant Sa Majesté l'Arbitre, que les réclamations de Messieurs Sauri et Herrera propriétaires et Capitaine le dernier de la "Maria Luz", et de Messieurs Canavaro et Compagnie chargeurs de dit navire, par les torts et dommages qu'ils ont éprouvé à conséquence de sa détention forcée, dans le port de Yokohama et les faits que l'ont suivis avec les pièces comprobatoires. Quoique le soussigné n'estime pas que ces documents puissent être considérés entre ceux dont il est question dans l'article 3<sup>me</sup> du Protocole de Yedo (Tokio) du 25 Juin 1873—25<sup>me</sup> jour 6<sup>me</sup> mois 6<sup>me</sup> année de Meiji, puis que les réclamations des parties lésées sont la conséquence du fait que constitue le differend entre

le Pérou et le Japon soumis à la décision arbitrale de Sa Majesté l'Empereur de toutes les Russies, et dont la nature doit être définie d'après ceux dont il est question dans le dit article; n'obstant, et en obéissance aux instructions que le soussigné a reçu (et se réservant le droit d'y apporter les modifications qu'après mtr examen, il puisse trouver conformes à l'esprit de justice et d'équité que règle la conduit de son Gouvernement) il s'empresse de les porter à la connaissance de Son Excellence le représentant du Japon, que du reste, les recevra bientôt directement du Gouvernement du Japon même, auquel ils doivent avoir été adressés par celui du Pérou, selon Son Excellence le Ministre des Affaires Etrangères de la République l'exprime au soussigné dans la note ci-dessus référée en se conformant aux désirs manifestés par Son Excellence Terashima Munenori que dans celle que le Soussigné a déjà indiqué, dit textuellement ce qui suit: "Mais je désire toujours que de les nouveaux documents que le Gouvernement du Pérou veuille offrir à l'appréciation de l'arbitre, soient transmises des Copies à ce

Gouvernement que les enverra au Représentant du Japon à Saint Petersbourg".

Cependant qu'à la meilleur manière d'apprécier du soussigné les documents que pour avoir été imprimés sont du public domaine, ne peuvent pas être classés entre ceux qui doivent être soumis à l'échange préalable; pourtant, pour éviter tout malentendu, et à fin que l'entente la plus complète ne cesse de régner entre les Légations du Pérou et du Japon, il s'empresse également, d'envoyer à Votre Excellence, un exemplaire de la "mémoire" présentée au Congrès Nationale du Pérou dans la session de 1874-75 par Son Excellence le Ministre des Affaires Etrangères de la République dans laquelle se trouvent de la page 55 à la page 140 et sous le titre "Chine et Japon", plusieurs documents concernant au cas de la "Maria Luz". Parmi eux, il y a un grand nombre que Votre Excellence doit connaître, soit parce qu'ils ont été compris entre ceux qu'ont été dûment communiqués par la Légation du Pérou, soit pour émaner directement du Gouvernement de Votre Excellence même ou les lui avoir été adresser,

haute et très distinguée considération.

(Signé) J. A. DE LAVALLE.

A Son Excellence le Vice-Amiral

Enomotto Takeaki.

(右附屬書一和譯文)

寫甲 譯文

第貳拾八號 一千八百七十五年二月三日(十五日)比特堡

「ホテル・ギン・フロンセ」に於て

拜啓拙者義白露國共和政事外務卿閣下より客冬十一月廿一日付の書翰を以て帝國日本外務卿明治七年九月二十七日附公書の寫を落手せり右公書に據れば拙者千八百七十四年六月十八日附の書翰に添て當時日本代理公使たりし花房君宛にて贈りし目錄中同氏よりの返翰に撰拔さりし目錄の書類一切を貴政府は我白露政府より相當に御落手ありし段を認可せられ候將又花房君の撰拔れて所望ありし書類は予か留守中我公使館代理公使たる「ソーエル」君より九月十五日附の書翰に添て差進閣下御落手の段同月廿四日の貴翰にて承知致し候

右の通に付千八百七十四年六月十八日の目錄丈けの一切書

Ceux-la sont marqués à l'encre rouge dans l'employaire y joint. Si parmi les autres il y en a quelques uns dont Votre Excellence puisse avoir le désir de prendre connaissance, le soussigné, d'après l'indication de Votre Excellence se fera un devoir de les lui envoyer traduits en français.

Dans le même but-et malgré qu'en aucun cas elle ne peut pas être classifiée dans la catégorie des documents soumis à l'échange—le soussigné crois convenable de prévenir Votre Excellence, que, peut être, il sera possible que dans le cours de son Exposition du cas de la "Maria Luz" à Sa Majesté l'arbitre, il puisse employer certains documents et certaines appréciations, consignés dans une brochure publiée à Yokohama dans le mois de Décembre 1872 avec le titre de "A full statement of the case of the Maria Luz", brochure que doit être connue de Votre Excellence.

Avec l'espoir que nous serons encore cette fois-ci en parfait accord, le soussigné profite avec plaisir, de cette première occasion, pour offrir à Son Excellence le Vice-Amiral Enomotto l'expression de sa



類は拙者方にては悉く差出し申候

一右の外白露公使館より仲裁陛下<sup>魯帝を</sup>云ふ え差出す書類は只「サウリ」氏及「マリヤルツ」船々頭兼船主たる「ヘレラ」氏並に同船荷主たる「カネウァロ」社よりの抗議書面の外無之候右は同船横濱港に於て強て差留られしによりて生ぜし損害と同件に關係ある事柄とに證詰書を添たるものにて候拙者は右書面を以て千八百七十三年六月廿五日即明治六年六月廿五日東京約定書第三款に掲載せる所に屬し得へきものとは存不申其譯は右抗議は畢竟魯帝陛下の仲裁に任せし白露國と日本國との間に異論の起りし事柄の續きにして仲裁者の採用となるへき書類の性質は前文第三款に掲載するものによりて定むへき筈なればなり乍去拙者は右に關わらず我國の命令に従順して（尤書面は拙者綿密に取しらへの上我政府の常規とする所の正直正當の意を體して存削を加る權を有せり）取急き右書面を日本國公使閣下に差進申候但右書面は日本公使其本國政府より無程御落手可有之其譯は我外務卿閣下より拙者え達せし書翰中に我外務卿は寺島宗則閣下の御所望通り從事する旨を陳し其<sup>寺島卿</sup>語を其儘抄録して曰く「併し拙

者常に望む所は白露政府におゐて仲裁者勘辨の爲に新なる書面を差出す時は其寫を我政府に贈られ度然る節は此方よりして比特堡府在留の我公使に轉贈すへし」と

一拙者の意見には公然刷行せし書類は人々隨意に用るを得るものにて夫の前以取替すへき部に屬すへきものにあらずと雖も拙者預め一切の間違を避け且白露と日本兩公使館の篤交を保存するために我共和政事の外務卿閣下より千八百七十四年同五年の公會の節我國議院え差出したる覺書一部を閣下に呈す同書五十五葉より百四十葉までに支那及日本と題せる中に「マリヤルツ」事件に關せる數多の書付類見へたり此書付中に付或は白露公使館より差進たるもの或は貴政府より差越されたるもの或は白露より日本政府え差進たるもの等多分は閣下既に御承知のものに可有之即書中朱印有之者に候右の中或は委數御調被成度もの有之候は、其條御示し有之次第拙者右を佛文に譯して差上可申候

一前同斷の趣意を以て拙者預め閣下に御斷申置候は千八百七十二年十二月於横濱出版になりし「マリヤルツ」二件明細書と題せる小札子も前同斷双方取替すへき書類の部に

決して屬するものにあらざれとも右小札子中に記載せる一二の書付類及議論書を品により仲裁陛下え差出し候事も可有之候右小札子は閣下定て御承知に相成居ものと存候

此度も以前同様全く双方無異議事を希望し并せて此折を以て拙者閣下に對し格段尊仰の意を表す

ギ、ノ、ム、シ、ラ、ウ、ソ、フ

海軍中將 榎本武揚閣下下啓

(附屬書II)

2

Copie No. 29.

Legacion del Peru.

Hôtel de France

Saint Petersbourg, le 4/16 Février 1875.

Excellence.

Dans une conversation que j'ai eu l'honneur d'avoir dernièrement avec Son Altesse Sérénissime le Prince Gortchakow, je me suis permis de lui demander, quelle devait être la forme dans laquelle nous devrions adresser à Sa Majesté l'Empereur,

l'Exposition respective du cas de la "Maria Luz", soumis à l'arbitrage de Sa Majesté, en conformité avec l'article 2<sup>me</sup> du Protocole de Yedo (Tokai) du 25 Juin 1873; (25<sup>me</sup> jour du 6<sup>me</sup> mois 6<sup>me</sup> année de Meiji) si celle d'une exposition adressée à Sa Majesté elle même, ou celle d'une note à son Ministre des Affaires Etrangères. Son Altesse a bien voulu me répondre, que l'une ou l'autre forme étaient également acceptables, et que nous devrions, Votre Excellence et moi, nous mettre d'accord pour celle des deux que nous voudrions de préférence adopter.

Lorsque, la semaine dernière j'eus le plaisir de voir dans cette Légation le 1<sup>er</sup> Secrétaire de celle du Japon, je lui ai exposé ma conversation avec Son Altesse le Prince Gortchakow, et Monsieur Hanabusa m'a paru s'incliner de préférence à la forme d'une Exposition directement adressée à la personne même de l'Impérial Arbitre.

Je désire connaître l'opinion de Votre Excellence à ce sujet, pour m'y conformer entièrement, n'ayant aucune objection à faire m'aucune préférence, soit

pour l'une, soit pour l'autre ; mais désirant que nous deux nous adoptions la même.

Attendant votre réponse j'ai l'honneur de renouveler à Votre Excellence l'expression de ma haute et distinguée considération.

(Signé) J. A. LAVALLE.

A Son Excellence

Monsieur le Vice-Amiral Enomoto Takeaki

Envoyé Extraordinaire et Ministre Plénipotentiaire de Sa Majesté l'Empereur du Japon.

(右附屬書ニ和譯文)

寫乙 譯文

第貳拾九號 一千八百七十五年二月四日(十六日)比特堡「ホテル、デ、ソランセ」

頃日拙者儀「プリンス、ゴルチャコフ」殿下に面晤を得候節夫の一千八百七十三年六月廿五日東京約書第二ヶ條の旨に於り皇帝陛下の仲裁に任せ「マルヤルツ」一件を皇帝陛下に差出すには何等の書式を用ひ可然哉或は直に皇帝陛下に宛可差出哉又は外務卿宛の書體に可致哉問合候處殿下懇懇相答らるゝには兩様書式何れにても差支無之付唯吉曹即

貴閣下と拙者との間の慮意にて兩様の中何れ歟に一樣に可致との事に有之候右「プリンス、ゴルチャコフ」殿下説話の趣は過日當公使館に於て日本公使館一等書記官花房義質君と面話の節拙者より相話し候處於同氏は仲裁者たる皇帝陛下え直に宛たる方可然被考候様相見候於拙者は右兩様中何れにても忌避する所無之又選取する所も無之唯双方一樣に相成るを希ひ候迄の義に付閣下の御高慮承知致し度此段御問合および御答相待候恐惶謹言

ゼ、アド、ラツア、レ、手記

日本公使海軍中將

榎本武揚閣下

(附屬書三)

丙

Copie. No. 29

Légation Impériale du Japon.

St. Petersburg, le 7/19 Février 1875.

Excellence,

J'ai l'honneur de faire savoir à Votre Excellence que j'ai reçu sa lettre du 3/15 Février 1875 No. 28

avec les documents adjoints des réclamations des Messieurs Sauri et Herrera et des Messieurs Canevaro et C<sup>ie</sup>, ainsi qu'un exemplaire de la mémoire présentée au Congrès national du Pérou dans la session de 1874-75. Je m'occupe à présent de parcourir les documents qui se trouvent dans la mémoire de la page 55 à la page 140 et si j'éprouve quelque besoin d'avoir plus de renseignements sur ces documents, je profiterai avec empressement de l'aimable proposition de Votre Excellence de me les procurer traduits en Français.

Quant aux documents concernant les réclamations des Messieurs Sauri et Herrera et des Messieurs Canevaro et C<sup>ie</sup>, je me trouve obligé de communiquer à Votre Excellence mon opinion sur ces réclamations.

Je partage absolument l'opinion de Votre Excellence que ces documents ne peuvent être considérés comme appartenant à la catégorie de ceux dont il est question dans le protocol de Yedo (Tokio) 25 Juin 1873 (25 jour 6<sup>me</sup> mois 6<sup>me</sup> année de Meiji) et qui peuvent être exposés à Sa Majesté l'arbitre Im-

périal. Ces pièces ne sont pas nécessaires selon mon opinion pour l'appréciation du fait qui constitue le différend entre le Pérou et le Japon.

Je trouve que l'article 2 du protocol susnommé s'explique distinctement sur les catégories des documents qui peuvent être présentés. Les mots : Official correspondence and other official or public State-ments bearing on the subject, etc. expliquent évidemment que seulement les documents ayant un caractère official ou public peuvent être présentés. Les réclamations des Messieurs Sauri et Herrera ainsi que des Messieurs Canevaro et C<sup>ie</sup> ne peuvent être considérées que comme documents privés, dont il n'est pas question dans l'article 2 du protocol mentionné.

Mais Votre Excellence me dit dans Sa lettre que ses réclamations doivent avoir été adressées aussi à mon gouvernement par celui du Pérou et que je les recevrai bientôt directement de mon Gouvernement, c'est pour cela que je veux observer à Votre Excellence que je vous prie de considérer l'opinion que je viens de prononcer comme mon opinion

personnelle.

Aussitôt que j'aurai reçu des nouvelles de mon gouvernement à cet égard ou bien des instructions je m'empresserai de les porter à la connaissance de Votre Excellence.

A la fin de Votre lettre je lis qu'il sera possible que Votre Excellence fera usage de certains documents et de certains appréciations consignées dans une brochure publiée à Yokohama dans le mois de Décembre 1872 sous le titre de "A full Statement of the case of the Maria Luse" Je ne suis pour le moment pas en possession de cette brochure et Votre Excellence m'obligera infiniment, si elle voudrait me la céder pour quelques jours.

Je saisis cette occasion pour offrir à Votre Excellence l'assurance de ma considération haute et distinguée.

(Signé) ENOMOTTO TAKEAKI.

Son Excellence

Monsieur le Sénateur J. A. de Lavalle,

Envoyé extraordinaire et Ministre Plénipotentiaire du Pérou à St. Petersbourg.

(右附屬書三和譯文)

寫丙 譯文

第廿九號 千八百七十五年二月六日<sup>(註一書簡)</sup> 比特堡日本公使館拜啓千八百七十五年二月三日<sup>十五</sup> 附の尊書第廿八號に添られたる「サウリ」氏「ヘレラ」氏及び「カネフ、ロ」氏社中よりの抗議書其外千八百七十四年同七十五年白露國公會に差出されし覺書一部髓に拜領せり、拙者不取敢右覺書中五拾五葉より百四拾葉までに記載有之書面を取調らへに掛り申候右取調中不分の廉有之候は、御懇諭に任せ佛文へ重譯の御手數所望可致候

「サウリ」氏「ヘレラ」氏及「カネフ、ロ」氏社中よりの抗議書の義に付ては拙者の所見を閣下に陳述可致候拙者の意存にても右書面は千八百七十三年六月廿五日即明治六年六月廿六日<sup>(廿五カ)</sup>東京約定書中に詳記せる仲裁人たる魯帝陛下え可差出書類の部類に屬すへきものにあらずして且又此書面は白露と日本國との異見を勘辨するためには不入用のものたる段全く閣下と御同説に御坐候拙者の所見に據れば如何様なる性質の書面を可差出敷は東京約定書第一款にて判然と存候即其文面中には同件に關係せる表向の

(下ケル)

横濱於て出版のマリヤ・ルース船一件明細書と題せる小札子は曾てスミット氏も見たる事なしとの事

註一、右附屬書三ノ日附ハ歐文ハ二月七日<sup>十九</sup>ニシテ後出一七三本文中ニモ「其一は二月七日(十九日)附第貳拾九號に有之即本年第六號「マリヤルズ」一件第九回公信に附し寫丙號として既に差進置候もの」トアルニ付二月十九日附トス

(附屬書四)

丁  
Copie No. 30  
Légation Impériale  
du Japon.

St. Petersbourg, 7/19 Février 1875.  
Excellence

J'ai eu l'honneur de recevoir la lettre de Votre Excellence en date du 4/16 Février 1875 No.29 et je m'empresse de faire parvenir ma réponse à Votre Excellence.

Votre Excellence désire connaître mon opinion

往復書翰及其他の表向并に公共の記録云々と有之候に付仲裁人え可差出書類は全く表向又は公共の性質を具せるもの而耳なる事瞭然にて夫の前文諸氏抗議書は只一個の私書にして約定書第二款中に記載無之ものとより外不存候

一昨去閣下の御書面に據れば白露政府は右抗議書面を日本政府え差出されしなるへく且拙者右を我政府より無程可落手趣に付拙者改て閣下に向て御斷置申候は前文所陳は全く拙者自己の意見に出たるものと御見做可被下候尤此義に付拙者我政府より委細の差圖を請取候は、其段早速閣下え御知らせ可申候

一偸又尊書の末段に據れば千八百七十二年中於横濱出版相成候「マリヤルズ」一件明細書と題せる小札子を閣下品により御用ひに可相成哉の趣相見へ申候右小札子は拙者即今所持不致候間兩三日間拜借相叶候は、難有存候拙者此折を以格段尊仰の意を閣下に表す

榎本 武揚

白露國公使 ゼ、ア、ニ、ラ、フ、ハ、閣下

下ケル 札

sur la manière de laquelle nous devons faire réciproquement l'exposition dans l'affaire de la Maria Luz à Sa Majesté l'Empereur de toutes les Russes comme arbitre, soit qu'elle doit être directement adressée à Sa Majesté même ou bien à Son Ministre des affaires Etrangères dans la forme d'une note. Je n'hésite pas de communiquer à Votre Excellence que selon mon opinion la première forme me paraît préférable savoir l'exposition directe à Sa Majesté l'arbitre Impérial de tout ce qui rapport au cas de "La Maria Luz".

Je saisis cette occasion pour exprimer à Votre Excellence l'assurance de ma considération haute et distinguée.

(Signé) ENOMOTTO TAKEAKI.

A

Son Excellence Monsieur

Le Sénateur J. A. de Lavalle,

Envoyé Extraordinaire et Ministre plénipotent.

de la République du Pérou

à St Petersburg.

(右附屬書四和譯文)

寫丁 譯文

第卅號 千八百七十五年二月六日<sup>(註三〇)</sup>十八 比特堡日本公使館  
拜啓千八百七十五年二月四日<sup>十六</sup> 附屬書第二拾九號を一昨  
日落手いたし候條閣下「マリアルズ」一件の書類を仲裁人たる  
魯國皇帝陛下え御互に差立方の義に付或は皇帝え直に可  
差出敷又は外務卿宛の書面體にて可差立敷の條鄙意御尋に  
付拙者意見には「マリアルズ」一件に關係せる一切の事柄は  
其仲裁人たる魯帝陛下え直に差立候方可然存候此段及回答  
候拙者此折を以て格別尊仰の意を閣下に表す

榎本 武揚

白露國公使 ゼ、ア、デ、ラ、フ、レ、閣下

註二、右附屬書四和譯文ノ日附ハ二月六日<sup>十八</sup>トアルモ便

宜原歐文ニ據リ二月七日<sup>十九</sup> 附トセリ

一七二 三月十四日 露國駐劄榎本公使ヨリ  
寺島外務卿宛

「マリア・ルース」號事件裁決ニ就キテノ交換書  
類ノ儀ニ關シ秘魯國公使ニ抗議セシ趣意報告竝

ニ露國皇帝ニ提出スヘキ辯論書ニ關シ意見具申  
ノ件

附屬書

三月六日露國駐劄榎本公使ヨリ露國駐劄秘魯國  
公使宛書翰寫

公刊ノ書類ハ交換ノ要ナシトノ意見ニハ  
同意シ能ハサル旨回答ノ件

五月十日到

明治 第八號「マリアルズ」一件(第十回)

一月十八日附第二號公信三月九日到來會て拙者七月十日附  
第十九號信に附呈候目錄の書類に對せる答辯書英佛兩文に  
て刷行の上御廻し相成即拾部落手致し且右一件書類第一第  
二號版行の分各五部つゝ御廻し是亦落手致し候右答辯書熟  
閱致候處英文にては條理明晰に候得共佛文の方にては大に  
其明を缺き候所有之に付仲裁者於て英文のみを以て據とせ  
られ候様拙者よりの書中に可申副候且第一第二號の分は英  
文の儘可差出候此義に會て花房義質を以て亞細亞寮頭「ス  
ツレモウホフ」氏まで打合不都合無之答相成居候へは也  
七十三年六月廿五日の東京約書第三條の解意拙者と「ラブ

アレ」氏との間に相違有之段は先便既に申進置其後尙別紙  
寫イ印の通り申進置候此餘異議有之候とも到底此論を推立  
相拒候積り且此程於當地「ラブアレ」氏より拙者まで披閱の  
ため差越候書類中「ガルシヤ」氏我東京に在し時書して其本  
國政府え送りし書中(種々盡力注意致し版行上に迄も逃路  
を求め候其他注意の義は一々御報知不致とも御推察可被下  
候)との語を見候是等は右異論上に於ても大體上に於ても  
共に力を我に添へきものに付右異論の趣仲裁者え申立候節  
は記して附呈する事可然と考居候

右の外今度御差越の答辯書中拙者の考にては或は詳に失し  
て我虚を示し略に過ぎて我強を盡さるゝ所有之様相見即其  
初條に屬するは小笠原壹岐守を以て壹箇日本人たるに過す  
と云の類其末條に屬するは支那人の頭髮を斷ちしの重事た  
るを記さず支那政府は我此舉を見て正とし且大にこれを德  
とせるの一段を略せるの類に候尤是等の類可成丈二字の加  
除なく差出申へく候得共篤と勘考の上眞に我害を招へく相  
考候義は取捨添削致候義も可有之候右は御書中(…の儘  
差進候間篤と御熟閱の上其政府え差出方等可然御處分有之  
度)との義に基き候得は既に御決定のものには候得共尙其